

—— 兵庫県文化財調査報告書 第14冊 ——

榮根遺跡

昭和57年3月

兵庫県教育委員会

栄根遺跡正誤表

頁	行	誤	正
國版目次	28	國版51(上)	國版51(上左)
タ	29	國版51(下)	國版51(その他)
タ	20	國版68(上)	國版68 削除
2	17	長尾丘陵	長尾山丘陵
4	5	川西市寺満願寺	川西市満願寺
5	註21	塙田直	塙田直
21	2	(第15回)	(第16回)
23	28	(第17・19回)	(第17・19・20回)
27	23	暗茶褐色砂質土	暗黃茶褐色砂質土
29	11	穿孔である	穿孔がある
37	13	⑥淡茶灰色粘質土層	⑥暗茶灰色粘質土層
63	17	⑥淡茶灰色粘質土層	⑥暗茶灰色粘質土層
64	25	⑥淡茶灰色粘質土層	⑥暗茶灰色粘質土層
68	2	⑥淡茶灰色粘質土層	⑥暗茶灰色粘質土層
68	14	⑥淡茶灰色粘質土層	⑥暗茶灰色粘質土層
69	8	⑥淡茶灰色粘質土層	⑥暗茶灰色粘質土層
69	21	⑥淡茶灰色粘質土層	⑥暗茶灰色粘質土層
70	9	法量は軸長7.55cm	法量は全長9.1cm、軸長7.55cm
70	13	⑥淡茶灰色粘質土層	⑥暗茶灰色粘質土層
70	18	柱穴1・5・6のように	柱穴1・5・7のように
79	2	この遺構はA—2、B—2区にかけて	この遺構はA—2区にかけて
85	6	棒状の土鉢(3)はで、	棒状の土鉢(3)は、
87	2	溝9(第97回、國版73)	溝9(第80・97回、國版73)
101	4	遺物(第108・109回、國版75)	遺物(第107・108回、國版75)
115	15	(1~10)	(6~10)
116	8	しかし第2・6次	しかも第2・6次
120	甕4~鉢7	47(左上)	45(上)
141	底部40	60(上)	削除
141	須恵器杯蓋1	61	削除
142	須恵器杯身8	61	削除
142	須恵器鉢11	61	削除
143	壺14	60(下)	61
143	甕17	60(下)	削除
146・7	土壤10 甕1~盃5	68	69
151	底部3	71	削除
152	壺2	71	削除
152	壺2	口径6.7	口径13.4
152	壺3	71	削除
152	壺3	口径8.3	口径16.6

頁	行	誤	正
153	壺5	器高10.3	器高12.8
153	有孔底部10	71	削除
154	高杯13	残存高10.0	残存高11.8
154	高杯15~16	71	削除
160	器台32	底径5.8, 残存高12.2	底径12.2, 残存高5.8
161	壺2	79	80
163	壺12	80	削除
163	壺15	79	80
163	底部18	80	削除
163	有孔底部19	有孔底部19	底部19
164	高杯22	79	削除
図版31	(左下) 杜穴	(右上) 杜穴	
図版50	12	4	
図版51	(上) 包含層出土石器	(上左) 包含層出土石器	
タ	(下) 土壌5	(その他) 土壌5	
図版62	住居跡4-c 出土土器	住居跡4-c 出土石器	
図版68	6	8	
図版75	33	写真逆転	
図版76	(右) 溝16出土土器	(中左) 土壌17出土土器	
タ	(中) 大溝出土土器	(右) 大溝出土土器	
タ	24	29	
図版78	住居跡5 山出土土器	住居跡7 出土土器	
図版79	29	28	
タ	15	16	
タ	22	24	
図版80	14	15	
タ	9	2	
タ	7	8	
タ	13	14	
タ	12	13	
タ	11	10	
タ	25	26	
タ	8	9	
タ	16	17	
タ	19	20	
タ	17	19	

写真図版に掲載した土器には、文様、器形等から考へて必要と思われるものを掲載することとした。

そのため、出土土器観察表には記述されず、写真に土器番号のないものがうまれることとなった。

ただし、図版にのみ番号を付した場合もある。



遺跡周辺の航空写真 1 萩根遺跡 2 加茂遺跡

はじめに

わたくしたちのふるさと兵庫県は、古くから文化が開け、全国的にみても貴重な文化財が多く残されています。

これらの文化財は、わたくしたちの先人が残した文化遺産であり、ふるさとの歴史を知り、理解するためにかかせない国民の共通財産として保護、保存に努めるとともに文化向上のため積極的に活用を図ることが必要と考えます。

最近、各種の開発行為等に関連した埋蔵文化財の発掘調査が増大しておりますが、国鉄福知山線（塚口～宝塚間）複線電化工事等に先立って、川西市所在の栄根遺跡発掘調査を日本国有鉄道大阪工事局の委託をうけ、兵庫県教育委員会が調査主体となり、川西市教育委員会の協力を得て実施いたしました。

このたび、発掘調査の結果をとりまとめ、この報告書を刊行いたしました。

この報告書が文化財保護と文化向上のためお役にたてば幸せです。

最後になりましたが発掘調査にあたり、なにかとご指導、ご協力をいただいた多くの方々に衷心よりお礼を申し上げます。

昭和57年3月

兵庫県教育長 森 脇 隆

例　　言

1. 栄根遺跡は、兵庫県川西市栄根2丁目に位置する。
2. 本報告は、昭和54年1月から11月にかけて、兵庫県教育委員会が実施した栄根遺跡の発掘調査報告書である。
3. 発掘調査は、日本国有鉄道（以下「国鉄」と略す）の福知山線複線電化工事及び川西池田駅舎移転工事にともない、兵庫県教育委員会が第1～5次にわたり実施したものである。（9頁調査一覧表参照）
4. 発掘調査は兵庫県教育委員会が調査主体者となり、川西市教育委員会の多大なる協力を得て実施した。

調査体制 昭和53・54年度

兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

課長 林 五和夫

参考 田中 幹雄

副課長 道郷 實

課長補佐 久保田幸雄 池田 義雄

係長 堀 洋

埋蔵文化財係長 村上 錠揚

事務担当係員 山本 三郎 吉田 異

（調査員） 池田 正男 深井明比古

田中 達夫 岡野 延隆（川西市教育委員会）

（調査補助員）

中野 卓哉, 三谷 重明, 納谷 守幸, 土谷 恵, 中村まどか, 岡島 壮見,

三宅泰次郎, 井口 高志, 泉 正隆, 坪田 行平, 藤田 義和, 松本 澪,

丸山 正洋, 渡辺 玲, 堀 健一郎, 山本 明彦, 谷沢 仁, 藤田 忠弘,

菅原 明弘, 柏井 信彦, 福間 一良, 森中 博子, 喜多 和子, 田中 寛,

田中 道彦, 佐藤 貴司

5. 出土遺物の整理と本書の作成は、兵庫県教育委員会が主体となり、川西市教育委員会の協力を得た。

整理体制 昭和55・56年度

兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課

課長 藤和 重喜
参事 田中 幹雄
副課長 道畠 実
課長補佐兼管理係長 河合 幸一
係長 堀 洋
課長補佐兼埋蔵文化財係長 池田 義雄
主査 大村 敬通
事務担当係員 吉謙 雅仁 深井明比古
(調査員) 池田 正男 深井明比古
岡野 慶隆 (川西市教育委員会)

(整理補助員及作業員)

古川 久雄, 石川 雄基, 山本 明彦, 渡辺 瑞, 堀 健一郎, 管原 明弘,
国見 幸春, 山田 隆一, 芦木 寿美, 山内小百合, 高野 池晶, 合田依利子,
山崎 公子, 小林美智子, 西村 洋子, 古川 啓子, 和田早苗子, 森岡みゆき,
渋谷 雅子, 二階堂康子, 坂本きよみ, 卷幡 誠子
遺構・遺物の実測、製図、レイアウトは 池田、深井が行い、古川久雄、山本明彦、松下勝、岡崎正雄、加古千恵子、森内秀造、木口富夫の各氏の協力を得た。

遺構の写真撮影は調査員が行い、遺物の写真撮影については森昭氏に依頼した。(国版73を除く)

6. 川西市教育委員会が実施した第6・7次調査の報告については、川西市教育委員会ならびに調査担当者である岡野慶隆氏の協力を得た。
なお、本書の執筆分担については、本文目次のとおりである。
7. 本書の挿図等で示す標高値は国鉄の工事用BMを使用し絶対高を示す。方位は磁北をさす。
8. 本書で使用した航空写真は兵庫県教育委員会が昭和53年12月撮影したものを使用した。
また1/50000(大阪西北部)1/25000(広根・伊丹)地図は国土地理院発行のものを使用した。
1/2500 地図は川西市教育委員会から提供を受けたものである。
9. 遺物の記載番号は、挿図・図版と同一番号にした。また遺物実測図は、土器を $\frac{1}{3}$ ・ $\frac{1}{4}$ 、
石器を $\frac{1}{3}$ ・ $\frac{1}{2}$ ・ $\frac{1}{4}$ にそれぞれ縮尺した。
10. 調査、整理後の出土遺物については、第1～5次調査の遺物は兵庫県教育委員会、第6
・7次調査の遺物は川西市教育委員会において保管している。
11. 調査の実施及び報告書の作成については、下記の方々の協力を得た。記して感謝の意を
表します。
(敬称略、順不同)
日本国有鉄道大阪工事局、国鉄川西池田駅、藤友建設、直宮憲一、丸山潔、森岡秀人、
坂本みよし

本文目次

I 位置と環境	(岡野)	
(1) 地理的環境	1	
(2) 歴史的環境	1	
II 調査の経過		
(1) 調査に至るまで	(田中)	7
(2) 調査の経過	(岡野)	7
III 第1次調査	(深井)	
(1) 調査の経緯	11	
(2) 試掘調査の結果	11	
(3) 小結	14	
IV 第3次調査	(深井)	
(1) 調査の経緯	17	
(2) 試掘調査の結果	17	
(3) 小結	21	
V 第2・6次調査	(深井・岡野)	
(1) 調査の経緯	23	
(2) 層序	23	
(3) 遺構と遺物		
① 弥生時代	25	
② 弥生時代後期～古墳時代	38	
③ 中世	70	
(4) 小結	73	
VI 第4次調査	(池田)	
(1) 調査の経緯	75	
(2) 層序	75	
(3) 遺構と遺物		
① 弥生時代	76	

② 古 墳 時 代.....	80
③ 中 世.....	87
(4) 小 結.....	91
V 第 5 次 調 査.....	(池田)
(1) 調 査 の 經 錄.....	93
(2) 層 序.....	93
(3) 遺 構 と 遺 物	
① 古 墳 時 代.....	95
② その他の時代.....	104
(4) 小 結.....	105
VI 第 7 次 調 査.....	(岡野)
(1) 調 査 の 經 錄.....	106
(2) 試 挖 調 査 の 結 果.....	106
(3) 小 結.....	108
VII ま と め.....	(深井・岡野・池田)
(1) 弥 生 時 代 中 期 に お け る 遺 構 と 遺 物.....	109
(2) 弥 生 時 代 後 期 か ら 古 墳 時 代 の 遺 構 と 遺 物.....	114
(3) 栄 標 遺 跡 の 性 格 に つ い て.....	116
X 出 土 土 器 鑑 察 表.....	119

挿 図 目 次

第1図	栄根遺跡の位置	1
第2図	西摂地方遺跡分布図	3
第3図	栄根遺跡周辺遺跡分布図	4
第4図	調査地点位置図	8
第5図	遺跡全体図	
第6図	2トレンチ 土器群	11
第7図	2トレンチ 出土土器	12
第8図	第1次調査 トレンチ断面図	13
第9図	6トレンチ 遺構平面図	14
第10図	4・6・8トレンチ 出土土器	14
第11図	調査地点及び柱状図	15
第12図	第3次調査 トレンチ断面図	18
第13図	2トレンチ 出土土器	19
第14図	7トレンチ 遺構平面図	19
第15図	7トレンチ 遺構出土土器	19
第16図	3トレンチ 出土磁器	20
第17図	第2次調査 A—1地区土層断面写真	24
第18図	第2・6次調査地点 遺構平面図	
第19図	第2次調査地点 南側断面図	
第20図	第6次調査地点 南・西側断面図	
第21図	方形周溝墓1 平面図	25
第22図	方形周溝墓1 出土土器	26
第23図	土壤5 平面図	28
第24図	土壤5 壺(9)出土状態	29
第25図	土壤5 出土土器—1	30
第26図	土壤5 出土土器—2	31
第27図	土壤5 出土石器	32
第28図	土壤3 出土土器	33
第29図	土壤3 平面図	33

第30図	溝7 土器出土状態	34
第31図	溝7 出土土器	35
第32図	第2次調査 包含層出土弥生土器	36
第33図	第2次調査 包含層出土石器	37
第34図	第6次調査 包含層出土土器	37
第35図	住居跡1 平面図	38
第36図	住居跡1 宽(7) 出土状態	39
第37図	住居跡1 出土土器—1 拓影	39
第38図	住居跡1 出土土器—2	40
第39図	住居跡1 出土石器	41
第40図	住居跡2 平面図	43
第41図	住居跡2 出土土器—1 拓影	44
第42図	住居跡2 出土土器—2	45
第43図	住居跡2 出土土器—3	46
第44図	住居跡2 出土土製品	46
第45図	住居跡2 出土鉄器	46
第46図	住居跡3 平面図	47
第47図	住居跡3 出土土器	48
第48図	住居跡4-c 平面図	49
第49図	住居跡4-c 出土土器—1	50
第50図	住居跡4-c 出土土器—2	51
第51図	住居跡4-c 出土石器—1	51
第52図	住居跡4-c 出土石器—2	52
第53図	住居跡4-a・b 平面図	54
第54図	住居跡4-b 出土土器—1 (上・下層)	55
第55図	住居跡4-b 山土土器—2 (最下層)	56
第56図	住居跡4-a 出土土器	57
第57図	住居跡4 建築順序	58
第58図	土壤1 平面図	59
第59図	土壤1 出土土器	59
第60図	土壤2 平面図	60
第61図	土壤2 出土土器	61
第62図	土壤4 平面図	61

第63図	土壤4 出土土器	62
第64図	土壤8・溝4 平面図	63
第65図	土壤9 平面図	65
第66図	土壤9 出土土器	65
第67図	土壤9 出土鉄鏃	66
第68図	土壤10 平面図	66
第69図	土壤10 出土土器	67
第70図	土壤11 平面図	67
第71図	溝1・2 平面図	68
第72図	溝2 出土土器	69
第73図	ピット1 出土土器	70
第74図	第2次調査 包含層出土土器	70
第75図	第6次調査 包含層出土石製模造品	71
第76図	掘立柱建物跡 平面図	71
第77図	柱穴4 出土土器	72
第78図	柱穴4 平・断面図	72
第79図	溝8 平面図	73
第80図	第4次調査地点 遺構平面図	
第81図	第4次調査地点 南側断面図	
第82図	方形周溝墓2 溝内土器出土状態	77
第83図	方形周溝墓2 出土土器	78
第84図	土壤12 平面図	79
第85図	土壤12 出土土器	80
第86図	土壤12 土器出土状態	80
第87図	住居跡5 平面図	81
第88図	住居跡5 南側土層図	81
第89図	住居跡5 出土土器	82
第90図	方形周溝墓2・住居跡6-a・b 平面図	83
第91図	住居跡6-b 西側断面写真	84
第92図	住居跡6-a・b 断面図	85
第93図	住居跡6-b 出土土器	86
第94図	住居跡6-b 出土遺物	87
第95図	土壤15 平面図	88

第96図	溝10 平面図	89
第97図	砂層内 出土土器	90
第98図	第5次調査地点 遺構平面図	94
第99図	第5次調査地点 南側断面図	95
第100図	住居跡7 平面図	96
第101図	住居跡7 出土土器—1	97
第102図	住居跡7 出土土器—2	98
第103図	方形遺構・土墳16 西側断面図	99
第104図	方形遺構 平面図	100
第105図	第5次調査地点 北側断面図	101
第106図	大溝 北側断面写真	101
第107図	大溝 出土土器—1	102
第108図	大溝 出土土器—2	103
第109図	土墳17 出土土器	103
第110図	土墳16 平面図	104
第111図	盛土内 出土土器	105
第112図	5トレンチ 出土土器	106
第113図	第7次調査 トレンチ断面図	107

図 版 目 次

- 巻頭図版 栄根遺跡
- 図版1 栄根遺跡遠景
- 図版2 栄根遺跡全景
- 図版3 第1次調査 2トレンチ
- 図版4 第1次調査 (左上) 14トレンチ (右上) 6トレンチ遺構検出
(左下) 7トレンチ (右下) 8トレンチ
- 図版5 第3次調査 (左) 調査地点近景 (下) 1トレンチ
- 図版6 第3次調査 (左) 2トレンチ (下) 5トレンチ
- 図版7 第3次調査 (上) 7トレンチ (下) 同遺構内出土状態
- 図版8 第2次調査 (左) 調査終了全景 (下) 遺構全景
- 図版9 第6次調査全景
- 図版10 (上) 方形周溝墓1 (下) 同土器出土状態
- 図版11 方形周溝墓1 土器出土状態
- 図版12 土壙5
- 図版13 土壙5 土器出土状態
- 図版14 土壙3
- 図版15 (上) 溝7 (下) 同壹出土状態
- 図版16 (上) 第2次調査 住居跡1 (下) 第6次調査 住居跡1
- 図版17 (左) 第2次調査 住居跡2 (下) 第6次調査 住居跡2
- 図版18 (上) 第2次調査 住居跡2土器出土状態 (下) 住居跡1・2
- 図版19 住居跡3
- 図版20 (上) 住居跡4-c (下) 同土器出土状態
- 図版21 (上) 住居跡4-a・b (下) 住居跡4-b土器出土状態
- 図版22 (上) 住居跡4-b土器出土状態 (下) 住居跡4-a
- 図版23 (上) 土壙1 (下) 土壙2
- 図版24 (左) 土壙4 (下) 土壙6
- 図版25 (上) 土壙8・溝4 (下) 土壙9
- 図版26 (上) 石製模造品出土状態 (下) 掘立柱建物跡
- 図版27 第6次調査 掘立柱建物跡柱穴

- 図版28 第4次調査 全景
- 図版29 住居跡 5
- 図版30 住居跡 5 土層
- 図版31 住居跡 5 遺構・遺物
- 図版32 方形周溝墓 2・住居跡 6-a+b
- 図版33 方形周溝墓 2・住居跡 6-b 土器出土状態
- 図版34 住居跡 6-b 遺物出土状態
- 図版35 (上) 溝10 (下) 土壌12
- 図版36 第5次調査 全景
- 図版37 第5次調査 (上) 全景 (下) 大溝
- 図版38 住居跡 7
- 図版39 住居跡 7 遺物出土状態
- 図版40 大溝
- 図版41 大溝遺物出土状態
- 図版42 (上) 溝11 (下) 土壌16
- 図版43 (上) 土壌18 (下) 溝12
- 図版44 第7次調査 (左上) 3トレンチ (右上) 6トレンチ
(左下) 1トレンチ (右下) 5トレンチ
- 図版45 (上) 第1次調査 2トレンチ出土土器群
(下) 第1次調査 4・6・8トレンチ出土土器
- 図版46 (上左・右上) 第3次調査 7トレンチ遺構内出土土器
(上・右下・下) 第3次調査 3トレンチ出土土器
- 図版47 (左上) 第1次調査 2トレンチ出土土器群
その他 第2次調査 方形周溝墓 1出土土器
- 図版48 土壌 5 出土土器
- 図版49 土壌 5 出土土器
- 図版50 (上) 土壌 5 出土土器 (下) 同出土石器
- 図版51 (上) 第2次調査 包含層出土石器
(下) 第2次調査 土壌 5 出土石器
- 図版52 第2次調査 包含層出土石器・土器
- 図版53 住居跡 1 出土土器
- 図版54 (上) 住居跡 1 出土土器 (下) 同出土砥石
- 図版55 住居跡 2 出土土器

- 図版56 住居跡2 出土土器・土製品・鉄器
- 図版57 (上) 住居跡3 出土土器
(下) 住居跡4-a 出土土器
- 図版58 (上) 住居跡4-b 上層出土土器 (下) 同、下層出土土器
- 図版59 住居跡4-b 下層・最下層出土土器
- 図版60 (上) 住居跡4-b 最下層出土土器
(下) 住居跡4-c 出土土器
- 図版61 住居跡4-c 出土土器
- 図版62 住居跡4-c 出土石器
- 図版63 (上) 土壙1 出土土器
(中左) 土壙2 出土土器
(中右・下) 土壙4 出土土器
- 図版64 (上右・上中) 土壙1 出土土器
(上左) 土壙3 出土土器
(下) 土壙4 出土土器
- 図版65 (上) 土壙9 出土土器
(下) 土壙10 出土土器
- 図版66 第6次調査 その他出土遺物
- 図版67 住居跡6-b 出土土器 (中右) 土壙12 出土土器
- 図版68 (上) 住居跡6-b 出土土器 (中右) 住居跡5 出土土器
- 図版69 (上) 住居跡5 出土土器 (中・下) 方形周溝墓2 出土土器
- 図版70 方形周溝墓2 出土土器
- 図版71 (上) 住居跡5 出土土器
(下) 住居跡6-b 出土土器
- 図版72 (上) 住居跡6-b 出土土器 (下) 同、出土石斧
- 図版73 第4次調査 砂層内 出土土器
- 図版74 住居跡7 出土土器
- 図版75 (上・中) 住居跡7 (下) 大溝 出土土器
- 図版76 (上右) 溝16 出土土器 (上左) 住居跡7 出土土器
(中) 大溝 出土土器 (下) 盛土 出土土器
- 図版77 住居跡7 出土土器
- 図版78 住居跡7 出土土器
- 図版79 大溝 出土土器

- 図版80 大溝 出土土器
- 図版81 (上) 第7次調査 5トレンチ 出土土器
(下) 第6次調査 終了後近景
- 図版82 道跡周辺の航空写真

I 位 置 と 環 境

(1) 地理的環境

栄根遺跡は、兵庫県川西市の南部、栄根2丁目に位置する。この周辺は、兵庫県の南東部、大阪府の北西部に形成された西摂平野が広がり、北の長尾山丘陵、東の千里山丘陵、西の六甲山地に囲まれ、南は大阪湾に面している。この平野の東部には猪名川、西部には武庫川の二つの代表的な河川が南流し、その間に伊丹段丘が形成されている。

栄根遺跡の位置はこの平野の北端部にあたり、猪名川を境に大阪府池田市と接している。この地点は猪名川が長尾山・五月山・西丘陵間より平野に流れ出たところの西側の沖積地で、遺跡は長尾山丘陵の南縁に形成された段丘のすそに近接している。また、ここでは北側の段丘と南側の伊丹段丘にはさまれて東方に開ける幅約300mの谷が形成されており、猪名川の支流最明寺川と前川が遺跡の南西部を東流する。

栄根遺跡の標高は約25mで、北から南に緩く傾斜している。その間を江戸時代以来の用水路である小戸水路と加茂水路が南流するが、小戸水路の通過する第2～7次調査地点周辺と、加茂水路が通過する第1次調査1・2・12・13トレチ周辺は微高地となり、その中間部と東・西側及び南側は低地となっている。ただし、遺跡の中心地北部の第3～7次調査地点付近は、国鉄貨物駅造成の際の盛土が厚く盛られていることもあり、細かな旧地形を知ることは困難である。

(2) 歴史的環境

栄根遺跡の周辺には多くの遺跡が存在する。まず西摂地方の遺跡を概観してみたい。

先土器時代の遺跡としては、芦屋市朝日ヶ丘遺跡^①があげられるほか、宝塚市五ヶ山旭ヶ丘・香合新田で旧石器が採集されている。^②

また縄文時代では、早・前期の芦屋市朝日ヶ丘遺跡、猪名川流域では前期の箕面市瀬川遺跡^③、中期の伊丹市大阪空港A遺跡^④、後期の同B遺跡や晚期の尼崎市猪名川川床遺跡・藤川川床遺跡・田能遺跡などが知られる。

弥生時代になると遺跡数は増加する。前期では猪名川旧河口に近い田能遺跡、豊中市勝部



第1図 栄根遺跡の位置

遺跡、大阪空港B遺跡や、武庫川旧河口ふきんの尼崎市上ノ島遺跡、庄下川遺跡・西宮市甲風園遺跡など、旧海岸線に近い沖積地に立地する集落が日につく。ところが中期になると、田能・勝部遺跡が継続する以外にも、猪名川流域の池田市宮ノ前遺跡、川西市加茂遺跡や、武庫川流域の尼崎市武庫庄遺跡、宝塚・西宮市仁川高台遺跡など、前期の遺跡より上流の段丘上に立地する集落があらわれ、その多くは大集落として発展するようである。

また、西宮市五ヶ山遺跡や、芦屋市会下山遺跡などの丘陵上に営まれるいわゆる高地性集落が出現するのもこの時期である。統いて後期になると、前時期より継続する集落もあるが、全体として小規模な集落が増加する傾向になり、とくに猪名川旧河口ふきんの沖積地での分布が目立つようになる。

一方古墳時代になると、確認されている遺跡は少なく、尼崎市若王寺遺跡・下坂部遺跡・東園田遺跡・豊中市利倉遺跡や、加茂遺跡が知られているにすぎない。しかし古墳の分布は多く、前期では長尾山丘陵の宝塚市万籾山古墳・長尾山古墳、五月山丘陵の池田市茶臼山古墳・娘三堂古墳、千里山丘陵北西端の豊中市待兼山古墳・御神山古墳のほか、宝塚市安倉古墳など丘陵部での分布が目立ち、中期では伊丹段丘南端部の伊丹市御瓢塚古墳・尼崎市園田大塚山古墳・南清水古墳・池田山古墳・御園古墳や、豊中段丘西端部の豊中市桜塚古墳群など、沖積地に近い段丘端での分布がみられるようになる。また後期では、宝塚市雲雀丘古墳群をはじめとする長尾丘陵の古墳群や、宝塚市五ヶ山古墳群をはじめとする仁川流域の古墳群、芦屋市八十塚古墳群など、丘陵部での群集墳の形成がみられる。

なお古代寺院址としては、伊丹市伊丹庵寺、尼崎市猪名寺庵寺、豊中市新免庵寺、芦屋市芦屋庵寺などがみられる。

このように西摂地方の遺跡の分布をみた場合、栄根遺跡周辺の猪名川上流地域に一つの遺跡群を見いだすことができる。次にこの地域に限定して遺跡を見ていきたい。

この地域で最も古い遺物は、川西市加茂遺跡採集のナイフ形石器と同市花屋敷出土の有舌尖頭器などの旧石器である。また縄文時代では、加茂遺跡で後・晚期の遺構と遺物が検出されたほか、川西市小花で石棒、池田市伊居太神社参道遺跡で石顎がそれぞれ出土している。

統いてさらに詳しく弥生時代の集落遺跡を見ていくと、まず池田市木部遺跡において前期の集落が出現するが、当地域において最も大きな存在となるのは栄根遺跡南西約300mの伊丹段丘上に位置する加茂遺跡である。加茂遺跡では、弥生時代の集落は中期より（第II様式期）はじまるが、中期中ごろ（第III・IV様式期）に発展し、遺跡東部の居住地と西部の墓地をあわせると東西約750m、南北300mの大規模な集落となる。

しかし後期になると、集落の状態は一変し、小規模になるとともに、遺跡東・西部に分かれて居住地が営まれるようである。このような状態は古墳時代まで継続されるが、大規模な集落は再び営まれることはなかった。

第2圖 西擴地方遺跡分布圖



弥生時代の集落としては、他に川西市寺畠遺跡・久代遺跡・池田市神田遺跡・五月山公園遺跡・城山遺跡など後期のものが多いが、大規模な集落は確認されていない。またこの時期には、標高約200mの五月山丘陵上の池田市愛宕神社遺跡や、標高約100mの丘陵上の池田市・川西市戻ヶ瀧遺跡などの高地性集落ともいべき集落もみられる。

なおこの時代のものとしては、加茂遺跡東側崖下出土の栄根銅鐸と川西市寺満願寺でそれぞれ突線鉈式の銅鐸が出土している。

古墳時代になると、集落址としては加茂遺跡と神田遺跡があげられるにすぎないが、古墳の分布は多くみられる。とくに栄根遺跡北側の長尾山丘陵での分布が最も顕著で、当丘陵の古墳群の東部地域にあたる前期の宝塚市万籠山古墳・長尾山古墳や、後期の宝塚市雲雀丘古墳群・雲雀山東尾根古墳群・同西尾根古墳群・平井古墳群、少し離れて川西市勝福寺古墳などが分布している。また猪名川対岸の池田市でも、前期の茶臼山古墳・鶴三堂古墳や、後期の鉢塚古

凡 例

- △ 銀文時代遺跡
- 弥生時代遺跡
- 古墳時代～中世遺跡
- 銅 鐸
- 古墳・古墳群



1 栄根遺跡	6 寺畠遺跡	11 愛宕神社遺跡	16 雲雀山東尾根古墳群	21 鶴三堂古墳
2 加茂遺跡	7 久代遺跡	12 戻ヶ瀧遺跡	17 雲雀山西尾根古墳群	22 鉢塚古墳
3 小花石株出土地	8 神田遺跡	13 万籠山古墳	18 平井古墳群	23 五月丘古墳
4 伊居太神社参道遺跡	9 五月山公園遺跡	14 長尾山古墳	19 勝福寺古墳	24 二子塚古墳
5 木部遺跡	10 城山遺跡	15 雲雀丘古墳群	20 茶臼山古墳	

第3図 栄根遺跡周辺遺跡分布図

⑧・五月丘古墳・二子塚古墳なども分布するが、後期の群集墳はみられない。

なお、柴根遺跡の北側段丘上には、現在平安時代の薬師如来を安置する柴根寺が存在する。同寺の縁起が奈良時の創建とする点は明確ではないが、少なくとも中世以降の寺院が存在したことは確かなようである。

以上のように、柴根遺跡周辺の遺跡の分布をみてきたが、なかでも本遺跡と近距離に位置し時期的に並行する加茂遺跡や、北側丘陵上の古墳群との関係は、本遺跡を考える上で重要な問題点をふくんでいる。

註

- ① 棚井祐介「印石器・縄文時代」（『新修芦屋市史』資料篇1 1976年）
- ② 武藤誠・橋本久「考古編」（『宝塚市史』第四卷資料編1 1977年）
- ③ 棚井一夫「原始古代の箕面」（『箕面市史』第1巻本編 1964年）
- ④ 佐原真・横田義章・高井柳三郎「考古編」（『伊丹市史』第4巻 1968年）
- ⑤ 尼崎市田能遺跡発掘調査委員会「田能遺跡概報」（尼崎市文化財報告第5集 1973年）
- ⑥ 篠中市教育委員会「勝部遺跡」（1972年）
- ⑦ 尼崎市教育委員会「尼崎市上ノ島遺跡」（尼崎市文化財調査報告第8集 1973年）
- ⑧ 尼崎市教育委員会「尼崎市栗山・庄下川遺跡」（尼崎市文化財調査報告第9集 1974年）
- ⑨ 折井千枝子・坂井秀弥「西宮市甲風廻採集の弥生式土器」（『関西学説考古』No.4 1978年）
- ⑩ 富田好久「考古学上に現われた池田」（『新版池田市史』概説篇 1971年）
- ⑪ 末永雅雄「張津加茂」（関西大学文学部考古学研究第3冊 1967年）
川西市教育委員会「加茂遺跡—造構を中心としてみた遺跡の概要—」（1976年）
同「加茂遺跡発掘調査概要」（1980年）
- ⑫ 宝塚市教育委員会「仁川高台弥生遺跡」（宝塚市文化財調査報告第13集 1979年）
- ⑬ 武藤誠「埋蔵文化財調査記録」（『西宮市史』第7巻 1959年）
西宮市教育委員会「仁川五ヶ山弥生遺跡—№4地点の調査報告—」（西宮市文化財資料第14号 1975年）
同「仁川五ヶ山弥生遺跡—№5地点の調査記録—」（西宮市文化財資料第16号 1976年）
- ⑭ 村川行弘・森岡秀人「弥生時代」（『新修芦屋市史』資料篇1 1976年）
- ⑮ 尼崎市教育委員会「尼崎市若王寺遺跡発掘調査概要」（尼崎市文化財調査報告第4集 1966年）
同「尼崎市下坂部遺跡（第4次調査報告）」（尼崎市文化財調査報告第13集 1981年）
同「尼崎市東園田遺跡—第1次・第2次調査報告」（尼崎市文化財調査報告第12集 1980年）
- ⑯ 利倉遺跡発掘調査用「利倉遺跡」（豊中市教育委員会 1976年）
- ⑰ 宝塚市教育委員会「概津万籾山古墳」（宝塚市文化財調査報告書第7集 1975年）
- ⑱ 橋本誠一「長尾山古墳外形測量調査報告」（『兵庫県埋蔵文化財調査報告』第1集 1970年）
- ⑲ 畠田直「池田市茶臼山古墳の研究」（大阪古文化研究会学術第1輯 1964年）
- ⑳ ⑯と同じ。
- 富田好久「考古資料」（『池田市史』史料編1 1967年）

- ◎ 藤沢一夫「古墳文化とその遺跡」（『豊中市史』本編1 1960年）
- ◎ ④と同じ。
- ◎ ④と同じ。
- ◎ ④と同じ。
- ◎ ④と同じ。
- 石野博信『宝塚市長尾山古墳群』（宝塚市文化財調査報告第1集 1971年）
- 高井悌三郎『平井古墳群』（宝塚市文化財調査報告第2集 1972年）
- 岡田務『宝塚市巽御山古墳群－東尾根A支群・西尾根B支群の調査－』（宝塚市文化財調査報告第6集 1975年）
- ◎ ④と同じ。
- 関西学院大学考古学研究会『仁川流域の古墳群』（『関西学院考古』No.3 1977年）
- ◎ 藤岡弘・勇正広「古墳時代」（『新修芦屋市史』資料篇1 1976年）
- 芦の芽グループ・芦屋市教育委員会『芦屋・八十塚古墳群岩ヶ平支群の調査』（芦屋市文化財調査報告第11集 1979年）
- ◎ 高井悌三郎『浜津伊丹鬼寺跡』（伊丹市教育委員会 1966年）
- ◎ 芦屋市教育委員会『芦屋施寺址』（芦屋市文化財調査報告第7集 1970年）
- ◎ 亥野豊「考古資料」（『川西市史』第4巻資料編 1976年）
- ◎ 1934年ごろ出土したもので、現在川西市寺畠在住の西口栄蔵氏が所蔵されている。
- ◎ ④と同じ。
- ◎ ④と同じ。
- ◎ 橋高和明『池田市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』（池田市教育委員会 1981年）
- ◎ 式藤誠「考古学からみた川西地方」（『川西市史』第1巻 1974年）
- ◎ 梅原末治『浜津火打村勝福寺古墳』（『近畿地方古墳墓の調査』1 1935年）
- ◎ 同『浜津火打村勝福寺古墳の石室』（『近畿地方古墳墓の調査』1 1935年）
- ◎ 富田好久、橋高和明『五月丘古墳』（池田市文化財報告第3号 1980年）
- ◎ ④と同じ。

II 調査の経過

(1) 調査に至るまで

今回の一連の発掘調査の契機となるのは、昭和47年に実施された国鉄福知山線複線電化計画地内の遺跡分布調査である。

この調査については、まず地元研究者などにより分布調査等の実施を求める声が出されたのを機に、昭和47年川西市教育委員会より兵庫県教育委員会をつうじて国鉄大阪工事局に埋蔵文化財の取扱いについての問い合わせがなされた。その後、国鉄大阪工事局より兵庫県教育委員会をとおして川西市教育委員会に埋蔵文化財の分布等についての照会文書が出された。この文書は隣接する宝塚市教育委員会にも出されたので、両市教育委員会は協議の上、両市合同の遺跡分布調査を実施することになった。

この調査は同年6月、国鉄福知山線北伊丹駅から宝塚駅までの複線電化部分を踏査することにより実施された。この結果、川西市域では、国鉄福知山線と市道が交差する川田踏切付近で弥生土器か土師器と思われる赤褐色の土器片が数点採集されたが、地名より栄根遺跡と名づけ、兵庫県教育委員会に報告した。^①

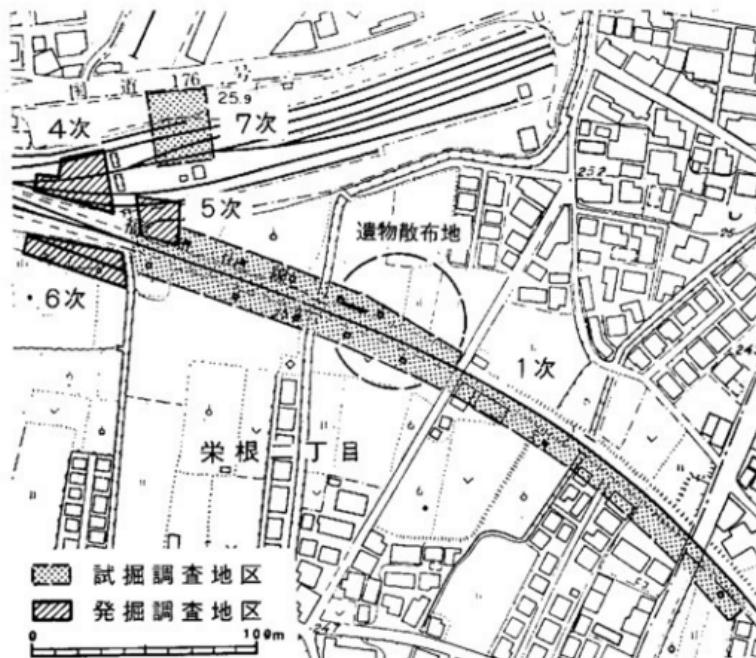
(2) 調査の経過

栄根遺跡の発掘調査は、上述の分布調査により遺物散布地を確認して以降、7次にわたって実施された。このうち、前半の昭和54年1月から同年11月におよぶ第1～5次調査は、国鉄福知山線複線電化工事及び国鉄川西池田駅移転建設工事にともなうもので、兵庫県教育委員会が主体となって調査を行い、川西市教育委員会が調査員を派遣し協力した。また、後半の昭和54年11月から昭和55年7月にかけての第6・7次調査は、川西市による国鉄川西池田駅建設にともなう下水道移設工事及び同駅前暫定広場建設工事によるもので、調査は川西市教育委員会が主体となり、栄根遺跡発掘調査団（団長多淵誠樹）が実施した。

第1次調査では、まず遺物散布地を中心に線路増設部を東西約350mにわたって15ヶ所の試掘調査を行った。この結果、東部の2トレンチでは弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器群が、西端部の6・8トレンチでは弥生時代中期から古墳時代前期と思われる遺構と遺物包含層が検出された。



第1次調査土器群実測風景

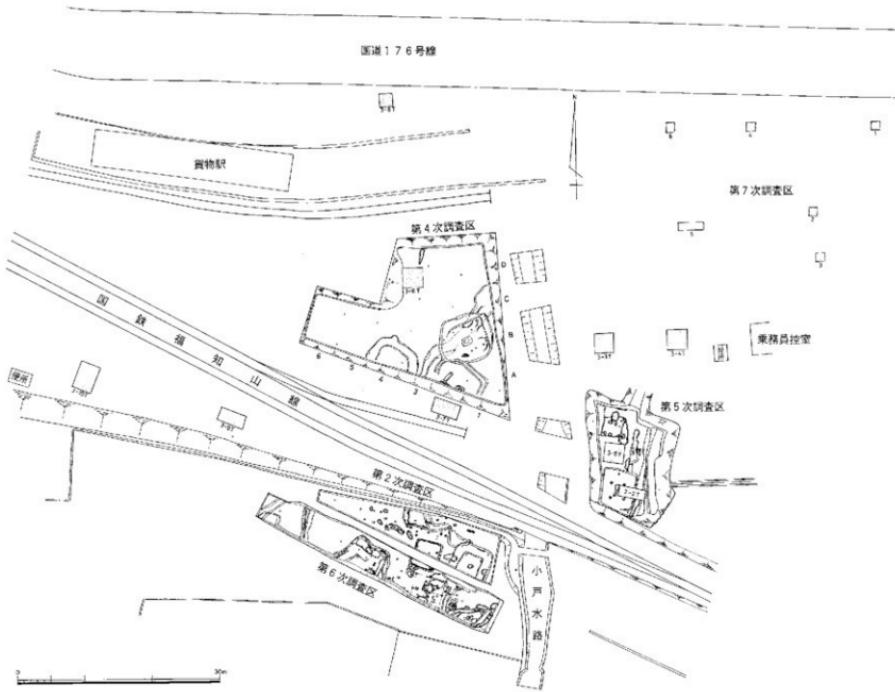


第4図 調査地点位置図

第2次調査では、このうち、6・8トレンチの地点において線路増設部の全面調査を実施した。この結果、弥生時代中期の方形周溝墓1基と弥生時代末から古墳時代前期にかけての堅穴式住居2軒が検出され、この地区を中心として弥生時代から古墳時代にかけての集落址が広がっていることが判明した。

ところが、これまでの調査は複線化における線路増設部分を対象としたが、第2次調査によりこの北側に予定される駅舎建設工事が問題となった。このため、第3次調査では駅舎建設地を中心に試掘調査を行ったところ、駅舎建設地にも遺構の存在することが明らかになり、この地点においても全面調査を実施することになった。なお第1次調査2トレンチ検出の土器群の性格を確認するための試掘調査も合せて行ったが、遺物包含層及び遺構は全く検出できなかった。

第4次調査はこのうち駅舎建設部、第5次調査はプラットホーム建設部にそれぞれあたるものであるが、線路やその周辺の掘削が危険な地点については調査対象地域から除外した。これらの調査では、第4次調査において弥生時代中期の方形周溝墓1基、弥生時代末から古墳時代中



第5回 遺跡全休図

期にかけての堅穴式住居 3軒、第5次調査において弥生時代末から古墳時代初頭にかけての堅穴式住居 1軒、古墳時代中期の大溝などがそれぞれ検出された。なおこの調査により、国鉄福知山線複線電化工事及び川西池田駅建設工事関係の調査は終了した。

一方、川西市下水道部では、それまで第2・4次と第5次調査地点の間を流れていた小戸水路が駅舎建設地内に入るため、駅舎の西側を迂回させる工事が計画されたが、この水路建設地の一部が第2次調査地点の南側に接することになった。そのため、川西市教育委員会では柴根遺跡発掘調査団を組織し、第6次調査を実施したが、弥生時代前期の大溝や弥生時代末から古墳時代後期にかけての堅穴式住居 4軒が新たに検出された。

調査名	調査期間	対象地と要因	面積	調査主体	調査員
分布調査	昭和47年6月	国鉄福知山線複線化部分		川西市教育委員会	田中達夫
1次	昭和54年1月8日 2月28日	同線複線電化にともなう試掘調査	62m ²	兵庫県教育委員会	深井明比古 田中達夫 岡野慶隆
2次	昭和54年4月23日 7月30日	同線複線増設部の発掘調査と試掘調査	180m ²	タ	タ
3次	昭和54年4月24日 7月24日	国鉄川西池田駅建設地試掘調査	100m ²	タ	タ
4次	昭和54年8月20日 11月23日	同駅建設地発掘調査	350m ²	タ	池田正男 岡野慶隆
5次	昭和54年8月20日 11月3日	同駅プラットホーム建設地発掘調査	200m ²	タ	タ
6次	昭和54年11月24日 昭和55年2月2日	水路移設地発掘調査	190m ²	川西市教育委員会 柴根遺跡発掘調査団	岡野慶隆
7次	昭和55年7月14日 7月22日	駅前暫定広場建設地試掘調査	110m ²	タ	タ

調査一覧表

また駅舎建設地北東部では、川西市により駅前暫定広場が計画されたことから、川西市教育委員会が主体となり、栄根遺跡発掘調査団が第7次調査として試掘調査を行った。その結果、一部で古墳時代の遺物包含層が検出されたが、同広場が恒久的な施設でないことや、建築物の計画がないことより、試掘調査にとどめた。

註

- ① 遺跡分布調査は宝塚市教育委員会直宮憲一氏の協力により実施された。



第4次調査風景

III 第1次調査

(1) 調査の経緯

昭和49年度の国鉄福知山線複線電化地区内分布調査の結果、市道109号線川田踏切西方50mを中心とする弥生土器群が、土師器が散在していたことから考えて、県道尼崎池田線付近から川西池田駅東端までに至る線路西側の約350mの範囲を確認調査の対象とした。

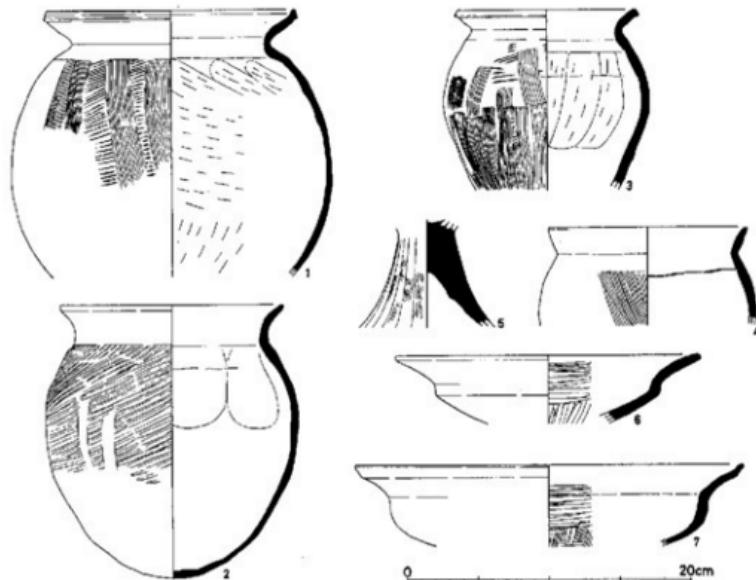
これらの範囲には小戸水路・加茂水路が南に貫流し、この付近には自然堤防と考えられる微高地が広がっている。確認調査は福知山線北側の微高地上に1トレンチ～5トレンチを設定し、福知山線南側では県道東に15トレンチを設定したのが東端となり西方に10トレンチを設け、合計15トレンチを設定し、調査を昭和54年1月8日から2月28日まで実施した。

(2) 試掘調査の結果（第6～11図、図版3・4・45・47）

第1次調査範囲は地形から市道109号線西に広がる微高地とその東側の低地に分けられ、14トレンチ・15トレンチの表土は標高23m未満の所であり耕土下は砂質土層となり、砂砾層も15トレンチでは22.3m付近、14トレンチは21.3m付近まで下がっていることが判明した。一方、13トレンチ以西では、表土はいずれも24～25mラインにおさまってはいるものの、基底礫層は起伏を示している。



第6図 2トレンチ土器群



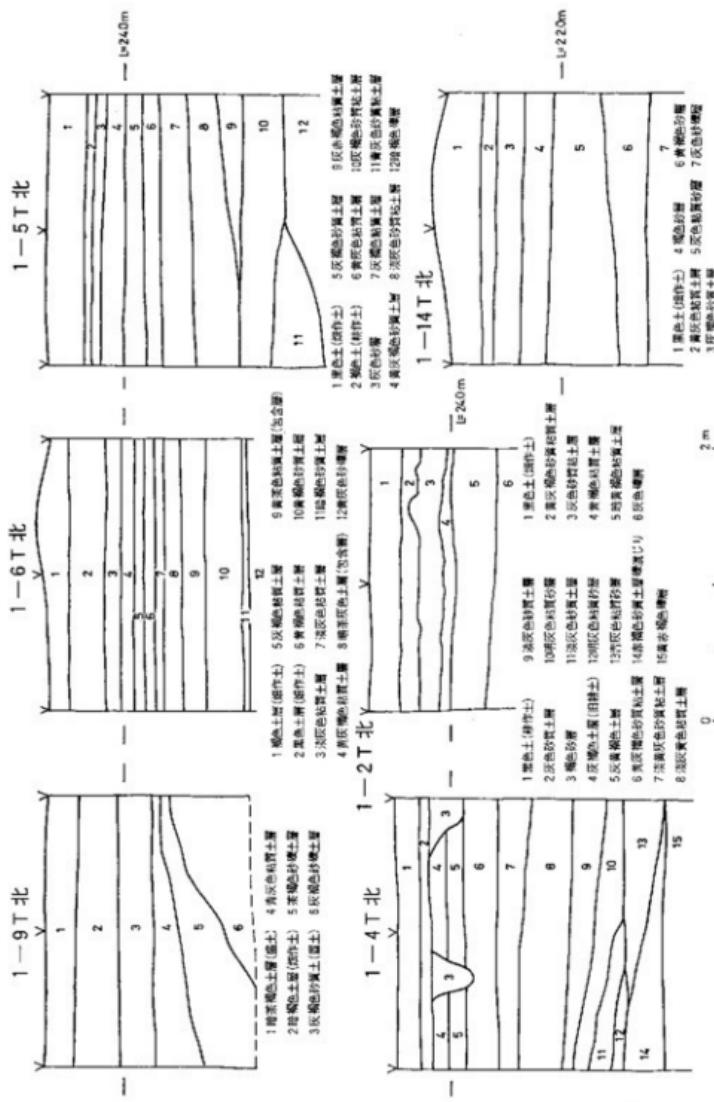
第7図 2トレンチ出土土器

この中で2トレンチでは1層～4層にかけて土師器等が出土したが、いずれも磨滅しており若干の上器の移動が考えられる。なお5層暗黄褐色粘質土層上面において土器群が検出された。（第6図）これらは東西約1m南北約60cmの小範囲に土器が集中しており、その中には円窪も多く含まれていた。なおこの上器群直下に茶灰色粘質土の入った深さ15～20cm程度の浅い土壌状の凹みが検出されたが、土器はほとんど含まれなかった。

これらの遺物の中で壺は4種類に分類され、（1）は頸部がくびれ口縁端部が直立し胴部が球形になるもので外面には細い印き目、内面へラケズリが施されるものであり、（2）は頸部が開きV様式の伝統的印き目を残すものであるが丸底となっている。（3）は頸部から口縁にかけて屈曲し外面ハケ目調整、内面へラケズリが施されている。（4）は全体的に丸みをもつもので外面にハケ目が残るものである。

高杯としてはハケ目調整の後ヘラミガキが施されている脚部（5）、杯部外面に明確な棱があるもの（6）がみられる。

鉢として口縁がくびれ、扁平な形をなすもの（7）がある。



第 8 図 第 1 次 調査トレン断面図

これら土器群から出土したものの中で畿内第V様式のものと考えられるものに(3・5・6・7)があり、庄内式土器の系統であると考えられる(1)があり、ほぼ同時期のものとして(2)がある。これらの遺物から、畿内第V様式～庄内式に至る土器が存在することが判明した。

3トレンチにおいては第1次調査トレンチの中で最も疊のレベルが高い位置にあり、居住条件の良い場所と考えられたが遺構は検出されず、遺物も数点が磨滅した状態で出土したのみであった。

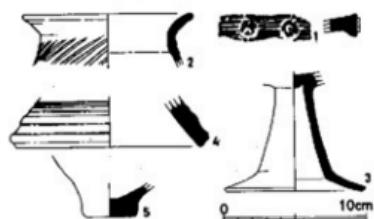
4～7トレンチでは、粘質土・砂質土の堆積が厚く、しかも疊層レベルも22.6m付近まで下がっていることからこの間は旧河道であった可能性が強い。またこれらのトレンチのうち4トレンチ14層から弥生土器底部が出土している。(第10図-5)

6トレンチは加茂水路西側に隣接した地点にあり、暗茶灰色土層の遺物包含層を確認し、黄茶色粘質土層上面にて、灰茶色粘質土の住居跡隅の可能性のある遺構を検出した。(第9図)またこの遺構を形成する地山である黄茶色粘質土層中からも弥生土器が検出されたことから、少なくとも2層以上の包含層が検出された。これらの包含層のうち暗茶灰色土層からは弥生土器から古式土師器が出土し(第10図-1・2),下層の黄茶色粘質土層からは弥生土器のみが出土しているところから、2時期の包含層が考えられた。

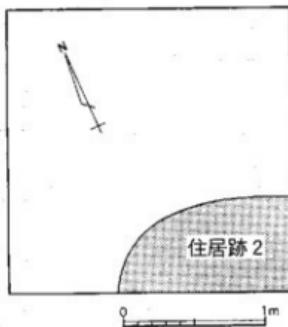
8トレンチでは6トレンチと同様の層序を示し、暗茶灰色土層の包含層が確認され、高杯脚部や台付鉢脚部等が出土した。(第10図-3・4)9トレンチでは疊が上昇し、包含層は検出されなかった。

(3) 小 結

第1次調査の結果、栄根の福知川線沿いの旧地形がある程度判明するに至った。まず、14・

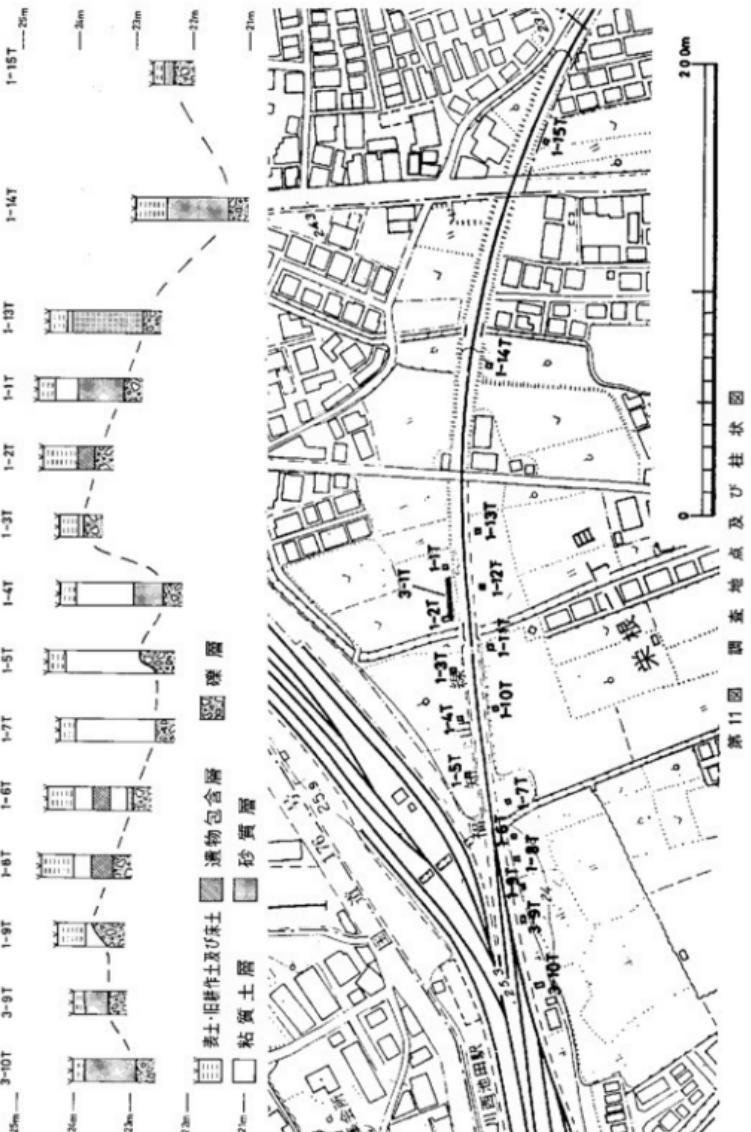


第10図 4・6・8トレンチ出土土器



第9図 6トレンチ遺構平面図

15トレンチ部分では表上レベルが低いうえに疊が低いことから、猪名川旧河道右岸付近に位置するものであり、その端は市道109号線を境にするものと考えられる。またこれより西方については、13・1・2・3トレンチでは自然堤防と考えられる微高地が広がり、2トレンチにおいて弥生時代後期から古墳時代初頭にわたる土器群及び土壇状遺構が検出



第11圖 調査地点及柱状図

された。しかし、土器群が旧耕土直下であるため新田開発による包含層等の削平ということも考えられる。

4・5・7トレンチについては、堆積状況から弥生時代以後の旧河道が考えられる。6・8トレンチにおいては明確な遺物包含層や遺構が検出された。これらはいずれも弥生時代中期から古墳時代前期に至る時期のものが確認された。

以上のことから、5・6・8トレンチの位置する加茂水路右岸で福知山線南側部分の約180m²の全面調査が必要となった。また小手水路左岸に位置する2トレンチで検出された土器群については、包含層が周囲に広がるかどうか不明な点も多いため周囲に再度トレンチを設定し、再確認調査が必要であると考えられた。

IV 第3次調査

(1) 調査の経緯

第1次調査(確認)の結果を踏まえて、2トレンチで検出された土器群の性格等を明らかにするための再確認調査と、6・8トレンチで検出された包含層や住居跡等を含む地区以外に、新たに駅舎、プラットホーム建設、下水道移設工事等の新駅建設に関連する場所に遺跡の範囲がどのように広がるのかをおさえるべく第3次調査(確認)を昭和54年4月24日から同年7月24日までの期間内で実施した。

第3次調査の範囲は、加茂水路東の2トレンチ付近から川西池田駅東端までの東西200m、北は国道176号線沿いから福知山線路北側までの約50mの範囲についての調査ではあるが、現況の福知山線沿いの調査であることや、川西池田駅貨物引込線構内であることから、おのづから発掘調査面積等に制約があったことを記しておく。

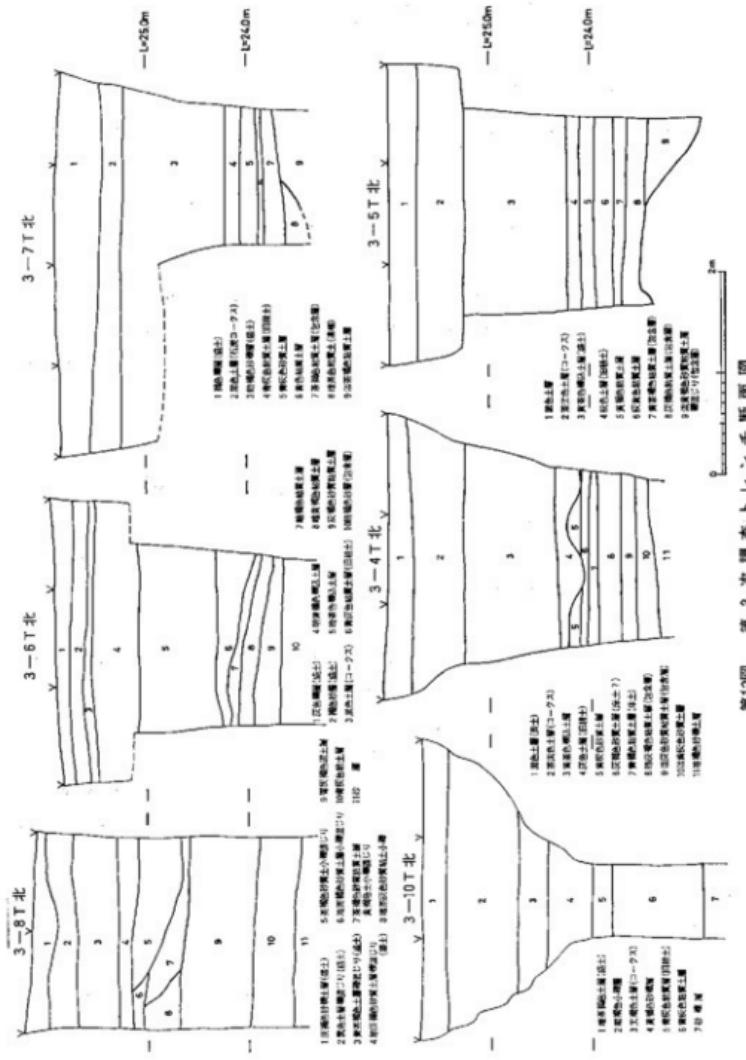
(2) 試掘調査の結果(第12~16図、図版5~7・46)

第3次調査の東端にあたる2トレンチ付近は加茂水路の東に位置し、基底疊も上昇している所でもあり、2トレンチで検出された土器群の性格を追求するためや、付近の遺物包含層、遺構等を確認するため、2トレンチ東に幅1.5m長さ17mの第3次調査1トレンチを設定し調査した結果、2~6層にて土器等が検出されたがいずれも小片でしかも遺構等は検出されなかった。

以上のことから、第1次調査2トレンチ、第3次調査1トレンチ付近においては土器群が検出されたものの、第3次調査ではプライマリーな包含層は検出されなかったことから、微高地に立地し、特に有機質土を含まない遺構が調査対象範囲外に存在する可能性や、あるいは新田開発時に包含層が削平され、かろうじて土器群が残ったものとも考えられる。

2トレンチは新駅のプラットホーム及び本線上に計画されているもので、小戸水路東10m付近の福知山線沿い標高24.6mに位置する。2トレンチでは、耕土や床土、旧耕土等が約60m続き、標高23.6m付近で暗灰黒色粘質土層の遺物包含層が確認された。

遺物としては、(1~3)の高杯や(4~7)の底部等が出土した。(1~3)は中空の高杯脚上部であり、いずれも円板充填法によって杯部を接合しているものである。このうち(2)には脚中央に円形透かしがあり、外面はヨコナデにてていねいに仕上げられたもので、(3)は外面縱方向のヘラミガキがみられる。(4)はあげ底で底面には木葉痕がある。(5)は尖りぎみの小さな底をもち外面は右上がりの叩き目で調整している。(6)は底部端面が若干外反しドーナツ状を呈するものである。(7)は尖りぎみのものであり外面は縱方向のハケ目調整されているものである。

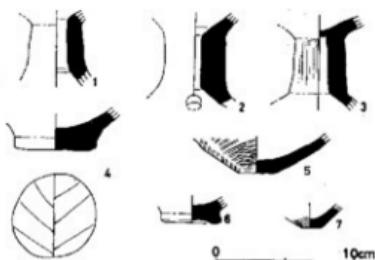


第12図 第3次調査トレンド面断面図

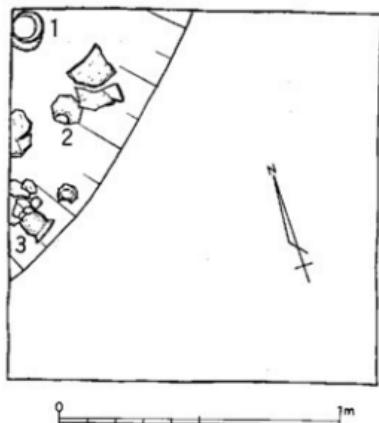
以上の遺物から3トレンチ内の包含層出土の土器は弥生時代後期～古墳時代前期にわたるもののが存在する。

6・7トレンチは駅舎建設予定地にあたるもので小戸水路の西15m付近にあり、貨物引込線内に位置する。

6トレンチでは1～5層までが貨物引込線造成あるいはそれ以前の盛土であり、

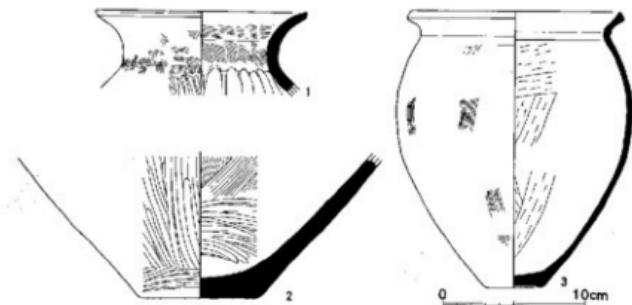


第13図 2トレンチ出土土器



第14図 7トレンチ遺構平面図

近世～現代におよぶ遺物が含まれている。6層は盛土される以前の旧耕上であり、この土層以下は中世の遺物が若干混入しており、9層ではごく小量の遺物が存在していた。7トレンチでは1～3層まで盛土であり、これらの土層からは現代瓦及び2層から急須等が数点出土している。4～6層は旧耕土であり、7層茶褐色粘質土層からは畿内第V様式の土器を含む遺物包含層が検出され、9層淡茶褐色粘質土層上面にて暗茶色粘質土の入った遺構が検出され、遺物も検出された。（第14図）



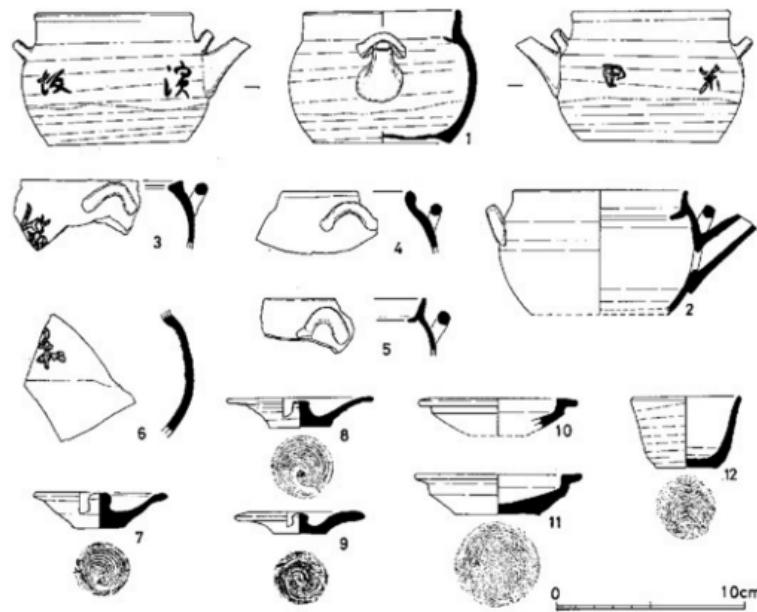
第15図 7トレンチ遺構出土土器

(1) は壺口頸部で、口縁部にかけて外反し、ハケ目調整の後ナゲで仕上げている。(2) は壺底部でていねいなヘラミガキを施す大型の土器である。(3) は壺で短く外傾する口縁をもち胴部の張りが少ないものである。これらの遺物から畿内第V様式のものであり、弥生時代後期の遺構であると考えられる。

8・9トレンチは駅舎建設に伴って小戸水路を西側に迂回される計画があり、その地点に8・9トレンチを設定した。8トレンチは6トレンチ北方27mの国道176号線沿いに設定した。

8トレンチも1～4層まで厚く盛土されている。4層以下は小粒混じりの粘質土層が続き、9層青灰褐色泥土層で備前焼鉢等が小量出土したにとどまった。9トレンチにおいては1～3層までの約1.8mが盛土となっており、4・5層が旧耕土であり、7層暗茶色土層から土器が若干出土したが湧水のため深く追求することはできなかった。

3・4・5・10トレンチは新駅舎建設に伴って新しく計画される建築物等を考慮し遺跡範囲を確実につかむためトレンチを配して調査を実施した。その結果、3トレンチでは1～4層までは盛土で5層以下が旧耕土になっており、最下層9層次黃色砂砾層に至るまでの土層では遺物



第16図 3トレンチ出土磁器

は出土しなかった。しかし2層茶黒色上層（石炭ガラ）から駅弁用の急須、蓋、湯呑み茶碗等が出土している。（第15図）（1・2・5）は急須で直立する口縁をもち、内側にかえりをもつもので体部中央に注口部と把手2ヶ所が付く。（1）は体部中央の両面に「濱坂」「米田」の文字がある。（3・4・6）は口縁端部が平坦に押えられているものや丸く成形されているもので（6）は色調等からこの類に入るものと考えられる。（3）は体部上半に「笠」と考えられる文字や（6）には「和」の文字がある。（7・8・9）はつまみ部分をもち、口縁端部が上方に外反するもので底部は全て回転糸切りである。（10・11）はつまみをもたない蓋で口縁が平坦に屈曲しているものであり底部は回転糸切りである。（12）は湯呑み茶碗で底部から口縁にかけて外傾する小型のものであり底部は糸切りである。

これらの遺物については、「濱坂」「米田」の文字をたよりに調査した結果、兵庫県美方郡浜坂町にある浜坂駅前の米田茶店が駅弁と共に販売した急須とその蓋及び湯呑み茶碗であることが判明した。また販売していた時期は大正初期であるが、全て米田茶店が販売したものではなく、（3）は篠山口で（6）は和田山で販売していたものと考えられる。これらの急須とその蓋のセット関係は（1・2・5）のかえりをもつものと（7・8・9）のつまみをもつもの、（3・4・6）のつまみをもたないものと（10・11）のつまみをもたないものがセットになるものと考えられる。

以上のことから第3次調査範囲内の石炭ガラによる盛土については大正時代以後のものと考
えられる。

4トレンチでも1～3層は約1.7mにおよぶ盛土であり、4層以下が旧耕土で8層暗灰褐色粘質土層で遺物包含層が検出されたが、遺構は検出されなかった。

10トレンチは第3次調査の西端にあたる。1～4層までは盛土層であり5層は旧耕土であり、砂礫層上面は標高22.9mである。このトレンチからは遺物、遺構等は検出されなかった。

（3） 小 結

第3次調査は鉄道建設時の多量の盛土により発掘面積が狭く確認調査は困難を極め、東端の1トレンチから西端の10トレンチまで行われた結果、第1次調査2トレンチで検出された土器群の性格を追求すべく第3次調査1トレンチで再確認をしたが、結局工事予定区域内においては遺物包含層や遺構等はないと断定した。しかし、旧猪名川右岸にあたる地点でしかも自然堤防上の微高地に立地しているところから、北側の貨物引込線に遺構が広がっていることも考えられる。

駅舎等の付属施設の予定された小戸水路及び第2次調査地点北の福知山線路をはさんだ区域が遺跡の中心となるところから、駅舎建設予定地等の付属施設建設地において発掘調査の必要が生じた。また遺跡の広がりとして西は9トレンチ付近、北は6トレンチで、南については第6次調査地点より以南に延びており、北東方向については今後の調査で確認する必要がある。

註

- ① 急須の「浜坂」「米田」の文字の聞き込み調査については坂本みちよ氏の多大なる協力を得。浜坂駅前に所在する米田茶店の米田弥右二氏にお聞きした。米田氏の話から、急須、蓋、湯呑み茶碗はセットとして駅のホーム等で販売され、つり手には竹、つり手と把手の接続には針金を使用し、中身であるお茶は寒冷紗に番茶を包み、ティーバッグにして使用されていたものであった。これらの製作地については瀬戸から外交員が来ていたらしいが瀬戸では依頼しなかったそうであるため現在のところ製作地は不明である。
- ② 明治30年阪鶴鉄道として建設され、明治40年8月以後国鉄福知山線となった。この福知山線及び山陰線沿線の主要な駅として、浜坂、和田山、篠山口駅等も取り上げられ、これらの駅名が該当するものと考えられる。
- ③ 旧川西池田駅が建設されたのは明治34年であり、少なからず遺跡付近においても盛土等がなされたものと考えられるが、影響の多くは貨物引込線造成時に盛土されたものであり、その時期は昭和初期頃と聞く。



5 トレンチ 調査 風景

V 第2・6次調査

(1) 調査の経緯

第2次調査は第1次調査の6・8トレンチで確認された包含層や遺構等の性格を明らかにするため小戸水路の西側、福知山線の南にあたる所で、三角形に近い約180m²の小さな範囲の全面調査を行った。

調査の実施にあたっては第1次調査の6・8トレンチの土層を検討したうえで⑧層暗茶灰色土層（包含層）まで約80cmを機械による掘削を考えたが機械搬入が不可能なため手掘りによる表土掘削という方法をとらざるを得なくなった。また調査対象範囲が狭いうえに福知山線に隣接していることや、北側の福知山線との間に水路があることに加えて遺構面が深いため、調査範囲が少なくなった。

なお調査地区的設定は南北を2分割し南をA列、北をB列とし、東から任意地点を0として8区画16地区に分けて調査を行った。

一方、第6次調査の要因となる水路移設工事地は、北部で第4次調査地点の西端部を通過した後、第2次調査地点の南側に沿って東へほぼ直角に曲り、従来の小戸水路に合流する。第6次調査では、このうち調査不可能な線路部分を除き、それまでの調査で遺物包含層と遺構の存在が考えられる第2次調査地点の南側通過部分を発掘調査の対象とした。調査範囲は当初南北約5m、東西約34mであったが、調査中さらに西側でも遺構の存在が予想されたため、約4mの長さで拡張した。

調査の実施にあたっては、北側に接する第2次調査地点での成果をふまえたうえで、まず表土より遺物包含層上面までを機械により除去した。調査地区的設定は、この時点で南北にほぼ二等分し、南をA列、北をB列とし、それぞれ東より西に1から8地区まで設定した。

遺物包含層である⑧層の上面では、A・B-2・3地区において、まず握立柱建物跡が検出されたが、これを調査した後、⑧・⑨層を除去した。弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺構は、これらの遺物包含層を除去する過程で検出されたが、⑧層とその上に部分的に堆積する遺物包含層の前後関係が当初明確でなかったため、一部遺構の調査順序が逆転した部分もある。この後⑩層を除去したが、弥生時代中期の遺構は検出されなかった。

なお、この調査では、第2次調査地点の住居跡1・2の南部を調査することができたが、第2次調査地点はすでに線路が敷設されていたため、幅50cmの未調査部分を残すことになった。

(2) 層序(第17・19図)

第2次調査の基本土層は①黒色土層（畑作土）、②淡灰色粘質砂層、③黄灰褐色粘質砂層、

④灰褐色粘質土層、⑤黄褐色粘質土層、⑥淡灰色粘質土層、⑦淡黃褐色粘質土層の順にはほぼ水平に堆積する。これらの土層はいずれも、かつて畑や水田の耕作土となっていた土であり、近世以後のものと考えられる。また、これらに伴なうと思われる水路跡や暗渠等も確認された。

遺物包含層は、その直下に⑧暗茶灰色粘質土層（古墳時代前期）、⑨灰茶色粘質土層（弥生時代後期～古墳時代前期）、⑩黄茶色粘質土層（弥生時代中期）の順に堆積し、さらに地山として⑪黄褐色砂質土層、⑫黄灰色砂礫層が堆積している。

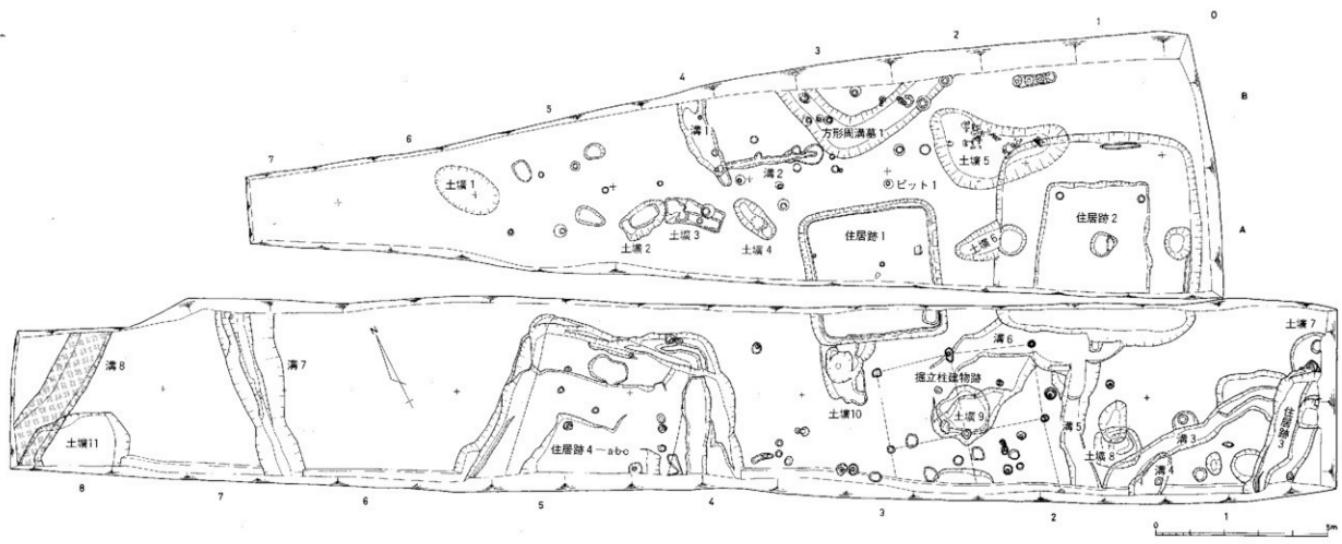
第2次調査地点内における包含層は地山の堆積状況と密接な関係があり、⑫の砂礫層が東側から下がりはじめA-3地区で最も下がり、西に徐々に上がりA-6地区で標高23.7mまで上がり西に平行に堆積しており、この砂礫層上に⑪層が堆積し、弥生時代、古墳時代の順で遺物包含層が存在する。

土層の堆積状態は、第6次調査地点でもほぼ同様である。まず表土から、80～90cmまでは、調査地区のほぼ全域に①黒色砂質土層、②灰色粘質土層、③灰黄色粘質土層、④灰色粘質土層、⑤灰黄色粘質土層、⑥灰色粘質土層、⑦黄色粘質土層の順にはほぼ水平に堆積する。これらの土層はかっての畑、水田の耕土と床土であるが、少なくとも近世以降のものであろう。

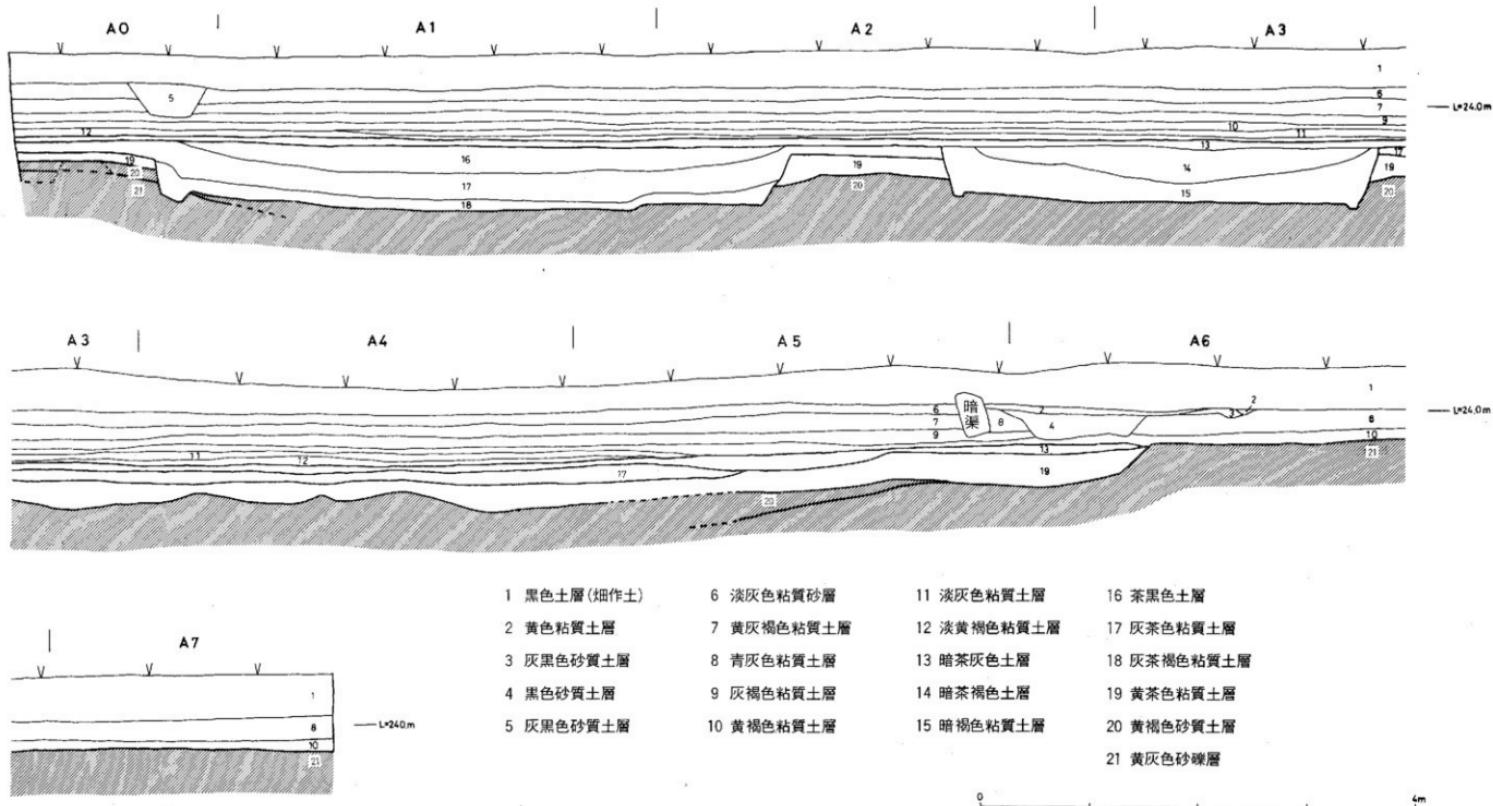
遺物包含層は、その直下に、⑧暗茶灰色粘質土層（弥生時代後期～古墳時代前期）⑨灰茶色粘質土層（弥生時代後期～古墳時代前期）、⑩黄茶色粘質土層（弥生時代中期）の順に堆積する。ただし、これらの遺物包含層は調査地点全域には堆積せず、⑧層はA・B-1～6地区の比較的全域、⑩層はA-1～4、⑪層はA-2～6にかけて、それぞれ堆積している。なお第6次調査地点では、⑪層の上にもう1層遺物包含層（灰褐色粘質土層、古墳時代後期）が一部堆積していた。



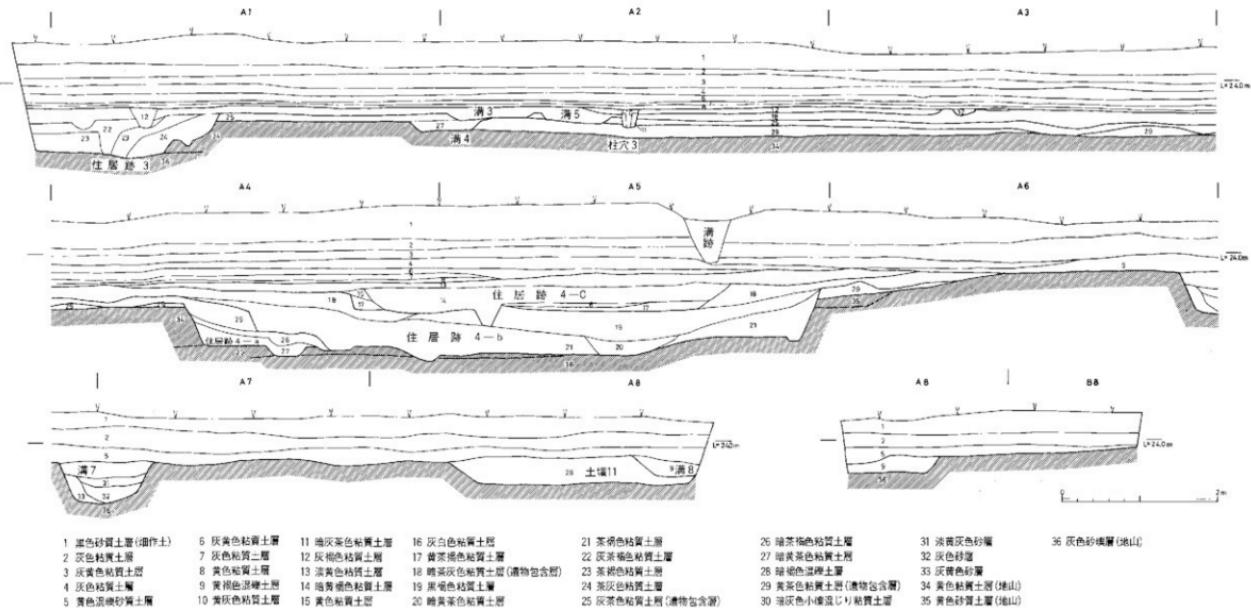
第17図 第2次調査A-1地区土層断面写真



第18図 第2・6次調査地点 遺構平面図



第19圖 第2次調查地點 南側路面圖



第20圖 第6次調査地点 南・西側断面

地山は⑩黄色粘質土層、⑪黄色砂質土層、⑫灰色砂礫層の順に堆積する。地山のうち全城に堆積するのは最下層の⑫層で西部のA・B-6~8地区ではレベルが高く、⑪・⑫層をともなわないで直接露出しているが、中央部で大きく落込んだ後、東部ではわずかに高くなっている。おそらく、当初⑫層は西部でさらに高くなっていたり、⑪・⑫層はその落込んだ部分に堆積していたが、近世ころの水田開発時に⑫層の高まりは削平されたものと考えられる。

(3) 遺構と遺物

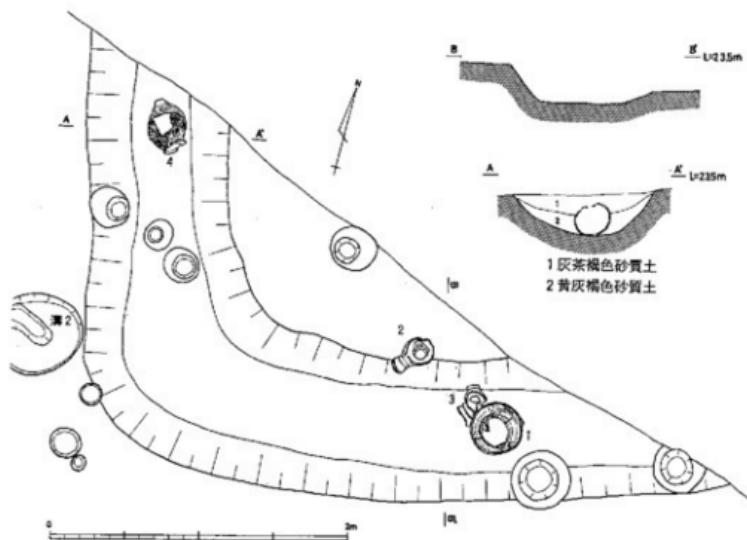
① 弥生時代

方形周溝墓1

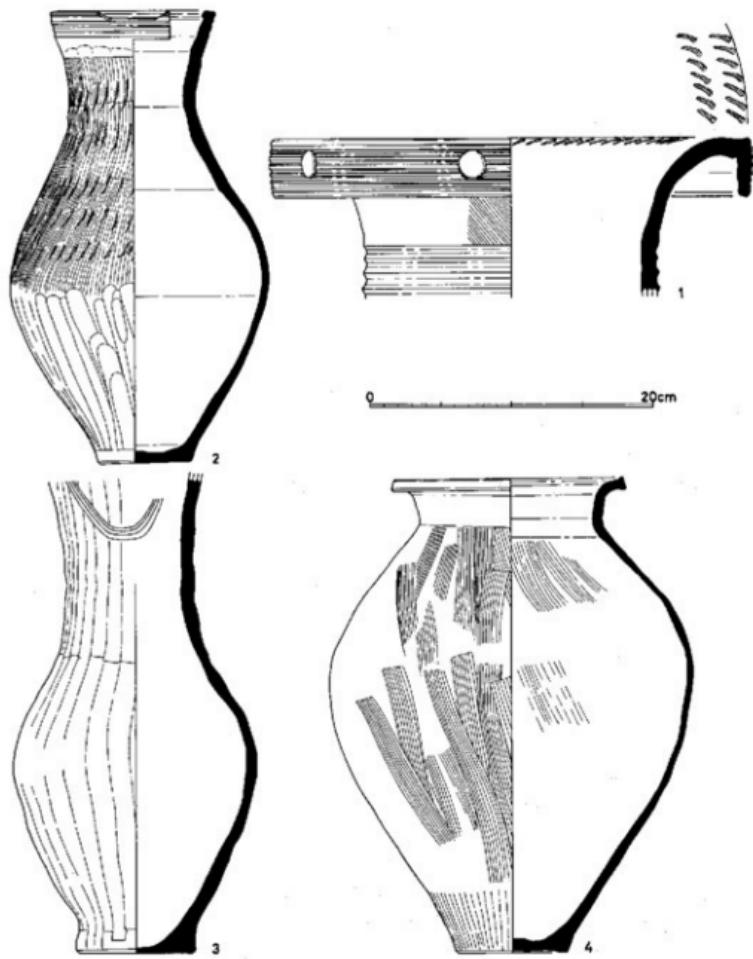
方形周溝墓1はB-2・B-3地区に位置し、⑬黄茶色粘質土層を除去した段階で灰茶褐色砂質土の周溝が検出された。地山は黄褐色砂質土層である。

遺構(第21図、図版10・11)

方形周溝墓の規模について、半分以上が福知山線線路下に及ぶため全容はつかめなかった。周溝部の現状は一辺4m以上、幅1m、深さ約30cmである。また周溝の方向は磁北にほぼ沿った状態であり、南西隅が検出された。周溝部の土層は上層に灰茶褐色砂質土、下層に黄灰褐色砂質土が堆積しており、調査時には湧水が激しく調査は困難であった。



第21図 方形周溝墓1平面図



第22図 方形周溝墓1出土土器

遺物（第22図、図版47）

方形周溝墓1からの出土遺物は、壺上層から出土した壺（1）と溝下層で出土した（4），及び周溝部内側肩部に置かれていた（2）・（3）が出土したのみであった。（1）は口縁端部が直下に大きく肥厚し凹線文と円形浮文で飾られており、口縁上面には櫛先刺突文がみられるものである。（4）は短く直立する頸部から口縁が外反する器壁の薄い縦型土器である。（2）は片口部をもつ長頸ぎみの壺で、最大の文様特徴として頸部から胴部上半に5条施された貝殻腹縁压痕文がある。弥生中期の貝殻腹縁压痕文は中部瀬戸内地方を中心東は播磨地方まで、比較的顕著にみとめられるが、西振における例ではなく、西宮市五ヶ山遺跡^①、神戸市垂水区玉津町新方遺跡出土例は貝殻腹縁を使用していないものの櫛状工具によって同様に文様が施され、調整も縦方向のハケ目調整がされている点でひじょうに酷似している。（3）は長頸化した筒状の頸部をもつ壺で口縁下に4条の櫛描文がある。スマートなプロポーションという点において（2）と類似する。

以上のように方形周溝墓1から出土した土器はいずれも畿内第IV様式の特色を有しており、完形品や大型品であるため時期判定の資料となった。また、これらの土器は浜津あるいは西振地方の地域色をもったものであり、（2）の器形をなし貝殻腹縁压痕文を施す土器の成立は少なからず中部瀬戸内や播磨地方の影響を受けたものであろう。これらのことから方形周溝墓は弥生時代中期後半のものと考えられる。

土塙5

遺構（第23・24図、図版12・13）

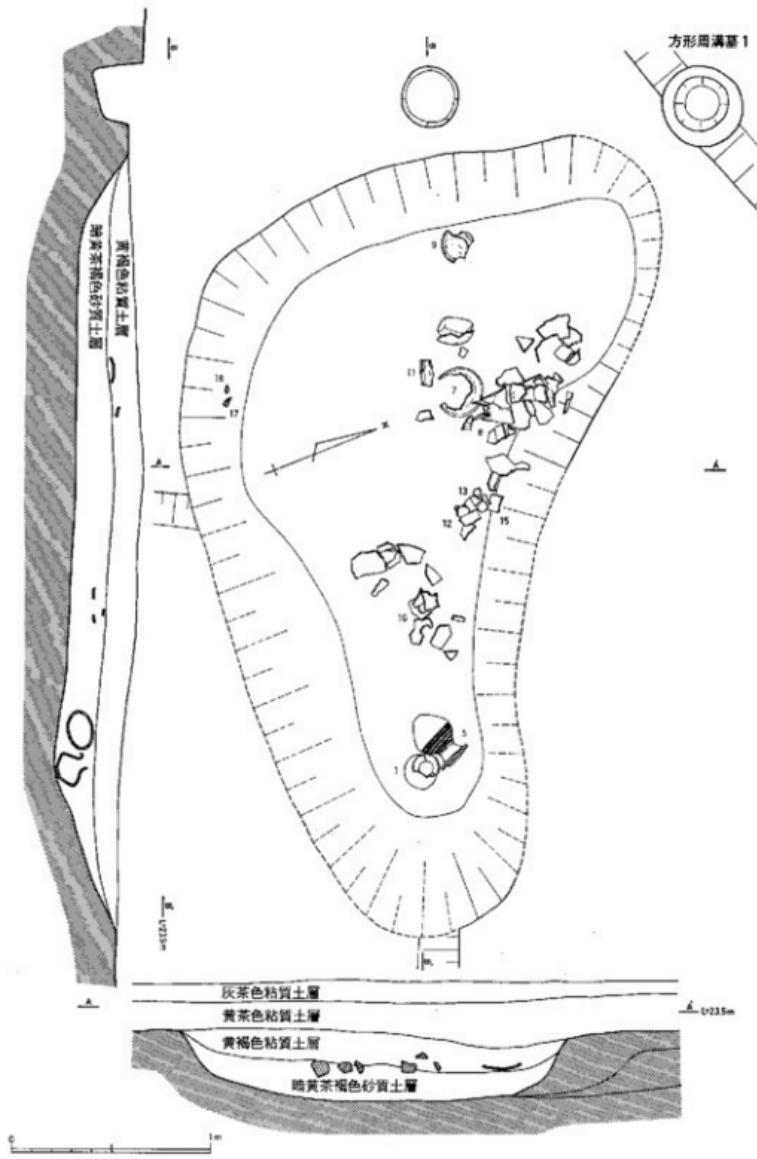
土塙は第2次調査のA-1・A-2・B-1・B-2地区にまたがっており、その規模は3.7×2.0m、深さ35cmをはかる大形のものである。

この土塙は、⑩黄茶色粘質土層を削除した段階で黄褐色粘質土の落ち込みを検出したもので堆積層は前述の黄褐色粘質土が上層で、下層に暗茶褐色砂質土が堆積している。

遺物（第25～27図、図版48～51）

土塙5からの出土遺物としては壺・甕・台付鉢・高杯・蓋・台付無頸壺があり、石器には石錐・不定形刃器・フレイク・チップが出土している。これらの遺物の中で下層から出土したものは壺（1・5）のみで他は上層出土分である。

壺は小型で文様はなく頸部に2ヶ所穿孔され、洞下間に焼成後穿孔のあるもの（1）や、受口状口縁で頸胴部に凸带をもつもの（2・3）、直口する口縁で頸胴部間に凸带をもつもの（4）や、漏斗状の口縁が外反し、頸胴部間に断面三角凸带をもつもの（5）や口縁直下に丸みを帯びた凸带をもつ長頸のもの（6）、口縁端部が直下し、凹線文と櫛描き文により加飾されるもの（7）、漏斗状の口縁で頸部に数条の凹線をもち洞の張るもの（5・9）に分けられ、種々の型



第23図 土 墓 5 平 面 図

式に分類できるが各個体数はひじょうに少ない。これらの壺のなかの（2）は頸胴部間に凸唇がめぐらされ、その刻み目の原体に貝殻腹縁を使用しており、方形周溝壺1で出土した壺（2）の文様との関連がうかがえる。

甕（10）は口縁が短く外反し端面に凹線が入るものである。

台付鉢（11）は口縁が直立し台部に円形の穿孔である。高杯（12・13）は杯部と脚で杯部は

椀状に内彎しており脚部との接合は充填によるものである。脚部は端部直上に凹線が入るもので裾が広がる。蓋には、（14・15）があり（14）は小型品で文様を持たないもの、（15）は2ヶ所で2対の穿孔をもつ笠形のものでつまみ部分は凹み体部上面に4条の凹線がある。台付無頸壺（16）は脚部から口縁部にかけては内彎し口縁直下に2ヶ所で2対の穿孔をもち台部には6コの円窓透かしがある。なおこの土器の製作法については胴部外面及び台部を作った後胴部底を接合したものと考えられる。また、この台付無頸壺の蓋として考えられるのが（15）で、^①胎土や焼成皮が酷似している。台付無頸壺は口縁が内彎しており大和地方に多く、河内や摂津地方では類例が少ない。

石器はいざれもサスカイト製で石錐・不定形刃器・フレイク・チップが土壤内南の上層より密集した状態で出土した。

石錐は3点出土し、（17）は平基無茎式石錐で全長5.4cm、最大幅3.0cm、厚さ0.5cm、重量9.9gと大型品である。粗雑な打撃により、先端は中心軸からはずれている。（18）は凸基無茎式の石錐で全長5.3cm、最大幅2.7cm、厚さ0.7cm、重量9.0gとこれもまた大型品である。

（17）に比べ周辺部の剥離は精緻なものである。（19）は両端を欠くが凸基有茎式石錐であると考えられる。裏面に主要剥離が認められる他は精緻な調整剥離がなされている。

不定形刃器（20）は裏面に主要剥離面を残し上端に自然面を残すもので下半は欠損している。（20・21）はやや小型の剥片を用いたもので、正面に細かい剥離がある。その他フレイク・チップが約200点出土しているが石核はない。これらのことから石器製作時に生じたフレイク・チップ類を一括投棄した際、製品が混入したものか、或は意識的に製品までも埋納したのかは不明である。

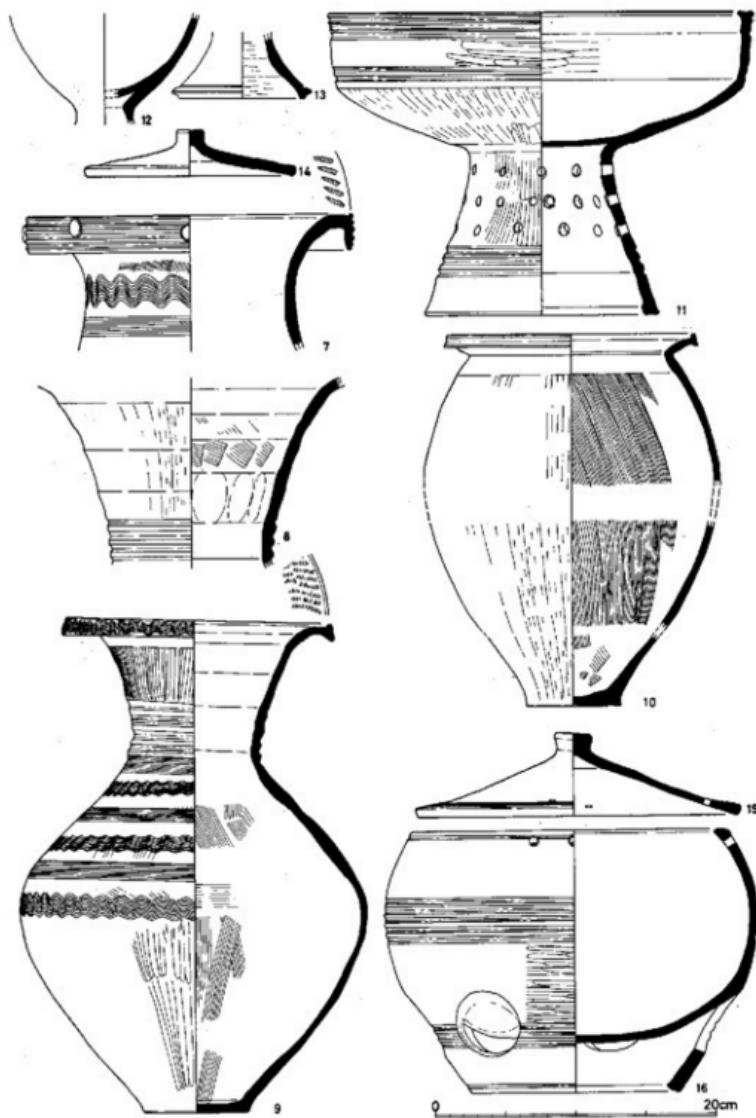
これら土壤5から出土した遺物は全て弥生時代中期に入るもので、下層で出土した壺（1・5）は土壤内東端にて隣接し出土したもので双方の胴部下半に焼成後の穿孔がみとめられる。



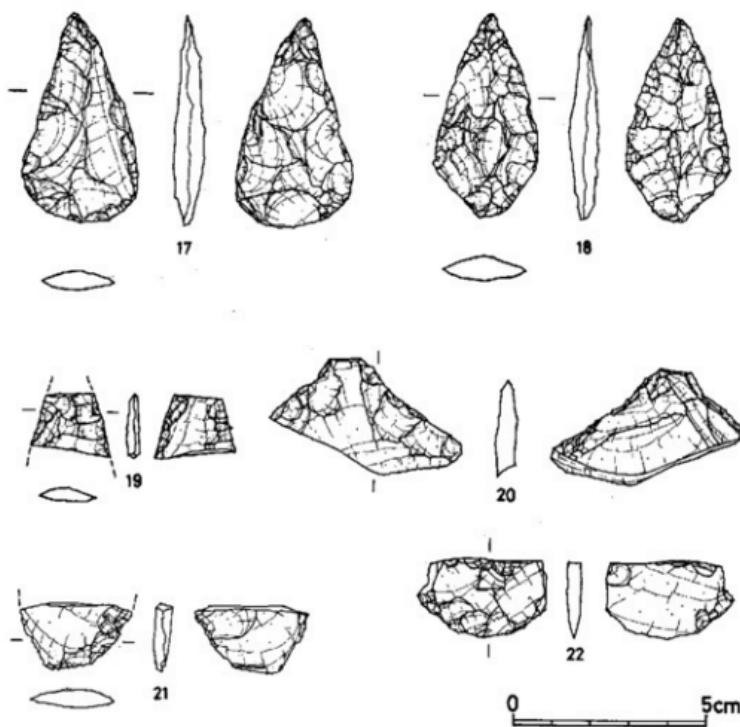
第24図 土 壤 5 壺(9) 出 土 状 態



第25図 土 塚 5 出土 土 器 - 1



第26図 土塙5出土土器—2



第27図 土 塚 5 出 土 石 器

この土壙は方形周溝墓1に接しているところから祭祀的要素の強いものと考えられ、また(5)は頸部に断面三角凸帯があり、若干古い様相を示すものである。一方、上層で出土した壺にも(4・6)では頸部や口縁直下に凸帯を1条もつものだが、なだらかなプロボーションから考えると新しい要素を含んでいるものかもしれない。

以上のことから、下層から出土した遺物は畿内第Ⅲ様式(新)～Ⅳ様式の時期であり、上層出土の遺物は畿内第Ⅳ様式の良好な一括遺物であろう。

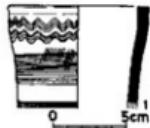
土壤3（第28・29図、図版14・64上左）

土壤3は第2次調査地点のほぼ中央に位置し、A—4地区にあり、土壤2と土壤4に挟まれている。この土壤は⑧灰茶色粘質土層除去後に検出されたものである。

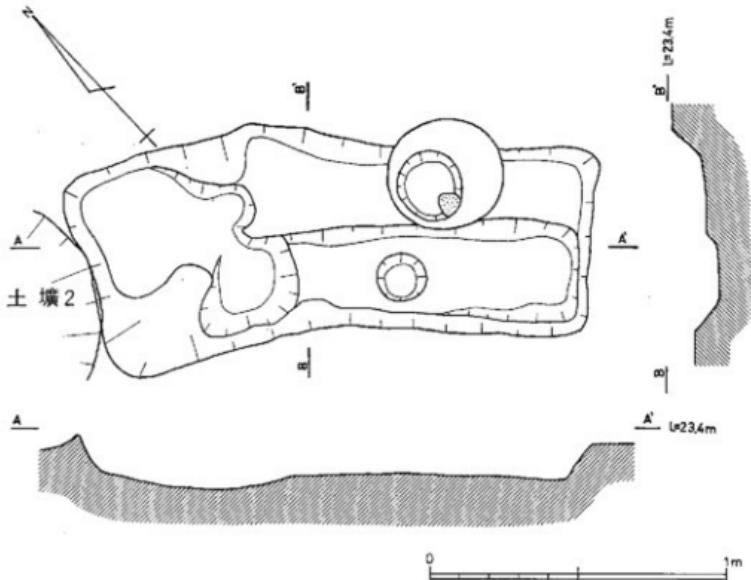
土壤の規模は、 $175 \times 70\text{cm}$ 、深さ約15cmの長方形に近い土壤で、南や西に一段低い所がある不整形なものである。

遺物としては壺（1）が出土したのみで、これは口縁が直口し、端部が平坦におさえられたものであり、櫛描波状文や直線文で加飾された畿内第IV様式の土器と考えられる。

以上のように、遺物が破片一点のみで土壤の性格など詳細は不明であるが、土層の検出レベルが弥生時代中期包含層である⑩黄茶色粘質土層上面で検出されているところから、弥生時代中期以後の時期のものであり、遺物は混入の可能性がある。



第28図 土壤3出土土器

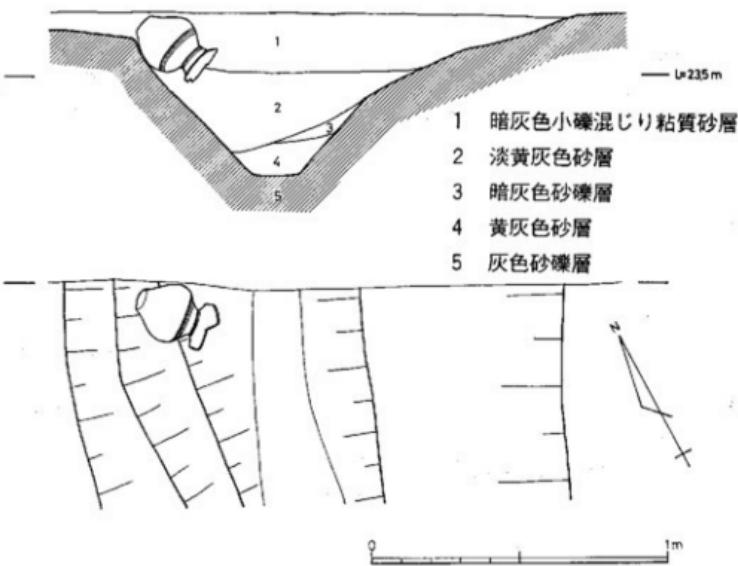


第29図 土 壤 3 平 面 図

溝 7

遺 墓 (第30図、図版15)

第6次調査地点の西部を南北に走る弥生時代前期の溝である。規模は幅約1.7m、深さ約0.6m、長さ5m以上で、北部ではV字形に、南部ではU字形に掘込まれている。溝内堆積土は砂層で、本遺跡検出の他の遺構と全く異なっている。なお、この溝周辺には遺物包含層はなく、もと高まりを形成していたと考えられる地山の灰色砂礫層が後世の耕作土直下に存在することから、溝上部は多少削平されている可能性がある。

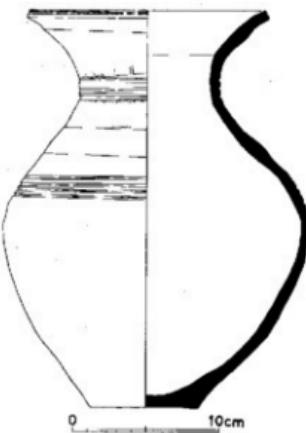


第30図 溝7 土器出土状態

遺物（第31図、図版66上左）

畿内第Ⅰ様式の壺が溝北端部の西側斜面の上部で地山直上に横たわった状態で出土したが、他はごく細かい土器片しか出土していない。

この壺は、口縁部の一部を欠くがほぼ完形品で、肩のはった胴部に大きくひらく頸部をもつ。文様は口縁端面に1条、頸部に3条、胴部に4条のヘラ描沈線文がそれぞれ施されている。畿内第Ⅰ様式でも新段階のもので、佐原真氏のいわれる同段階末期の壺^⑨にあたるものと思われる。



第31図 溝7出土土器

包含層出土遺物（第32～34図、図版51上・52・66中右）

弥生時代遺物包含層から出土した土器の他、住居跡1や2において、明らかに混入したものも含めて一括説明する。

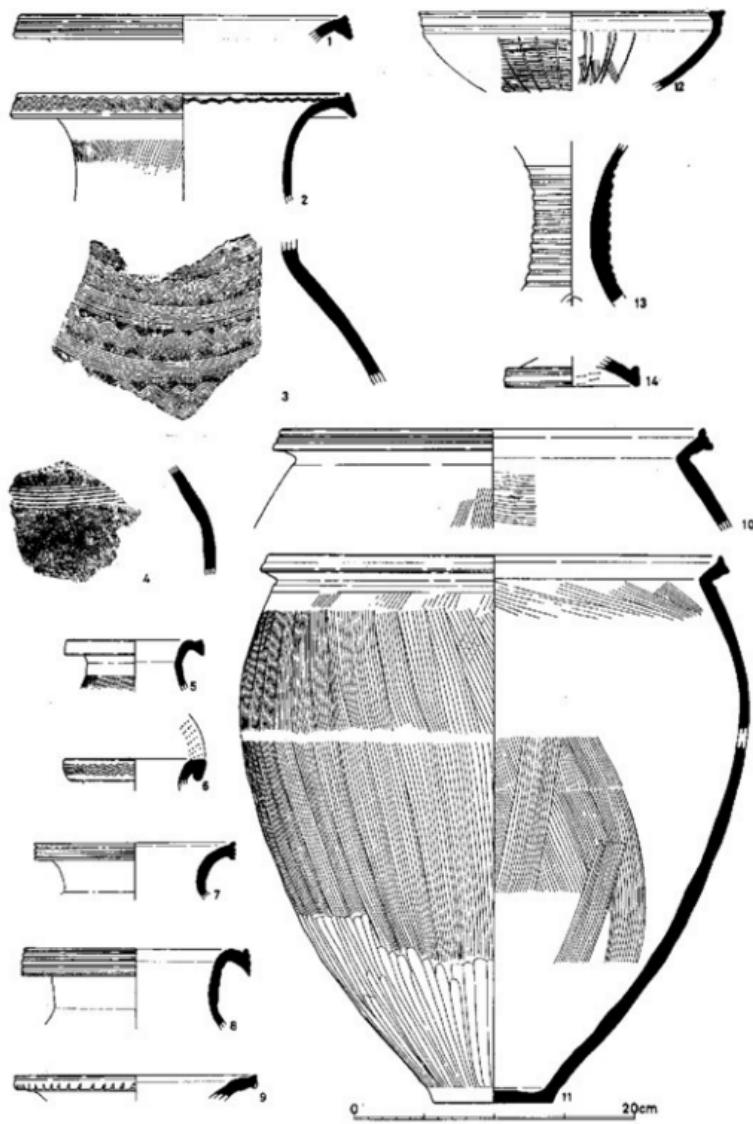
第2次調査における包含層内出土遺物には壺・甕・高杯があり、石器には石庖丁・石鎌・不定形刃器がある。

壺には、口縁にかけて外反し、端部は垂下させ、櫛描波状文による施文を行い、上端に櫛による刺突文が入る小型のもの（6）がある。また口縁が外反し、端部が上下に拡張するもので、櫛描波状文を附加するもの（2）の他、端面に凹線を施すもの（1・7・8）があり、無文のもの（5）がある。その他、口縁端部下半にヘラによる刻み目をもつもの（9）もある。

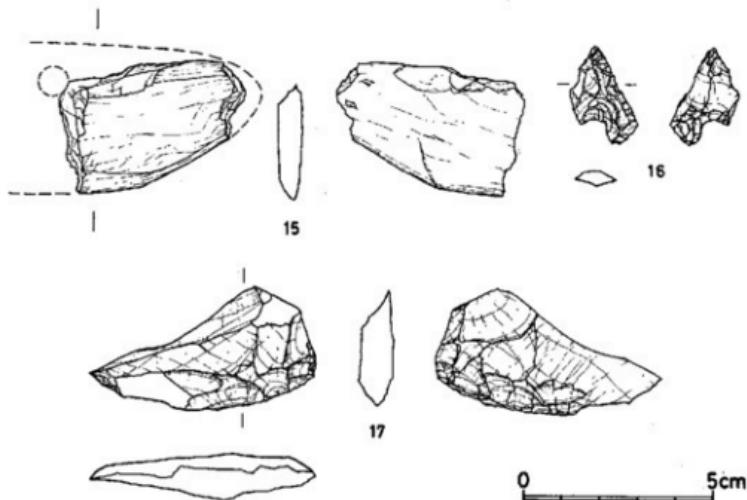
甕には（10・11）がある。（10）は短く屈曲する口縁部をもち、端部は上下に拡張され、端面には2条の凹線が入るもので大型品である。（11）は短く屈曲する口縁を有し、上方に拡張され、端面はやや凹線状を呈する。最大径は胴部上半にあり、底部に至る。内外共縦方向のナデ調整がされ、底部付近の外面は縦方向のヘラミガキである。

高杯には（12～14）がある。（12）は内彎しながら外傾する杯部で、口縁にかけて直立し、端部は平らに押える。杯部口縁外面に2条の凹線文が施され、杯部は横方向ヘラミガキの後、縦方向のヘラミガキが暗文状に入る。（13）は大型の脚柱部で、外面に12条の凹線文を施し、脚下半の4方に透かし孔をもつ。（14）は脚端部であり、端部は上方に拡張され、端面には2条の凹線文が入る。

以上が包含層^⑩黄茶色粘質土層を中心とした弥生土器であり、ほぼ畿内第Ⅳ様式のものであ



第32図 第2次調査包含層出土弥生土器



第33図 第2次調査包含層出土石器

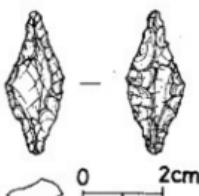
ると考えられるが(9)の口縁端部下端に刻み目が入るもののは、それより古い様相を示すものかも知れない。

石器としては、石庵丁・石鎌・不定形刃器が出土している。

石庵丁(15)は粘板岩製のもので両面が丹念に研磨されたもので左面下端に刃部が作られており、周辺が欠損しているにもかかわらず、かろうじて組穴が確認された。(16)はサヌカイト製の石鎌で、長さ2.6cm、残存幅1.8cm、厚さ0.4cm、重量1.4gと小型の凹基式石鎌である。裏面にネガティブな剥離が残り、正面は周縁部に剥離が行われているもので形態から繩文時代の石鎌であると思われる。(17)はサヌカイト製の不定形刃器であり、一部に階段状剥離を残す。上部はアクシデントによる割れであると考えられる。また第6次調査では周縁部調整剥離の整った凸基有基式石鎌が出土している。

以上の石器で(16・17)は⑩黄茶色粘質土層にて出土し、

(15)は住居跡2層土上面にて出土したもので、第6次調査の—
凸基有基式石鎌は⑧淡茶灰色粘質土層から出土している。



第34図 第6次調査
包含層出土石器

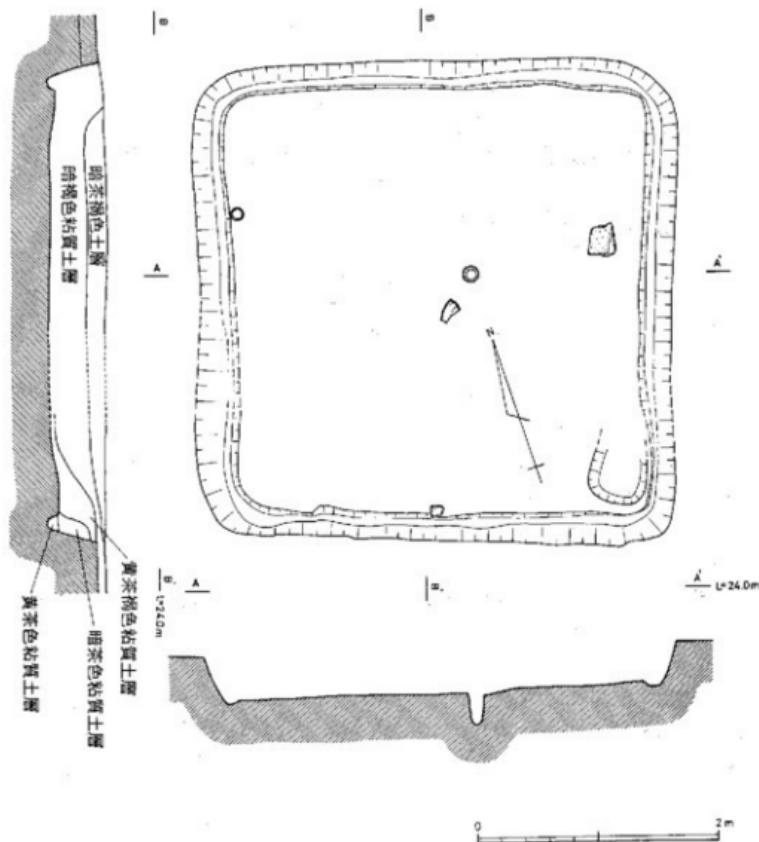
② 弥生時代後期～古墳時代

住居跡 1

住居跡 1 は第 2 次調査 A-2・A-3 地区にまたがり、また第 6 次調査の B-3 地区にも及んでおり、⑨灰茶色粘質土層上面にて検出された。

遺構（第35・36図、図版16・18）

規模は一辺 4 m、深さ45cmの方形堅穴式住居である。住居跡内の堆積土は基本的に上層の暗茶褐色土層、下層の暗褐色粘質土層がある。



第35図 住居跡 1 平面図

住居跡内の周囲には深さ4~8cmの周壁溝が検出され、一部に黄茶色粘質土の堆積も確認された。住居跡内の遺構の配置は南東隅に幅40cmの土壙が検出され、土器(3・6)が出土した。柱穴としては中央付近に径13cm、深さ25cmのものと、西壁沿いに径10cm、深さ9cmのものが2本存在したが、いずれも住居跡主柱穴になりうるものではない。床面の南北方向はほぼ平坦であるが、東西方向では12cmの傾きをもって西に傾斜している。

遺物(第37~39図、図版53・54)

住居跡1からの出土遺物は壺・小型丸底壺・甕・高杯・鉢・台石・砾石がある。

壺(1・2・4)は口縁が短く外傾し、端部は丸く、胴部は球状で丸底のものであると考えられる。(4)は胴部上半に叩き目の痕跡がある。これに対して(3)は長く外傾する口縁部をもち、口縁端部は内側に肥厚し端面は外傾している。なお、この土器は胎土から観察すると生駒山西麓からの搬入品と考えられる。

また(13・14)は櫛先刺突文のみられるもので二重口縁壺の破片もある。

小型丸底壺(5)は上半部の張った体部に大きく外傾する口縁部をもち頸部内面に明瞭な稜がみられる。

甕(6~10)は、いずれも球形の胴部にわずかに内傾する口縁部をもち、口縁端部は内側に肥厚している。口縁端部の平坦面については水平のもの(8・10)とわずかに外傾するもの(6・7・9)がある。

鉢(12)は口縁部が二段に屈曲し外方に開き浅い体部をもつ。

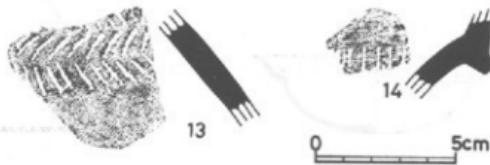
高杯(11)は中実の短い脚部をもつ。

以上の壺・甕・小型丸底壺・鉢は布留式のものではほぼ一時期のものとしてとらえられ、本住居跡の時期を示すものと考えられる。

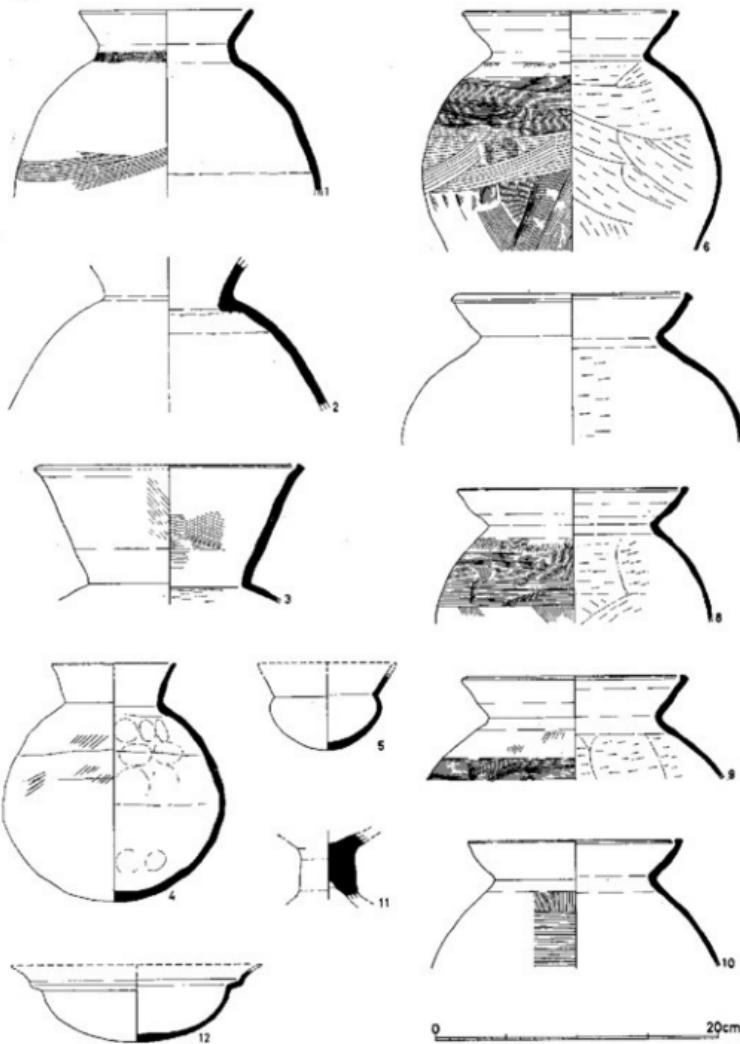
台石(17)は住居跡東壁付近の床面上直上にて出土したもので、長さ28cm、幅22cm、厚さ9.6cmと大形で両面共何ら



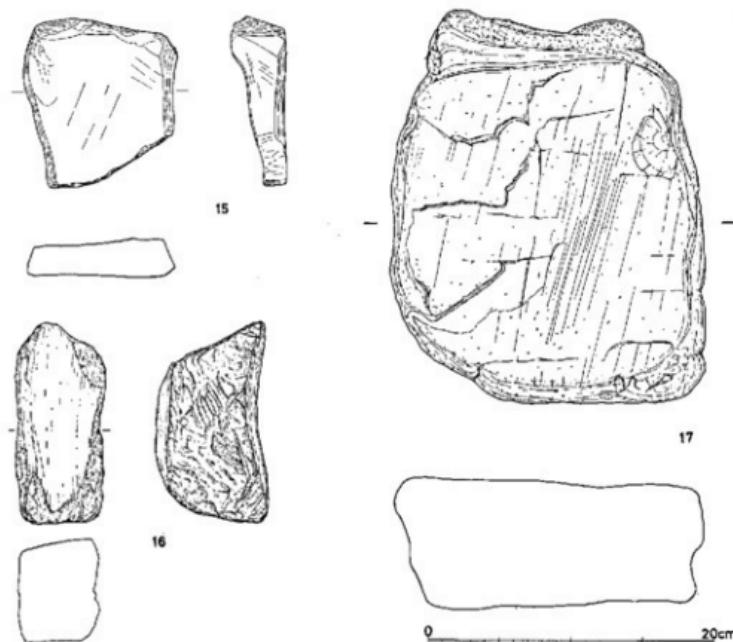
第36図 住居跡1 壺(7)出土状態



第37図 住居跡1出土土器-1撮影



第38図 住居跡1出土土器—2



第39図 住居跡1出土石器

かの使用痕が認められる。

砥石(15)は扁平であり、長さ11.8cm、幅10.5cm、厚さ3.9cmである。特に正面の使用痕が著しく、側面も使用されているものである。(16)は正面が凹面状をなし両面において顕著な使用痕が認められるもので大きさは長さ14cm、幅6.2cm、厚さ7cmである。

なお、いずれも砂岩製である。

以上のように、この住居跡1からの出土遺物はいずれも布留式土器の特徴を示すものが多く、古墳時代前期の時期であろう。また住居跡内の主柱穴としては何ら検出されなかつたが、未発掘部分があるため主柱穴のない住居跡になるのかは不明である。

住居跡2

住居跡2は第2次調査A-0, A-1, A-2, B-0, B-1, B-2各地区にまたがり、第6次調査のB-1, B-2地区に及んでおり、⑩灰茶色粘質土層上面で茶黒色土層の落込みが検出され、発掘が進むにつれ⑩黄茶色粘質土層から掘り込まれていることが判明した。

遺構（第40図、図版17・18）

規模は一辺約6m、深さ60cmの方形堅穴式住居である。また住居跡西では土壇6により、南は溝5や溝6と切り合っている。住居跡内の基本堆積土として上層は茶黒色土層で小礫を多量に含み土器は最も多い。中層は灰茶色粘質土層で土器が多い。また、この土層はA—5地区までにおよぶ包含層である。下層は灰茶褐色粘質土層であり上層の2層に比べて土器量は少ない。また、この住居跡の地山は黄褐色砂質土層や黄灰色砂礫層がある。

住居跡内には屋内高床部が1~1.2mの幅で四辺にあり、その高さは4~8cmをはかる。また柱穴として北西隅と北東隅が検出され、その深さも45cmである。しかし南の柱穴については不明であるが、第6次調査区との発掘不可能な場所に当たることが予想される。土壇は住居跡の中心と東西軸に沿った屋内高床部に2ヶ所検出された。中央

土壇は80×70cm、深さ約10cmと浅く、45×20cmの大きな台石があり、(32)器台が出土している。西の土壇は80×95cm、深さ30cmをはかり、この土壇より(26)高杯が出土している。また東の土壇は1.05×1.2m、深さ26cmをはかる。

なお、これらの土壇内からは顕著な炭や焼土等は検出されなかった。住居跡内周壁溝は東の一部と北の一部において検出されたのみで、その深さも2~5cm程度の深いものであった。

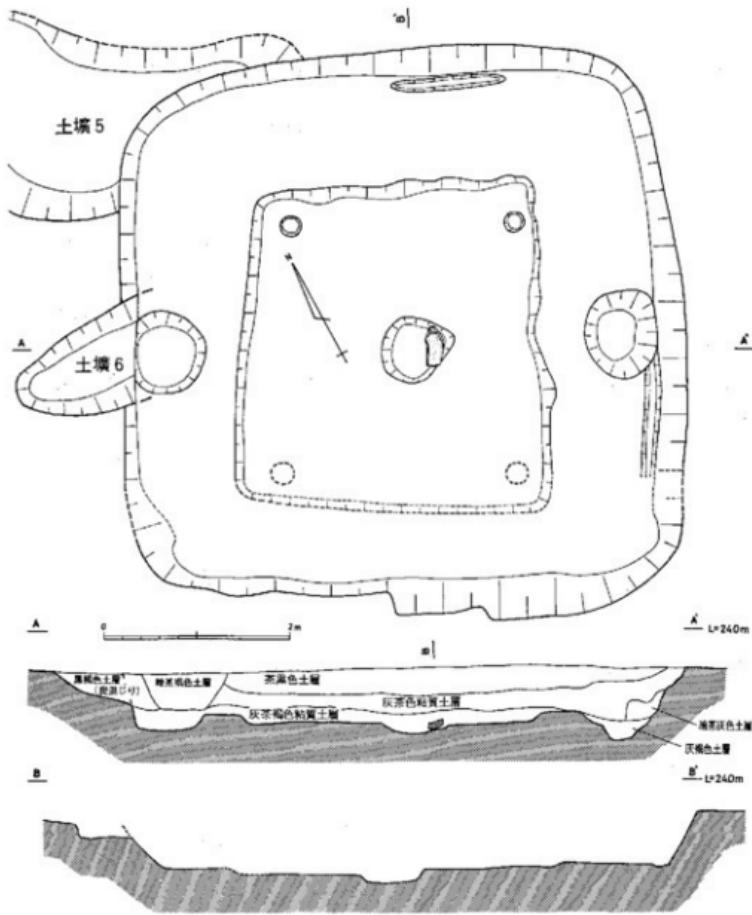
遺物（第41~45図、図版55・56）

住居跡2から出土した遺物は壺・甕・高杯・器台・蓋・鉢・土製品・鉄器がある。壺(1・2)は口縁が外傾し胴部が張るものであり、口縁端部が内側に肥厚するもの(2)がある。また胴部上半に櫛描文と櫛先刺突文を施した土器(37)や二重口縁の口縁付近に付加された円形浮文をもつ土器(38)があり、やや小型のものとして(3)や、口縁が短く外反する尖底の壺(4)がある。これらの土器で(3)は中層出土のものであるが、他は全て上層出土という事から布留式土器の要素をもつものが多い。

甕は完形品になるものはないが多くの破片が出土しており、これらの中においてもV様式の系統を引くもの(5~8・10・13・16・18)があり叩き目の幅も広い。これに対して典型的ではないが庄内式土器の影響を受けたものとして(11・39~41)があり、(11)は口縁が外傾し端部がつまみ上げられ、胴部に細かい叩き目が入るものが下層でも出土している。また口縁が



住居跡2 調査風景



第40圖 住居跡 2 平面圖

わざかに内彫しながら外傾し、端部が内側に肥厚するもの（9）があり布宿式土器と考えられる。

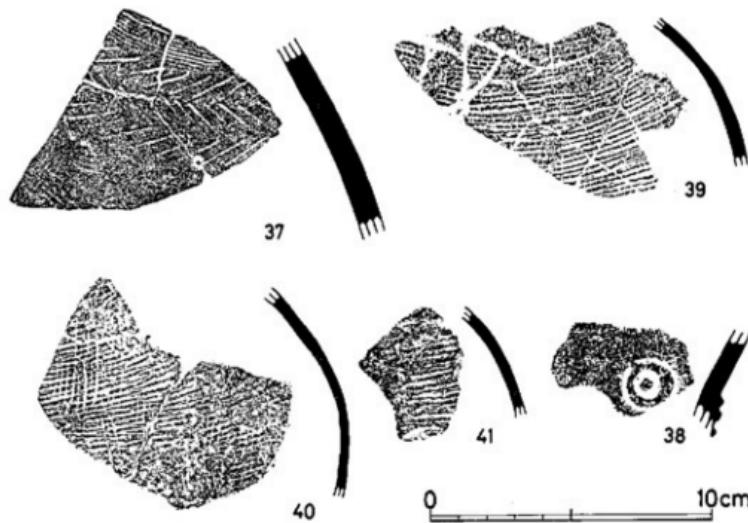
高杯は杯部が外反し、縁をもってたちあがるもの（28）と楕形の杯部をもち、脚部が口縁と同程度に開くもの（25・26）があり、庄内式の高杯と考えられるものである。

器台については、浅い皿部と裾広がりの脚部をもち、杯部口縁端部が直立ぎみのもの（32～34）がある。これも庄内式の器台と考えられよう。

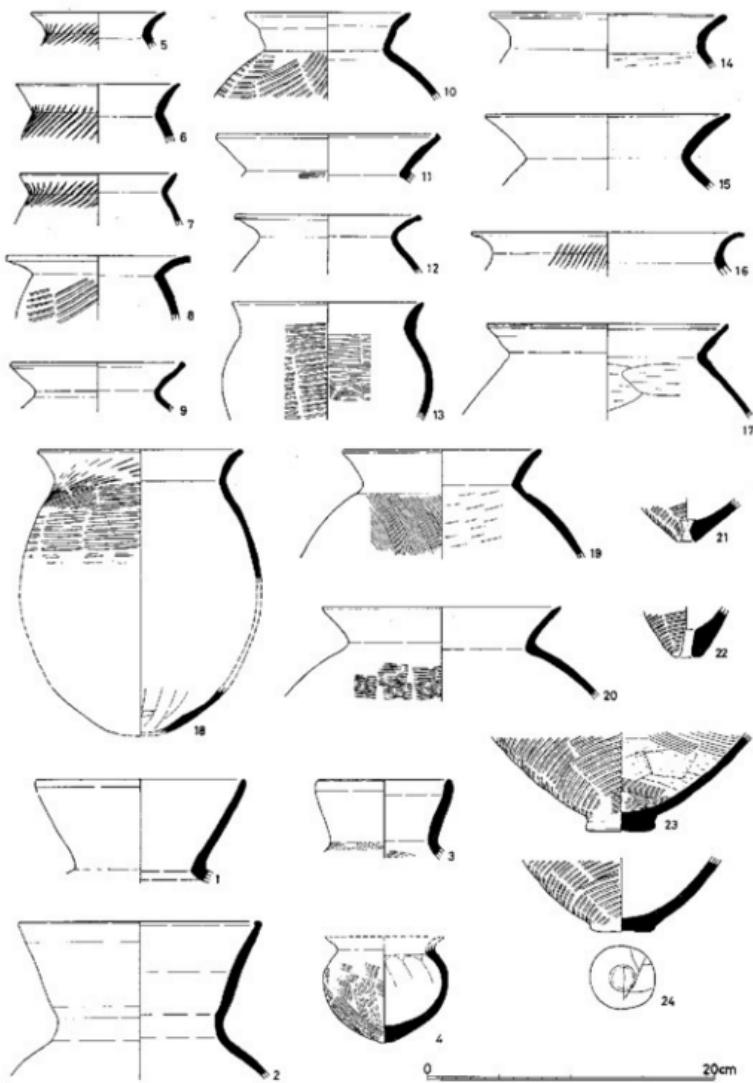
鉢としては体部から内彫ぎみに口縁に至り、端部に丸みをもつ土器（36）が出土し、蓋としては笠形に開き、つまみを有するもの（35）が出土している。

上製品（第44図-42）は住居跡中央付近の床面から出土した。長さ3.6cm、厚さ2.85～2.35cmとやや扁平であり、一方は丸く一方は尖りぎみに作られた小型の土製品で、中央部には幅4mmの溝が回り、尖りぎみの尖端部より径4mm、深さ1.5cmの穿孔がある。調整は全体にナデによるもので溝はヘラ状工具でつくられたものと考えられる。なお溝にはひも等による磨滅痕は認められず、性格、用途については不明である。

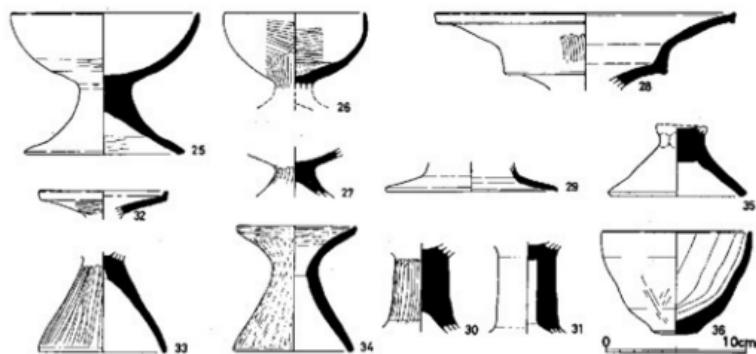
鉄器（43）は現存長5.9cm、幅1.0cm、厚さ0.5cmのやや扁平な棒状の鉄製品で鉄鍔の可能性が強い。



第41図 住居跡 2 出土土器 - 1 拓影

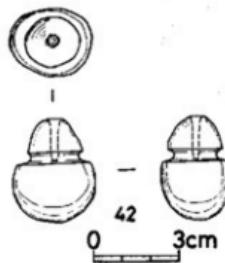


第42図 住居跡2出土土器—2

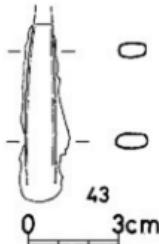


第43図 住居跡2出土土器—3

以上、住居跡2からは多くの遺物が出土し、ひじょうに厚い住居跡内覆土は3層にわかれることから下層及び中層の遺物がこの住居跡の時期を決定する重要な資料となる。これらの土層から判断するとV様式の伝統を引き継ぐ太目の叩き目を有する土器と、口縁端部がつまみ上げられ胴部に細い叩き目がある甕も出土しており、高杯や器台の形態から考えると、弥生時代後期～古墳時代前期のものであると考えられる。



第44図 住居跡2
出土土製品



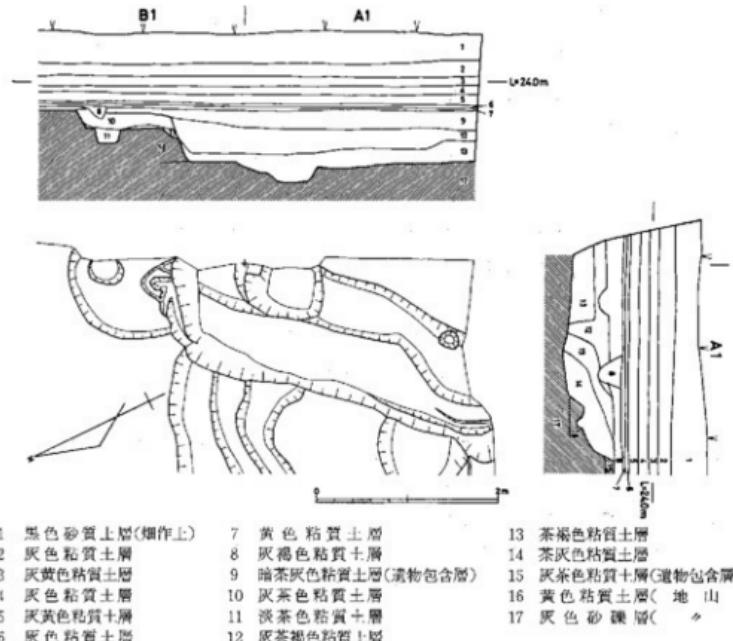
第45図 住居跡2
出土鉄器

住居跡 3

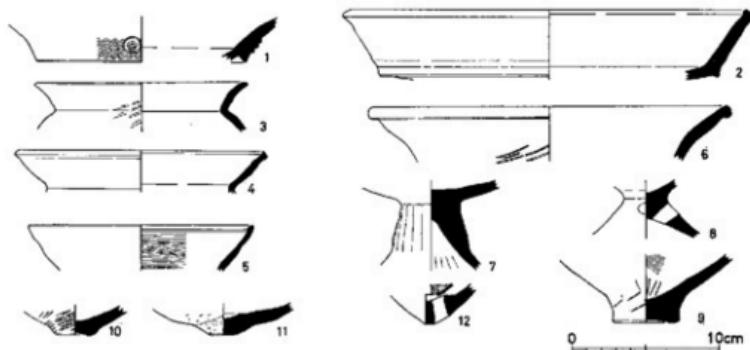
遺構 (第46図、図版19)

住居跡3は、第6次調査地点の東端部で⑥層除去後検出された。一辺4m以上、深さ約50cmの方形窓穴式住居で、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものである。

この住居跡は、北西部が部分的に検出されただけで、その全容は不明であるが、床面の西部が約50cm、北部が約40cmの幅でそれぞれ中央部に比べて15~10cmほど高くなる屋内高床部をもつ住居であることがわかる。この高床部は、北部と西部では約5cmほどの段差があり、西部の方が高くなっているほか、西部の高床部は南側で約20cmほどに狭まっている。また、両高床部に接して、深さ約15cmの土壇がみられるほか、西部高床部と中央部との間に幅約60cm、深さ5~10cmの溝がはしり、南西部の壁ぎわに幅約15cm、深さ約10cmの周壁溝が部分的にみられる。



第46図 住居跡3 平面図



第47図 住居跡3出土土器

遺物（第47図、図版57上）

出土土器には、壺、甕、鉢、高杯などがある。

壺の2点（1・2）はいずれも二重口縁をもつ。（1）は大きく外反する口縁部外面に垂下する突帯を付けて段を形成したもので、その外面には櫛描波状文と円形浮文がみられる。（2）は大型のもので、水平にひらいたのち外傾してたちあがる口縁部をもつ。

甕（3・4・5）のうち（3）は畿内第V様式のもので、ゆるく外反する口縁部から胸部にかけて右上がりの叩き目をもつ。（4）はわずかに内彎する口縁の端部をつまみ上げたものである。（5）は布留式の甕で、内彎ぎみの口縁の端部を内側に肥厚させ、その端面を内傾させたものである。

鉢（6）は人型のもので、大きく外反する口縁の端部を外側に折り、丸くおさめる。

高杯（7・8）のうち（8）は小型のもので、脚部に円形四方透かしをもつが、器台の可能性もある。

底部（9～12）では、突出する底部をもつ（9）以外はいずれも小さな底部である。（11）はヘラケズリにより仕上げられたもので、（12）は尖りぎみの底部に孔をもつものである。

以上の出土土器は下層から上層までのものを含むが、下層のもの（3・4・6・11）に限定すれば、畿内第V様式の系統をひく甕（3）や庄内式の甕との関係が考えられる甕（4）などがみられる。上層のものには（5）の布留式の甕のように時期的に下るものも含まれる。

住居跡 4

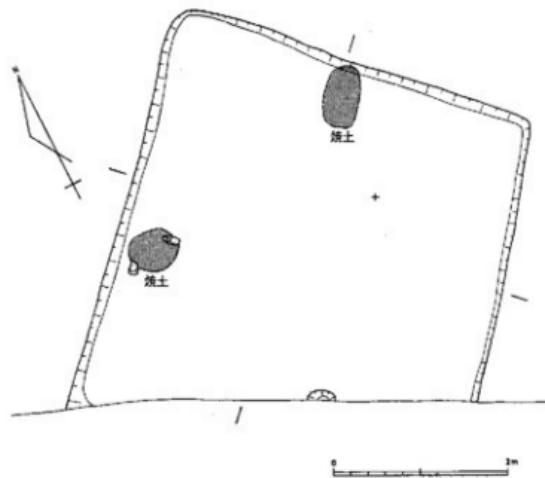
住居跡 4 は、第 6 次調査地点の中央部で 3 軒の住居跡が重複した状態で検出された。時期は弥生時代後期から古墳時代後期にかけてのもので、いずれも方形堅穴式住居である。以下新しいものから順にみていく。

住居跡 4 - c

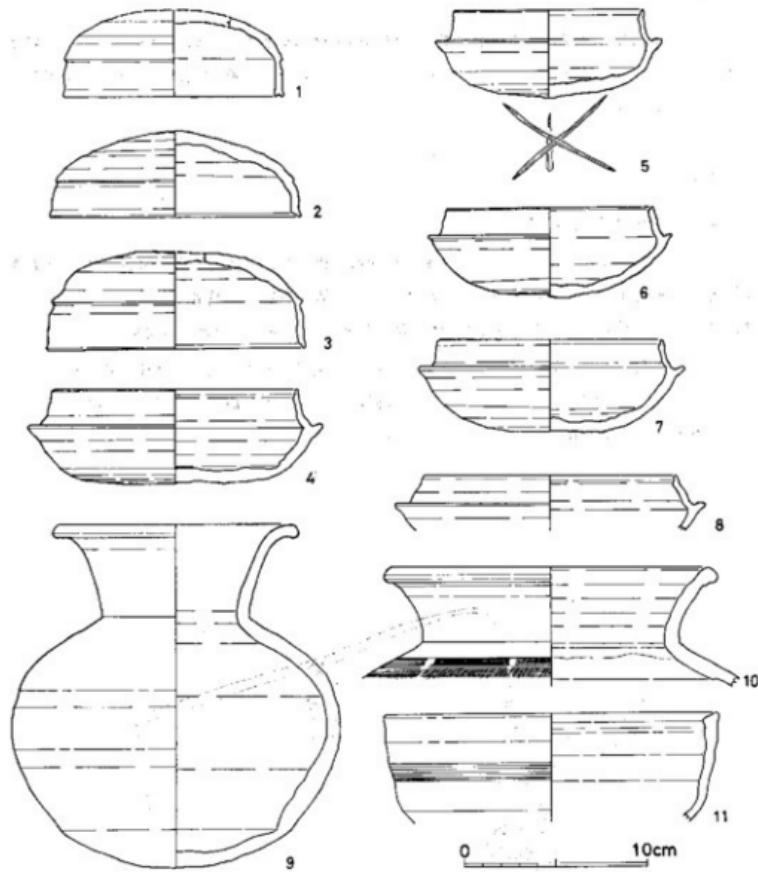
遺構 (第48図、図版20)

先行する住居跡 4 - b の中央部におさまった状態で建てられた方形の堅穴式住居で、淡黄色粘質土層除去後検出された。当初、住居跡 4 - b の上層と判断して調査したためもあり、その構造は必ずしも明確でないが、東西 4.3m、南北 5m 以上、深さ約 30cm の規模をもつ。

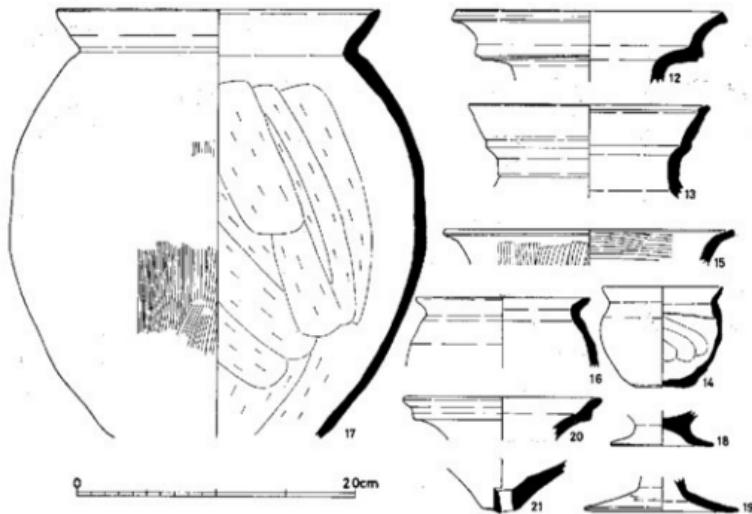
床面では北側と西側の壁の中央部に近接して焼土と炭が検出されたが、西側の焼土については、下半部を床面に埋めて直立させた石が 2 個存在することから竪である可能性が強い。この西側の焼土付近では多量の土器が出土している。



第48図 住居跡 4 - c 平面図



第49図 住居跡 4-c 出土土器 - 1



第50図 住居跡4-c出土土器—2

遺物(第49~52図、図版60下・61・62)

遺物は須恵器、土師器、石器などが出土している。

須恵器には杯蓋、杯身、壺、甕、鉢などの器種がみられる。

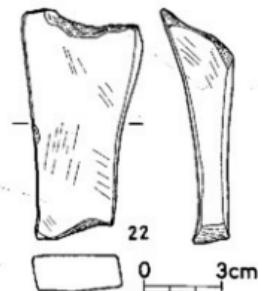
杯蓋(1・2・3)はいずれも天井部と口縁部の境に稜をもち、(2・3)は内傾する口縁端部に、(1)は水平な端部にそれぞれ凹みをもつ。杯身(4~8)は、いずれも内傾するたちあがりの端部内側に凹みをもち、このうち(5・6・8)の受部とたちあがりの境に凹みがみられる。なお、(5)は器体のひずみがはげしいもので、底部には「オ」形のヘリ記号がつけられている。

壺(9)は張りの強い胴部の上に外反する口縁部をもち、水平にひらいた口縁端部はまるくおさめられている。

甕(10)は外反する口縁部をもち、口縁端部は外側に肥厚している。

鉢(11)は、ほぼ直立する口縁部をもち、内傾する口縁端部はわずかに凹んでいる。

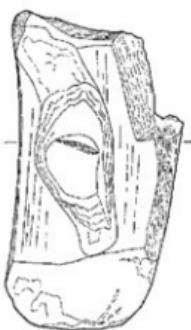
土師器には壺、甕、高杯、脚台、器台、底部などの器種が



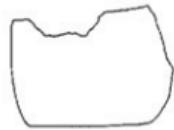
第51図 住居跡4-c出土石器—1



23



24



25



0 20cm

第52図 住居跡4-c出土石器-2

みられる。

壺（12～14）のうち、（12）は二重口縁壺で、直立する頸部上に二段にひらく口縁部をもち、段部には凹線状の凹みがみられる。（13）は二段に外反する口縁部をもち、口縁端部は内側に肥厚して端面は内側に長く内傾している。（14）は小型の壺で、わずかに肩の張った胴部に短く外傾する口縁がつく。

壺（15～17）のうち（17）は大型の壺で、長手の胴部にわずかに内鷺する短い口縁部をもつ。住居西部の焼土上層部で出土したものである。

石器は、砥石などが4点出土している。

（22）は小型の砂岩製の砥石で、小口面以外は全面使用痕が顕著である。大きさは長さ8.9cm、幅4.6cm、厚さ2.1～1.2cmである。

（23）も砂岩製の扁平な砥石で、自然に凹んだ面の使用痕が特に著しい。大きさは長さ21.4cm、幅10.9cm、厚さ7cmである。

（24・25）は砥石ではないが、何らかの使用痕をのこすものである。（24）は長さ26.5cm、幅9cm、厚さ5.5cm、（25）は長さ34.3cm、幅15.8cm、厚さ6.8～8.5cmの大きさをもつ細長い自然石である。いずれも住居跡西部の焼土中に（24）を西侧、（25）を東側に配して立てられていた。何らかに使用されたものを、竪構築時に転用したものと思われる。

以上、出土した遺物の時期についてみると、須恵器の杯蓋・身は陶邑MT15にほぼあたるものと思われ、陶邑における須恵器編年のⅡ期初頭に位置づけられる。また土師器については壺（14）、壺（15～17）は船橋遺跡における編年の0～IV・Vにあたるものと思われ、須恵器とともに6世紀初頭ころのものとしてとらえることができる。ただし、土師器のなかには壺（12・13）のように時期的にさかのぼるものも含まれる。

住居跡4-b

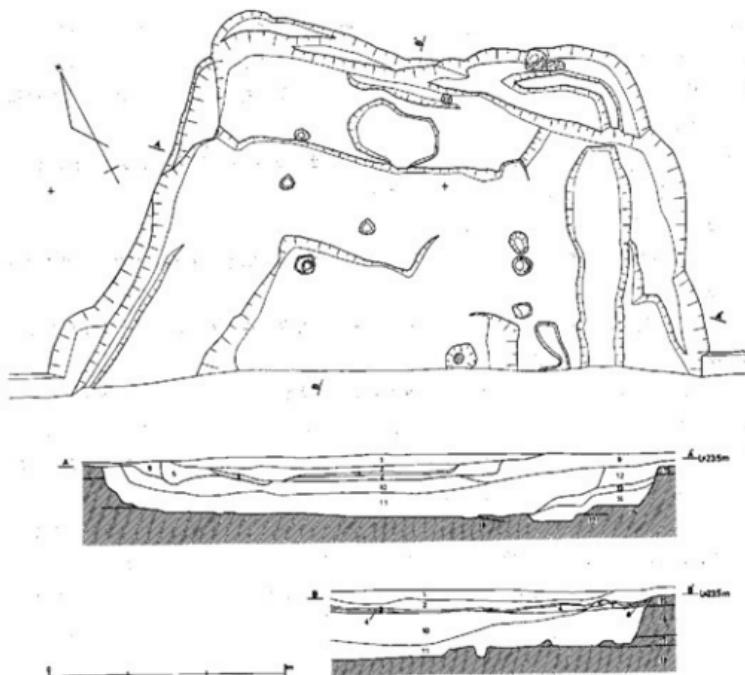
遺構（第53図、図版21・22上）

先行する住居跡4-aとはほぼ同一地点に方位をかえて建てられた西南部に小さい張出し部をもつ方形堅穴式住居で、⑥薪茶灰色粘質土層除去後に検出された。東西6.5m、南北5.5m以上、深さ約60cmの規模をもち、内部には不整形ではあるが、東・西・北部に中央部と比べて5～20cm高い室内高床部が幅1～1.3mで存在し、その北端部と東端部にはさらに5cmほど高い高床部が設けられている。

また、北端部の高床部には東西1.2m、南北0.7m、深さ10cmの土壙が、北側と西側の隙ぎわには幅20～30cm、深さ約5cmの周壁溝が部分的にみられる。また柱穴については、住居跡4-aのものと区別が困難なため明確ではないが、その配列よりいちおう4本柱と考えられる。

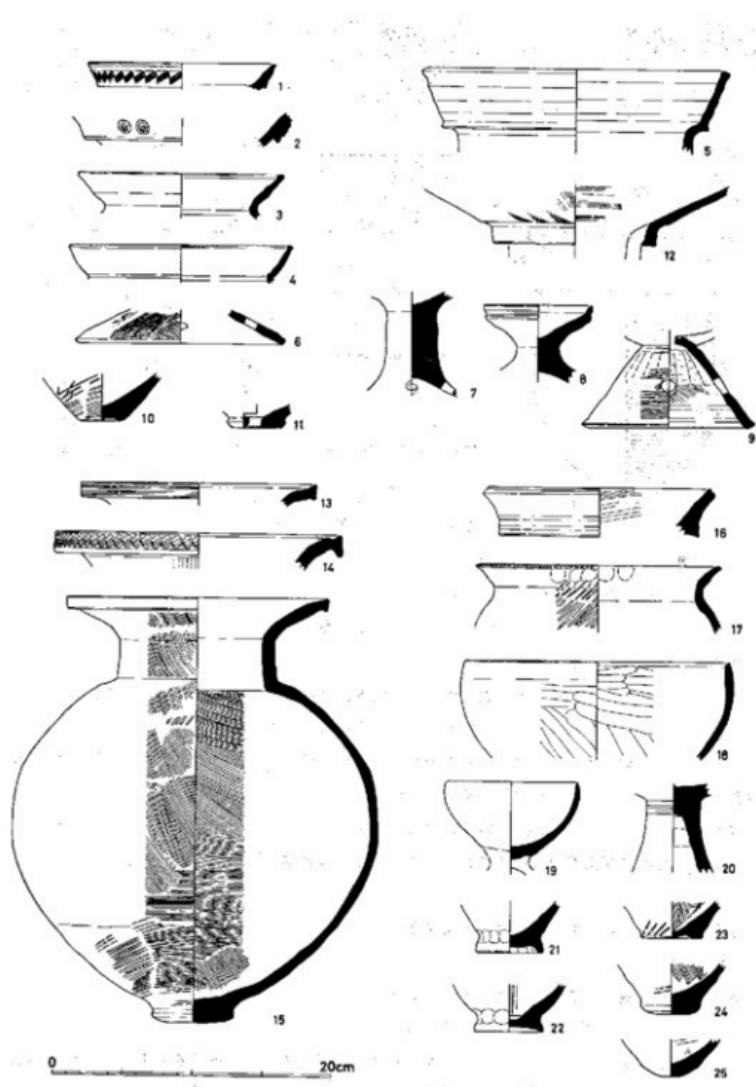
遺物（第54・55図、図版58・59・60上）

出土遺物は上・下・最下層に分けて取上げたため、各層に分割してみていただきたい。

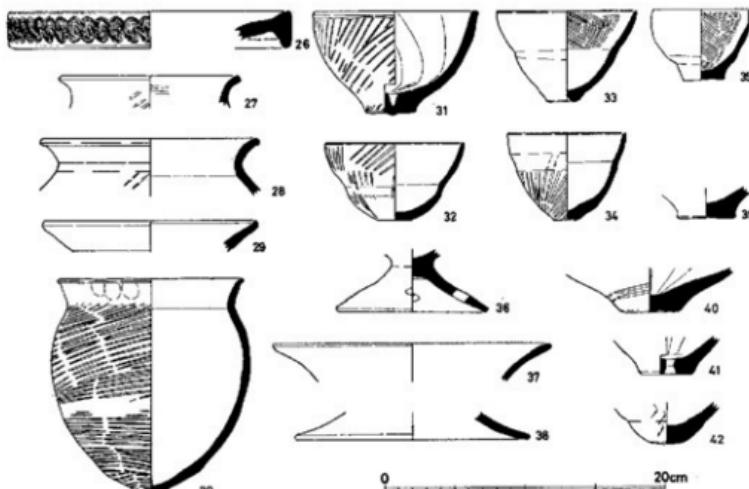


- | | | |
|------------|-------------------|-------------------|
| 1 黄色粘質土層 | 7 黑茶色粘質土層(炭 含 七) | 13 猶茶褐色粘質土層 |
| 2 賠黃褐色粘質土層 | 8 黃色粘質土層 | 14 賠黃茶色砂質土層 |
| 3 灰白色粘質土層 | 9 賠茶灰色粘質土層(遺物包含層) | 15 黃茶色粘質土層(遺物包含層) |
| 4 黃茶褐色粘質土層 | 10 黑褐色粘質土層 | 16 黃色粘質土層(地 山) |
| 5 淡黃色粘質土層 | 11 茶褐色粘質土層 | 17 黃色砂質土層(夕) |
| 6 燒 土 層 | 12 灰茶色粘質土層(遺物包含層) | 18 灰色砂礫層(夕) |

第53圖 住居跡4-a・b平面圖



第54図 住居跡4-b出土土器一1（上・下層）



第55図 住居跡4-b出土土器—2(最下層)

上層

壺・甕・高杯・器台・底部などがみられる。

壺（1・2）はいずれも二重口縁で、（1）には変形した波状文が、（2）には円形浮文が2個ずつつけられている。

甕（3・4）は、いずれも布留式の甕で、口縁端部は内側にわずかに肥厚し、端面は水平かわずかに外傾している。（5）は大型のもので二段にたちあがる口縁部をもつ。

高杯（6）は脚下部で、大きくひらき円形透かしがつけられている。（7）は中実の長い脚柱部で、下方のひらいた部分に円形透かしがつけられている。

器台（8・9）はいずれも小型のもので、（8）は外反する受け部に直立する口縁部をつけ、口縁外面には櫛描直線文が施されている。（9）は外傾する脚部で、円形透かしがつけられている。

底部（10・11）のうち（11）は孔を有する。

下層

壺、甕、鉢、高杯、底部などが出土している。

壺（13～15）はいずれも大きくひらく口縁部をもつもので、口縁端部を上下にわずかに拡張させ、端面を垂直にしている。（15）は球形に近い胴部に直立する頸部をもつ。口縁部は屈曲してひらく。（13）は口縁端面に凹線文をもち、（14）では波状文が施されるが、（14）は弥生時代中期のものである。（16）は二重口縁壺で、外傾する口縁端面に1条、段部外面に2条

の回線文をもつ。なお(15)は、住居西南端部において、ほぼ完形の状態で出土した。

甕(17)はゆるく外反する口縁部をもち、口縁部外側に刻み目がつけられている。

高杯(19)は小型の瓶形のものである。(20)は脚部であるが、上部に横描直線文がみられる。胎土からすれば、生駒山西麓地域からの搬入品と考えられる。

底部(21~25)のうち、(21・22)は指頭圧痕をのこすあげ底で、(25)は尖りぎみの底をもつ。

なお、大型の円形浮文が1個出土しているが、第2次調査地点の土壤4甕(1)のものであろう。

最下層

甕、甌、鉢、高杯、底部などが出土している。このうち甕(30)は住居の北東部床面直上で、小型の鉢(31~35)は北東隅の床面近くで一括してそれぞれ完形の状態で出土している。

甕(26)は大きく水平にひらく口縁の端部を上下に拡張させ、下方にさらに垂下している。幅広く垂直な端面には変形した波状文がつけられている。

甌(27~30)のうち、(27・28・30)は口縁部がゆるく外反し、腹部から口縁部にかけて右上がりの印き目がみられる。(30)の口縁部には指頭圧痕がみられ、口縁部は多少ゆがんでいる。(29)は外傾する口縁部をつまみ上げている。

小型の鉢(31~35)のうち、(31)は内彎する口縁をもつものである。これに対して、(32~34)は内彎する口縁部が外側にひらいたもので、内面に稜がつく。(35)が最も小型のもので、基本的には(31)と同形態である。

高杯(37・38)は大きく外反する杯口縁部と、大きくひろがる脚下部である。

小型の器台と思われる(36)は大きくひらく脚部に円形透かしがつけられるが、高杯の可能性もある。

底部(42)は尖りぎみの底で、(41)は平底の底部に孔があけられる。

以上の遺物のうち、最下層のものには畿内第V様式の系統をひく甕(27・28・30)がみられるほか、庄内式土器との関係が考えられる甕(29)や小型の器台などが含まれるが、この住居の時期を示すものと考えられる。下層の土器もほぼ同時期のものであるが、上層の土器は時期が下るようで、(3・4)のように布留式の甕がみられる。

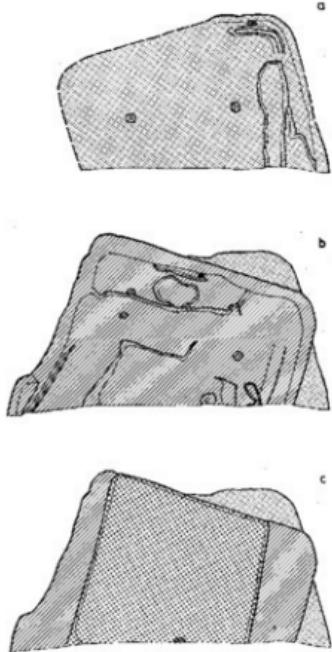
住居跡4-a

遺構(第53図、図版21上・22下)

住居跡4-bにその大半が壊されているため、北東端部と北西端部・南東端部のごく一部が



第56図 住居跡4-a 出土土器



第57図 住居跡4 建築順序

括直線文が施されている。

底部（3・4・5）のうち（5）には孔があげられている。

出土遺物はこのように少なく、明確な時期を示すものはみられないが、叩き目のつく底部は畿内第V様式に含まれるものと思われる。甕（2）については、当地域にはみられないもので、他地域から搬入された可能性がある。

土壤1（第58・59図、図版23上・63上・64上右・上中）

土壤1は第2次調査地点西側部分のA-5, A-6, B-5, B-6にまたがった位置であり、第2次調査範囲内では西端の遺構となっている。

この土壤は⑥暗茶灰色土層除去後検出されたものであり、土壤の規模は $2.0 \times 1.2m$ 、深さ16cmと浅く、梢円形を呈するものである。

遺物としては甕・高杯・底部が出土している。甕には頭部が屈曲し口縁にかけて外反し、端部に面をなすもの（2）や、なだらかな頭部を有し、口縁端部に丸みをもつもの（1・3・4）

が残されているだけである。東西6.5m、南北4m以上、深さ約50cmの規模の方形堅穴式住居で、⑨灰茶色粘質土層除去後に検出された。

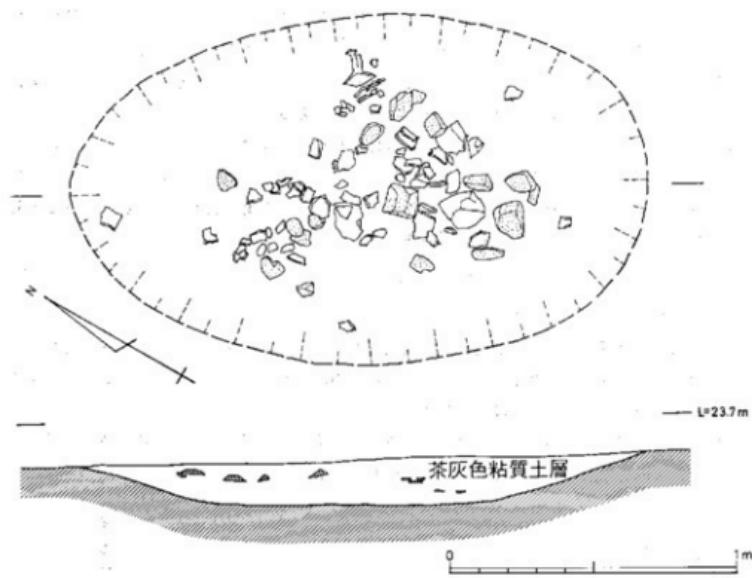
わずかに残されている北東端には疊ぎわに幅約30cm、深さ約5cmの周壁溝をもち、その内側は幅30cmほどの土手状の高まりを隔てて落込む。また土層の堆積状態からすれば、東部の長さ2.8m以上、幅0.5~0.8m、深さ約10cmの溝はこの住居にともなうものと考えられる。柱穴については、住居跡4-bのものと区別しがたいが、その配列より4本柱であったと考えられる。なお、屋内高床部については明確でないが、少なくとも東部と北部の一部には存在したようである。

遺物（第56図、図版57下）

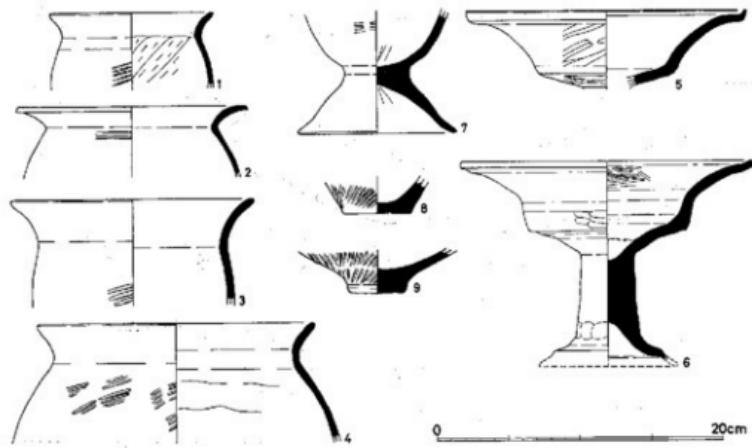
川土遺物は少量であるが、壺、甕、底部などが出土している。

壺（1）は外反する口縁の端部をわずかにつまみ上げている。

甕（2）は小型のもので、張りの乏しい腹部にゆるく外反したのも垂直にたちあがる口縁部をつける。直立する口縁外面には横目の明顯でない櫛



第58図 土 壤 1 平面図



第59図 土 壤 1 出土土器

がある。高杯（5）は杯部口縁が外反し口縁端部はつまみあげられている。（6）は杯部口縁が外反し端部は面をなすもので、胸部は中実、脚下半に段を有するものである。一方、（7）は内彎する杯部をもつ内彎しながら外傾する脚部をもつ高杯である。底部（8・9）はいずれも外面に叩き目を残すものである。

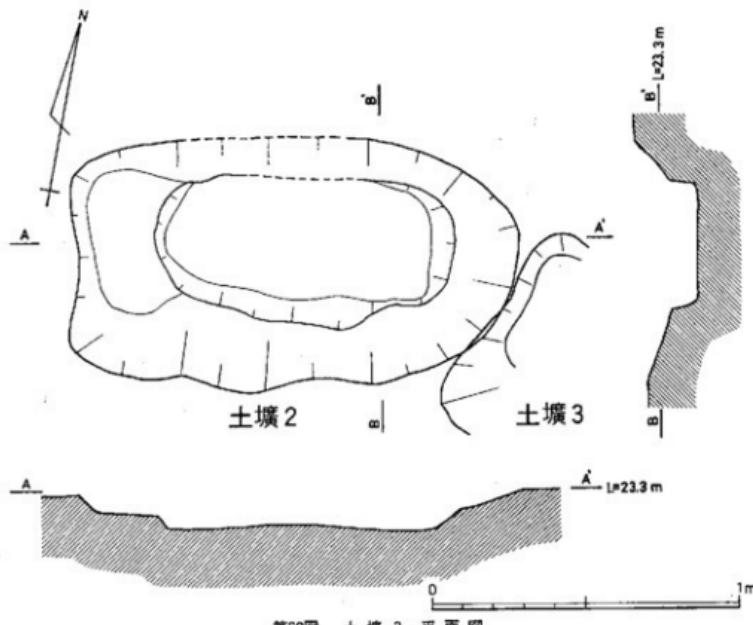
以上の遺物の中で高杯の杯部に稜があり、口縁にかけて外反する形態は庄内式土器にみられ、これら以外の土器でも畿内第V様式の伝統をひくものであることから、この土壙の時期は、弥生時代後期～古墳時代初頭であると考えられる。また、この遺構の掘り込み状況からみると若干の落ち込みに疊と共に土器が溜った可能性もある。

土壙 2（第60・61図、図版23下・63中左）

土壙 2は第2次調査地点のやや西寄りのA-4地区に位置し、土壙 3の西に隣接している。

この土壙は⑥暗茶灰色土層除去時点では不明確ながら検出されていたもので、⑨灰茶色粘質土層除去後に明確に検出されたものである。土壙の規模は145×80cm、深さ16cmの長円形を呈するもので、中央が97×47cmの範囲で一段低くなっている。

遺物としては壺（1）が出土し、直立してやや外反する口縁部をもち、胸部が球形に張り、叩き目を残すものと、（2）の短く外反する脚台が出土している。



第60図 土壙 2 平面図

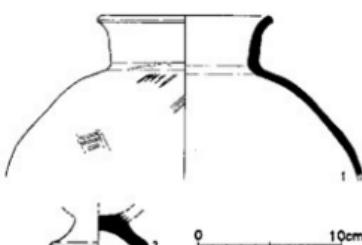
以上のことから遺物を観察すると、壺(1)の形態は布留式土器にみられるものであることや、⑧暗茶灰色土層除去時点では土壇の範囲が確認されていたことから、土壇の時期は古墳時代前期と考えられる。

土壇 4

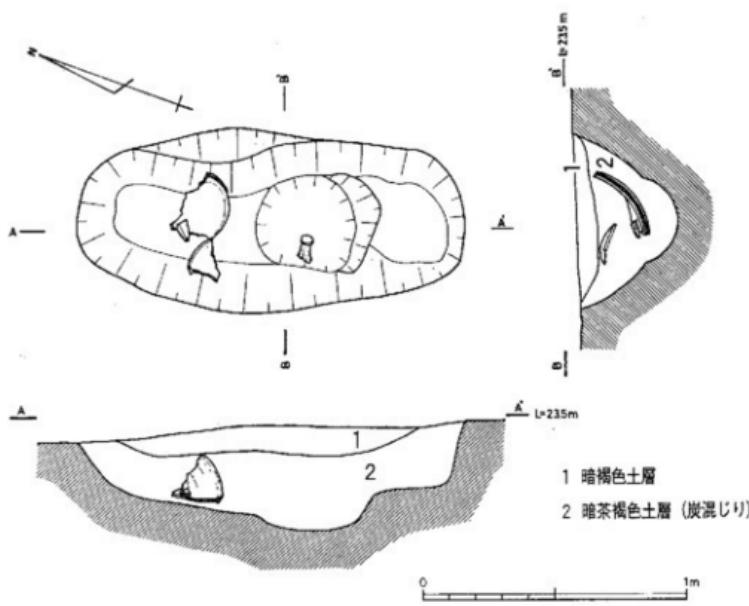
遺構(第62図、図版24上)

土壇4は第2次調査地点の中央部A-3・

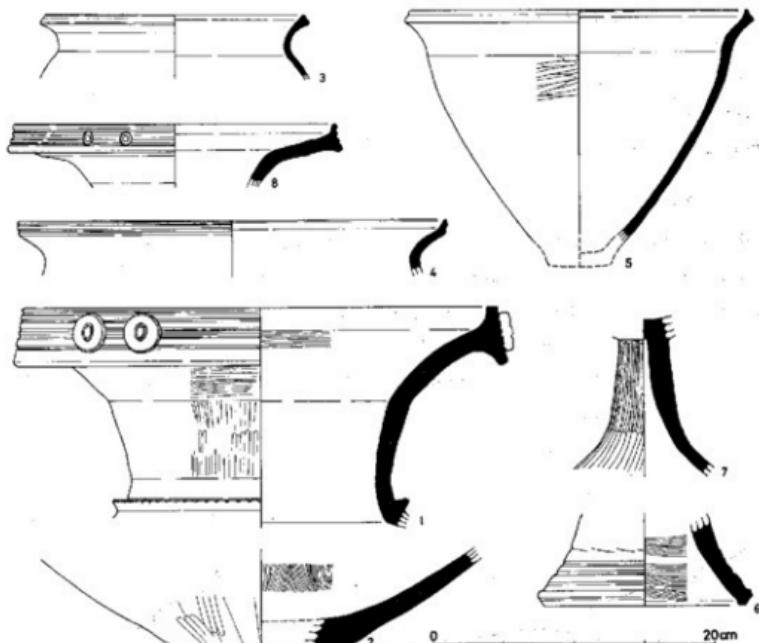
A-4地区にあり、住居跡1の北西1mに近接しており⑨灰茶色粘質土層除去後に検出された。土壇の規模は145×70cm、深さ40cmの長円形の土壇で中央寄りに2~3段の掘り込みが検出された。なお、土壇内堆積土上層は暗褐色土層、下層は暗茶褐色土層(炭混じり)となっており、地山は黄褐色砂質土層である。



第61図 土壇2 出土土器



第62図 土壇4 平面図



第63図 土塙4 出土土器

遺物 (第63図、図版63中右・下・64下)

土塙4出土の遺物は、壺・甕・鉢・高杯・器台が下層より出土している。

壺(1)は漏斗状の口縁部で端部は上下に大きく拡張されており、外面に5条、沈線ぎみの凹線文が施され、径2.8cmの竹管文のついた円形浮文が2個1対で配され、頸胴部間に細かい刻み目のつく断面三角形凸帶文があぐる。(2)は器盤や調整から壺(1)と同一個体と考えられる底部である。

甕(3)は口縁が外反し端部に凹線文が施されているものである。(4)は、口縁が外反し端部は直立しその外面には細い凹線文が2条施される。鉢(5)は口縁がわずかに外反する。口縁端部は外傾し凹線文が1条施される。底部は欠失しているが小型のものであろう。(6)は裾部が若干開く脚台部であり、下半外面に4条の凹線文が施され、端部は拡張され凹線文1条がある。この脚台は台付鉢のものか、高杯の脚部かは不明である。高杯(7)は脚部下半が大きく広がる中空のもので、外面は丁寧なヘラミガキがおこなわれている。器台(8)は、口縁は外反しながら屈曲し、端部は上下に拡張され、端面には4条の凹線文があり竹管文が2孔

1対で施されている。

以上のように出土遺物は決して多くはなかったが各器種特徴的なものが出土した。そのひとつが壺（1）である。これは口縁が大型でしかも胴部が張っていることから（2）がその底部になると想えられ、弥生時代後期初頭のものと思われる。その他甕や鉢の口縁端部に細い凹線文が多用されるのが特徴である。また浴台（8）は口縁が鋭く立ちあがり、端面に付された竹管文や器形から考え、中部瀬戸内地方の影響を受けたものと思われる。これらの土器からすると土塙4の時期は、壺内第V様式初頭の頃と考えられるが、性格等は不明である。

土塙6（第40図、図版24下）

土塙6は第2次調査地点の東寄り、A—2地区に位置し、住居跡2の西側に土塙が掘られている。

この土塙は、暗茶灰色土層除去時点で検出されたが、平面では住居跡2との切り合い関係は不明であったが、断面観察の結果、土塙6が住居跡2を切っているのが判明した。土塙の規模は長径約2m、短径約1m、深さ38cmをはかり、楕円形を呈する。

遺物の出土はなく、時期は不明であるが検出レベルからすると古墳時代前期の可能性が考えられる。

土塙7（第46図、図版19）

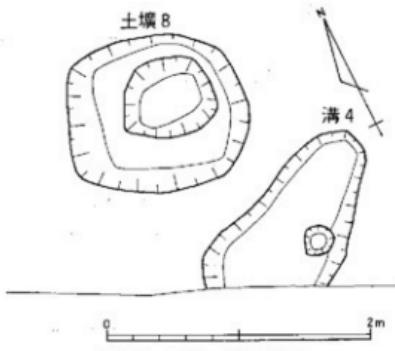
土塙7は、第6次調査地点の東端部において住居跡3の北西部と切り合った状態で、⑥淡茶灰色粘質土層除去後検出された。東西0.8m、南北1.1m以上、深さ約20cmの規模をもち、その内部ではピットが検出されたが、東部は調査地区外にのび、南部は住居跡3に切られているため、全体の規模や性格などは不明である。

出土遺物は小片のため図示しえなかつたが叩き目をもつ甕の破片が含まれることや、住居跡3に先行することから、弥生時代後期の遺構と考えられる。

土塙8（第64図、図版25上）

土塙8は第6次調査地点の東部、A—2地区で、⑦灰茶色粘質土層除去後検出された。1.4×1.2m、深さ約10cmの規模で、さらにその内部に80×60cm、深さ約10cmの落込みがある。

出土遺物は小片の土器がわずかに出土しただけで、時期の明確なものは含まれないが、基本的層序からすれば弥生時代後期ころの遺構と考えられる。



第64図 土塙8・溝4平面図

土壤9

遺構(第65図、図版25下)

土壤9は、第6次調査地点の中央部、A-2・3、B-2・3地区において、⑨灰茶色粘質土層除去後検出された。1.4×1.55m、深さ約20cmの規模をもつ不整形な円形の土壙である。⑩層上面の遺構を調査した時点では、この土壙の上層部は溝状の落込みとなっていた。土壙の内部からは多量の10cm大の炭と少量の焼土が検出された。

遺物(第66・67図、図版65上・66下右)

壺、甕、鉢、高杯、蓋、底部のほか、鐵錠が1個出土している。

壺(1)は直立する頸部に水平にひろがる口縁が屈曲してつくものである。口縁端部は上方にたちあがるとともに下方へも若干抵張し、垂直で幅広い口縁外面には凹線文が3条つけられている。

甕(2)は右上がりの叩き目を剥部から口縁下部までつけたものである。

鉢(3)は内側に外反する口縁部をつけ、内面にはにぶい稜がみられる。また、口縁端部はつまみ上げている。

高杯(5)は比較的短い脚部で、四方向の円形透かしがつけられている。

蓋(4)は指頭圧痕のつくつまみをもち、つまみの上面はわずかに凹んでいる。

底部(6~9)のうち、(6・7)はいずれもていねいなつくりの平底で、小型の壺の可能性がある。

鐵錠は土壙の下層より出土した。長さ3.7cm、幅3.1cm、厚さ4mmの大きさで、重量は7.2gである。鐵錠の底部は大きく抉れ、両側のかえりの先端内側は凹んでいる。

以上の出土土器は戦内第V様式に入るものの、甕(2)は弥生時代後期末ごろ、鉢(3)、高杯(5)は同時期後半ころのものと考えられる。

土壤10

遺構(第68図、図版16下)

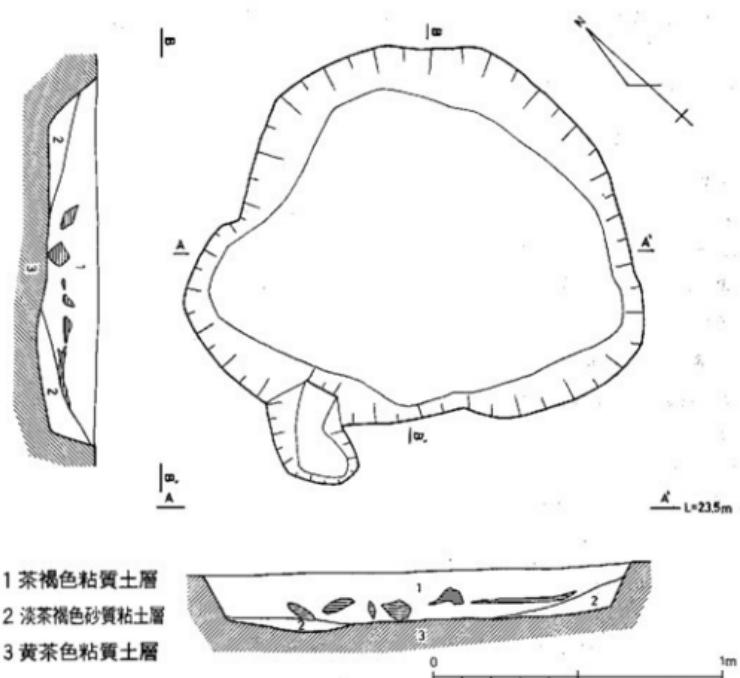
土壤10は、第6次調査地点の中央部、B-3、4地区の住居跡1の南側に接しており、⑩淡茶灰色粘質土層除去後に検出された。90×80cm、深さ約30cmの長円形の土壙で、その外側には深さ5cm程度の浅い落込みがみられる。なお土層の堆積からすれば、住居跡2に先行するものと考えられる。

遺物(第69図、図版65下)

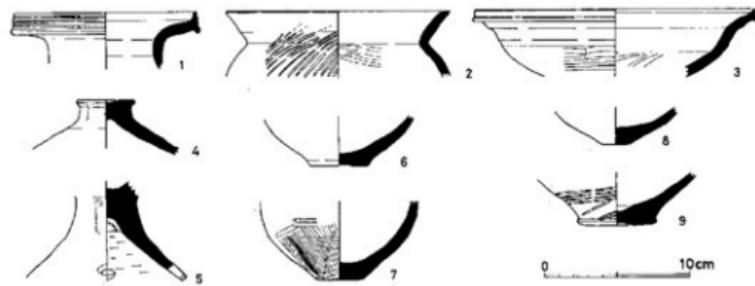
遺物は甕、蓋、底部が出土している。

甕(1・2)はいずれも内面にヘラケズリがみられる。(1)は上下にわずかに抵張した口縁の端面に凹線文が2条つけられ、(2)はつまみあげた口縁端部の外側に1条の凹線文が見られる。

底部(3・4)のうち、(3)は内側に縦方向のヘラケズリがみられるが、甕(1・2)のいずれかと同一個体の可能性が強い。



第65図 土 壴 9 平 面 図 (上層内の堆積物は炭)



第66図 土 壴 9 出土土器

以上の出土遺物のなかでは明確な時期を示す土器はないが、おそらく弥生時代後期のものと思われる。なお甕(1・2)は当地域にみられないもので、中部瀬戸内系のものと考えられる。

土壤11(第70図)

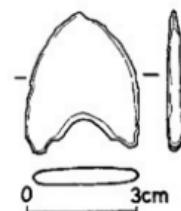
土壤11は、第6次調査地点の西南端部、A-8地区において検出された、 $3.0 \times 1.6\text{m}$ 以上、深さ約40cmの比較的大きい土壤で、南部は調査地区外にのび、西部は溝8により切られる。

遺物としてはごく少量の土器が出土しただけであるが布留式の甕口縁部が上層より出土している。

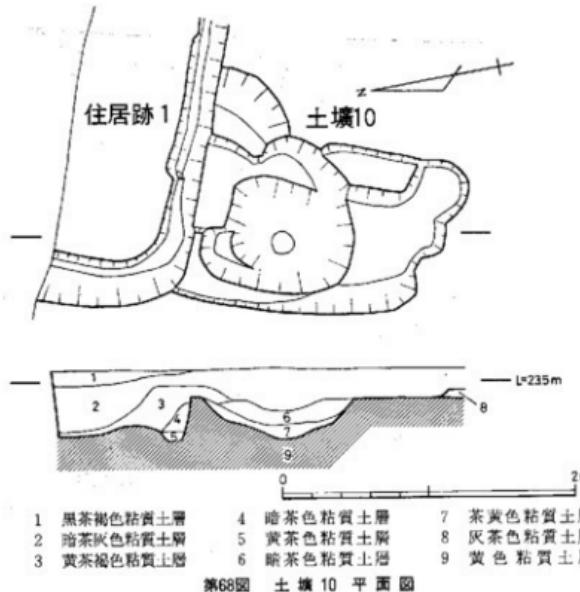
溝1(第71図)

溝1は第2次調査地点西方のA-4、B-4地区に位置し、土壤3や土壤4の北に隣接している。

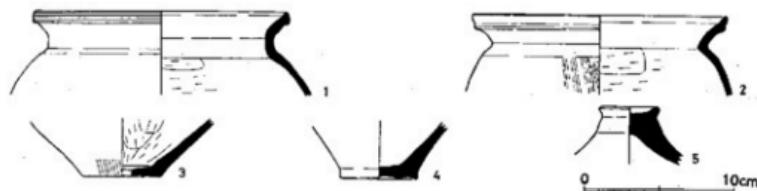
この溝は、⑧暗茶灰色土層の除去後検出されたもので南北2.7m以上、幅0.8m、深さ約10cmと浅く、北側で若干北東方向に曲がりはじめる。また溝底は部分的に2段になる所もある。



第67図 土壤9出土鉄器



第68図 土壤10平面図



第69図 土 壤 10 出土土器

出土遺物はなく時期不明であるが検出レベルから判断すると、弥生時代後期～古墳時代前期のものと考えられる。

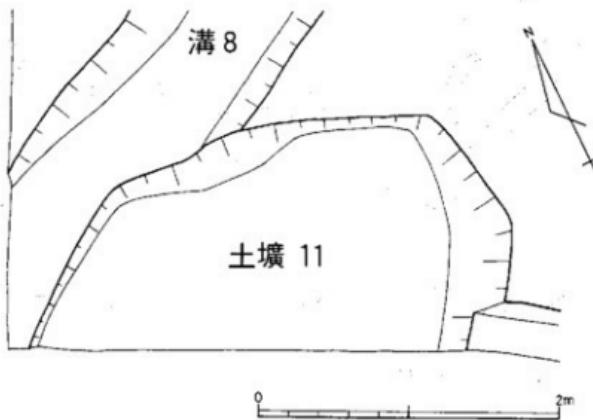
溝 2（第71・72図）

溝2は第2次調査地点西方のB-3, B-4地区に位置し、溝1の東に接している。

この溝は⑥暗茶灰色土層の除去後検出されたもので、溝1に切られた状態であった。溝の規模は東西4.2m以上で幅30~80cm、深さ約10cmと浅く直線に延びるものである。

出土遺物としては甕がある。（1）は口縁がゆるく外反し口縁端部が丸くなり、胴部の張りが少なものである。（2）は胴部の張りの少ないもので、凹み状の底部をもつ。なお（1・2）共、外面に縱方向のハケ目、胴部はヘラケズリにより整形されている。

以上のように出土遺物は僅かに甕が出土したのみで、明確な時期を判定しうる遺物は出土しなかったが検出レベル等から弥生時代後期～古墳時代前期のものと考えられる。



第70図 土 壤 11 平面図

溝3

第6次調査地点東部、A-1・2、B-1地区にかけて、東西にはしる溝で、⑥淡茶灰色粘質土層除去後検出された。長さ6m以上、幅0.6~1.0m、深さ10cmの規模をもつ、東部と西部ではそれぞれ南へ直角にまがるようすがうかがわれるが、東は住居跡3と切り合い、西は調査地区外にのびるため明確ではない。また、住居跡3との切り合い関係も明らかではなかった。出土遺物は小片の土器ばかりのため図示できなかったが、確認される範囲では弥生時代末から古墳時代前期にかけてのものばかりであった。

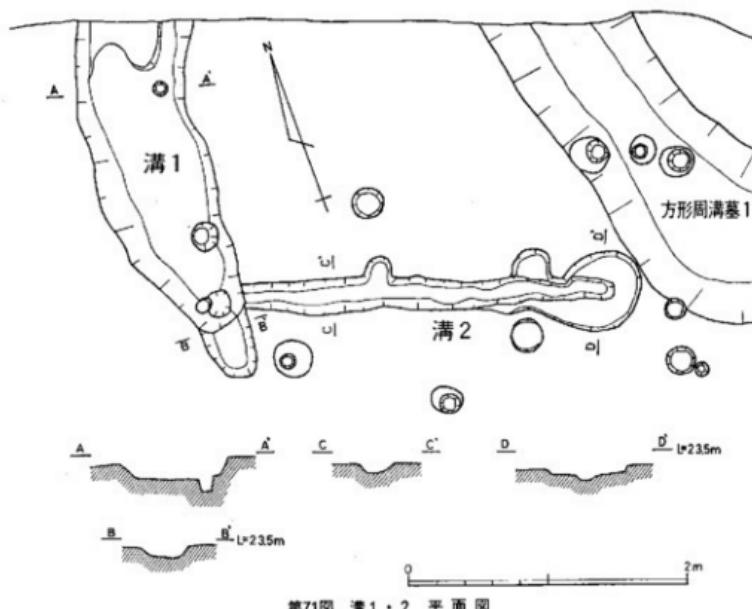
溝4（第64図、図版25上）

第6次調査地点の東部、A-2地区の南端部で⑦灰茶色粘質土層除去後検出された。幅0.6~1.0m、深さ約15cmの溝で、長さは1.3m以上あり、南部は調査地区外にのびている。

遺物としては土器の小片が出土しただけであるが、弥生時代後期でも末ごろのものが大半を占める。

溝5

第6次調査地点の東部、A・B-2地区を南北にはしる溝で、⑧淡茶灰色粘質土層除去後検



第71図 溝1・2 平面図

出された。長さ5.2m以上、幅60~90cm、深さ約10cmの規模をもち、北部は住居跡2と切り合い、南部は調査地区外にのびている。住居跡2との切り合い関係については、溝5の方が後のものである。

出土遺構は土器の小片だけであったが、弥生時代後期末から古墳時代前期にかけてのものがみられる。

溝6

第6次調査地点の東部、B-2・3地区において⑥淡茶灰色粘質土層除去後検出された。長さ3m以上、幅0.6~1.2m、深さ約5cmの規模をもち、北東部は住居跡2と切り合い、南西部は浅くなりとぎれている。

遺物はごく小片の土器だけで、時期のわかるものはなかった。なお、住居跡2との切り合い関係については、溝6の方が先行する。

ピット（第73図）

第2次調査では、1区~5区までの全般にわたり多くのピットが検出された。

これらの内には⑥暗茶灰色土層、⑨灰茶色粘質土層、⑩黄茶色粘質土層の各層除去時点で、各々検出されたものの上層の類似する土層からの掘り込み等により、明確な掘立柱建物跡になる遺構等は検出されなかった。しかし、ピット1からは口縁が外反し、端部は肥厚し端面は凹線状をなす壺（1）が出土している。

この土器から、ピット1は弥生時代後期のものと考えられる。また⑩黄茶色粘質土層除去後検出されたB-1、B-2地区にまたがる4個連結した柱穴の性格等は不明である。

一方、第6次調査では中央部から東部にかけて多くのピットが検出された。⑥淡茶灰色粘質土層除去後検出されたものは10個で、⑨灰茶色粘質土層除去後検出されたのは21個である。遺物をほとんどともなわないため、明確な時期は不明であるが、基本的層序にしたがえば弥生時代後期から古墳時代前期のものと考えられる。

なお、第2次調査のものも含めて建物跡を復元することはできなかったが、生活に關係した何らかの構造物であったと考えられる。

包含層出土遺物（第74・75図、図版26上・52中左・66下左）

ここでとりあげる包含層出土の土器はすべて⑥暗茶灰色土層出土のものであり、壺、甌、高杯、石製模造品が出土している。

壺（1）は口縁部が外反する二重口縁のもので、内外面はヘラミガキの調整がある。（2）は口縁が外傾し、端部はやや丸みを帯びる。（3）は小型の丸底甌で、内壁しながら外傾する



第72図 溝2 出土土器

短い口縁をもち、胴の張りが少ないので、(4)は短く内彎する口縁をもつ小型丸底壺で内面へラケズリがほどこされる。甕(5)は内彎しながら外傾する口縁部をもち、端部は内側に肥厚するものである。高杯(6)は脚が幅広がりをみるもので、(7)は柱状部を持ち屈折して聞く脚部で、透かし孔を持つ。(8)は二段に屈折して聞く脚部をもつ。

以上の土器はいずれも古墳時代のものであるが、甕(5)や小型の丸底壺(3)は若干新しい要素を持っているものと考えられる。

一方、石製模造品は第6次調査地点B-3地区の住居跡1の南側の⑥層より出土している。暗緑色のストレート裏の刀子形模造品である。法量は箱長7.55cm、箱幅3.20cm、厚さ4~7mmを計る。

⑧ 中世

掘立柱建物跡

遺構(第76・78図、図版26下)

掘立柱建物跡は、第6次調査地点の東部、A・B-2・3地区で灰褐色粘質土層及び⑥淡茶灰色粘質土層上面において検出された。柱穴は7個検出されており、桁行2間(4.4m)以上、梁行2間(4.5m)の規模の縦柱の建物である。柱の間隔は桁行、梁行とも2.2~2.4mで、各柱は正確には直線上には並ばない。なお、建物の方位は桁行方向でN-27°-Eとなる。

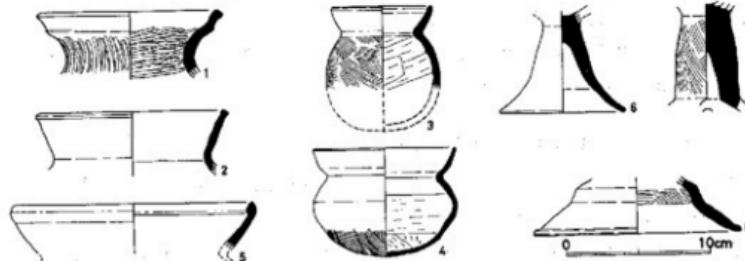
柱痕は柱穴2・3・4でそれぞれ検出されたが、まったく検出されなかったもの(柱穴5)や、柱穴1・5・6のように自然石が柱穴上面まで達し、かなり細い柱でないかぎり建築不可能と思われるものもあった。ただし、柱穴2の石2個は柱穴底部にあり、根石としたことが考えられる。なお、柱穴1と柱穴7の下部の石は火をうけた痕跡がみとめられた。

遺物(第77図、図版66上右)

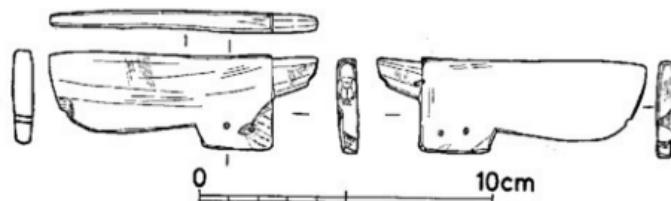
遺物は柱穴4よりのみ土師器の甕が出土した。この柱穴の規模は25×45cmと他に比べて大きく、その北部を一段深く掘って土師器の甕の破片と小さい自然石を埋めた後、柱がたてられた



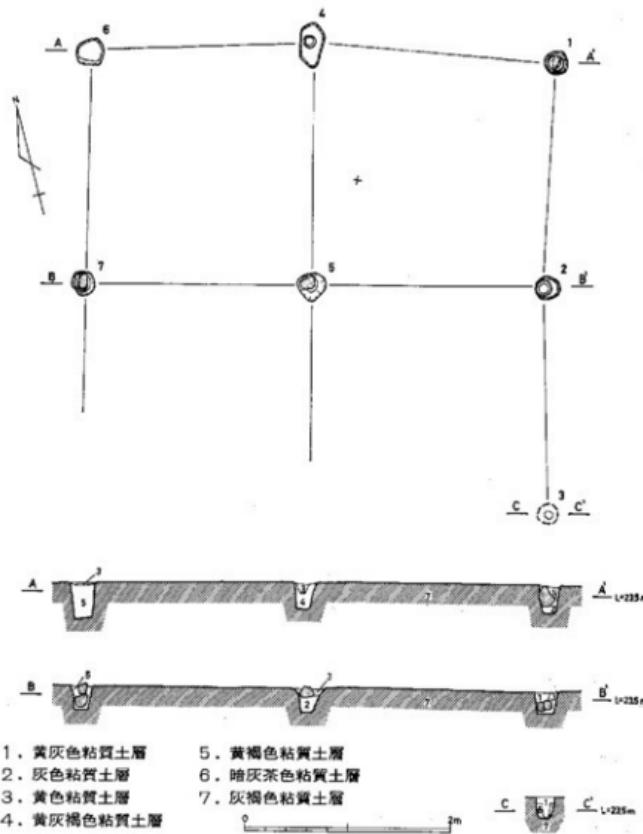
第73図 ピット1 出土土器



第74図 第2次調査 包含層出土土器



第75図 第6次調査 包含層出土石製模造品



第76図 据立柱建物跡平面図

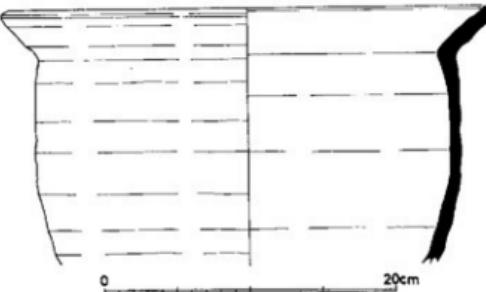
1. 黄灰色粘質土層
2. 灰色粘質土層
3. 黄色粘質土層
4. 黄灰褐色粘質土層

5. 黄褐色粘質土層
6. 暗灰茶色粘質土層
7. 灰褐色粘質土層

0 1m

ようで、柱底は柱穴底部に達していなかった。

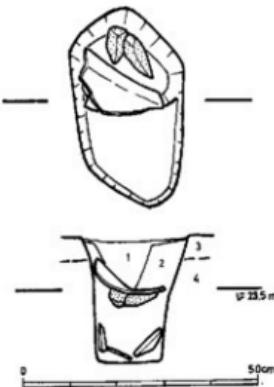
この土師器の甕は大型のもので、長手の胴部の上に「く」の字形に屈曲する口縁部がつく。高槻市上牧遺跡出土例があり、平安時代末期から鎌倉時代にかけてのころのものと考えられる。^⑨



第77図 柱穴4 出土土器

掘立柱建物跡柱穴規模表

番号	柱穴規模 cm		柱底規模 cm		備 考
	径	深	径	深	
1	22	28	10	12	火をうけた痕跡のある自然石(20cm大)柱穴上部にあり。
2	22	20	16	8	底盤に15×8cmの人の自然石を2個並べて置かれるが、底部に達していない。
3	18	20	7	20	調査地区南端の断面に検出。
4	45×25	26	12	10	上部器皿出土
5	30	24	検出されず		柱穴上部に15cm人の自然石1個あり。
6	26	35	タ		
7	24	24	タ		16~20cmの大なる自然石2個を重ねて置く。上の石は遺構上面より高く、下の石は火をうけた痕跡あり。

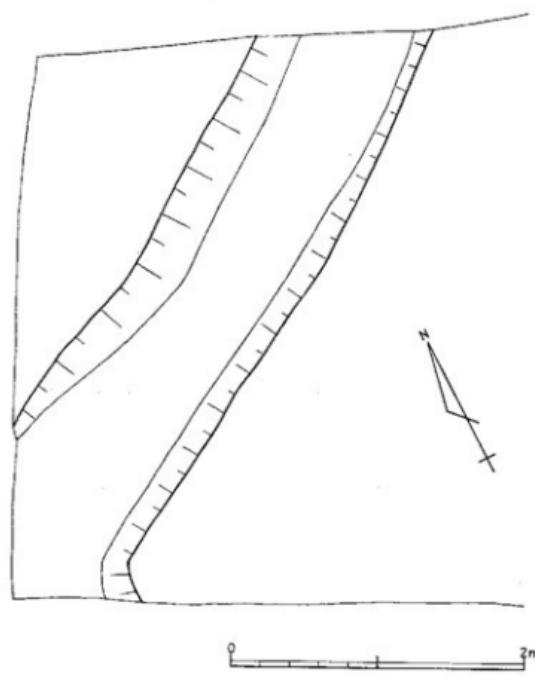


第78図 柱穴4 平・断面図

溝 8 (第79図)

第6次調査地点の西端部、A・B—8地区で検出された北東から南西方向にはしる溝である。長さ4.4m以上、幅1.1~1.2m、深さ約15~25cmの規模をもち、南西部は土壌11を切っている。

遺物は土師器、須恵器、瓦器、黒色土器などが出土した。小片ばかりで明確な時期は確定できないが、平安時代後期から鎌倉時代にかけてのものと考えられる。



第79図 溝8 平面図

(4) 小 結

第2・6次調査地点では、弥生時代前期・中期・後期、古墳時代前期・後期、中世の遺構が重複して検出された。

弥生時代前期の溝については性格不明であるが、弥生時代中期では方形周溝墓（巣内第IV様式期）とそれに隣接して胸下部に穿孔した土器を埋納した祭祀的色彩の強い土壙（巣内第Ⅴ様式（新）～第IV様式期）が検出された。

一方6軒の住居跡はすべて弥生時代後期～古墳時代後期のもので、弥生時代後期に至り集落が營まれたようである。住居跡の時期は住居跡4-aが最も古く、住居跡4-b及び住居跡2・3・住居跡1～住居跡4-cの順に建築されたと考えられる。

なお、この調査地区は、他の地区に比べて住居跡等、弥生時代後期～古墳時代にかけての遺構が最も集中している。

註

- ① 基本的層序は第2・6次調査とも同様であるが、調査時の土層觀察を重視し、あえて土層名を統一しなかった。
- ② 西宮市五ヶ山遺跡№3北西隅にて出土したものと同形で、類似文様であるとの御教示を古川久雄氏より得た。また、京都府綾部市青野遺跡、兵庫県氷上郡春日町七日市遺跡、兵庫県氷上郡島町三ツ塚遺跡でも出土したと聞く。
- ③ 神戸市垂水区玉津町高津橋 新方遺跡 昭和55年度発掘調査丁の坪地区で出土したものに類似例がある。神戸市教育委員会丸山潔氏の御教示を得た。
- ④ 佐原 真「畿内地方」「弥生式土器集成」本編2 (1968年)
- ⑤ 佐原 真「畿内地方」④と同じ
- ⑥ 田辺昭三「陶邑古墳址群I」(平安学園考古学クラブ 1966年)
原口正二「船橋」(平安学園考古学クラブ 1958年)
- ⑦ 岡山県教育委員会「雄町遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査報告一山陽新幹線建設に伴う調査一』1972年)
- ⑧ 大阪市立大学教授笠間太郎氏の鑑定による。
- ⑨ 高槻市教育委員会「上牧遺跡発掘調査報告書」(高槻市文化財調査報告書第13回 1980年)
この壺と類似したものは、同遺跡井戸2・3・6で出土しており、橋本久和氏によれば「土師器壺B」に分類されている。

VII 第4次調査

(1) 調査の経緯

第4次調査は、福知山線複線電化工事に関する事業として駅舎建設が計画され、事前に調査を実施したものである。この調査は、第3次の確認調査結果にもとづき、駅舎建設予定地(480m²)ならびにプラットホーム建設予定地(第5次調査地点108m²)を対象とする地域とし、弥生時代から古墳時代にかけての生活跡が存在すると考えられた。

そこで、上記の建設予定地内全域を発掘調査の対象地域として調査を行うことにしたが、実際は南北に流れる小戸水路と線路等の安全性を考慮した範囲を該当する地域とした。そのため、調査地域は小戸水路をはさんで変形な形をとることとなった。遺跡は同一のものであるが調査地域が二ヶ所にわかれた。

調査の範囲は東西約32m、南北20mを測るが、東側は小戸水路が北西から南東へ流れ、また北西隅は試掘調査、ならびに盛土除去の観察によって遺物包含層等、遺跡の存在する可能性がないと考えられる地域については調査予定地から除くこととした。

調査の実施にあたっては、パワーシャベル等の大型重機で、旧地表面まで掘削を行い、それ以下は人力により遺構面の検出に努めた。

まず、調査の方法は、調査区を5m方眼の枠目により区域割りを行い、土層の堆積順序の新しいものから掘り下げていった。

遺跡は、北から南へゆるやかな傾斜をもつ、東西にはほぼ水平な地盤である。遺構のある土層は、A-0~2まで粘土質の土層であり、A-3~6までは砂層である。住居跡5では砂利層中に住居を棗いている。これらのことから第5次調査地点と深く関連することであり、この柴根遺跡についてもいえるが、低位丘陵からゆるやかな傾斜で低地へ降りる敵高地上に立地している。

そして、表土下25~50cmに堆積する暗茶褐色土層中に多くの遺物が含まれており、またその下には、方形周溝墓、住居跡、土塙などが掘り込まれている。

それに対して砂層中には、須恵器を始めとして、中世の遺物を含む包含層、土壌もある。

以上のようにして、この調査地点の所属年代は平安、鎌倉時代頃とする中世の溝、土塙、古墳時代の溝、住居跡、弥生時代の土塙、方形周溝墓等の遺構が確認された。

(2) 層序(第81図)

第4次調査地点の層位的関係は、各住居跡と、南側の土層図によって大まかな旧地形を知ることができる。ただ南北方向の層位的関係を示す土層図が作成されていないため東西方向の動きのみ知ることができる。また特に南側上層図を参照し、調査の所見を踏まえてみると、

一つには、A—3地区の旧跡状部分に該当する第5層を境としてA—0～3区とA—4～6区までとは地層の堆積状況が異なり、前者はある程度の自然地層が見られ、耕作が⑥・⑨・⑩層の遺物包含層直上にまでおよんでいる。一方、後者は土管の埋設工事や、西端の地域ではかなり後世の手が入っている。

さて、この基本的な土層の堆積状況は大きくわけて、⑧・⑨・⑩層に見られる遺物包含層と遺構内における土層の堆積状況、そして、地山を形成する土の違いなどの3点に集約される。

一点は、A—2地区よりはじまる遺物包含層は西端にまでおよび、遺構をおおう形で堆積する。この遺物包含層の有無は、集落が形成され、廃絶した後もこの付近には地点を貫にする生活が営まれていたことを証明するものだろう。

二点は、西から住居跡5、周溝墓2、土壙12・13・14・溝9などの遺構が壁面に顯著にあらわれている。

三点は、地山を形成する土層が、A—2と3を境として、砂利層を地山とする西側の地域と褐色粘土層を地山とする東側の地域とに大きく分れ、そのため周溝墓、溝は粘土層の上に掘られ、住居跡は砂利層中に築かれたことになる。ただ、第5次調査地点と共通する面もあるが、かならずしも粘土質系統の地山土壤の上に築かれたのではなく、むしろ砂利層といった不安定な基盤の上に遺跡が立地することである。また北側に行くと砂利層とその上層をおおう砂層等が検出され、しばしば、河川等の氾濫による水害を受けた地域であったと思われる。

(3) 遺構と遺物

① 弥生時代

方形周溝墓2

遺構(第82・90図、図版32・33)

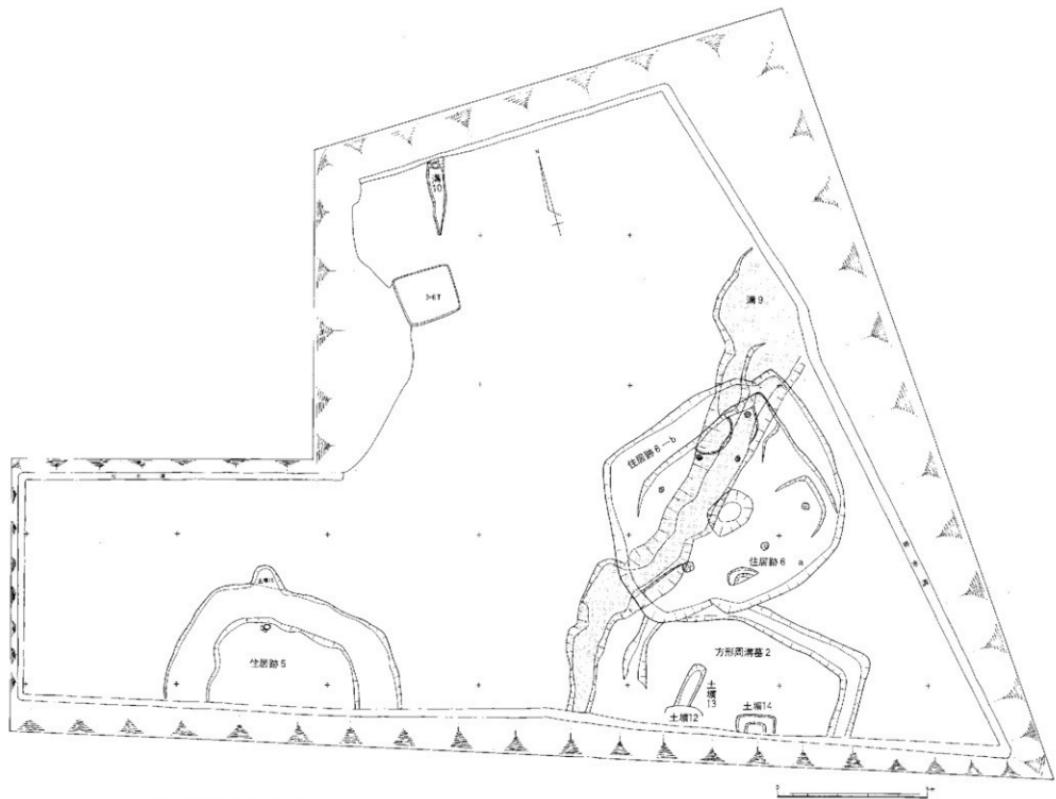
方形の溝によって規格された遺構で、北半分しか調査ができなかった。方形周溝墓と断定すべき墓壙が調査区外にあるものかと思われるが、また、溝内に8個体の壺、鉢、高杯が供獻されており、かつその内に穿孔した壺を持つことなどから、周溝墓と判断した。

この周溝墓は、調査区の南東隅近くに位置し、住居跡6—a、bに接し、これらの住居跡によって削平されている。そのため、周溝墓が古く住居跡が新しいという新旧の関係をつかむことができた。

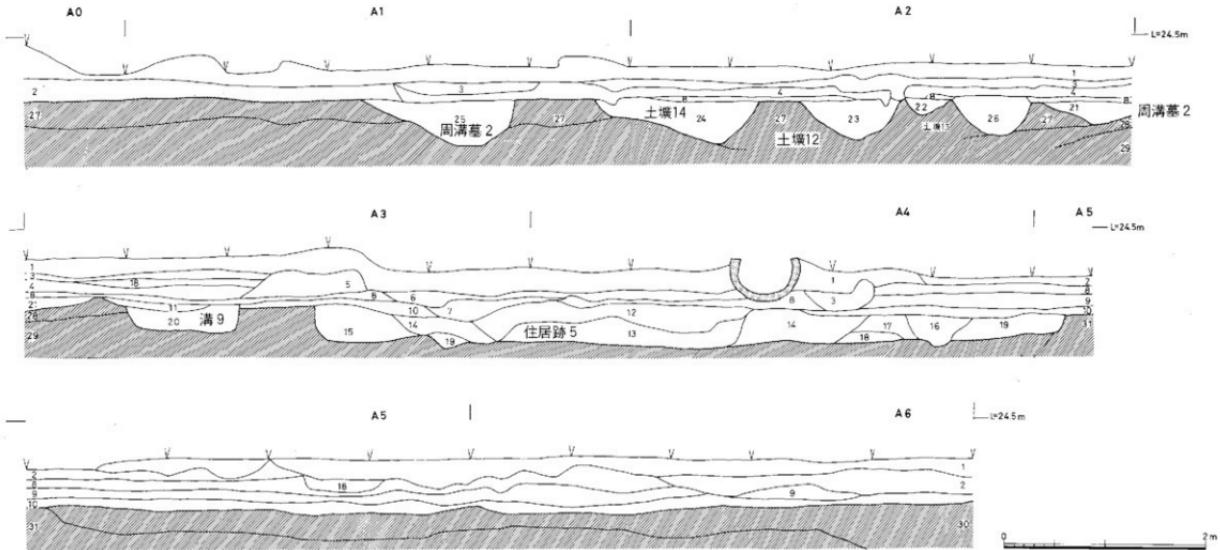
また、方形周溝墓内の上層13・14は遺構の状態、出土遺物から判断して墓壙の可能性も残るが断定できない。

周溝は三辺が「コ」の字状にめぐり幅30～40cm、深さ20cmでU字状を呈する。周溝の長さは東西約8mである。この周溝には横状のものはない。

溝の堆積状況は暗緑褐色粘土の單一土層である。

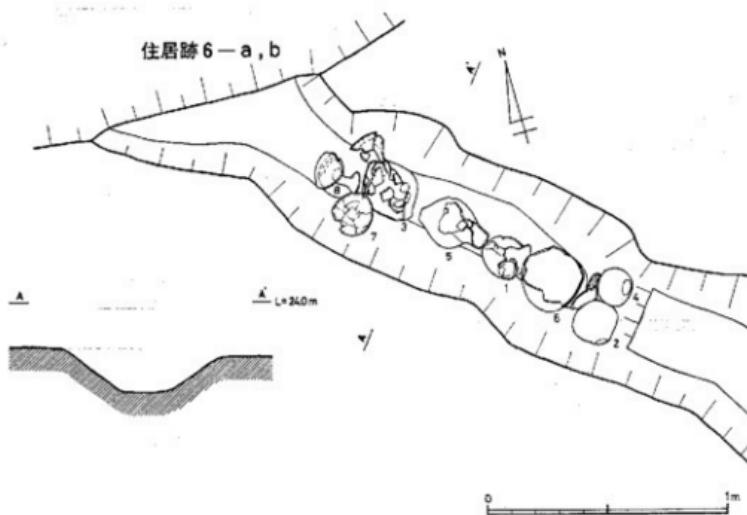


第80図 第4次調査地点 遺構平面図



- | | | | |
|-----------------|--------------------|-----------------|----------------------|
| 1 耕 土 層 | 9 黄褐色砂砾層(遺物包含層) | 17 暗褐色混疊粘土層 | 25 暗綠褐色粘土層 |
| 2 床 土 層 | 10 黄褐色混疊粘土層(遺物包含層) | 18 黄褐色粘土層(ブロック) | 26 灰褐色砂礫層 |
| 3 灰褐色砂質土層 | 11 暗青灰色粘土層 | 19 黑色砂層 | 27 棕色粘土層(地山) |
| 4 旧 耕 土 層 | 12 暗褐色粘土層 | 20 茶褐色砂砾層 | 28 綠褐色砂礫層(地山) |
| 5 黄灰褐色土層 | 13 明褐色砂砾層 | 21 暗綠灰色砂泥層 | 29 黃褐色砂礫層(地山) |
| 6 淡黃色砂泥層 | 14 褐色砂砾層 | 22 暗褐色砂泥層 | 30 茶褐色粘土と砂礫のラミナ層(地山) |
| 7 綠灰色粘土層 | 15 茶褐色砂砾層 | 23 暗灰色砂泥層 | 31 灰褐色砂層(地山) |
| 8 黄褐色粘土層(遺物包含層) | 16 暗黃褐色砂砾層 | 24 暗綠灰色粘土層 | |

第81図 第4次調査地点 南側断面図



第82図 方形周溝墓 2 溝内土器出土状態

造構の性格としては、第2調査地点B-2, B-3の方形周溝墓1と有機的な関係をもつものであろう。

この造構の所属する年代としては、溝内に供獻された弥生式土器から判断して、畿内第Ⅲ様式の時期に相当すると考えられる。

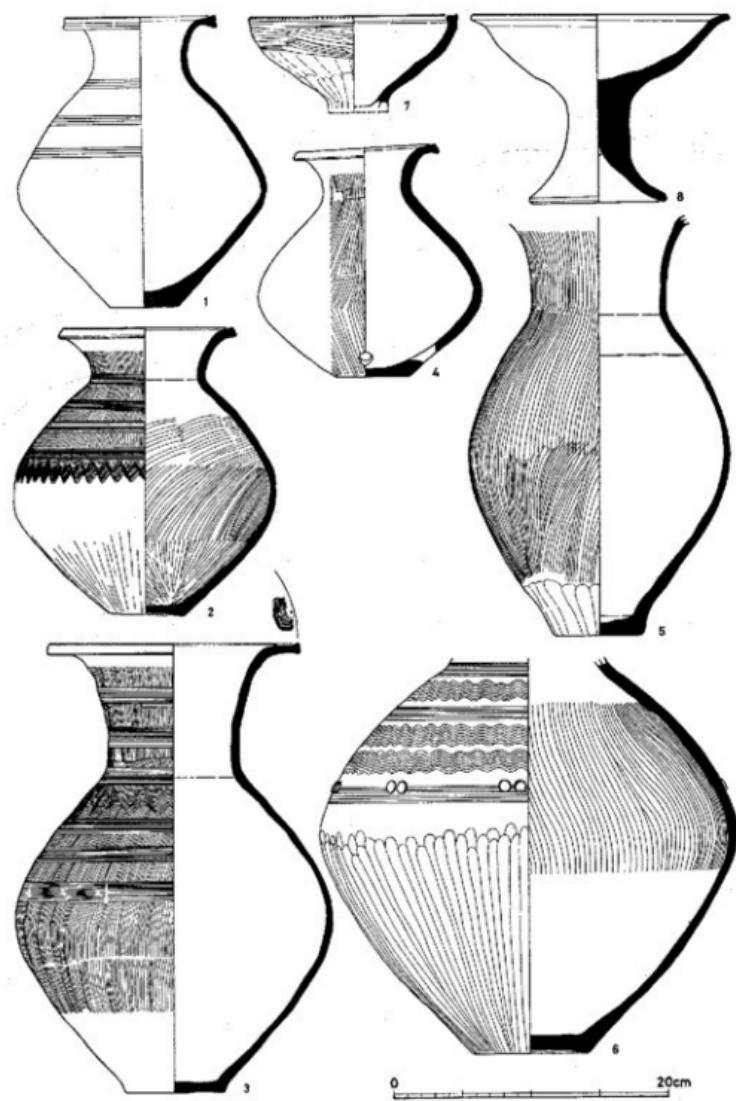
遺物 (第83図、図版69・70)

遺物は壺6個体、鉢1個体、高杯1個体、計8個体である。出土の状況は、鉢と高杯とが近接しており、これらの土器は溝底にたてられた状況を示し、長さ3m未溝の中に供獻されていたと思われる。

壺は大別して、頸部が縮まり、口縁部が大きく外反するものと、頸の長い壺とにわかれる。前者は(1・2・3・4・6)が該当し、最大径が胴部中央に位置し、頸部から胴部中位にかけて櫛描直線文、櫛描波状文を施文するもので、(3)などは口縁部内面に櫛を施文具とする櫛描同心円を描く。(4)は底部近くに穿孔をしている。

後者は、外面に縱方向のハケ目を細密に施す細頸壺(5)である。

鉢(7)は橢状の形態に突出する底部がつくものである。口唇部に櫛かヘラによる刻み目が施されている。高杯(8)は、脚部より水平にひろがる口縁部をもち、脚柱は太い、脚部はわずかに外反する。



第83図 方形周溝基2出土土器

土 壤 13 (第90図、図版32)

細長く長方形に掘られた土壌で、土壌12に切られる形で検出した。この遺構はA-2、B-2区にかけての方形周溝墓内に掘られたものであるが、直接的に方形周溝墓との関連をつかむものはない。遺構の規模は、残存しているだけで長さ1.4m、幅0.5m、深さ20cmを測るU字形の断面をとるものである。

この遺構に堆積している土層は暗黄茶色土層のみであり、周溝墓の木棺等の埋葬施設は確認できず遺物もなかった。

この遺構の年代は、土壌12が弥生時代後期末であることから考えて、それ以前に遡るものであろう。

土 壤 12

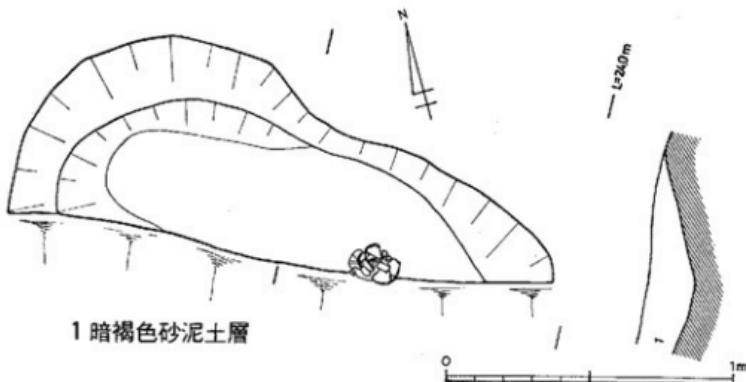
遺 構 (第84・86図、図版35)

やや長方形を呈する土壌で、南東隅に壺を有する。遺構は、調査区の南東隅に近く、方形周溝墓内に位置し、一部は調査区外へとおよんでいる。そのため全体の形をつかむことはできない。主軸線は磁北に対してN-53°-Wにふっている。

土壌の規模は長軸が約1.9m、短軸が0.7m以上、深さ30cmという数値である。そして、ゆるやかな傾斜で階段状に掘られている。

遺構内には①暗褐色砂泥層が堆積している。

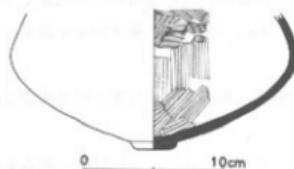
遺物は遺構面に接して出土した壺で、胸部から底部のみの破片である。



第 84 図 土 壤 12 平 面 図

この遺構の時期を決めるのは、壺の年代にたよるしかなく、今の所、弥生時代畿内第V様式の時期に属すると思われる。

この遺構と方形周溝とは直接的に関係なく方形周溝墓 2 の上に掘られたものと考えられる。



第 85 図 土壇 12 出土土器

遺 物 (第85・86図、図版67)

壺のみの出土であるが、口縁部等を欠損した状態で、遺構面より出土したものである。

長頸壺の胴部下半から底部にかけての土器片で胴の最大径は中位にある。底部は突出するもので乳首状を呈する。外面はヘラミガキ、内面は刷毛目調整を行っている。

土 壤 14 (第90図、図版32)

土壤14は、土壤12・13に接し、周溝墓内に位置するものである。方形を呈し、二段に掘られた土壤で一部分線路内に入りこむため遺構の全体を知ることができない。

遺構の規模は幅1.3m、下段の幅0.7mを測

る。深さは中段まで10cm未満、最下底まで18cmを測る。

土壤内には暗緑褐色粘土層のみが堆積している。この中からは1片の土器片も採集することができなかった。そのため、遺構の年代については明確な時期を知ることができない。

(2) 古墳時代

住居跡 5

遺 構 (第87・88図、図版29~31)

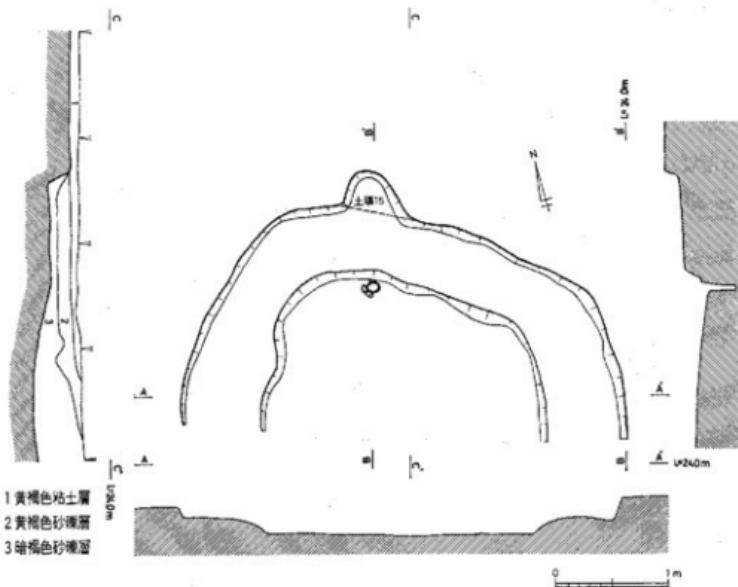
一部路線内にあるため調査はできなかったが、屋内をめぐる高床部を持つ方形竪穴式住居である。

住居跡の位置は調査区の西南にあり、方形周溝墓 2 と平行する所にある。

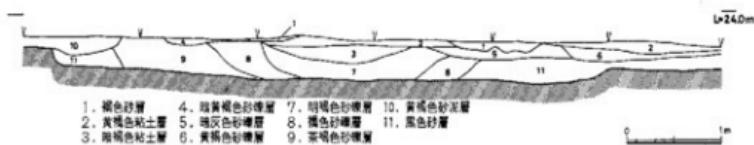
住居跡の大きさは、東西約7.8m、南北4m以上、高床部分の幅0.5m、そして、柱穴1ヶ所を持つものである。深さは中央部で40cm、高床部分で30cmを測る。

柱穴は、1ヶ所しか検出できず、そのまわりを頭大、拳大の石によって支柱を支えたと思われる石がある。

住居跡内より出土した遺物は少なく壺、甕、高杯の数点のみである。

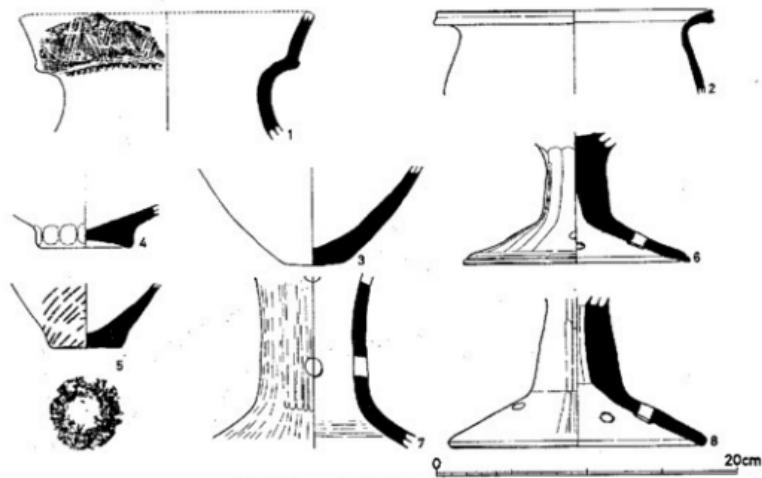


第 87 図 住居跡 5 平面図



第 88 図 住居跡 5 南側土層図

住居跡廃絶後の土層は、南北方向を見ると⑥の暗褐色砂礫層が厚く堆積した上へ⑨黄褐色砂礫層が堆積したのち、住居全体を①黄褐色粘土層がおおう順堆積ともいべき自然に土砂が堆積していることを示している。東西方向では近くから⑪黑色砂層、⑩茶褐色砂礫層、⑥褐色砂礫層、⑦明褐色砂礫層、⑧暗褐色粘土層等によって順次埋没している状況を呈し、北からの土砂堆積が進んだことを示している。



第89図 住居跡5出土土器

遺物 (第89図、図版68・69・71)

壺は、口縁部が二重口縁を呈するもの（1）と、甌（2）は外方に向かって大きく外反する口縁部をもつものである。また、底部のみであるが、外面は叩き目を施しながら底部がドーナツ底をとるもの（5）と凹むもの（4）、平底を呈するもの（3）とにわかれる。高杯は（6・8）は脚柱部下端が内傾しながら直立するもので透かし孔を四方にもっている。また（7）は中空の脚柱である。

住居跡6-a (第90~92図、図版32)

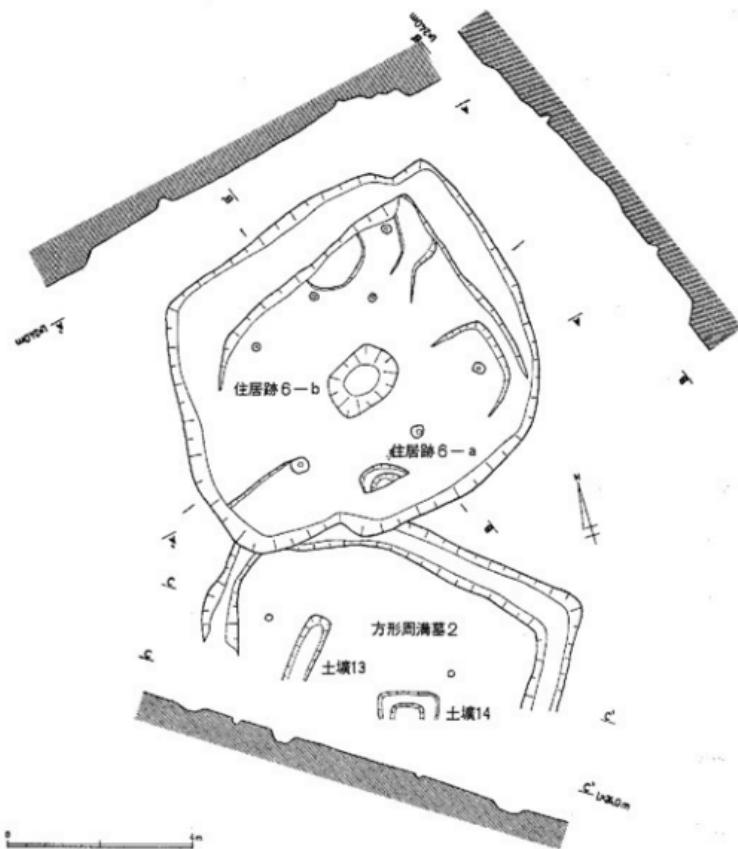
住居跡6-aは、方形の堅穴式住居ではほとんどの部分を住居跡6-bによって切られてしまい、南東の壁のみがかろうじて残っているにすぎない。

住居跡6-aは調査区南に位置し、方形周溝系2の溝に接し、一部切断している。この住居跡は1辺約4.5mを測り、方形を呈し、深さは50cm、壁は直立に近いもので、住居は地山の⑩淡黄茶色粘質土層、⑪青灰色混疎粘質土層を掘り込んでいる。ただ、6-b住居跡に削平されているため遺物等について不明な点が多く、しいて述べれば住居跡が前後して築かれ、なお接近しているため、住居跡6-bと遺物が混在した可能性があり、第93図(9)が該当すると考えられ、それが事実とすれば、畿内第V様式の系統を引くもので弥生時代後期末頃と推測される。

住居跡6-b

遺構 (第90~92図、図版32~34)

住居跡6-bは住居跡6-aを削平するという形で築かれた方形堅穴式住居である。調査



第90図 方形周溝墓2・住居跡6-a・b平面図

区の東南、周溝墓の溝に接する形のもので、方形周溝墓2、住居跡6-aを切ることからもっとも新しい時期の住居跡と考えることができる。住居跡は、砂・シルトを地山とするもので、方形を呈し、1辺の長さ約6m、深さは約50cm、屋根等の上部構造に関係する柱穴等は7箇所あるが、方形に近く並ぶ柱穴は室内中央部に位置し、柱間約2.8mを測る。また、南西隅のピットからは壁へと続く溝がある。また、室内中央に炉床に使われたかと思われるピットがあり、部分的に焼上がり入っている。壁面直下には、用途不明の落ち込みが数箇所見られ、

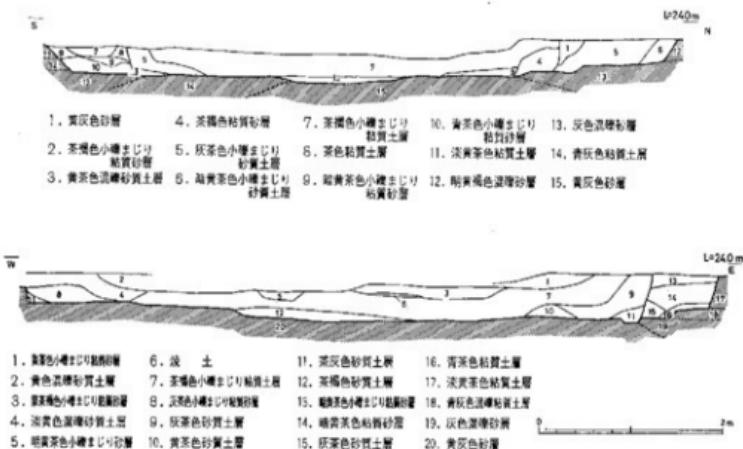
土器も床面に密着して出土している。住居跡の廃絶後を示す東西方向の土層の堆積はこの住居跡 6-a の埋土、⑩暗黄茶色小礫まじり粘質砂層を掘り込み、壁直下には⑪茶灰色砂質土層、⑫灰茶色小礫まじり粘質砂層、⑬黃茶色砂質土層、⑭灰茶色砂質土層などがたまり、住居跡全体をおおう形で、⑮茶褐色小礫まじり粘質土層が形成される。住居跡 6-a の埋土が後世の氾濫等により住居跡の平面プランを適確につかめていないため、一部住居跡 6-a 内出土の遺物も住居跡 6-b に紛ぎれている場合もあり得ると考えられる。住居跡の所属年代は遺物等から判断して、須恵器をもつ時代の 5 世紀後半に位置づけておきたい。

遺物（第93・94図、図版67・68・71・72）

遺物は住居跡内から多数床面に密着した状態で出土しており、壺・甕・碗・高杯と須恵器では壺、杯、把手付楕円土器や、土錘、石斧などが出土している。土師器における器種を見ると、壺・甕・鉢・高杯があり、壺は 4 種類に分けることができ、(1~6) が該当する。二重口縁を呈する(1・4)、短頸壺の(2)、頸部から大きく外反する口縁部(3)。そして球形の胴部に丸底を呈し、「く」の字状に外反する口縁部をもつ(5・6)である。(1)には、口縁部に櫛描波状文を横走させ、その上に竹管文を押した、2 個を一対とする円形浮文を貼付している。また底部のみであるが木葉痕を呈するもの(11)がある。甕は(7~10)が該当し、(7)の如く「く」の字状に大きく外反するもの、(9)にみられる「く」の字状に外反し外面に叩き目を施しているもの、(10)のらせん状の叩き目を底部近くまでくわえ、やや尖がる底部に穿孔している例も、また、(8)のように「く」の字状に外反しながら内面の口唇部が肥厚する

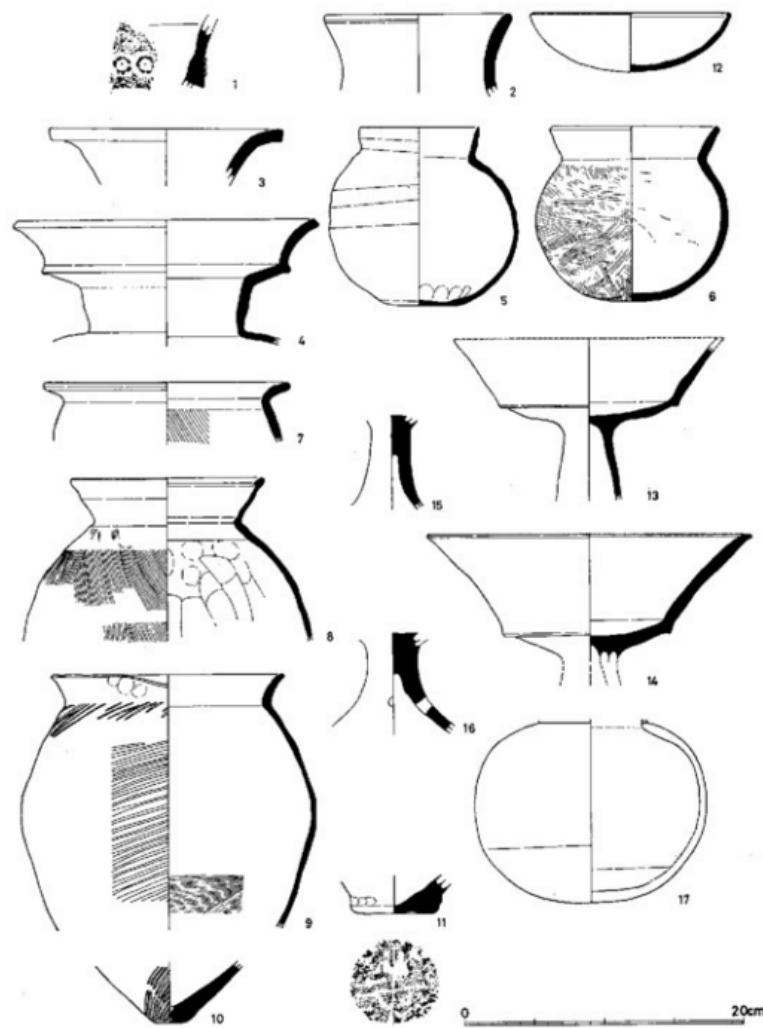


第 91 図 住居跡 6-b 西側断面写真

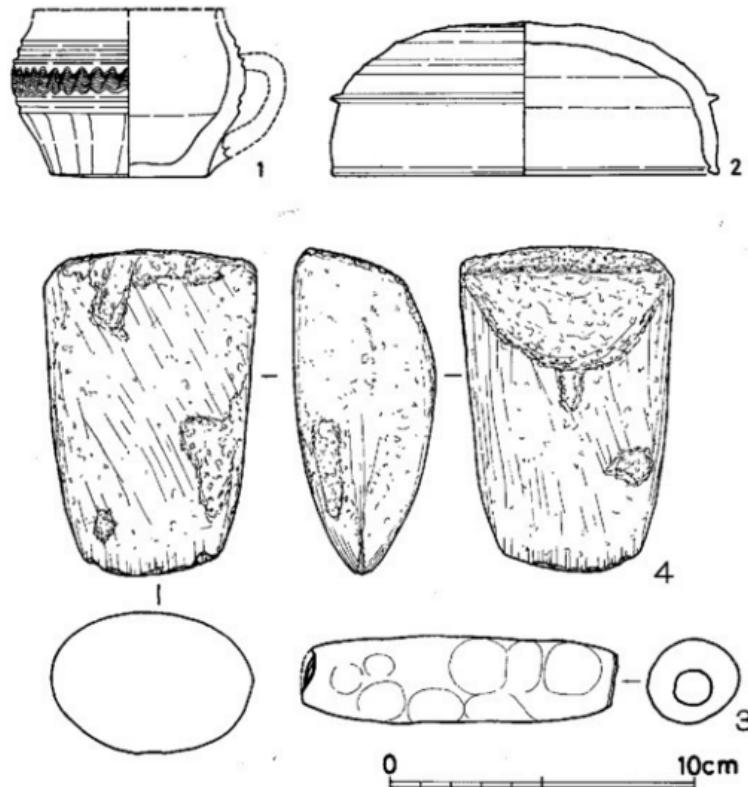


第 92 図 住居跡 6-a+b 断面図

ものもあり変化に富んでいる。(12)は小形の椀形上器で器形は弧を描く半円形に近い。内面口唇部はわずかに肥厚する。高杯の大きな杯部を有する(13・14)は、鋸角的に大きく開くもので中空の脚柱がつく。もう一方の(15・16)は、脚部が中実のもので透かし孔をもつ形態のものである。須恵器の壺(17)は、球形の胴部に直立する口縁部が接合されるものである。この須恵器と壺形土器(5・6)とが、共伴して出土している。また後の明瞭な杯(2)、把手付椀(1)も明黄色砂層中より出土している。また住居内より出土した鉢状の土錐(3)はで、葉巻き状を呈し、表面には指頭によるオサハの痕跡がいたる所に凹部となってあらわれている。筒状部分は真直ぐに開けられており成形段階で棒に粘土を張りつけ、土錐の形に整えた後、乾燥し、充分乾燥が進んだ段階で引き抜いたものであろうか、焼成はあまり良くなく低温度で焼成したものか、黒く焼け残り焼成の不十分さを示している。胎土には砂粒を含んでおり色調は肌色に近い褐色を示す。残存長10cm、口径2.5cm、筒部の径1.2cm。統いて時代は遡るが、石斧(4)がある。この石斧は住居跡内床面近くから出土した花崗岩製の大型船刃の石斧である。基部も完存し、使用の痕跡が見られるが全体的に研磨されている。基部には黒く焼けた痕跡がある。刃部の角度は75度を測る。刃先の幅4.5cm、基部の幅7cm、残存長11.4cm、幅4.6cmである。



第 93 圖 住居跡 6 - b 出土土器



第94図 住居跡6-b出土遺物

③ 中世

溝9(第97図、図版73)

住居跡6-bあるいは6-aの上層を北東から南西へと斜めに流れ蛇行する溝状遺構である。この遺構は灰色の砂利と砂とで北から南へと流れた状態を示しており、幅約1.2~2.0m、長さ14mにもおよぶ。第92図の住居跡6-a・b断面図において、中央部がくぼんでいるのはそのためである。

遺構としては溝の西肩が定かでなく、遺跡の立地する場所が低地であることから、上流における河川の氾濫による自然の流路と化した状況をあらわしているものと考えられ、その中に含まれている瓦器、須恵器等の破片から平安時代末から中世にかけて流れたものと思われる。

土壌15（第95図、図版29）

土壌15は、住居跡5の壁を切断して掘られたもので、やや橢円形を呈している。

遺構の大きさは長径1.05m、短径0.95mを測り、深さ10cmを測る。遺構としては北から南に傾斜しており、遺構内には黄褐色の砂が堆積している。

遺物はなく、掌大以上の石がある。

所属する時期は遺物のないことから明確でなく、住居跡5の廃絶された弥生時代後期後半以降に求められる。

溝10（第96図、図版35）

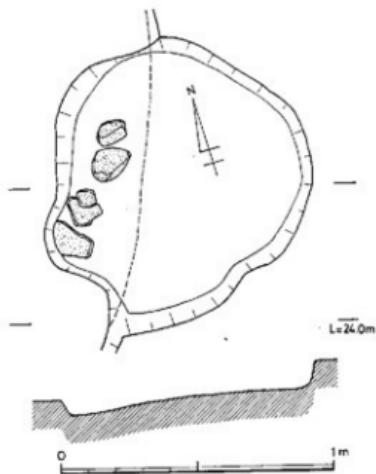
北西隅に位置し、北端に一部深くなつた部分をもつ溝状遺構である。遺構が調査区外へとおよんでいるため全体の形は不明である。

遺構の規模は長さ2.5m、幅0.6m、深さ5cm程のもので、一番深い部分は10cmを測る。

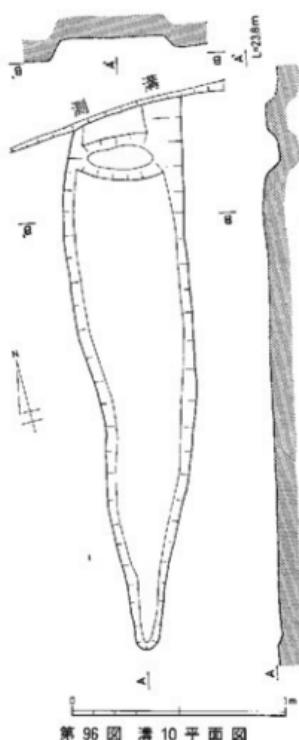
この調査区は北から西にかけて砂利、疊を基盤とする土層を掘り込む形で遺構があり、その基盤土層の上に、灰色、あるいは黄褐色を呈する砂が堆積している。遺構内の埋土として砂が入っている。

この砂層中には、中近世を示す、くすべ焼技法による黒色の瓦、土師器、須恵器、上質の小皿、瓦器等が採集されているが、いずれも細片であることから図示しなかった。しかし第97図に図示した磁器、瓦器等は、この砂層中より出土したものである。

よって、この溝10は人工的な遺構とは速断できないが、中世頃に猪名川あるいは中小河川の氾濫等による跡か、それとも栄根を中心とする生活跡とも考えられるが、遺構をおおう砂とその中に含まれる出土器から判断して、平安時代末から鎌倉時代頃に属するものであろう。



第95図 土壌15平面図



第96図 潟10平面図

白磁碗（3）

底部のみの白磁製の碗で高台はロクロによって削り出しているものである。器形は外にひらく青磁碗に近いものだろう。外面から内面にかけて乳白色に近い釉を施している。高台には釉薬はかかっていない。

底径7.9cm 高台高1.0cm

須恵質の土釜（4）

胴部以下が欠損した土釜で、口径15.6cm、鋤の部分23.5cm、残存高5cmを測るものである。口縁部は内側に二段にわたり稜線をもち、内面はハケ目調整。

瓦質の土釜（5）

風化の進む土釜で鋤の部分のみ残存している。鋤の径は26.8cmである。

擂鉢（6）

遺物（第97図、図版73）

瓦器碗（1）

貼り付け高台をもつ椀形の瓦器である。口縁部内面に1条の沈線をもち、外面では、口縁部近くにおいて水平、胴部では斜行する暗文を施している。椀内面には、見込み部分にジグザグ文、胴部には水平の暗文の圓線を濃密に施しており、中位に橢円を描いている。

高台は三角形の貼り付け高台である。口径15cm、器高6.0cm、底径6.3cm、高台高0.6cm

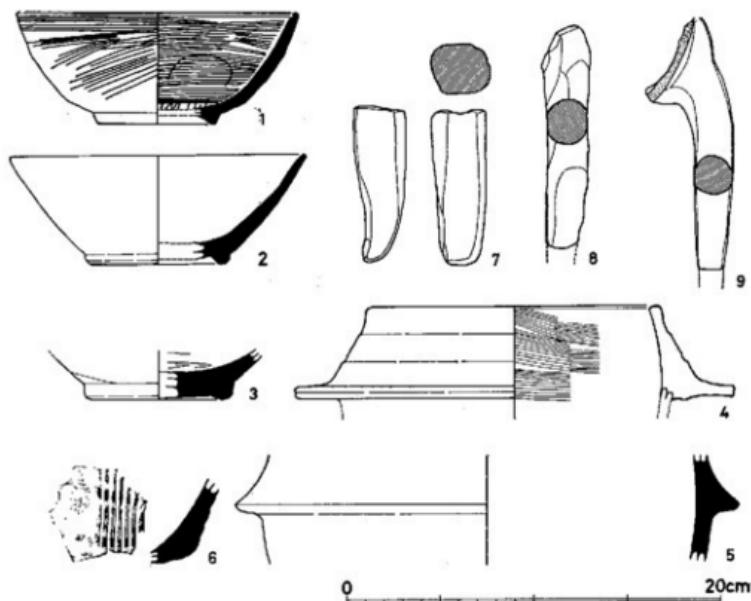
年代としては高根市上牧遺跡出土土器による年代観にもとづくと、II-1・2期に該当し、12世紀代にあたるものと思われる。

青磁碗（2）

外方にひらく椀である。器面全体に薄緑色を呈す釉薬がかけられている。内面は描かれた文様の一部と思われる線があるが何であるか不明、また、見込み部分には重ね焼きの痕跡がある。高台は幅の広いもので、5mm以上を測る。

口径15.8cm、器高3.8cm、底径7.8cm、高台高0.5cm。

この青磁碗は、器形、胎土、釉の状態から越州窯で製作されたものと考えられ、10世紀末頃のものであろう。



第97図 砂層内出土土器

脚部のみを残す擂鉢の破片で、縦に6本以上の櫛状沈線を陰刻している。器面は非常にすべすべしたもので、かなり使用されたことを物語っている。胎土は重く均密で、非常に堅牢である。備前焼と推測される。

三足堀（7）

断面方形を呈する土師質の堀の足で、先端部分がやや内傾するものである。足は中途で折れている。

残存長8cm、断面の大きさ3.0cm×2.7cmを測る。

三足堀（8）

途中で折れている堀の足で断面は円形を呈するもので、堀に接続する部分から欠損している瓦器質のものである。

残存高12cm、直径約2cm。

三足堀（9）

堀からはずれた状況を示すもので足先が欠損している。

瓦器質、残存高13.3cm、直径2.0cm。

(4) 小 結

第4次調査地点は駅舎建設に伴って調査を実施したものである。遺構は現在の高さより約2m下に存在し、土層の堆積によると、駅として使用される以前は水田等に使われていたらしく、旧耕作土が二枚にわたって確認された。その深さは現在の高さより約1.5m下に存在する。確認された遺構は古いものから順に方形周溝墓1基、方形竪穴式住居3軒、土壙3基、溝状遺構が2ヶ所あり、弥生時代中期から古墳時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代といったかなり年代に幅をもつ遺構群といえる。

さて、遺構、遺物について簡単にまとめてみる。まず方形周溝墓2をとりあげると、方形周溝墓は墓壇を調査区内で検出しえなかつた為に問題は残るが、一辺約8mの構築部をもたない溝内に8個体もの供獻された壺、鉢、高杯と脣部下半穿孔の事実、ならびに近接する第2次調査地点における方形周溝墓1等を考え合わせる時、墓と考えてよいだろう。

統いて、弥生時代後期から古墳時代に入ると、方形周溝墓内の一角に掘られた土壙12には、底部から脣部下半の部分しか残っていない壺が1例出土し、この土器から弥生時代後期後半に年代が求められる。また、同様の時期に属するものとして住居跡5が該当する。この住居跡は砂利や躓を基盤とする屋内高床部を持つ住居跡で7.8m×4m以上を測るが、柱穴らしきものは1ヶ所しか確認されなかつた。また、住居跡内の遺物からその年代を推定することが可能であり、その土器は図示したものから判断して、畿内第V様式の後半の時期と今の所考えておきたい。またこの畿内第V様式期になって中期の墓地から生活する居住区へと変化している点に注目したい。

次に方形周溝墓2の溝を切断する形で建築された住居跡6-a,bがある。この住居跡6-aはさらに6-bに大部分切断されていることから考えて、数的には周溝墓よりは新しく、住居跡6-bよりは古いと考えられること、また片口になる可能性をもつ、壺を住居跡6-aに伴う遺物とするなら弥生時代末から古墳時代前期頃のものと考えられる。

住居跡6-bは須恵器を伴出する方形の住居跡であり、土師器、須恵器の年代から5世紀末以前に廃絶されたと思われる。

これらの遺構が築かれた以後、瓦器等が示す平安時代から鎌倉時代以後における砂に運ばれた土器群が出土したが、人為的な遺構ではない。

以上によって遺構を時間的な流れの中に羅列的にとりあげてみたが、国鉄福知山線々路下および他の調査地点、地区との中で再度見なさなければならないだろう。

註

- ① 高槻市教育委員会『上牧遺跡発掘調査報告書』(高槻市文化財調査報告書第13冊 1980年)
- ② 田辺昭三『陶邑古窯址群1』(平安学園考古学クラブ 1966年)

VII 第5次調査

(1) 調査の経緯



調査前盛土除去風景

第5次調査は第4次調査同様、福知山線複線電化等関連事業の一環としてプラットホームの建設が計画され、第3次調査に実施した2・5トレンチによって確認された結果にもとづいておこなわれたものである。

調査の対象地域は、第4次調査区と小戸水路をはさんでちょうど対称の位置にあり、調査面積は東西約12m、南北約17mの範囲で総面積約200m²におよび、旧構内の地表下2m

下に遺構は存在した。そのため遺構面までは確認調査の所見によって調査員が立合の上、バーナー・シャベル等の重機で盛土を旧耕作上面まで除去した後、それ以下は人力で取りのぞいた。ここでも、調査区の近くを国鉄福知山線の列車が通過し、また小戸水路が流れているため安全地帯を確保して調査区を設定したためやや変形な形をとらざるをえなかった。

調査は層序に従って掘り下げていったが、特に第3次調査2トレンチの調査結果は調査を進める際の指標となった。このトレンチは最終的には住居跡内に設定されたものであったことが判明した。

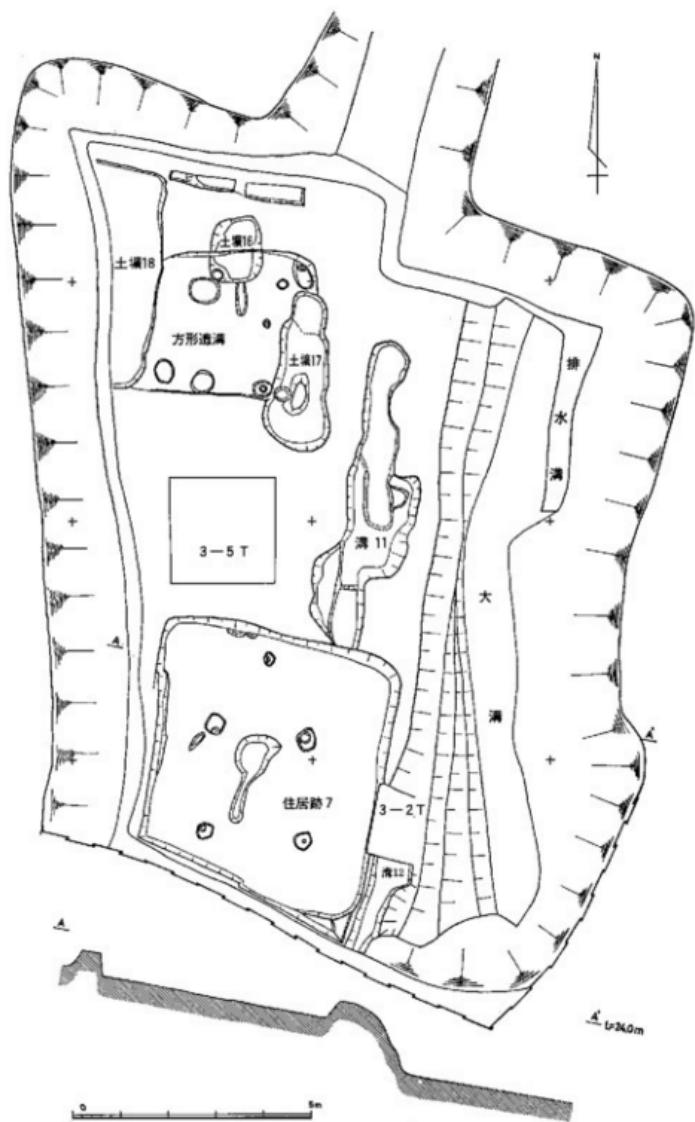
なお遺構として、住居跡1、大溝1、方形遺構1、溝状遺構2、土壙3が検出された。

(2) 層序 (第99図)

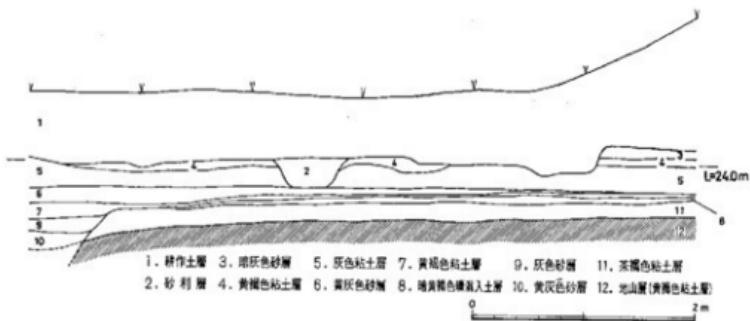
全体の土層は、東西方向においては、大きく分けて3時期におけることができる。

それは、国鉄福知山線の線路と川西池田駅構内の建設に伴い土盛が行われた明治時代以後と、大溝が完全に埋没する以前と以後である。特に後者は、第99図の⑥黄灰色砂層下面を境として、粘土の堆積した①～⑤までの須恵器、瓦器等の中近世の遺物を含む層と、大溝の埋没と併行して粘土、砂利等が交互に堆積している土層で土師器、弥生土器、自然木などが含まれ、須恵器出現以後の古墳時代の遺物を含まない。

また、遺構面をおおう形で堆積する⑦黄灰色砂層は地形的に見ても、猪名川の氾濫地帯に立地することから、再三にわたる水害等を示すものであろう。



第98図 第5次調査地点遺構平面図



第99図 第5次調査地点南側断面図

(3) 遺構と遺物

① 古墳時代

住居跡 7

遺構 (第100図 図版38・39)

第5調査地点の南に位置し、火溝に接して竪穴式住居跡がある。第3次調査の2トレンチによって確認されていたもので、南西部分が調査区域の関係上未掘となったが、ほぼ住居のプランを知ることができる。住居の平面プランは東西5.1m、南北5.1mの正方形を基するもので(約26.1m²)、壁の深さ50cmを測る。住居内に4ヶ所の柱穴(直径20~10cm)、中央には溝、円形ピット、そして、北壁に接してピットがあり壁直下の周溝はない。

住居跡内の土の堆積状況は、住居廃絶後の自然堆積によるものと思われ、壁面近くから埋没が始まり、住居の真中部分が最後に埋る。その後、⑥暗灰色粘土層が厚く地積する。この中に多量の遺物が含まれている。この住居は屋内に炉をもたない。

住居跡内からは多量の遺物が出土し、下層からは壺、甕、高杯、木炭が出土している。

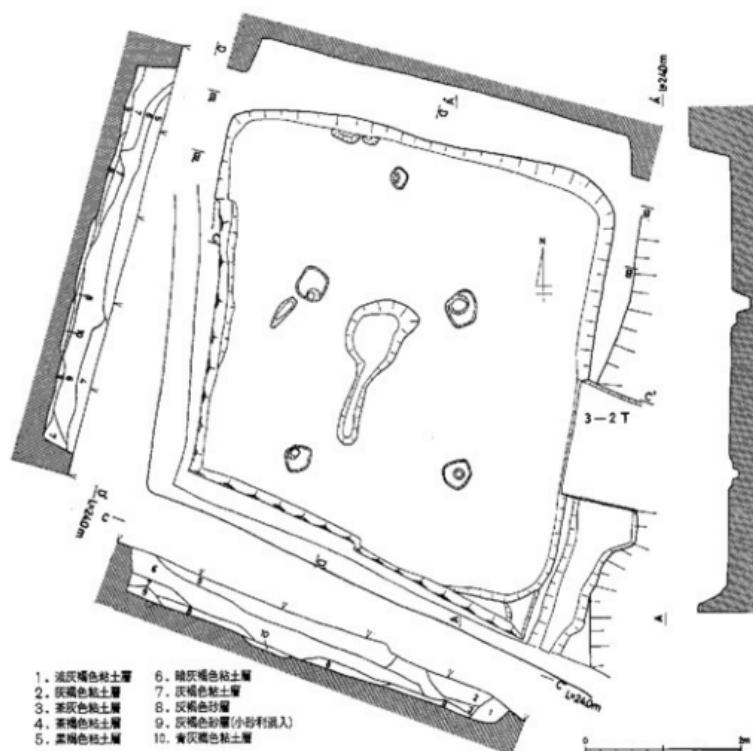
住居の時期は庄内式併行期に位置づけられるものと思われる。

遺物 (第101・102図 図版74・78)

住居跡内より出土した多量の遺物のうち、図示したものはわずかにすぎない。

器種としては、壺、甕、鉢、高杯などが出土しており、器種別にわけてみた。

壺(1~12)では、二重口縁を有する(1~3・6・10・12)と、小形の壺(4・5)、

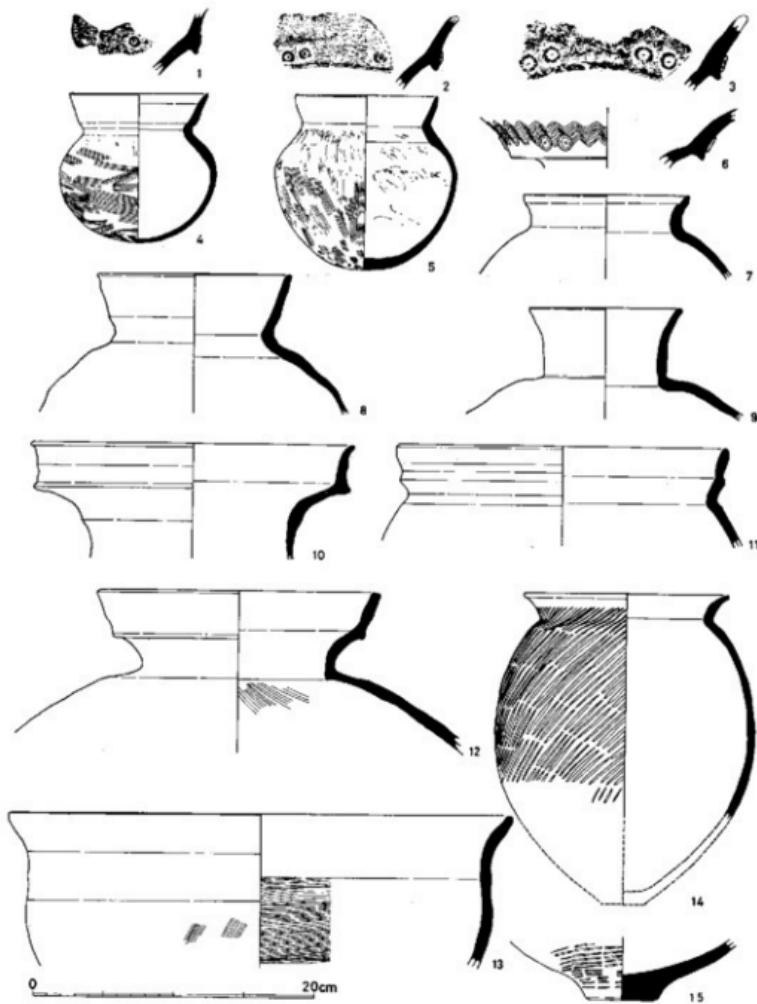


第100図 住居跡 7 平面図

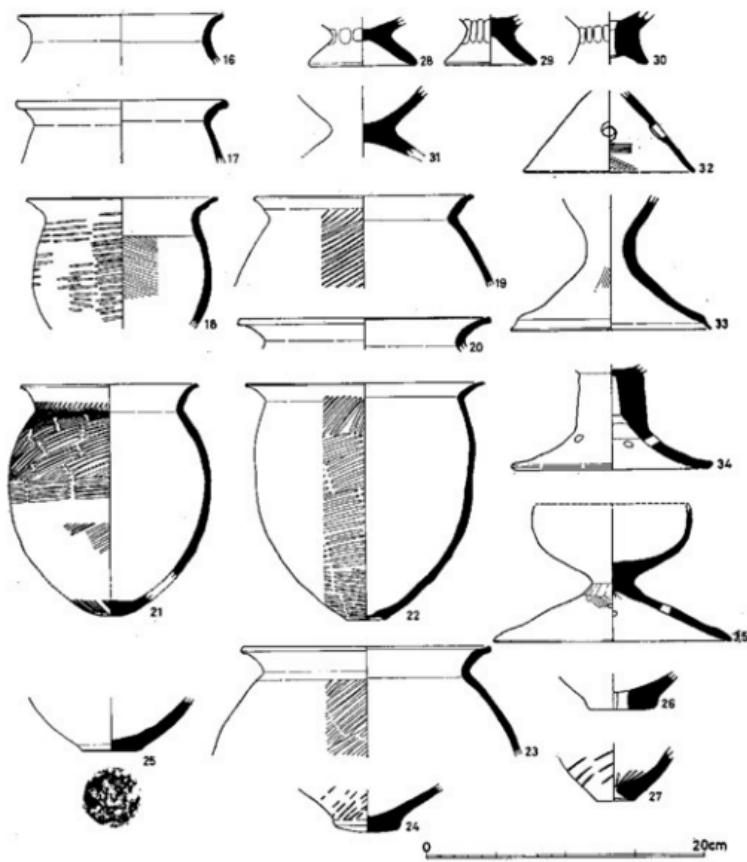
球形の頭部から直立する口縁部をもつもの（7・8・9），さらに屈曲しながら直立する口縁部をもつ（11）の4種類に分けることができる。（1～3・6）はいわゆる庄内式の二重口縁を有するもので，外にひろがる頭部に粘土帯を貼りつけて口縁部とし，その幅のひろい端面に横波状文を横走させ，その上に竹管文を押した円形浮文を貼りつけるもので，2個を1対としている。

他の二重口縁壺は，頭部から外反して口縁部が水平につき，さらに直立するもので，大型の壺口縁部である。

壺（14～27）を大別すると胴部外面に叩き目を連続ラセン状に施す壺（14・15・18～24），器面に叩き目をもたないもの（16・17）の2種類にわかれる。（14・15・18～24）は胴部下半



第101図 住居跡7 出土土器—1



第102図 住居跡7 出土土器—2

から右上りの叩き目を施し、胴部中位では斜行あるいは水平な叩き目を調整に用いるもので、口縁部は頸部から「く」の字状に外反するものである。最大腹径は胴部中位にある。底部には、底面がくぼむドーナツ状を呈したもの（22）や突出したものの（24）がある。内面には斜めハケ目が施される（27）がある。（16・17）は、張った胴部から「く」の字状に外反する口縁部である。（26・27）は底部に穿孔を加えているもので、胴部に叩き目を有する（27）、木葉痕をもつ（25）もある。

鉢(13)は、1例のみ図示したが図版にはこれに相当するものがある(図版78下-13)。器肉が厚く口径も20cmをこえ、頸部からゆるやかに外反する口縁部をもつものであり、灰白色を呈している。

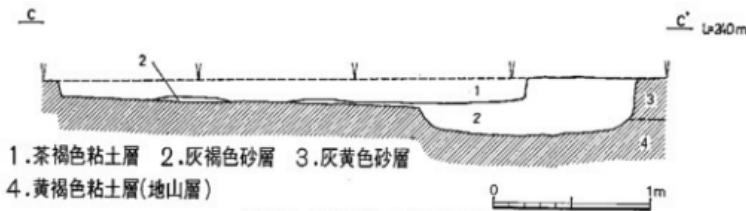
小型の脚台(28~31)は低い脚部をもち外にひろがるもので、中実、中空のものなどがある。指頭によるオサエナデによって調整を施している。

器台(32・33)は、「ハ」の字にひらく脚部をもち中空である。脚部中位に透かし孔を穿ち、内外面はハケメによって調整している。(33)の如く脚端部がさらに外反するものもある。

高杯(34・35)、(34)は太い脚径をもつ中空の脚部、脚部中位から外反していくもので、接合する杯部をもつものと思われる。(35)は橢形の杯部をもつもので、低い脚部が大きくひろがり、脚径は杯部の口径よりも大きい。

方 形 遺 構(第103・104図、図版36)

④黄褐色粘土層(地山層)に限九方形に掘り込んだ遺構である。平面プラン、ピット等から住居跡とは断定しがたく、ここでは方形遺構と名づけた。東西3.35m(残存長)、南北2.95mを測り、壁の深さ15cmである。遺構内には8個のピットと溝状遺構があり、特にP—1~4までのピットは柱穴と考えてもよいもので、東西1.4~1.7m、南北2.2~2.3mの間隔をもつものであろう。その他のピットもこの遺構の上部構造に伴うなんらかの遺構であろう。ただ、ピットが大きく平らなものは生活跡に伴うものかもしれない。上層としては、④黄褐色粘土層(地山)を掘り込んで⑤灰黄色砂層が堆積している。



第103図 方形遺構・土塗16西側断面図

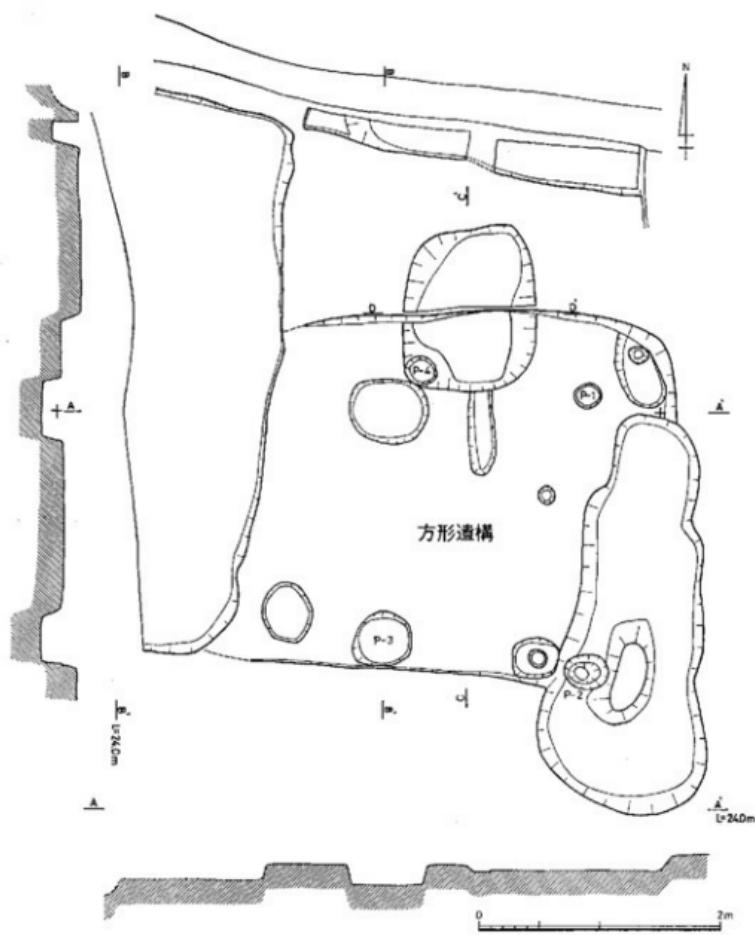
大 溝

遺構(第105~108図、図版37・40・41)

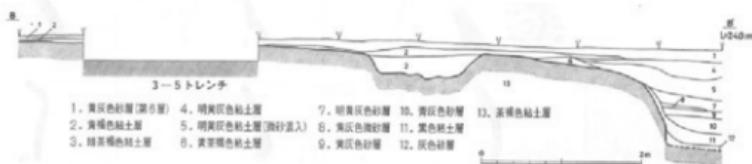
調査区の東側を南北に流れる大溝で、溝内には多数の上器が包含されていた。流れる方向は磁北に対して6度東へふっている。溝の幅は1.2m以上あり、右岸のみ確認することができ、長さは約7m、深さは約1.1mである。

土層は砂と粘土が幾重にも重なり、下方の⑥茶褐色粘土層、⑦灰色砂層からは壺、甕などが出土している。

遺物は⑧黄灰色砂層より壺、甕、高杯などの土器と共に木枕、自然木、木の葉などが出土している。



第104図 方形遺構平面図



第105図 第5次調査地点北側断面図



第106図 大溝北側断面写真

この遺構の所属年代は、土器から判断して、古墳時代の布留式期の新しい時代に位置づけられるものであろう。

遺物 (第108・109図、図版75・76・79・80)

大溝内出土の遺物は、溝内最下層ならびに⑦明黄灰色砂層にまで至り、砂層中に多く含まれている。ここで取り上げる出土遺物は壺、甕、高杯、土製支脚の四器種がある。

壺 (1~9・16) は二重口縁をもつもの (1・4・8)、頸部から外反するもの (2・9)、口縁端部に円形浮文を貼り付けるもの (1・3)、内側が肥厚し球形の調部をもつもの (5~7)、頸部に凹線をもつもの (16) などがある。

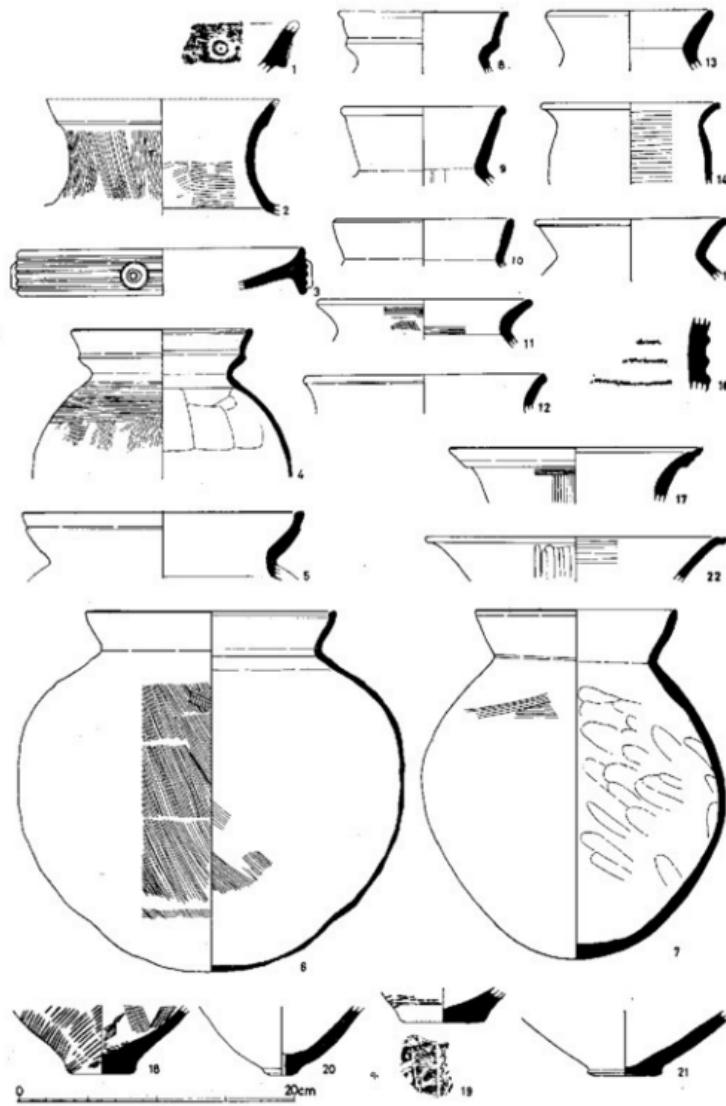
甕 (10~15) は、やや直立する口縁部をもつもの (10) と、「く」の字状に外反するもの (11~15) の2種類に分かれる。また底部を穿孔する土器 (20)、底部近くまで器面に連続する叩き目を施すもの (18・19)、平底の (21)、木葉痕をもつ (19) の例もある。

高杯 (22~33) は明瞭な段を有する杯部をもつもので、脚端部は鋭角的にひろがる (22~24・29)、次に椀形の杯部を有し脚端部の広がる脚部と受部とを接合するもの (25~28・31)、内側が脚部を有するもの (30)、ラッパ状に大きく広がる脚部もつもの (32)、屈曲して裾の広がる脚部をもつもの (33) がある。

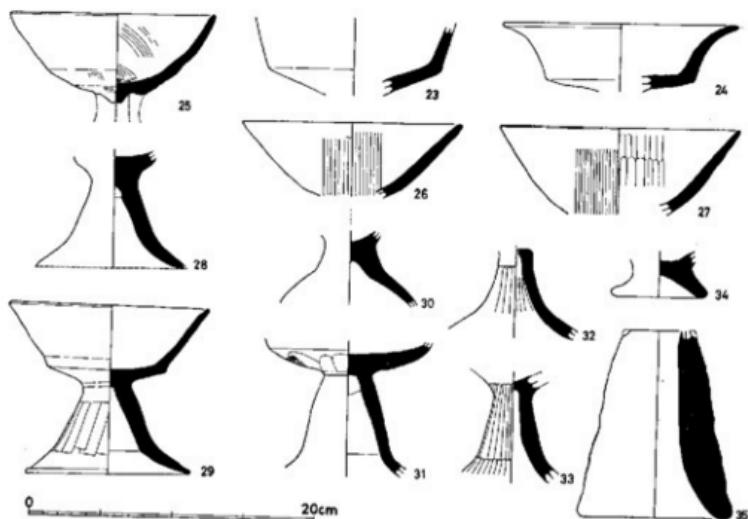
脚台 (34) は低い脚部より外にふんばるもので碗状の杯部をのせるものである。

土製支脚 (35) は、器壁が厚く中空を呈し、裾部がひらくもので、上部は火熱を受けている。脚部内面には指頭によるオサエが見られ内面は上端において円形に近い。

なお、上端が火熱をおび、形態などから今のところ支脚と推定したが、胎土は溝内出土土器の色調とは異なり暗灰褐色をしていること、内面が円形をとるなどの点から鍛冶道具の羽口の可能性も残されている。類例をまつて再度検討してみたい。



第107図 大溝出土土器—1

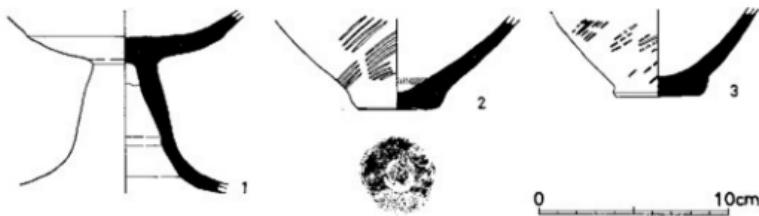


第108図 大溝出土土器—2

土壤 17

遺構 (第98・104図、図版36)

方形遺構の東南隅に設けられた細長い溝状を呈し、中央よりやや下に島しょ状の高まりをもつ遺構である。規模としては東西約1.2m×南北2.0m、深さ20cmを測る。土層は暗茶褐色粘土の单一土層である。



第109図 土壌 17 出土土器

この遺構は、方形遺構よりも後にもうけられたものである。

遺物 (第109図、図版76)

溝内出土の土器は、遺構面に接して出土した底部、高杯がある。底部 (2・3) は両者共叩き目を胴部に施したものである二種類ある。1つは平底を呈するもの (3), 1つはドーナツ

状の底（2）である。高杯（1）は杯部が外に開くもので、脚部は下方で外へひらがる。これらの土器から考えて、古墳時代の布留式に併行する時期であろう。

土 墓 16 (第103・110図、図版42)

隅丸方形の土塚である。方形造構の北に位置し、東西1.1m×南北1.35m、深さ平均35cmをはかり方形造構を切り込む形でつくられたものである。土層①は灰褐色砂層の單一土層であるが、造構内に壺の破片等を含んでいることから年代的に見てきわめて方形造構と近接しているものであろうが、この造構の性格については不明である。

溝 11 (図版42)

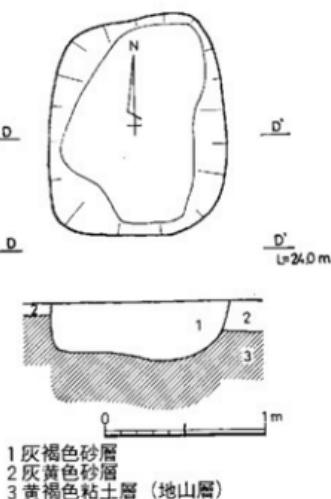
造構の性格を適格につかむことができない溝状造構である。水が流れた形跡ではなく、大溝に平行しており、第3次調査5トレンチの東に位置している。この造構は枝状を呈し、溝の最大幅は0.7mを測り、平均では0.5m、長さ3.2m、深さ40cmである。

溝内の土層の状況は下層に②暗茶褐色粘質土層、その上に①黄褐色粘質土層が堆積している。下層に遺物が含まれている。

所属の年代は不明

溝 12 (図版43)

住居跡7と大溝にはさまれた溝状造構である。この造構は地山層である黄褐色粘土層を掘り込んでおり、規模は長さ1mを測り、最大幅45cm、狭い所で25cm、深さは20cm程の浅いものである。



第110図 土 墓 16 平面図

土層としては、茶褐色土が堆積しており、この土層中には弥生土器が含まれているが、後世の攪乱によると考えられ、住居、溝との相互関係から古墳時代に属するものだろう。

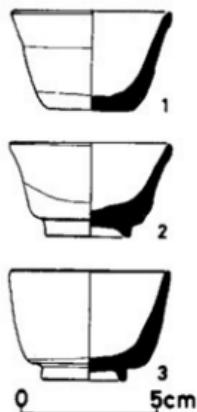
② その他の時代

土 墓 18 (図版43)

調査区西北隅に位置するやや方形の造構らしきものである。方形造構とは関係がなく、後に何らかの理由により出来たものと思われる。

地山土層には③砂利層があり、上から①黄褐色粘土層、②黄茶褐色粘土層とが堆積している。何も出土遺物がなく、時期不明。

盛土内の遺物（第111図、図版76）



第111図 盛土内出土土器

湯呑み茶碗

車中の弁当の普及に伴いひらく使われた駅弁と共に売られた陶器製湯呑み茶碗である。複線化工事に伴う盛土除去や、駅構内の盛り土内から見つかっている。ここでは、高台をもつものともたない2種類あり、第3次調査3・7トレーンチでも駅弁用の急須が出土している。

(1)は高台をつけず口縁部分がラッパ状に外反するもので、成形はロクロビキ。底部は糸切り底である。柿色の釉が内面から外面3分の1の所までかかっている。

(2・3)は高台をもつ茶碗で、(2)のように大きく外反するものと、直立ぎみに外に開くもの(3)とがある。高台は両方とも削り出し高台で、(2)は焼き締め技法により焼成、(3)は高台近くまで釉薬をつけて焼成をおこなっている。

(4) 小 結

第5次調査地点は人溝によって東の端がおさえられ、第4次調査地点から続く遺跡の範囲を示している。この調査区は第4次調査地点とは異なり、黄褐色あるいは茶褐色のシルト土壤が厚く堆積しており、その土壤を基盤として遺構が築かれている。

調査区南側の土層図を見ると大溝の掘られた時期、埋没した時期、そして黄色の砂層が北から南へ流れ堆積した時期とに分けられ前2者の時代をここではとりあげておきたい。この調査地点には住居跡1、大溝1、方形遺構1、溝状遺構2、土壙3等が確認され、それらの遺構が重複してみられる。

大溝は集落の東端を示すものであるが右岸が検出されているだけで全体はわからない。溝内から出土する遺物は古墳時代の布留式期に位置づけられる土器のみで、ある程度限定された時期に人为的に掘削されたのではないかと考えられ、深さ約1.1m、溝幅1.2m以上を測るこの大溝、すなわち小河川は人工の川であった可能性が強い。

そして、この大溝以前に、住居跡7が營まれた。この堅穴式住居は5.1mの方形のプランをもち、4ヶ所に柱穴をもつものであった。この住居跡内から出土した大型の鉢、二重口縁の壺などから判断して庄内期に相当する住居跡で、この住居跡に対応するかの如くある程度の間隔をおいて方形遺構が存在し、そのプランから建築遺構を想定してもおかしくないだろう。

最後に、土壙や溝状遺構が大溝の掘削以後造られることになる。

VIII 第7次調査

(1) 調査の経緯

第7次調査は、建設中の国鉄川西池田駅北東側に計画された駅前暫定広場建設地約1,200m²を対象とした。この工事は新駅舎前の当面の広場を建設するもので、当該地を整地したのも舗装するだけのものであるが、第5次調査地点の北約30m、第4次調査地点の東約30mの近距離にあたることから、試掘調査を実施した。

調査にあたっては、建設地に試掘地点を6ヶ所設定し、このうち1~4・6トレンチは約4×4mの広さで約2mの盛土を機械により除去した後、約1.4×1.4mの規模で試掘を行った。また、工事地内でも最も遺構の存在する可能性の強い南西部の5トレンチでは、約4×8mの広さで機械により盛土を除去した後、約1.4×4mの規模で試掘調査を行った。

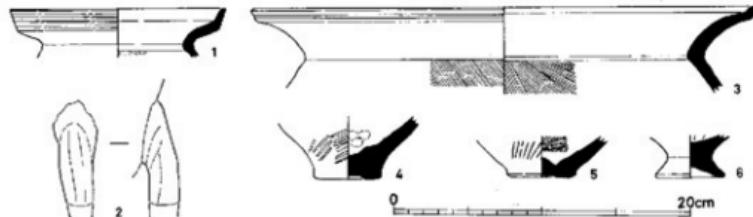
(2) 試掘調査の結果(第112・113図、図版44・81上)

試掘調査の結果、遺物包含層が検出されたのは5トレンチだけで、他のトレンチでは流れによる土器の小片がみられただけであった。

5トレンチの層序は、①~⑥層までが新しい水田の耕土、床上で、⑦~⑫層が遺物包含層であった。最下層の⑬層はほぼ水平に堆積するが、⑭層は東に、⑮層は西にそれぞれ傾斜し、⑯層は溝状に堆積する。各包含層の堆積状態はトレンチ調査のため明確でないが、⑯層については遺構である可能性が強い。

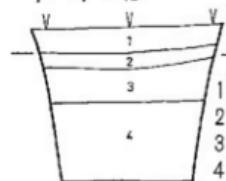
出土遺物は、⑯層より弥生土器の甕(1)、瓦器の脚部(2)、⑯層より土師器の甕(3)、弥生土器の甕の底部(4・5)、⑯層より弥生土器の脚部(6)、⑭~⑯層より弥生土器の小片がそれぞれ出土している。甕(1)は弥生時代後期のもので、口縁端部が外傾してちあがり、その外面に回線文が4条つけられるが山陰系の土器と思われる。その他(2)は中世の三足壺の脚部で、(4~6)は弥生時代後期のものである。

このような遺物出土状況からすれば、5トレンチの遺物包含層は、調査範囲が狭いため、各



第112図 5トレンチ出土土器

7-1 T北



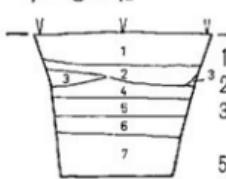
1. 青灰色砂質粘土層
2. 灰黃色混練砂質粘土層
3. 灰色砂質粘土層
4. 黃灰色粘土層
5. 灰色砂質粘土層

7-2 T北



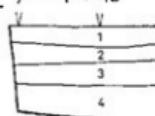
1. 暗灰色粘土層
2. 淡青灰色砂質粘土層
3. 灰黃色砂質粘土層
4. 灰色粘土層
5. 黃色砂質粘土層
6. 黃色砂層
7. 黃色砂層
8. 暗灰色砂層

7-3 T北



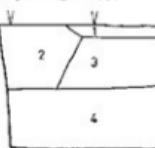
1. 青灰色粘土層
2. 淡青灰色砂質粘土層
3. 灰茶色砂質粘土層
5. 灰色砂質粘土層
6. 黄色砂質粘土層
7. 淡灰色砂質粘土層
8. 青灰色砂質粘土層
9. 黄色砂層

7-4 T北



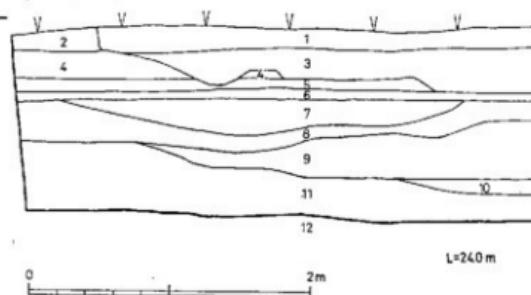
1. 暗灰色砂質粘土層
2. 暗灰色粘土層
3. 反色砂層
4. 灰色混練砂層

7-6 T東



1. 暗灰色砂質粘土層
2. 青灰色混練粘土層
3. 青灰色粘土層
4. 暗灰色粘土層

7-5 T北



L=24.0 m

1. 暗灰色粘土層
2. 灰色粘土層
3. 淡青灰色砂質粘土層
4. 灰黄色粘土層
5. 黄色粘土層
6. 灰黄色粘土層
7. 淡茶褐色砂質粘土層
8. 灰茶褐色粘土層
9. 灰茶褐色砂質粘土層
10. 黄色褐色粘土層
11. 灰褐色粘土層
12. 暗灰色粘土層

第113図 第7次調査トレンチ断面図

層の堆積時期を限定することはできないが、ほぼ弥生時代後期から中世にかけて堆積したものと考えられる。ただし、⑦層については遺構になる可能性が強い。

(3) 小 結

第7次調査地点は、第2・4～6次調査で赤牛時代中期の方形周溝墓と弥生時代後期から古墳時代後期にかけて住居跡群が検出された地点の北東部に近接している。したがって、この試掘調査によりこれまで判明している栄根遺跡の北東部の状態が確認されたわけである。

調査の結果、5トレンチにおいてのみ遺物包含層が検出され、遺跡の範囲はほぼこの地点までのびていることが確認された。その他のトレンチについては、土層の堆積状態が各トレンチごとに異なっており、各土層間のつながりは明確でないが、弥生、古墳時代には低湿地になっていた可能性が強い。なお旧水田面のレベルは北東部の1トレンチで最も高く、2・4・6トレンチふきんは低地になっていたようである。ただし、全般に2・4～6次調査地点の旧水田面に比べると低くなっている。

IX ま と め

(1) 弥生時代中期における遺構と遺物

遺 構

弥生時代中期に営なされた遺構には方形周溝墓1・2と土塙5がある。

方形周溝墓1・2は共に国鉄福知山線の路線下に存在し、その遺構の全貌を知ることができない。方形周溝墓1は南西隅が確認されただけであり、方形周溝墓2はちょうど中程まで調査をする形となった。また、どちらも墓域と思われる遺構がなく方形周溝墓と判断すべき根拠に欠けるけれども前述した第2・6次調査、4次調査で述べた理由により墓と判断した。

両周溝墓の方位は、西辺を基準にしてみると第21図の如く方形周溝墓1は北西にあり、2は北東へふっている。そのため、ある一定の方向性をもって規則的にならぶものではない。

方形周溝墓の今までの調査例を見ると、時期を別にすれば単独出土例は少なく、畿内中核部においては、数基から数十基、あるいは百基以上密集している例もあり、谷をはさんで南北の丘陵に立地する加茂遺跡では11基、猪名川下流の低地に立地する田能遺跡では3基、原田西遺跡では12基を数える。このような例から判断すると周溝墓は2基のみではなく、さらに多数の方形周溝墓が築かれていると考えられる。

それでは、栄根遺跡における方形周溝墓1・2はどのような位置づけがなされるのだろうか。

方形周溝墓1・2の2基のみでなく、それ以上の方形周溝墓が造られていた可能性を述べたが、この遺跡における弥生時代の遺構は弥生時代前期（新段階）の溝状遺構と、中期の土塙などがあり、方形周溝墓と有機的に関係する遺構は遺物の所で述べる土塙5のみで、生活遺構である住居跡は発見されていない。

しかしながら、弥生時代中期に営えた加茂遺跡の例では、遺跡の西部に方形周溝墓や土塙墓が群在し、東部に住居跡が営まれるという現象がみられる。

この現象を栄根遺跡に適用することが許されるならば、遺跡の立地する微高地には加茂遺跡に対応する形で中期に集落が形成されていたと考えることができる。

統いて、土器の出土の状態をながめると、方形周溝墓1では溝内、溝の肩などに壺のみ4個体散在し、細頸壺（2・3）は近接し、壺（1）は溝内上層より出土している。方形周溝墓2では溝に土器が群在しており、8個体もの壺、鉢、高杯が接するが如くおかれていった。

このような周溝墓2の土器群のあり方は、周溝墓に土器が供獻されたある限られた時間と社会を反映しているものと言え、方形周溝墓1の土器出土のしかたこそ一般的といえる。

遺物（第22・25・26・83図）

統いて、弥生時代中期の遺構と遺物、特に方形周溝墓1・2と土塙5出土の遺物をとりあげその土器群の分析を通して時間的変遷をたどっていきたい。そこで、まず重複するかと思われるが、概略的に各遺構の遺物をとりあげ説明したのも内容分析へと進みたい。

方形周溝墓1は南西隅の部分のみ検出されたもので、一边4m以上、幅1m、深さ約30cmを測る。周溝墓の全体像を把握ところまで調査はいたっていない。

土器の出土状況は溝上層から壺（1）、溝下層から壺（4）および周溝部内側肩部に置かれていた（2・3）で、周溝墓に直接的にかかわるのは溝下層の土器と考えられる。

上器の種類は4個体すべて壺によって構成されている。

方形周溝墓2は、周溝が「コ」の字状にめぐるもので約半分近くが調査できた。周溝の一辺の長さ約8m、幅30~40cm、深さ20cm、断面はU字状を呈する。

土器の出土状況は北に面した溝内に東から壺6個体と鉢、高杯の順に計8個体供獻されており甕を欠く点に注目しておきたい。

土塙5は、方形周溝墓1に近接して設けられた上塙で、その規模は3.7m×2.0m、深さ35cmを測る大形のものである。

この上塙は上、下の2層にわかれ、出土した遺物は、下層では土塙内の東隅に接して壺2個体が出土し、両者共焼成後穿孔が認められる。上層では14個体の完形に近いものをはじめとして多数の土器が出土している。

統いて、これらの土器を弥生式土器集成（巻内）における土器の分類に従い、大雑把であるが器形分類したのち、器面における文様構成を分類の基準としてとり入れ、無文の土器をI型、頸部から胴部、あるいは口縁部に櫛波状文・直線文のみを施した土器をII型、器体の中に文様として断面三角凸帯をもつ土器をIII型、さらに、凹線文を施している土器をIV型と分類してみた。

それでは、土器の器形から類型化してみたい。

まず、壺形土器Aと総称される土器はやや算盤玉に近い器体に漏斗状にひらく口頭部をつけた土器で、方形周溝墓1の（1）、方形周溝墓2の（1～3・6）、土塙5の下層（5）、上層（7～9）が該当する。そのうち、方形周溝墓1の（1）は大きな壺の口縁部で全体を復元すると「動かさずに使う大壺」に属するものと考えられる。

壺形土器Dは胴部のやや上方に最大腹径をもつ土器で、そりぎみに直立する頸部から大きく外反する口縁部をもつ無文の土器である。方形周溝墓1の（4）が該当する。

壺形土器Eは「算盤玉形に胴のはった器体に太く短い頸部をつけ、口縁部を水平に近くおりまげた……壺」といわれ、口縁下部の2方に2孔1対の細孔をあけているのが常である。この

土器に該当するのが上墳 5 の下層から出土した（1）であり、同様の器形をもつものとして方形周溝墓 2 の（4）があてはまる。どちらも無文である。

竜形土器 F は、指頭圧痕をくわえた凸帯をめぐらすことを常とし、外びらきの頸部をつけ、さらに曲折して直立する口縁部をもつものである。土墳 5 の（2・3）が該当する。そのうち、（2）の凸帯に施した刻み目の原体には貝殻腹縁を使っている。

細頸竜形土器は、長頸と少し外反する口縁部をもち、最大腹径が胴部中央に位置する卵形、あるいは球形の胴部である。この土器には方形周溝墓 1 の（2・3）、方形周溝墓 2 の（5）、土墳 5 の（6）が該当し、その中でも、方形周溝墓 1 の（2）は、頸部から胴部上半に 5 条にわたり貝殻腹縁压痕文、口縁端部には 3 条の凹線をめぐらす。また、この貝殻腹縁を施す例は弥生時代中期の中部瀬戸内地方から播磨地方にかけて比較的頗著にみとめられる現象であり、西摂地方に出土する例は珍しく、前述したように貝殻腹縁を使わず櫛状工具によって同様の文様を施す西宮市五ヶ山遺跡、神戸市垂水区玉津町新方遺跡の例がある。また同じ周溝墓 1 の（3）の壺は、口縁直下に 4 条の「U」字に似た櫛描文を描いている。これらの細頸竜形壺は、尼崎市田能遺跡、高槻市安満遺跡、同天神山遺跡などでも出土例を知ることができる。

方形周溝墓 2 の（5）は、前二者に比してやや頸部から口縁部にかけての外反度は大きい。土墳 5 の（6）は、今までの細頸竜形と異なり、球形の胴部と、細く長い頸部をもち、胴部上半から頸部にかけて櫛描直線文を施し、口唇部には 1 条の凸帯、内面は肥厚する。

短頸壺は土墳 5 の（4）が該当する。頸部から直立する口縁部をもつもので、頸部に断面三角凸帯を施すものである。

台付無頸壺は胴のはった器体から内側にたちあがる口縁部をつけ、胴部中央から下へ内側する台部をつけた器形で、（16）は 6 個の円窓透かしと、口縁直下に紐孔を 2ヶ所あけ、胴部下半、中央、口唇部に 1~5 条の凹線を施している。同造構の蓋（15）は、この土器と対をなすものだろう。

この台付無頸壺は、口縁が内側している点から大和地方に多く、河内や攝津地方において類例に乏しい。

甕形土器としては、土墳 5 の（10）がある。胴の張った器体から「く」の字状に外反する短い口縁部をもち、口縁部端面は上方へ拡張するものである。端面には凹線が入る。

鉢形土器には、台のつくものとつかないものとがあり、前者は特に台付鉢と名づけられている。それには、土墳 5 の（11）が該当し、その器形は、直立する口縁と台部に透かし孔をあけ、口縁部や脚部下端に数条の凹線をめぐらしている。後者の方は、方形周溝墓 2 の（7）がある。底部の突出する橢形の土器で口唇部に簡かヘラによる刻み目を施し、内面端部は肥厚するものである。

高杯形土器は方形周溝墓 2 の（8），土塙 5 の（12・13）が掲げられる。前者の（8）は，大きく水平に開いた杯部に，中実の脚部をもつもので器面は調整が粗く，一見「手づくね」風の高杯であり，その類例に乏しい。後者の二例は杯部と脚部であり，（13）は端部直上に凹線が入るものである。

蓋形土器は土塙 5 の（14・15）の 2 例あり，小型の無文のもの（14）と，大型の笠形を呈するもの（15）で 2 対の縦孔をもっている。

それでは，遺構毎における器種と文様の関係はどのように関係づけられるのだろうか。

方形周溝墓 1 では，壺形土器 A-IV 型（1），壺形土器 D-I 型（4），細頸壺形土器-IV 型の（2・3）である。

方形周溝墓 2 では，壺形土器 A-II 型（1・2・3・6），壺形土器 E-I 型（4），細頸壺形土器-I 型（5），鉢形土器-I 型（1），高杯形土器-I 型（8）である。

土塙 5 の下層出土の土器では，壺形土器 A-II+III 型（5），壺形土器 E-I 型（1）である。

同じく上層では，壺形土器 A-II+IV 型（7・9），壺形土器 A-IV 型（8），壺形土器 F-IV 型（2・3），細頸壺形土器-II+III 型（6），短頸壺形土器-III 型（4），台付無頸壺-IV 型（16），壺形土器-IV 型（10），高杯形土器-IV 型（11）であり，蓋と高杯については分析資料という点で乏しいものと思われることから省略したが，蓋の（15）は，台付無頸壺と対になると考えるので，凹線文を器体に施す IV 型の中に含ませておきたい。

こうして，遺構毎に器形と文様とを摘出してみると，方形周溝墓 1 においては壺のみで，文様は I・IV 型で，無文あるいは凹線文によって文様が描かれている。方形周溝墓 2 では壺，鉢，高杯といった器種を有し，甕を欠いている。文様は I と II 型で壺にのみ頸部から脚部にかけて櫛描波状文・直線文あるいは櫛描同心円文を施すもので，櫛描文のみによって飾られた純粹な土器群といえる。

土塙 5 の下層においては，壺のみで文様は I・II+III 型をとり，櫛描波状文・直線文を方形周溝墓 2 の壺同様，頸部から脚部に，さらに口縁部端面，あるいは内面にまで施し，頸部に 1 条の凸帯を有する点に大きな違いがある。

同じく，上層出土の土器は，きわめて器種に富み，壺，甕，鉢，高杯，蓋などによって構成されており，壺においては，壺形土器 A・E・F・細頸壺・短頸壺・台付無頸壺の 6 器形にわたっている。

文様のあり方は，文様の構成において II+III 型と表現した櫛描直線文に凸帯を付加したもの（6），II+IV 型には櫛描波状文・直線文を地文とし，頸部に凹線を施す（9）と，口縁部端面に凹線を施す（7）とがある。断面三角凸帯のみをもつ直型（4），凹線文のみをもつ IV 型（2・3・8・11・16）があり，櫛描文，断面三角凸帯，凹線文が器面の上に縱横に駆使され，組

み合わされて一つの器面を構成していることがわかる。ここには方形周溝墓2の如く、II型の櫛描波状文・直線文のみで施文された土器は皆無であり、また、方形周溝墓1のようにIV型の凹線文のみで施文された土器もまた皆無である。この2つの事実は留意すべきものだろう。

以上のように方形周溝墓1・2と土壙5（上・下層）の土器群をとりあげ、その特色を抽出したのであるが、さて、この上器群はどのような時間的関係に位置づけられるのであろうか。

まず、そこで、指標として弥生式土器集成による畿内第III様式の編年観を参考としていきたい。それには、畿内第III様式をもつとも特徴づけるものとして「櫛描文の盛用」と、畿内第IV様式は櫛描文の衰退、それにかわって凹線文の手法が発達した時期とされており、この凹線文は畿内第III様式（新）の時期には採用され始めていると言われている。

このような畿内において検証されつつある土器の変遷を踏まえて、方形周溝墓1・2・土壙5出土の土器をながめるとき、まず、方形周溝墓1の凹線文のみで施される細頸壺は新しい部類に属するものと思われ、なおかつ、上層より出土した壺（1）は、同時期か時間的に若干新しい時期と考えねばならない。

方形周溝墓2はどうであろうか。この土器群は櫛描文のみで構成されることから、古い時期に属すると考えるのが妥当であろう。

統いて、土壙5は、上、下層の土器にわけることができ、この事実を時間差におきかえることができるとするなら、下層は櫛描文と凸帯の組み合わされた時期と言える。

次に、同様にして考えていくと、土壙5の上層の土器群のうち凹線文のみをもつIV型の土器（2・3・11・16）は、この土器の中でも新しい要素をもつものと言え、櫛描文と凸帯、あるいは凹線文と併用する土器は古い要素と言える。

さらに、細かく個々の土器にあらわれた文様構成を見てみると、3つの遺構に共通する土器として、壺形土器Aと細頸壺の二例があげられる。壺形土器Aに代表される方形周溝墓2の（3）と、土壙5・下層出土土器（5）と上層出土の（9）とを比較してみると、三者とも器形はまったく同一に近く、櫛描波状文と直線文を頸部から胴部にかけて施文し、（5）と（9）では口縁部端面に櫛描波状文、内面には櫛状工具による同心円文を描く（3）、波状文を描く（5）、刺突文を描く（9）といった共通点がみられるが、ただ頸部の文様帶は著しい違いを見せている。（3）は櫛描波状文（II型）、（5）は一条の断面三角凸帯（II+III型）、（9）は凹線文（II+IV型）である。層位的に見た場合、同時期か（5）の方が古く、（9）が新しい時期と考えねばならないだろう。

細頸壺はどうであろうか。細頸壺は、方形周溝墓1・2、土壙5（上層）の4例が数えられる。その器形は、方形周溝墓1（2・3）方形周溝墓2（5）は同じ形をとるものであるが、土壙5（6）のみ球形の胴部をもつものである。これらの壺の中で、方形周溝墓1（2）では口縁部に3条の凹線をもち（IV型）、（3）は無文である（I型）。方形周溝墓2の（5）では無文（I型）、土壙5の（6）は、胴部から頸部へと櫛描直線文を横走させ、口縁部には1条の凸

帶を付加するもの（II+III型）である。これらのことから、細頸壺においては、櫛指直線文と凸帯をもつものから凹線文のみの段階へと推移すると言えないだろうか。

さらに、方形周溝墓1（上層）と土墳5（上層）から出土している大型の壺形土器Aの（1・7）は、口縁部のみのものであるが、文様のみを見ると、口縁部端面には凹線文と円形浮文を貼りつけ、内面には同様に櫛状工具による刺突文を施す点は共通している。しかし、頸部については、（7）が櫛指波状文と直線文（II+IV型）であり、（1）は凹線文を施す（II+III型）という大きな違いが生じている。

土器の文様として櫛指文から凹線文へと変遷する土器の中に、凸帯をもつ土器がわずかな期間存在したと想定できないだろうか。

これによって、各遺構出土土器は方形周溝墓2→土墳5→方形周溝墓1といった流れが認められ、方形周溝墓2については畿内第III様式、方形周溝墓1については畿内第IV様式があてはまるものと考えることができる。

ただし、この地域で第III様式古段階においてよくみられる断面三角凸帯が複数でつけられているのが、この土器群内には見ることができない。断面三角凸帯を全く欠く方形周溝墓2の土器が断面三角凸帯をつけた土器とどのような関係にあるかについては今後の問題としたい。

（2）弥生時代後期から古墳時代の遺構と遺物

今回の7次におよぶ調査で最も多く検出されたのは、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺構と遺物である。その中心となるのは10軒の住居跡で、この時期の栄根遺跡では第2～6次調査地点あたりに集落が営まれていた。ここではこの集落についての問題を考えるにあたり、各遺構出土土器の時期より検討を加えたい。

遺 物

この期間の出土土器の時期をみた場合、次の4期に分けることができる。

まずその第1期は、畿内第V様式の弥生土器をともなうもので、住居跡4-a・5、土墳4・9・10・12、第3次調査7トレンチなどの出土土器をあげることができる。

この時期の壺としては、典型的な第V様式のものは少なく、土墳9出土の壺の口縁部（2）と他に数点の底部がみられるだけである。また、この口縁部についても、次にあげる第2期の壺と判別することは困難である。

これに対して、壺のなかには第3次調査7トレンチ出土のもの（3）のように外面はハケ目、内面にはヘラケズリを行ったものや、口縁部端面に凹線文をもつ土墳4（3・4）・10（1・3）などが比較的多くみられる。また、壺についても、土墳4（1）・10（1）のように大きくひらいた口縁の端部が上下に拡張したり、たちあがったものも類例は少ない。

このような点に加えて、この時期の出土遺物は他の時期に比べて少なく、明確な土器の組合せや時期を考えることは困難である。ただし、土墳4（5）・9（2）などの鉢や土墳12の壺、

住居跡の形態などからすれば、弥生時代後期でも後半のものが大半を占めるものと思われる。

次の第2期は、庄内式土器と並行する時期のもので、住居跡2・3・4-b・7、土壙1などの出土土器があげられるが、他の時期に對して最も量が多い。この時期の指標となるのは庄内型の甕と類似する甕で、河内産のものはみられないが、在地のものと思われる住居跡2(11)・3(4)・4-b(29)、第1次調査2トレンチ土器群(1)などが少量出土している。またこれにあわせて、この時期特有の二重口縁甕、高杯、器台なども各遺構より出土している。

ところが、これらの遺構より出土した土器のなかで大多数を占めるのは第V様式の系統をひく甕である。この甕は、都出比呂志氏のいわれる「口縁叩き出し手法」によるもので、ゆるぐ外反する口縁部まで叩き目がおよんでいる。また、口縁上半部はヨコナデか指おさえによって調整されて叩き目が消されており、口縁端部は丸くおさまるか尖りぎみのものばかりで、端面を形成するものは全く含まれていない。

これに続く第3期は、布留式土器の時期である。この時期のものは住居跡1と大溝の出土土器をあげることができるが、前者を古く、後者をそれに続くものとしてとらえることができる。

とくに住居跡1では典型的な布留式土器が出土しており、これらはほぼ同一時期のものと考えられる。なかでも甕は同形態のものばかりで(1~10)、内輪ぎみの口縁の端部は内側にわずかに肥厚し、口縁端面は水平か、わずかに外傾している。一方これにともなう甕は、球状の胴より短くまっすぐのびる口縁部をもつもの(1・2・4)と長い口縁部をもつもの(3)とに分けることができる。また、小型丸底甕(5)と二段にひらく口縁をもつ鉢(12)も1点ずつ出土している。

これに対して大溝出土の甕では、口縁端部は内側に肥厚するが口縁端面が内傾するもの(6)や、二段にたちあがる口縁部をもつもの(4)、全体に厚手につくられ口縁端部が肥厚しないもの(7)などがみられる。

両者の時期については、安達厚三・木下正史両氏の編年にあてはめると、前者を上ノ井手遺跡SD031、後者を同遺跡SE030上層出土の土器、あるいは船橋遺跡の0Ⅰの土器に対比させて考えることができる。

次の第4期は須恵器をともなう時期で、住居跡6-bと4-c出土土器がこれにあたる。

住居跡6-bでは、口縁部端面が内側に長く傾斜する甕(8)と2点の甕(5・6)、杯(12)などが出土し、須恵器は中層で、甕が出土したほか(17)、上層で杯蓋が出土している(2)。これらの土器の時期は、土師器を船橋遺跡の0Ⅱ・Ⅲの土器に、また上層出土でやや時期的に下る須恵器の杯蓋については胸邑における編年のⅠ期後半にあてることができる。なお、この近辺では尼崎市東園田遺跡土壙1出土の土器をほぼ同一時期のものとして考えることができることできる。

一方、住居跡4-cでは須恵器が多く出土している。ここで出土した須恵器の杯蓋・身は胸

邑における編年のⅡ期初頭に、また長手の胴をもつ壺などの土器について船橋遺跡の〇IV・Vの土器にあてることができ、実年代としては6世紀初頭ころのものと考えられる。

以上のように各時期の土器を検討してきたが、各年代については、第1期は弥生時代後期、第2期は弥生時代後期末から古墳時代前期、第3期は古墳時代前期から中期、第4期は古墳時代中期から後期にそれぞれあたるものと思われる。

遺構

以上のような年代観よりまず住居跡の時期についてみると、第1期が2軒、第2期が4軒、第3期が1軒、第4期が2軒となり、第2期の住居跡の数が最も多く、しかし第2・6次調査地点に集中する傾向がみられる。また、その形態はすべて方形堅穴式住居であるが、時期により次のような変化がみられる。

まず第1期の住居跡では、一部しか検出されなかった住居跡4-aは別として、住居跡5は胴張りぎみの不整形な方形堅穴式住居で、内部には三方以上の屋内高床部がすでに認められる。

次の第2期になると、間に丸みをもつ方形堅穴式住居に変化する。また、屋内高床部は住居跡7を除くすべての住居跡に認められ、その形態は住居跡2のように四方にもつもの、住居跡4-bのように三方以上でさらに二方に一段高い段を設けたものなどがみられる。

ところが第3期になると、住居跡は小型化し、屋内高床部はみられない。このことは第4期も同様で、住居跡6-bにおいて不整形な屋内高床部がみられるものの、住居跡4-cでは屋内高床部はなく、かわりに龜らしきものが出現する。

一方、他の遺構のうち大溝については第3期にいれることができ、隣接する第2期の住居跡7より後に掘られたことになる。また土壤については、土壤4・9・10・12を第1期に、土壤1を第2期にあてることができ、第1期に集中する傾向がみられるが、各時期の住居跡に閑適した遺構としてとらえることができる。

(3) 栄根遺跡の性格について

以上みてきたように、栄根遺跡は弥生時代前期から古墳時代後期、平安・鎌倉時代の遺跡である。このうち弥生・古墳時代に注目すれば、弥生時代前期、中期、弥生時代後期から古墳時代後期の三つの時期に区別して考えることが可能である。

まず弥生時代前期については、第6次調査地点より溝だけが検出されている。この溝の性格は明確でないが、この近くに同時期の集落が存在したと考えてまちがいないであろう。このことについては、近接する加茂遺跡の弥生時代集落が中期（巣内第Ⅱ様式期）に始まるなどを考えれば、栄根遺跡がこの小地域における最初の弥生時代集落としてとらえられることや、加茂遺跡の弥生時代集落の成立を考える上でも重要な意味をもつものと思われる。

一方、弥生時代中期になると、第2・4次調査地点において方形周溝墓が営まれるが、やはりこの近辺に集落が存在し、今回の調査地点が墓地になっていたものと考えられる。ただし、

前期の集落との関係については不明である。なお、この時期の加茂遺跡の集落はこの近辺では最大規模となるが、栄根遺跡の集落と密接な関係にあったことは十分推測される。

ところが弥生時代後期になると、第2～6次調査地点を中心として新たに集落が出現することになる。この集落は、今回の調査による限りでは径約50mの小規模なもので、その後、古墳時代後期まで継続する。この集落の出現についてはさまざま要因が考えられるが、少なくとも次のような問題点が指摘されよう。

その一つは、加茂遺跡ではこの集落が出現する弥生時代後期になるとそれまで大規模であった集落が急激に小規模化する点である。そして、おそらくとも弥生時代後期末ころには遺跡の東部と西部に小規模な集落が營まれ始め、この状態は古墳時代後期まで継続する。また、この時期になると、この近辺では久代遺跡、寺畠遺跡、猪名川対岸では神田遺跡、五月山公園遺跡、城山遺跡などの集落が出現する。このような点からすれば、栄根遺跡での新しい集落の出現はこの両現象と関連するもので、加茂遺跡における小集落や他に新たに出現する集落と同等の性格をもつものとしてとらえられるのではないかろうか。

また、その一方で注目されるのは栄根遺跡における住居跡の形態で、その出現時点においてそれまで当地域にみられなかった屋内高床部をもつ方形堅穴式住居をともなっている点である。このことは加茂遺跡でも同様で、同時期の小集落出現期に最初に認められるのはそれまでみられなかった屋内高床部をもつ方形堅穴式住居である。このことからしても、栄根遺跡での集落の出現は単に本遺跡内での居住地の移動というだけでなく、当地域に影響をおよぼした何らかの大きな要因によるものと考えられる。

なお、ここであげた弥生時代後期から古墳時代初頭におけるそれまでの大規模集落の廃絶、縮小は他地域でも認められる現象であることや、近年、同時期の屋内高床部をもつ堅穴式住居が播磨、浜津、北河内、和泉、紀伊などの各地方で検出例が増加していることからすれば、さらに大きな地域を対象とした時代の流れのなかで考えるべき問題といえよう。

註

- ① 末永雅雄『攝津加茂』（関西大学文学部考古学研究第3冊 1967年）
- 川西市教育委員会『加茂遺跡一遺構を中心としてみた遺跡の概要一』（1976年）
- 尼崎市田能遺跡発掘調査委員会『田能遺跡概報』（尼崎市文化財報告第5集 1973年）
- 昭和52年、昭和56年の兵庫県教育委員会が調査主体者となって調査を実施した調査所見にもとづく。
- 佐原真『畿内地方』「弥生式土器集成」本編2（1968年）
- 西宮市五ヶ山遺跡3北西隅にて出土。
- 神戸市垂水区玉津町高津橋 新方遺跡 昭和55年度発掘調査 丁の坪地区で出土
- 註⑨と同じ
- 原口正二『高槻市史第6卷—考古編』（1973年） P.L.32—34
- 註⑨ P.L.79—1

- ⑩ なお、この時期の住居跡は深いためか上層と下層の出土遺物に若干の時期差を指摘することができる。とくに住居跡4-b出土の甕(3・4)は布留式のもので、明らかに住居跡の時期より下るものである。また、この堆積状態を考慮すれば、住居跡2・3・4-b・7にともなう土器はある程度鑑定することができ、第2層のなかで新古の区別をすることも可能である。
- たとえば、壺では住居跡3(1)、住居跡4-b(1・2)、住居跡7(6)のような円形浮文と波状文で飾られた二重口縁壺は各住居跡の上層でのみ出土し、壺では口縁端部をつまみあげた住居跡2(11)、住居跡3(4)、住居跡4-b(29)は下層でしか出土しないのに対して、口縁端部をつまみあげず内面にヘリケズリを行ったものは住居跡2の上・中層でのみ出土している(17・19・20)。また、小型の椀形の高杯は住居跡2(19)、住居跡4-b(26)、住居跡7(35)の、よう各住居跡の下層でのみ出土していることや、器台でも円錐形の脚台をもつものは、住居跡4-b(9)、住居跡7(32)のように上層でしか出土していないことが指摘できる。
- ⑪ 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」(『考古学研究』20巻4号 1974年)
- ⑫ 安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式上部器」(『考古学雑誌』第60号第2巻 1974年)
- ⑬ 原口正三「船横」(平安学園考古学クラブ 1958年)
- ⑭ 田辺昭三「南邑古窯址群I」(平安学園考古学クラブ 1966年)
- ⑮ 尼崎市教育委員会「尼崎市東園田遺跡第一回・第二回調査報告」(尼崎市文化財調査報告第12集 1980年)
- ⑯ 加茂遺跡では、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけてのこころの住居跡が4軒検出されている(43・51・59次調査)。いずれも屋内高床部をもつ方形堅穴式住居で、とくに43次調査のものは「ヨ」の字状の整然とした高床部をもつものである。なお同遺跡では、古墳時代中期(44次調査)と後期(51次調査)の堅穴式住居でも不整形ではあるが屋内高床部が認められる。

X 出 土 土 器 觀 察 表

第一次調査 2トレント土器群

器種	番号	種	国	國	版	法	量	形	技	法	備	考	
甕	1	7	口	径	17.4	頭部はヨコナデにて押えられ、頭部から脚部に右上がりの脚き目を施した後、縦方向のハケ目。脚部上半は左上がりのヘラケメリ。							
甕	2	7	47 (左上)	口	径	15.6	頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁でその端部はつまみ上げる。開部は張りは大きく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	
甕	3	7	口	径	17.7	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。							
甕	4	7	47 (左上)	口	径	12.4	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。
甕	5	7	47 (左上)	口	径	14.0	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。	頭部は頭部から口縁にかけて外反し、端部は小さく球形をなす。
高杯	6	7	47 (左上)	口	径	21.6	杯部は黒釉し外面に擦を残し、口縁にかけてさらには外反し跡く。	外曲コナデ。内面杯上部は横方向へラミガキ。	外曲コナデ。内面杯上部は横方向へラミガキ。	外曲コナデ。内面杯上部は横方向へラミガキ。	外曲コナデ。内面杯上部は横方向へラミガキ。	外曲コナデ。内面杯上部は横方向へラミガキ。	外曲コナデ。内面杯上部は横方向へラミガキ。
鉢	7	7	47 (左上)	口	径	4.8	口縁は「く」の字を呈し端部はカムももつ。体幅は著しく閉じる。	外曲コナデ。内面ヒ半纏方向へラミガキ。	外曲コナデ。内面ヒ半纏方向へラミガキ。	外曲コナデ。内面ヒ半纏方向へラミガキ。	外曲コナデ。内面ヒ半纏方向へラミガキ。	外曲コナデ。内面ヒ半纏方向へラミガキ。	外曲コナデ。内面ヒ半纏方向へラミガキ。

第一次調査 各トレント

器種	番号	種	国	國	版	法	量	形	技	法	備	考
甕	1	10	45 (下)	口	径	11.5	口縁上下に擦裏、外面に円形浮文の後、竹管文。	内中外共ナデ。	内中外共ナデ。	内中外共ナデ。	内中外共ナデ。	内中外共ナデ。

器種	番号	捕獲場	國	版法	重量	cm	形態	技法	備考
蝶	2	10	45 (下)	口唇 残存高	12.0	頭部から口縫にかけてやや外反し開く。 頭部にかけたはやや垂直ぎみ。	頭部に右上がり叩き目を施す。	焼成やや不良	
高脚杯	3	10	45 (下)	脚台径 残存高	3.5	脚部下半にて屈曲し開く。 杯部は光澤させる。	内外共ヨコナヂ。	焼成良好	暗褐色
脚台	4	10	45 (下)	脚台径 残存高	4.0	脚台端にかけて大きく開く。 4条+αの凹線文あり、脚部端にも凹線文あり。	焼成やや不良	乳褐色	
底盤	5	10	45 (下)	底径 残存高	3.5	底部から頭部にかけて小さく盛り出 4.3	内外共ヨコナヂ。	焼成やや不良	乳褐色
							底盤あり	黒斑あり	

第3次調査 2トレンチ 9層

器種	番号	捕獲場	國	版法	重量	cm	形態	技法	備考
高脚杯	1	13		残存高	5.5	杯部結合部に光澤めあり。頭部は屈曲し開く。	外側ナヂ。	焼成やや不良	深褐色
高脚杯	2	13		残存高	7.0	杯部結合部に光澤めあり。頭部は屈曲し開く。	内外共ナヂ。	焼成良好	淡茶色
高脚杯	3	13		残存高	7.0	杯部結合部に光澤めあり。頭部は屈曲し開く。	頭部上に横方向ヘリガタ。他はナヂ。	焼成やや不良	茶褐色
底盤	4	13		底盤 残存高	6.0 3.2	底盤から脇部にかけて大きく開く。	内外共ナヂ。底面に木葉質。	焼成やや不良	黃茶色
底盤	5	13		底盤 残存高	2.8 3.0	尖りぎみの底部で頭部へと開く。	外側右上がり叩き目を施す。 内側ナヂ。	中砂を多く含む	深茶白色
底盤	6	13		底盤 残存高	4.4 2.0	底盤の端面がやや外反する。底面中央部が凹む。	内外共ナヂ。	焼成良好	深灰黃色
底盤	7	13		底盤 残存高	1.5 1.7	底盤が小さく小型品と考えられる。	外面にハゲ目を施し。他はナヂ。	二次燒成の可能性あり	異黑色

第3次調査 3トレーンチ 2層

番号	種類	番号	捕獲場所	頭部長	頭部幅	頭部高さ	口径	形	量cm	頭部	法	技	量	備考
急須	1	16	46 (上・右下)	8.2	7.0	7.0	口径 器高 全長	内・外共ヨコナデ。底部はヘラ切り。 腹部中央にまろきをもじり頭部につ り手部2ヶ所削る。は鮮内側にか えりがつく。	内・外共良存で堅板 脣部中位2ヶ所に「蜜臥」 「米H」の文字あり。	成良好で堅板	成良好で堅板	8.2	青褐色	
急須	2	16	46 (下)	12.6	14.4	9.2	口径 器高 全長	同上	内・外共ヨコナデ。脣部上半は灰白色 あり。内面に注口蓋合縫の跡あ り。	成良好で堅板	成良好で堅板	12.6	灰白色	
急須	3	16	46 (下)	7.3	7.3	3.7	残存高	腹部から内頸する長い口縫をもつ。 口縫端は内側に平たく押える。脣部 上半に把手をもつ。	内・外共ヨコナデ。脣部に黒灰色輪あ り。	成良好で堅板	成良好で堅板	7.3	外面黄灰 色、内面灰白色、頭部中位に 「蜜」の文字あり。	
急須	4	16	46 (下)	3.3	3.3	3.7	残存高	腹部から内頸する短い口縫をもち、 輪部は丸い。脣部上半に把手をも つ。	内・外共ヨコナデ。脣部に白色輪あ り。	成良好で堅板	成良好で堅板	3.3	内面黄茶褐色を呈す。	
急須	5	16	46 (下)	2.9	2.9	2.9	残存高	脣部から短く直立する口縫をもち、 内面にかえりがある。脣部上半に把 手あり。	内・外共ヨコナデ。脣部に薄緑灰色輪 あり。	成良好で堅板	成良好で堅板	2.9	外面薄緑灰 色、内面灰褐色	
急須	6	16	46 (下)	6.8	6.8	6.8	残存高	腹部はやや張りぎみ。 内面に	内・外共ヨコナデ。脣部に白色輪 あり。	成良好で堅板	成良好で堅板	6.8	外面白色、 内面灰褐色、頭部上半に「和」 の文字あり。	
蓋	7	16	46 (下)	1.9	1.9	7.1	口径 器高 底径	1.2cmのつまみをもじり口縫端は上 方に延び、たみをもつ。	内・外共ヨコナデ。直面画軸糸切り。 つまみ近くに白色輪あり。	成良好で堅板	成良好で堅板	1.9	赤茶褐色	
蓋	8	16	46 (下)	2.7	3.3	7.8	口径 器高 底径	0.9cmのつまみをもち、口縫はそ の上方に反する。	内・外共ヨコナデ。底面山版糸切り。	成良好で堅板	成良好で堅板	2.7	赤茶褐色	

器種	番号	插図	國版	法量	形	體	技	法	備	考
蓋	9	16	46 (下)	口径 高 底	6.9 1.2 2.9	内外共ヨコナデ。底面回転糸切り。			焼成良好で堅緻、明褐色	
蓋	10	16	46 (下)	口径 残存高 底	8.4 1.7	内外共ヨコナデ。内面白色釉あり。	燒成良好で堅緻、内面白色、外面部灰褐色			
蓋	11	16	46 (下)	口径 高 底	8.9 2.1 4.5	口縁は外方に屈曲しその端部はもみをもつ。体部との境に線をもつ。	同 上	燒成良好で堅緻、内面白色、外面部灰褐色		
湯呑み	12	16	46 (下)	口径 高 底	5.8 3.8 3.2	底部から口縁にかけて外方に延び、輪部外は押えられる。	真面に糸切り。	同 上	燒成良好で堅緻、黄灰色	

第3次調査 7トレンチ 遺構内

器種	番号	插図	國版	法量	形	體	技	法	備	考
蓋	1	15	46 (右上)	口径 残存高	14.9 5.9	頸部から口縁にかけて外反し、端部は丸く断面は0.9cmと厚い。	頭部にヘラ目調査の後ナデ、胸部にかけては蛇方向のヘラミガキ。底部より上方にヘケ目調査、下半に指圧摸を残す。		焼成良好で堅緻、茶灰褐色	
蓋底	2	15		底盤 残存高	8.0 10.0	やや大型のもので器壁も厚い。	脚部下半は蛇方向のヘラミガキ、底部は横方向ヘラミガキ、上面にかけては横方向ヘラミガキ、上部にかけてヘケ目調査。		焼成良好で堅緻、淡灰茶色	
蓋	3	15	46 (上左)	口径 高 底盤 底	14.6 19.4 16.5 3.8	口縁は近く外傾し、腹部はやや強く立つ。腹部の張りは少なく、器壁も薄く底部へと続く。	脚部外面上は蛇方向ヘケ目調査の後ナデ、内面ヘリケツリ。	焼成良好で堅緻、赤褐色砂粒を多く含む。	脚部下部に煤	

第2次調查周邊帶

参考									
番號	種番号	学名	日本名	英名	法文	法量	形態	特徴	備考
老	1	22	47	口 周 體 高 胸 體 高 腹 體 高	34.0 11.3 11.3	口部前面が直下に大きくなびく膨厚し、 外側に凹面線7条+円形浮文、口線上 端より側に微丸溝突文あり。脚部1や や脚ぐ四回線文4条以上。	外面頭部上半に斜め 整、他はナデ。	燒成良好 燒成良好	渋黒色 外面部赤褐色
老	2	22	47	口 周 體 高 器 體 高 胸 體 高 底 體 高	11.5 31.9 15.2 5.5	脣部脣大至は豊高の下半にあり額部 にかけて内側に、口緣にかけて外反 する。口縁輪郭は内側にわざわざに脣 1条。脚部から脣部十半に眞横觀線 1条。脚部から脣部十半に眞横觀線 1条。脚部から脣部十半に眞横觀線 1条。	外面脣部から脣部上半に縱方向3分 割のハケ日。下半ヘリミガキ（一部 ヘラケツリ）内面縱方向ナデ。	燒成良好 燒成良好	内面部赤褐色 内面部赤褐色
老	3	22	47	残行高 胸 周 體 高 底 周 體 高	34.1 17.1 8.0	脣部脣人筋は豊高の下半にあり、頸 部から口縁にかけてわざわざに外反し る。口縁輪郭は不明が直下に4 角輪郭によるU字状文あり。	外面板状工具で縱方向にナデ、 ヘリミガキ。内面縱方向ナデ。	燒成良好 燒成良好	内面部赤褐色 内面部黑色
老	4	22	47	口 周 器 體 高 胸 周 體 高 底 周 體 高	16.0 33.5 25.7	脣部脣大斜が豊高中央のすぐ上にあ り、頭部は継ぐ直立の口縁。頸部は上 方に若干膨張され、器部は全体的に薄い。	脣部外面は縱方向ハケ目、底部は紙 方向ヘリミガキ。内面部木目調査。	燒成良好 燒成良好	赤茶褐色 底部下半に黒斑あり

第2次調查土壤5

器 種	番 号	神 國	國 版	法 量	形 態	觀	檢 法	備 考
臺	1	25	(48)	口 徑 器 皿 底 徑	12.2 16.2 16.5 3.8	口部端部は上下に膨張し、小さく びれる。大いに頸部から體に広がり を持ち、體部に至る。最大径は下位に あり器體は薄い。頸部に2孔の穿孔 が2対あり、底部上部に穿孔後の穿 孔が1つある。	外面腹部上半は縱方向へケの巻ナ デ。肩部最大径付近は横方向へラ ガキ。腹部下半は縱方向へミガ キ。	號成良好 青褐色

器種	番号	捕獲版法	重量	形	鱗	技	法	備	参考
鼈	2	25 49	口 径 残存高	18.5 10.5	受口状の凹縫をもち頭部は細い。口 最端は外傾し、外側に2条の凹縫、 頭部は具膜腹鰓圧痕による頭みをも つ内縫がある。	外面頭部上半は縱方向へケ目。他は ヨコナデ。	焼成良好	白茶褐色	
鼈	3	25 49	口 径 器 脊 胸 脊 底	20.9 48.9 31.6 7.4	受口状の凹縫をもち頭部は細い。頭 部はやや張り、底部に毛る。口縫端 面は平担で外側は2条の凹縫、頭部 にはヘラ状工具の頭みをもつ内縫が ある。	頭部及び脣部上半は縱方向のハケ 日、下半は縱方向のヘタケズリ。頭 部は内面横方向へケ目。脣部は縱方向 へケ目。	焼成良好	灰白色	
鼈	4	25 50	口 径 残存高	8.2 11.0	口輪部は直立し端面に凹縫が入る。 頭部に断面△形凸筋があり、頭部 と開く。	口輪、脣部共縫方向のハケ目。頭部 はヨコナデ。	焼成良好	赤褐色	
鼈	5	25 (上)	口 径 器 脊 胸 脊 底	16.3 27.4 66 6.5	漏斗状に開くは頭部を持ち縫部は上 下に配する。脣部は大きく張り眞 似があり、他はナデ。	頭下部から底部外縫に縫方向へテ ミガキ、他はナデ。	焼成良好	赤褐色	
鼈	6	25 (下)	口 径 器 脊 胸 脊 底	10.3 35.2 21.0 5.7	棘大筋は頭下部に位置し、頭部は椎 骨に全縫に張り眞似で、口縫端部は内側 に凹縫とし外縫にはやや丸みを帯びた 凸筋文が付す。また1单位11本の横 筋線文が頭部から脣部上半にかけ 7条ある。	頭部上半から口縫まで縫方向へケ 日、下半は横方向へミガキ。底部 近くで縫方向へミガキ。脣部上半 内縫はヘケ目調整。	焼成良好	深灰茶色	
鼈	7	26 49	口 径 残存高	23.0 9.7	口縫端部は直下に並縫され太めの筋 縫に至る。文様は口縫外縫に5条の凹 縫文と8ヨコ円形浮文、上面は脣部先 刺筋文が施され、頭部に横筋波状文 と直縫文がある。	頭部上半外縫に縫方向へケ目があ り、他はナデ調整である。	焼成や不良	明茶灰色	

器種	番号	種類	法蓋 cm	形	触	法 法 法	備	考
蓋	8	26	49	漏斗状に開く口縫を持つものと考え られ、頭部に4条以上の凹縫文を持 つ。	頭部上半にハケ状原体で縱方向でナ デを行ひ。内面は部分的にハケ、指 押えがあり。他はヨコナデ。		燒成良好 淡赤褐色	
蓋	9	26	48 (下)	口 径 18.7 高 35.4 脣 径 24.8 底 径 7.3	外面部前上半に縱方向ハケ目、脚下 半は縱方向ヘラミガキ。内面ハケ日 調整。		燒成良好 茶褐色	
蓋	10	26		口 径 17.4 高 26.5 器 器 径 21.1 脚 径 6.7	外面部前上半は縱方向のナデ、下半 は縱方向ヘタケズリ。内面、脚部は 縦方向のハケ目調整。		燒成良好 淡茶褐色	
台付鉢	11	26	50	口 径 30.0 高 21.5 器 器 径 16.3	外面部前上半は縦方向ヘラミガキ。 下半は縱方向ヘタケズリ。台部上半 は縦方向ヘラミガキ、内面ヨコナデ。 半には径 6 cm の穿孔が 3 段あり、下 半には 3 条の凹縫文あり。		燒成良好 赤茶色	
高杯	12	26		蓋付高 7.8	脚部から杯部にかけて内彎し、嵌合 は光触法によるものである。	内外尖ナデ調整。	燒成良好 淡黃茶色	
高杯	13	26	50	蓋付高 4.7 脚 径 8.7	脚下半にかけて外反するもので脚部 は内彎する。脚部上半に 1 条凹縫文 あり。	外面部ヘラミガキ。内面ヘタケズリ。 脚部はヨコナデ。	燒成良好 茶褐色	
蓋	14	26	50	つまみ 器 高 1.8 器 高 3.3 口 径 14.6	笠形で口縫端部は丸く、つまみ天井 部に凹みをもつ。	内外共ナデ調整。	燒成良好 淡白茶色	

器種	番号	接頭	法量 cm	形態			外面部上半に縱方向のヘリガ ル。他はナデ。	備考
				長	幅	高		
蓋	15	25	50	つまみ 桿 高 口 径	2.5 6.0 22.6	笠形で口縁端部は肥厚し幅は長く広 がる。11縫に4条の凹線文、同側に 横成前の穿孔が2つあり、2対にな るものと考える。		
台付無鉗蓋	16	25	50	口 桿 高 脚 径	21.2 18.6 14.7	脣部はゆるやかに内擭し、口縁部上 面は平坦である。台部は僅かに内擭 したがら爆脱に至る。脚部と台部と の接合部は明瞭に残る。文様等は口 縁直下に0.7cmの孔が2ヶ所で2対 あり、台部の上部に5cmの円窓蓋が、 6ヶ所ある。凹線文は口縁直下に1 条、体部中央に5条、脚上部に3 条、下端に1条ある。	外面部下半は横方向ヘリガ ル。他はナデ。	渕底素色

第2次調查土壤3

器種	番号	博図版	法量 cm	形	枝	法		備考
						口径	直さる口縁で端部は平坦に押え 内外共コナデ。	
壺	1	28 (上左)	64	直さる口縁で端部は平坦に押え 内外共コナデ。		口径 深存高	8.0 7.1	火候良好 淡茶色

溝 7

器種番号	柄圓板	口徑cm	形態	枝法	備考
蓋 蓋	31 (上蓋)	66 器高 26.9	やや脣のはつた鋸沿に大きくひらく 口頭部をもつ。口縁周囲に1条、頭 部に3条、脣部に4条のへら状紋 文をもつ。	頸部外側 面部に黒斑あり 面部方向ナダ。 背面方向ナダ。 側面方向ナダ。	喉頭良好 赤茶色

第2次調査 包含層(弥生土器)

器種	番号	揮	画	國	版	法	量	cm	形	質	技	法	備	考
壺	1	32				口 径	23.0		外反しながら開く口縫を伴つと考えられる。口縫部は下に拡張し、端面には3条の凹縫を施す。なお、ヨコナデによって上にもわざかに突出する。				焼成良好 上焼1 上唇出上	赤褐色
壺	2	32				口 径	23.5		外筋頭部は縦方向へケ日。他はヨコ	焼成やや軟	黄褐色			
壺	3	32				口 径	23.5		外筋頭部は縦方向へケ日。他はヨコ	焼成良好 柱后輪2	白赤褐色			
壺	4	32				口 径	23.0		内面側部はケズリのようである。					
壺	5	32				口 径	9.6		脛部外面の脛筋直線文より上がヨコ	焼成良好 ナデ、下が横方向へケ日。脣中間部	赤褐色			
壺	6	32				口 径	9.6		口縫部はヨコナデ。脣部の外面は縦	焼成良好 方向へケ日。内面はナデ。	黄紫褐色			
壺	7	32				口 径	14.2		口縫部は下に拡張し、端面に横筋波	焼成良好 4.0	赤褐色			
壺	8	32				口 径	15.8		上面は平坦面をなし、横筋列点文を施す。					

器種	番号	插図	版	法量	法量	形	態	考	
								燒成良好	燒成不良
壺	9	32	口 徑 残存高	1.8	口 徑 残存高	17.2	口盤部は大きく外傾し、端部は上下に 横に1条の凹線文を施す。	内外面ともヨコナデ。	焼成良好 黄褐色
壺	10	32	口 徑 残存高	7.0	口 徑 残存高	30.0	口盤部は幅く外傾し、端部は上下に 横張させる。肩部は大きくなり、上 位に最大径を持つと考えられる。端 部には棒状工具による2条の横凹線 文を施す。	肩部外面は縱方向のハケ目、内面は 横方向のハケ目。	焼成良好 赤黄褐色
壺	11	32	52	口 徑 器 銘 底	32.2 厚 径 径	39.0 36.4 8.6	口盤部はヨコナデ。外面部上半は 横方向ハケ目、下半はヘラミガキで あり、一部へラケズリ。底はヨコ ナデ。内面部上半は斜め方向ハケ メ、下半は縱方向ハケメ。	口盤部はヨコナデ。端部は上下に起 立する。端部はヨコナデのため凹んで いる。肩部は大きく張り、並葉に至 る。なお最大径は肩部上半にあり、 底部は最も狭くなっている。	焼成良好 赤茶色
高杯	12	32	52	口 徑 残存高	21.8 5.7	口盤部は内側で閉き、浅い形状を 呈す。端部は肥厚し、口盤部外面に 凹線文を施す。	口盤内外面ヨコナデ、体部外面は 横方向ヘラミガキの後、縱方向の雷 文を施す。内面はハケ目以後、縱方 向の雷文。	焼成良好 黄褐色	
高杯	13	32	52	腰存高	11.7	柱部は外反しており、瓶底、柱部に スムーズに移行すると考えられる。 12条の凹線文を施し、柱部下端に4 方の透かし孔を持つ。		焼成良好 乳褐色	
高杯	14	32	腰存高 脚	2.1 9.4	腰存高 脚	2.1 9.4	脚部は全体的に内側にしなら聞き、 端面には2条の凹線文を施す。脚部 上には強いヨコナデのために凹み を持つ。	外面部ヨコナデ。内面はヘラケズ リ。	焼成良好 淡白茶色

第2次調査 住居跡1

番号	番号	種類	形	量	法	技	法	細	参考
壺	1	38	口 径 12.0 残存高 13.2	頸部から口部にかけてはゆるやかに外傾し、端部は丸みをもつ。腹部は厚くやや張りきみ。	底部に細かいハケ目調整を行ない、腹部中位には深いハケ目、その他は腹部上半から頸部にて操作可能	焼成は良好	淡黄茶褐色		
壺	2	38	口 径 21.6 残存高 11.0	頸部はやや細く、口端部にかけて外反する。	腹部上半から頸部にて操作可能	焼成はやや不良	淡茶茶褐色		
壺	3	38	口 径 19.5 残存高 10.5	頸部は屈曲しはねは外傾する。口端部は肥厚し外傾する。	外面、斜め方向のハケ目その後ヨコナード。口縁内面ハケ目調整。胴部前面へタケリ。	焼成良好で堅硬	茶褐色		
壺	4	38	口 径 8.6 残存高 16.9	口縁はやや外反し端部はやや丸みをもつ、胴部は底角に近く丸底である。	外向き口を施しナデにて消す。内外共接合部確認。	焼成やや不良	淡茶白色		
小型丸底壺	5	38	口 径 5.4 残存高 7.9	口縁が屈曲し内側に明顯な張りあり。	内外共ナデ。	焼成良好	淡灰茶色		
甕	6	38	口 径 15.3 残存高 17.0	口縁は内側に外傾し端部は肥厚し外傾する。胴部は球形に張り器蓋はは離い。	外部外圍は細い縦方向のハケ目、下半は細かい縦方向のハケ目。内面斜め方向へタケリ。	焼成良好	淡灰茶色		
甕	7	38	口 径 16.2 残存高 10.6	口縁は内側に外傾し、端部は肥厚し平底。胴部は球形。	口縁ヨコナデ。内面横方向へタケリ。	焼成やや不良	明淡茶色		
甕	8	38	口 径 24.0 残存高 9.5	口縁は内側に外傾し、端部は肥厚し平底。胴部は球形。	底部外面ヨコハケ目、内面横方向へタケリ。器壁等。	焼成良好	淡黃灰色		
甕	9	38	口 径 15.8 残存高 7.4	口縁は内側に外傾し、側面は側面は外傾する。	底部外面横方向ハケ目、内面横方向へタケリ。器壁等。	焼成良好	淡黃茶色		
甕	10	38	口 径 14.9 残存高 9.0	口縁は若干内側に外傾する。端部は平底。	底部上端は横方向ハケ目、上半は横方向へタケリ。	焼成良好	淡明黄色		

器種	番号	捕獲場	図版	法量	法量	形	態	技	法	備考
高杯	11	38		縫存高	4.8	脚部上半で中空。		内外共隔壁不明。		焼成不良 赤褐色
鉢	12	38	53	口径 (推定) 高 (推定)	17.5 5.4	口縁部が二段に屈曲して外上方にひらく。体部は浅くからき底籠との境はみとめられない。	外腹側は削減のため不規則。内面はコナデ。	焼成良好 漢茶色		
壺	13	37	54 (上)			肩部上半部に櫛先刺突文を施す。			焼成やや不良 烧褐色	
壺	14	37	54 (上)			口縁部外面に櫛先刺突文を施す。 二重口縁部。			焼成やや不良 赤褐色	

第2次調査 住居跡2

器種	番号	捕獲場	図版	法量	法量	形	態	技	法	備考
壺	1	42	56 (下)	口径 縫存高	14.6 7.2	口縁は外傾し、端部は丸い。	内外共ヨコナデ。	焼成良好 赤茶褐色		
壺	2	42	55	口径 縫存高	16.8 11.0	口縁は外傾し、端部は内側に肥厚し。端面は平坦である。	口縁、内外共ヨコナデ。脣部は不明である。	焼成不良 漢茶色		
壺	3	42		口径 縫存高	9.0 5.6	口縁はやや内擡しながら外傾し、端部は丸い。	頭部下半外側は絶方向ハケ目。前面模様ハケ目。	焼成良好 漢茶色		
壺	4	42	55	口径 (推定) 高 (推定) 脣 (推定)	7.7 7.4 8.6	口縁は近く外反する。脣部は上半で最も大傾を示し、尖りぎみの底盤へと至る。	外面左上がりのハケ目、内面指ナデ。	焼成良好 漢白茶色		
壺	5	42		口径 縫存高	9.4 2.2	口縁は短く外反し、脣部の張りは少ない。	口頭部にかけて叩き目がある。他のヨコナデ。	焼成良好 褐色		
壺	6	42		口径 縫存高	11.5 4.0	口縁は極く外反し、端部は丸い。	頸部以下に右上がりの叩き目、口縁及び内面ヨコナデ。	焼成良好 漢褐色		
壺	7	42		口径 縫存高	11.0 3.6	同 上	口縫部にかけて右上がりの叩き目、内面ヨコナデ。	焼成不良 赤褐色		

器種	番号	種	形	量	法	性	備	考
甕	8	42	口 径 12.6 残存高 4.4	口縁は大きく外反し、端部は押えられ。口縁は内側に肥厚する。	脣部に右上がりの叩き目。	焼成良好	赤褐色	
甕	9	42	口 径 12.0 残存高 3.2	口縁は若干内彎しながら外傾し、端部は内側に肥厚する。	脣部に右上がりの叩き目。他はヨコナチ。	焼成良好	淡灰褐色	
甕	10	42	口 径 11.2 残存高 6.0	口縁は屈曲し外反する。端部は丸い。肩部は外反し、端部は内側に肥厚する。	脣部に右上がりの叩き目。他はヨコナチ。	焼成不良	淡褐色	
甕	11	42	口 径 15.3 残存高 3.0	口縁は外反し、端部は内側に肥厚する。端面は外傾する。	口縁は丸い叩き目あり。他はヨコナチ。肩窓内面はヘラケメリ。	焼成良好	淡褐色	
甕	12	42	口 径 13.0 残存高 4.0	口縁は短く外反し、端部外側に肥厚する。	肩部に細い叩き目。他はヨコナチ。	焼成不良	淡褐色	
甕	13	42	口 径 13.2 残存高 8.3	口縁は短く外反し、端部は丸い。能の張りは少ない。	脣部外側平行叩き目。内面上半にはヘケ目開状。	焼成良好	淡褐色	
甕	14	42	口 径 16.3 残存高 3.5	口縁は短く外反し、端部は丸い。	脣部内面ヘラケメリ。	焼成良好	淡褐色	
甕	15	42	口 径 16.8 残存高 5.0	口縁は外反し、端部は内側に肥厚する。	内外共ヨコナチ。	焼成良好	淡褐色	
甕	16	42	口 径 19.0 残存高 2.7	口縁は大きく外反し、端部は丸い。	口頭部に右上がりの叩き目。	焼成不良	淡褐色	
甕	17	42	口 径 16.8 残存高 6.4	口縁が外傾し、端部は丸い。能の張りは少くで堅硬無い。	脣部内面ヘラケメリ。他はヨコナチ。	焼成良好	淡褐色	
甕	18	42	口 径 14.0 器高 20.0 脣径 16.8	口縁は短く外反し、端部は丸い。能の張りは少なく、底部は尖りぎみである。	脣部の叩き目が口縁まである。脣部外側は細かいハケ目。内面はヘラケメリ。口縁はヨコナチ。	焼成良好	淡灰色	
甕	19	42	口 径 13.8 残存高 7.6	口縁は短く外反し、端部は丸い。能はやや張る。	脣部外側は細かいハケ目。内面はヘラケメリ。口縁はヨコナチ。	焼成やや不良	赤褐色	
甕	20	42	口 径 16.5 残存高 5.0	口縁は外反し、端部は丸い。脣部には細い叩き目。内面に指揮え。	脣部には細い叩き目。内面に指揮え。	焼成やや不良	淡褐色	

器種	番号	棒圖	圖板	法量cm	形態	技法	備考
有孔底部	21	42		残存高 孔 径 底 径	6.2 強る。 3.0 完成中央に孔があり。 1.0	跡が残る。	
有孔底部	22	42		残存高 孔 径 底 径	3.2 0.7 1.8	外面右上に孔の印き目。内面ナデ。孔は賣力からある。	焼成良好 淡茶色
底部	23	42		残存高 孔 径	6.5 4.8	強り出した脇部から中央が若干凹ん だ状態へと続く。	焼成や不均 黒褐色
底部	24	42		残存高 底 径	5.3 4.5	外側右上がりの印き目。内面横方向 のヘア目と板状工具による押えがあ る。	焼成良好 黄茶色
底部	25	43	55	口 径 器 剥 剥	13.2 10.0 11.0	外側は右上がりの印き目。側はアマ で、底面に木真似が残る。	焼成良好 淡茶色
高杯	26	43	55	口 径 残存高	9.9 5.4	輪形の杯部をもち、やや内側する。 脚部は大きく仄があると思われる。	焼成良好 黄茶色
高杯	27	43		残存高	3.4	輪形の杯部になると考えられるもの で、脚部は仄がある。	焼成良好 淡水褐色
高杯	28	43		口 径 残存高	21.2 5.5	杯部下半は外反し、縁をもつ。口縁 にかけてはまだあらがらんだら かに外反し、脚部に縁をもつ。	焼成不良 赤褐色
高杯	29	43		残存高 脚 径	2.0 12.0	脚部の下部より大きくなくもので、 露盤は附い。	焼成良好 淡茶褐色
高杯	30	43		残存高	5.9	4.9のもので脚上半の柱部が長い。	焼成良好 外面ナデ。
高杯	31	43		残存高	6.5	中空のもので杯、脚部共大きく開 く。	焼成良好 天黑色

器種	番号	揮	圓	版	法	量	形	體	長	法	法	備	考
器 台	32	43			口 径	9.0	浅い皿部をもち幅広がりの脚部をもつものと考えられ。杯盤口縁端部は直立ぎみ。	外面へラミガサ。		焼成良好	赤茶褐色		
器 台	33	43			脚 高	6.8			外面へラミガサ、内面ナデ。				
器 台	34	43	56	(下)	口 径	8.3	浅い杯部をもち深部はだらかに開けた中空の脚部である。	杯部 内面 上半及び外面はヘラミガサ。内面は脚下半を除きナデ。		焼成良好	淡茶色		
器 台	35	43	55	55	脚 高	8.9							
器 台	36	43	55	55	脚 径	7.6							
器 台	37	41			器 高	3.6							
器 台	38	41			器 径	5.0							
器 台	39	41			底 径	9.3							
鉢	36	43	55	55	口 径	10.6	器部に近い脚部上の部分であり、口縁より内側に凹みがある。	器部 宽くに横筋直線と筋状工具による刻文がある。	内面ナデ	焼成やや不良	暗灰色		
壺	37	41			器 高	7.3							
壺	38	41			底 径	3.0							
壺	39	41											
壺	40	41											
壺	41	41											

第6次調査 住居跡3

器種	番号	伸	曲	凹	凸	法	量	形	態	技	備	法	備	考
蓋	1	47		57 (上)	地大径 残存高	18.0 2.9	二重口縁部。大きな外反する口縁部 外面に墨下する突起を付け瓶を形成 する。その外面に輪葉状文、円形 浮文をつける。		内外ともヨコナダ。	焼成良好 中層出土	焼成良好 中層出土	明淡茶色		
蓋	2	47		57 (上)	口 径	26.6	二重口縁部。水平にひらいたのち、 外倒してたちあがる口縁部をもつ。 口縁部は、内側にわざかに肥厚す る。			焼成良好 上層出土	焼成良好 上層出土	淡明茶色		
蓋	3	47		57 (上)	口 径	14.0	口縁は「く」の字形に屈曲し、ゆる やかな外反する。口縁部は直をな さない。	山根部指おさえた 刷毛より口縁下半部右上がり印き 目。	内外ともヨコナダ。	焼成良好 下層出土	焼成良好 下層出土	淡灰茶色	淡明茶色	
蓋	4	47		57 (上)	口 径	16.5	口縁はわざかに内倒し、端部をつま み上げる。口縁部面は外傾する。			焼成良好 下層出土	焼成良好 下層出土	淡灰茶色		
蓋	5	47		57 (上)	口 径	15.0	口縁はわざかに内倒し、端部を内側 にわざかに墨厚させる。端面は内傾 する。	口縁端部、外面ヨコナダ。 口縁内面機方向へケ日。		焼成良好 上層出土	焼成良好 上層出土	淡茶色～暗茶色		
鉢	6	47		57 (上)	口 径	23.8	大きく外反し、口縁端部を外側に折 りかかるくおさめる。	口縁部内外ヨコナダ。 口縁外面下半右上がり印き目。		焼成良好 下層出土	焼成良好 下層出土	淡茶色～暗茶色		
高杯	7	47		57 (上)	脚柱径 残存高	4.0 6.1	内側がみの杯部に比較的低い脚柱を もつ。	杯部内面ナダ。 脚柱外側力向ヘタミガヤ。 同内面ヘラグズリ後ナダ。		焼成良好 中層出土	焼成良好 中層出土	淡明茶色		
高杯	8	47		57 (上)	脚柱径 残存高	2.9 3.9	斜め上にたちあがる杯部に大きくひ ろがぶる脚部をもつ。脚部には円形透 かしがあり。	杯部内外面ナダ。 脚部外面に船ヨコナダ、下部ナダ。 同内面ナダ。		焼成良好 中層出土	焼成良好 中層出土	暗茶色	器具台の可能性もあり	
底部	9	47		57 (上)	底 径	4.2	突出する底部で、底面がわざかに凹 凸する。	脚下部外面機方向ハケ目。同内面斜 め方向ハケ目。				淡茶色～深茶色		

器種	番号	種	國	版	法量	cm	形	施	技	法	備	考
底 部	10	47	57 (上)	底 残存高	2.3	底 径 2.0	小さい底部に、大きいくらがる脚下半部をもつ。	脚下部外面～底部右上がり叩き目、同内面ナデ。	焼成良好 中層出土	黒色～灰黑色		
底 部	11	47	57 (上)	底 残存高	1.5	底 径 2.2	同 上	脚下部外面～底部ヘテクスリ。同内面ナデ。	焼成良好 下層出土	灰茶色		
有孔底部	12	47	57 (上)	底 残存高	0.5	底 径 2.7	失りきみの底部に孔をもつ。	外面ナデ。内部線方向へヶ目。	焼成良好 上層出土	浅灰黑色	無斑及び縫合着	

第6次調査 住居跡4-a

器種	番号	種	國	版	法量	cm	形	施	技	法	備	考
壺	1	56	57 (下)	口 径 残存高	16.8	口 径 1.7	外反する口縁をもち輪縁をつまむ。	は縁部内外ともヨコナデ。	焼成良好 上層出土	黒色～灰黑色		
壺	2	56	57 (下)	口 径 残存高	11.2	口 径 6.8	ゆるく外反したのち垂直にたちあがる口縁をもち輪縁をつまむ。口縁部外面をもつ。口縁部外面には輪の明瞭でない輪縁直線文がつく。	は縁部内外ともヨコナデ。輪の外側へケ日。輪の張りは乏しい。	焼成良好 中層出土	黒色		
底 部	3	56	57 (下)	底 径 残存高	4.5	底 径 3.0	底面わざみに凹む。	脚外側から裏部に右上がりの叩き目。	焼成良好 下層出土	赤茶色～黑色		
底 部	4	56	57 (下)	底 径 残存高	3.4	底 径 3.7	内側をみにたちあがる脚下部に平底がつく。	脚外ナデ。同内面へヶ日。底面木裏あり。	焼成良好 下層出土	灰茶色		
底 部	5	56	57 (下)	底 径 残存高	4.0	底 径 2.3	平底の底部に孔をもつ。	脚外側から底面に右上がり叩き目。底面ナデ。	焼成良好 明系色			

第6次調査 住居跡4-b

参考									
器種	番号	桿	岡	岡版	法量	法量cm	形態	技術	法備
箸	1	54	58 (下)	口 種 残存高	13.2 1.9	二重口縁型。外側する口縁部外面に 段がつけられ、その上に変形した波 状文がつく。	口縁部内外ともヨコナデ。	焼成良好 上層出土	明白茶色
箸	2	54	58 (上)	最 大 隆 残存高	15.6 1.9	二重口縁型。外反する口縁部に若干 垂下する突起がつき、その上に円形 浮文が2個ずつつく。	口縁部内外ともヨコナデ。	焼成良好 上層出土	明白茶色
箸	3	54	58 (上)	口 垂 残存高	14.5 2.9	大きく外傾する口縁部を内側に 内側に浮きみにのびる口縁部を内外にわ り厚させ、端面を水平につくる。	口縁部内外ともヨコナデ。	焼成良好 上層出土	白茶褐色～淡羽茶色
箸	4	54	58 (上)	口 垂 残存高	15.2 2.7	内側に浮きみにのびる口縁部を内外にわ り厚させ、端面をわずかに外 傾させざる。	口縁部内外ともヨコナデ。	焼成良好 上層出土	輪茶褐色
箸	5	54	58 (上)	口 垂 残存高	21 5.9	直立する脛部に二段にたちあがる口 縁部をもつ。	口縁部内外ともハケがによるヨコナ デ。	焼成良好 上層出土	淡茶褐色
高杯	6	54	58 (上)	脚 種 残存高	14.3 2.4	大きくひらく脚下部で、円形透かし がつく。	脚部外面尾方向ハケ目。同 内面ナ デ、下端部ヨコナデ。	焼成良好 上層出土	淡茶色
高杯	7	54	58 (上)	脚 種 残存高	3.6 7.5	中実の良い脚柱部で、下方で外方に ひろがる。下方には円形透かしがつ く。	杯部内面ナデ。 脚部外面ヨコナデ。	焼成良好 上層出土	明茶色
器台	8	54	58 (上)	口 種 残存高	7.5 5.5	外反する受け部に直立する口縁部を つけ、脚部は大きくひらく。は様 受け部、脚部外面ヨコナデ。	口縁部内外ともヨコナデ。	焼成良好 上層出土	灰白茶色
器台	9	54	58 (上)	脚 種 残存高	12.2 6.5	円錐状にひらく脚部。円形四方法 部外面には脚指捺痕文がつく。	脚部ヘタケナリの後、回転ヘラケナ リ。同 内面上面へラケ目。中 脚め方向ハケ目。口縁部内外ともヨ コナデ。	焼成良好 上層出土	明淡茶色

器種	番号	種類	國	版	述量cm	形	特	法	備	考
瓶	10	54	58 (上)	底径 残存高	3.2 3.4	突出しない底部で、底面は輪状に凹 んでいる。	胴下部から底部にかけて右上がり叩 き目。底面ナデ。	燃成良好 上層出土	赤茶色～黒茶褐色	
有孔蓋部	11	54	58 (上)	底径 残存高	3.5 1.7	円盤状にわざかに突出する底部で孔 をもつ。	底面ナデ。	燃成良好 上層出土	明黄茶色	
不明土器	12	54	58 (上)	最大径 残存高	21.9 4.3	大きく外張する口縁部の下部に明顯 な段をもつ。	口縁部外面側め方向ハケ目後ヨコナ デ。同内面横方向ハケ目ヨコナデ。 段部ヨコナデ。	燃成良好 上層出土	明淡茶色～淡茶色	底部が壺の口部と思われる。 分明確ではない。
甕	13	54	58 (下)	口径 残存高	16.6 1.35	大きくひらく口縁部で、口縁部を 直な端面に2条の凹線文をもつ。	口縁端側内外ともヨコナデ。	燃成良好 下層出土	赤茶色	
甕	14	54	58 (下)	口径 残存高	20.2 2.35	大きくひらく口縁部で、口縁部を 直な端面に2条の凹線文をもつ。	口縁端部外側と内側ヨコナデ。 颈部外側方向ハケ目。	燃成良好 下層出土	淡明茶色	
甕	15	54	59	口径 器高	18.4 30.3	身に近い部位に直立する腹部をも つ。口縁部は屈曲してひらく。 口縁部は上下にわずかに膨張し、 垂直な端面をつくる。	口縁端部外側から腹部内面にかけて ヨコナデ。 口縁部、頸部外側め方向ハケ目。 胴上半部内外とも斜め方向ハケ目。 胴下部内外とも横方向ハケ目。 胴下部外側右がり叩き目。	燃成良好 住居南西端部下層において、 ほぼ完形の状態で出土。	明茶色	
甕	16	54	58 (下)	口径 残存高	15.6 3.45	二重口縁部。たもあがりぎみに外張 する口縁部をもち、断面三角形状の 腹部をもつ。外側する口縁部面上に1 条、段部外面に2条の凹線文をもつ。	口縁部外側ヨコナデ。 内面横方向ハケ目。	燃成良好 下層出土	明茶色	
甕	17	54	58 (下)	口径 残存高	17.0 4.8	ゆるく外反する口縁部をもち、口縁 部外側に刻み目をつける。	胴部から口縁部下半にかけて右上が り叩き目。 口縁部内外とも指おさえ。	燃成良好 下層出土	淡明茶色	

器體	番号	拂國	圖版	法量	形	態	技	法	備	考
鉢	18	54	58 (下)	口徑 残存高 6.95 つ。	18.6	内側縫みにたちあがいる口縫部をも 口縫部外側横方向へリミガサ。 前面横方向ナデ。 体部外面斜め方向へリミガサ。 向内面斜め方向ナデ。	口縫部内外ともヨコナデ。 口縫部外側横方向へリミガサ。 前面横方向ナデ。 体部外面斜め方向へリミガサ。 向内面斜め方向ナデ。	焼成良好 下層出土 口縫部に黒斑あり	淡灰茶色	
高杯	19	54	59	口径 残存高 5.5	9.3	小判の焼形の外縫ともつ。	下層出土	焼成良好 下層出土	淡灰茶色	
高杯	20	54	58 (下)	脚柱径 残存高 6.3	3.9	中空の脚柱部で、上部に横前縫文 をもつ。	下層出土	焼成良好 下層出土	茶褐色	
底部	21	54	58 (下)	底径 残存高 3.7	4.6	底部の外縫部がたちあがるあげ底の 底部である。	底部内外ともナデ。 氏たちあがり部内外に指頭圧真あり。 底面ナデ。	焼成良好 下層出土 黒斑あり	淡灰茶色	
底部	22	54	58 (下)	底径 残存高 3.4	4.8	内側縫みにたちあがる脚下部に靴外 端部のたちあがるあげ底の底部がつ く。	脚下部外縫ナデ。前面縫方向へケ 目。前面縫外縫に指頭圧真 あり。底面ナデ。	焼成良好 下層出土	淡灰茶色～茶白色	
底部	23	54	58 (下)	底径 残存高 2.7	4.1	実面が輪状に凹む。	脚下部から底部右上がり叩きの後ナ ゲで削す。	焼成良好 下層出土 黒斑あり	明淡茶色	
底部	24	54	58 (下)	底径 残存高 3.6	3.6	突出した底部である。	脚下部から底部右上がり叩きの後ナ ゲで削す。	焼成良好 下層出土 黒斑あり	淡灰茶色	
底部	25	54	58 (下)	底径 残存高 2.7	1.6	丸みのある尖りぎみの底部である。	外縫ナデ。内面ハケ目後ナデ。	燒成良好 下層出土	黑茶色～明茶色	
壺	26	55	60 (上)	口径 残存高 2.6	19.6	大きく水平にひらく口縫の端部を上 下方にさし下させる。下方に底部外縫に なる。側底く雅直な壺面には漫形し た側縫波状文がつけられる。	口縫端部から底部外縫にかけ目 ナデ。内面ハケ目後ナデ。	焼成良好 最下層出土	白茶色	

器種	番号	科	属	法 量 cm	形	態	技	備 考
甕	27	55	60 (上)	口 径 12.4 残存高 2.3	ゆるく外反する口縁部をもち、口縁 端部はまるくおさまる。	口縁部内外面ともヨコナデ。外面は ヨコナデの前の石上がり叩き目がの こる。 内面は一部擦り印が見られる。	焼成良好 茶色 灰下層出土。	明茶色 明茶色 灰下層出土。
甕	28	55	60 (上)	口 径 15.0 残存高 3.6	口縁部内外面ともヨコナデ。内面 右上がり印が見られる。	口縁部内外面ともヨコナデ。内面 右上がり印が見られる。	焼成良好 茶色 灰下層出土。	明茶色 明茶色 灰下層出土。
甕	29	55	60 (上)	口 径 14.9 残存高 2.2	外縁する口縁端部をつまみあげる。	内面は右上がり印が見られる。	焼成良好 茶色 灰下層出土。	明茶色 明茶色 灰下層出土。
甕	30	55	59	口 径 12.9 器 高 15.3	たもあがりきみに外反し、ゆがみを のこす口縁部をもつ。 底部は小さい平底である。	口縁部内外面指おさえとナデ。 外縁は右上がり印が見られる。	焼成良好 茶色 灰下層出土。	明茶色 明茶色 灰下層出土。
鉢	31	55	59	口 径 11.5 器 高 7.2	内側してちあがむ口縁部をもつ。 底部は平底で、焼成前内側より棒状 のもので穿孔があるが、途中でとめて いる。	口縁部から全体にかけて外縁右上がり の叩き目、内面ナデ。	焼成良好 茶色 灰下層出土。	白茶色～淡茶色 白茶色～淡茶色 灰下層出土。
鉢	32	55	59	口 径 9.6 器 高 5.5	内鷹ぎみの全体からさきに内側 にひらく口縁部をもち、内面には穂 がみられる。 底部は平底。	口縁部から全体にかけて外縁右上 りと左方向叩き目。 口縁部・体部内面ともなで。	焼成良好 茶色 灰下層出土。	淡茶色～ 茶色 灰下層あり
鉢	33	55	59	口 径 9.8 器 高 6.45	とほ同じ形態をもつが、底部は ドーナツ状でのものをりつける。	口縁部外油ナデ。内面ハケ目。体 部外斜方向ナデ、内面ヨコナデ。	焼成良好 茶色 灰下層あり	明茶色 明茶色 灰下層あり
鉢	34	55	59	口 径 8.2 器 高 6.2	と同形態であるが、口縁部のひら きは小さい。底部は少と同じ。	口縁部から全体内面までヨコナ デ。体部外油右上がり印が見られる。	焼成良好 茶色～ 明黄色	淡茶色 明黄色

器 標	番 号	插 国 版	國 版	法 量 cm	形	態	技 法	備 考
鉢	35	55	59	口径 6.8 高 5.1	内壁する口縁部をもつ。 底部は突出した平底である。	口縁部から全体にかけて外面をコナデ ルが調整不能。向内面側前方ハケ目。	焼成良好 灰黑色～ 灰黑色	淡赤茶色
器 台	36	55	60 (上)	口径 10.4 残存高 4.4	大きくひらく附着に円形窪かしをつ ける。	脚下端部コナデ。以外は内部とも ナデ。	焼成良好 灰下層出土	明淡茶色
高 杯	37	55	60 (上)	口径 19.6 残存高 2.7	大きく外半する口縁部をもつ。 口縁端部はまるくおさまる。	端部から外面にかけてヨコナデ。	焼成良好 灰黑色～灰黑色	高杯の可塑性もあり
高 杯	38	55	60 (上)	口径 16.4 残存高 1.9	大きくひらく附着下部である。	外面繊力窪ナデ。	焼成良好 灰黑色～灰黑色	灰黑色
底 部	39	55	60 (上)	底径 3.8 残存高 2.2	平底の底盤。	外面ヨコナデ。内面ナデ。	焼成良好 灰下層出土	赤茶色～赤羽黄色
底 部	40	55	60 (上)	底径 4.4 残存高 3.1	大きくひらく附着部に裏面がわざか に凹んだ底部をもつ。	外面右上がり引き目。 内面板によるナデ。	焼成良好 灰下層出土	明黄～淡淡茶色
底 部	41	55	60 (上)	底径 3.4 残存高 2.6	平底の底盤に孔をもつ。	内面板かヘケによるナデ。	焼成や不良 灰下層出土	淡黄色
底 部	42	55	60 (上)	底径 2.6 残存高 2.9	丸みをもった尖りぎみの底盤であ る。	外面軟状のものによるナデ。 内面ナデ。底面ナデ。	焼成良好 灰下層出土	明茶白色

第 6 次 調 査 住居跡 4 - C

器 標	番 号	插 国 版	國 版	法 量 cm	形	態	技 法	備 考
須恵器 蓋	1	49	61	口径 11.8 残存高 4.35	天井部は丸く仕上げる。口縁は垂直 と天井部との境に斜面がある。口	天井部へのラケズリ以外ヨコナデ。 ヘラケズリの方向は逆時計まわり。	焼成良好	灰 色
須恵器 杯	2	49	61	口径 13.5 高さ 4.7	天井部は若干尖りぎみとなる。口縁 は内側溝みに下がり、底部が凹む。	天井部上半部ヘラケズリ。他のヨコ ヘラケズリの方向は時計まわり。	焼成良好	淡灰色～灰色

器種	番号	押	凹	凸	版	法	量	形	態	備	法	天井部上方%へラケズリ、他のココナデ。ヘラケズリの方向は逆時計まわり。	参考
須恵器 杯	3	49	61	口 径 13.9 高さ 5.3	口 径 13.2 高さ 5.1	口 径 13.2 高さ 5.1	口 径 13.2 高さ 5.1	口 横は内面傾みにたちあがり、端面は内面傾し中央に凹みをもつ。受け部はほぼ水平である。底面はおおむね平らである。	天井部と口縁との間に隙をなす。	口縁部は内外面共ヨコナデ。底部外面へラケズリ、内面は一方向ナデ。底部外面へラケズリ、内面は一方ナデ。ヘラケズリの方向は逆時計まわり。	焼成良好	淡青灰色	
須恵器 身	4	49	61	口 径 13.2 高さ 5.1	口 径 13.2 高さ 5.1	口 径 13.2 高さ 5.1	口 径 10.2 高さ 4.8	口縁はきつく立ち上がり、端面は内面傾する。受け部は外方に丸くのびる。底面は丸尖をもつ。	天井部と口縁との間に隙を有する。	口縁部は内外面共ヨコナデ。底部外面へラケズリ、内面は一方ナデ。ヘラケズリの方向は逆時計まわり。	焼成良好	淡青灰色	
須恵器 杯	5	49	61	口 径 13.2 高さ 5.1	口 径 10.2 高さ 4.8	口 径 10.2 高さ 4.8	口 径 12.1 高さ 5.0	内傾する口縁は端面中央に凹みを有する。受け部は外方に丸くのびる。	天井部と口縁との間に隙を有する。	口縁部は内外面共ヨコナデ。底部外面へラケズリ、内面は一方ナデ。ヘラケズリの方向は逆時計まわり。	焼成良好	淡青灰色	
須恵器 身	6	49	61	口 径 11.1 高さ 4.9	内傾する口縁は端面に段を有する。受け部は上方へのびる。	天井部と口縁との間に隙を有する。	口縁部は内外面共ヨコナデ。底部外面へラケズリ、内面は一方ナデ。ヘラケズリの方向は逆時計まわり。	焼成良好	淡青灰色				
須恵器 杯	7	49	61	口 径 12.1 高さ 5.0	口 径 12.1 高さ 5.0	口 径 12.1 高さ 5.0	口 径 13.6 高さ 3.0	口縁の内傾度はやや大きく、端面は中央に凹みをもつ。	天井部と口縁との間に隙を有する。	口縁部は内外面共ヨコナデ。底部内面一方ナデ以外はヨコナデ。	焼成良好	淡青灰色	
須恵器 身	8	49	61	口 径 12.6 高さ 3.0	外反する口縁部は端部を丸くおさめる。張りの強い脚部から丸底で、へ至る。	天井部と口縁との間に隙を有する。	口縁部と受け部との境に接合真あり	焼成良好	淡青灰色				
須恵器 堂	9	49	61	口 径 17 高さ 6.5	口縁は「く」の字形に外反し、端面は外側に押厚している。	天井部と口縁との間に隙を有する。	口縁部上半部に横方向叩き目がある。	焼成良好	青灰				
須恵器 堀	10	49	61	口 径 17 高さ 6.5	口縁は「く」の字形に外反し、端面は外側に押厚している。	天井部と口縁との間に隙を有する。	口縁部上半部に横方向叩き目がある。	焼成良好	淡青灰色				
須恵器 鉢	11	49	61	口 径 17.9 高さ 5.9	ほぼ直立する口縁部をもち、内張す。口縁端面はわずかに凹む。	天井部と口縁との間に隙を有する。	口縁部外面へラケズリを施す。ヘラケズリの方向は時計まわり。	焼成良好	淡青灰色				

器 種	型 番	海 図	版 法 量 cm	形 態	技 法	備 考
壺	12	50	60 (下)	口 径 19.1 底存高 5.1 一段に重口彫造で、直立する脚部上に二段にひらく口縁部をもち、段部には凹頭状の凹みをもつ。	口縁は内外面共ヨコナデで仕上げる。	焼成良好 淡赤茶色
壺	13	50	60 (下)	口 径 17.1 底存高 6.7 二段にたちあがるは縁部をもち、口縁部は内側に腰厚し、端面は内傾している。	口縁は内外面共ヨコナデで仕上げる。	焼成良好 淡明黄色
壺	14	50	60 (下)	口 径 8.5 高さ 7.3 小判の形で、わずかに肩の張った胴部に細く外張する。	口縁は横ナデ。 肩部は斜め方向ナデ。外面は調査不到。	焼成やや不良 淡赤茶褐色
壺	15	50	60 (下)	外反する口縁は輪部を丸くおさめ、上方に凹厚する。	口縁はヨコナデ。口縁は外側継方向ナケ目。内面横方向ナカダ。	焼成良好 明茶褐色
壺	16	50	60 (下)	口 径 12.3 底存高 5.05 口縁は「く」の字状に細く外反し、輪部は丸くする。	口縁は内外面共ヨコナデ。 底部は上半部外面ヨコナダ。内面はナカダで仕上げる。	焼成良好 黄茶色
壺	17	50	60 (下)	口 径 23.0 底存高 30.7 大型の壺で、長毛の脚部にわざかに内張する短い口縁部をもつ。脚部は丸い。	口縁は内外面共ヨコナデで仕上げる。 脚部は総方向ナケ目、内面は上方に向かってナカダ。	焼成良好 淡明茶色 住居西側の墓土上層部で出土したものである。
脚 台	18	50	60 (下)	脚 径 7.0 底存高 2.5 短くひらく脚部である。	脚部は脚部である。	焼成やや不良 淡明茶色
高 杯	19	50	60 (下)	屈曲して大きくひらく脚部である。	脚部内外面共にヨコナデ。	焼成良好 淡赤褐色
器 台	20	50	60 (下)	外反する口縁は端部を外上方へつまり出す。口縁端面は幅く中央が大きくなっている。	口縁内外面共ヨコナデ調整。	焼成良好 明茶色
有孔底部	21	50	60 (下)	底 径 2.6 底存高 3.8 やや尖がりぎみの直部は中央に直径0.9cmの焼成前の穿孔を持つ。	焼成良好 淡黄茶色	

第2次調査 土壌!

器種番号	播種日	西園版法量	形	態	法		備考
					枝	葉	
壺 1	59 (上右)	64	口 径 11.2 残存高 5.2	口巻はゆるく外反し、端部は丸い。 洞部の張りは少ない。	脣部に右上がりの叩き目あり、口巻 はヨコナデ、脚部内面は右上方への ヘラケズリ。	焼成良好	赤茶色
壺 2	59 (上中)	64	口 径 15.8 残存高 4.9	口巻は「く」の字状にきつく外反し 端部は直をなす。	脣部に右上がりの叩き目。	焼成やや不良	赤茶褐色
壺 3	59	口 径 16.7 残存高 7.4	口巻はゆるく外反し端部は丸い、 脚部に右上がりの叩き目。	口巻内外共ヨコナデ。脚部は右上方 の叩き日の後をナデで消し、内面 はナデ。	焼成良好	明淡茶色	
壺 4	59	口 径 19.0 残存高 8.3	口巻は丸味を帯びて外反し端部は丸 い。脚部は少し柔る。	口巻は後をもって大きく外反し、端 部は外上方へつまみ上げる。	口巻部及び脚部はヨコナデ。段部 上には斜め方向へラミガキ同下方は 端方向へラミガキ。口巻内面は擦方 向ナデ。	焼成良好	淡明茶色
高 杯 5	59	口 径 19.4 残存高 5.4	口巻は後をもって大きく外反し、端 部は外上方へつまみ上げる。	口巻部及び脚部はヨコナデ。段部 上には斜め方向へラミガキ同下方は 端方向へラミガキ。口巻内面は擦方 向ナデ。	焼成良好	明茶白色	
高 杯 6	59 (上)	63	口 径 20.2 残存高 13.9	わずかに外反する杯部の上にさきら 大きく外反する口巻を付加したも の。脚部は比較となり筋部は最もも つて広がり、端部は消失する。杯部 内面中央は粘土を充填する。	は筋部付近が擦方向へラミガキの 他は脚部に至るまでナデ。口巻内面 は上半部へラミガキ他はヨコナデ。 脚部内面はナデ。	焼成良好	黄茶白色
高 杯 7	59 (上)	63	脚 径 10.6 残存高 8.6	輪形の杯部をもち、脚部はやや内側 がみに張り脚部付近ではわずかに外 反する。	杯部は叩きの後ナデで消し、内面は ナデ、脚部は内外面共ヨコナデ。	焼成良好	明茶白色
底 带 8	59	底 径 5.2	底 高 2.2	底部は半円となり表面中央に底 2 cm のくぼみをもつ。底面から直線的に 脚部は伸びる。	外面右上がりの叩き目。内面ナデ。	焼成良好	黄褐色
底 带 9	59	底 高 2.9	底 径 3.8	大きく張り出した脚部から突出した 外側は右上がりの叩き目、内面はナ デ。	外面は右上がりの叩き目、内面はナ デ。	焼成不良	淡赤褐色

第2次調査 土壌2

器種番号	種類	番号	標本	國版	法量	法量	形態	枝	法	備考
茎	1	61	(左)	63 (下)	口径 残存高	10.16 11.4	はば直立して伸びる口端は端部が近く で外反する。側面はやや盛り上がり、 口端部は若干肥厚する。	脇部は右上がりの叩き目をナデで消 し、内面はナデ。口端は内外両方に ナコナデ。	施肥良好	淡茶色
脚台	2	61		脚	口径	6.8	内側盛りの頭部に外反ぎみの脚台部	脇部内面及び脚部内外面はナデ。	施肥良好	淡褐色

第2次調査 土壌4

器種番号	種類	番号	標本	國版	法量	法量	形態	枝	法	備考
茎(花部)	1	63	(左)	63 (下)	口径 残存高	33.1 15.5	漏斗状の口端は漏部は大きく上下に 張り、前面に5条の凹線文+竹管文 のついた日形滑文が2個1対であ り。脚部間に刺毛目凹帯あり。	外面部端上半部方向へラミガキ。下 半部方向へラミガキ。内面側方へ ラミガキ。	施肥良好	淡茶色 ①と同一個体
葉	2	63		葉	口径	6.7	脚部からわざかに弓削しながら基盤 ハケ目。	外面部端へラミガキ。内面側方 ハケ目。	施肥良好	淡茶褐色
葉	3	63		葉	口径	12.3	口端が外反し、端部肥厚し凹線文あ り。	内外共ヨコナデ。	施肥良好	淡茶褐色
脚	4	63	(左)	64 (下)	口径 残存高	27.2 4.0	口端は外反、脚部は直立し輪廓に凹 線文2条あり。	内外共ヨコナデ。	施肥良好や不振	黃褐色
脚	5	63	(左)	64 (下)	口径 残存高	23.6 15.5	口端僅かに外反し始部は外輪、端部 に凹削1条、底葉ヶ片。	外面部模様方向へラミガキ。口端ヨ コナデ。内面側部へラミガキ。	施肥良好	淡茶褐色
脚台	6	63		64 (下)	口径 残存高	6.5 14.0	脇部が若干開く脚台部で外園及輪端 部に凹線文あり。	外面部線端上にヘラ押えの跡、ヨコナ デあり。内面側方ハケ目。	施肥良好	淡黃茶色
脚杯	7	63		64 (下)	口径 残存高	11.2	脇部下半が大きく広がり、中空のも の。	外面部端上半は縦かい筋方向へラミ ガキ。下半端広く筋方向へラミガキ。	施肥良好	淡黃褐色

器種	番号	種類	法寸	形	施	法	備考
器 台	8	63 (中右)	63 (中右)	口径 22.5 残存高 4.4	口盤は外反しながら弧削し縁部は上 下に拵装。底面に 4 条の凹縞文+竹 管文。	内外共ヨコナデ。	變成良好 漆赤褐色

第6次調查土壤9

器種番号	種類	版画	國版	形	量 cm	施	法	備考
笠	1	66	65 (上)	口 極 残存高	12.2 3.9	右がかりの叩き目を頭部から口輪下 部まで施す。口縫部ヨコナデ。	頭部	黒色～深茶色
要	2	66	65 (上)	口 極 残存高	15.2 4.6	「く」の字状に外反する口縫は頭部 に内傾するに似たい面をもつ。	頭部	淡茶色
鉢	3	66	65 (上)	口 極 残存高	19.0 4.6	内彌する体部に外反する口縫部をつ け、内面には特に似たい面がある。口縫 部はつまみ上げる。	頭部は外縫方向へミガキ、内面 は斜め方向へミガキ。	淡茶色
高	4	66	65 (上)	口 極 残存高	6.5	比較的短い頭部で、四方円形透かし がある。	頭部外面は縫方向へケ目、同内面は 横方向へケグリ。	深茶色～白黄色

土壤調查第6次調査

器種	番号	標本	國版	形			法	備考
				口径	深さ	底径		
甌	1	68	65 (F)	26.5	5.5	26.5	口縁は内外面共ヨコナヂ、口端面に凹線を上眼下にわざかに捺壓する。底盤は半ばやや張りぎみ。	焼成良好 下唇一括出土 明茶色
甌	2	68	65 (F)	26.7	5.1	26.1	口縁は「く」字状に外反し、端部に凹線をめぐらす。 は外上方へつまみ出す。 底部上半はやや張りぎみ。	焼成良好 下唇一括出土 淡明茶色

器種	番号	捕獲場	圖版	法量	形	態	技	法	備考
底部	3	63	65 (下)	底 径 5.0	平底の底面から直線的に広がる腹部 下半部へと続く。	底部内面は縦方向へラケズリ、外面 は縦方向ハケ目、底面はナデ。 底面付近黒斑あり。 下縫一括出上		燃焼良好 明茶色 燒成良好 明茶色	
底部	4	68	65 (下)	底 径 5.0	同 上	底面はナデ。			
蓋	5	68	65 (下)	つまみ 径 2.6 裏存高 3.1	つまみ上面は端部を外上方へつまみ 出した中央部を凹める。 体部は外反ぎみに広がる。			燃焼良好 淡明茶色 下縫一括出上	

第2次調査溝2

器種	番号	捕獲場	圖版	法量	形	態	技	法	備考
壳	1	72	口 径 5.5	口縫は「く」の字状にある外反し 脚部の張りは少ない。壳としては少 ないもの。	脚部外縫はハケ目、内面はラケ 目。			燃焼良好 灰褐色	
壳 (開拓部)	2	72	底 径 12.8 裏存高 10.5	張りの少ない腹部をも つ。	脚部外縫はハケ目、内面は上方向の ラケズリ。			燃焼良好 淡褐色	

第2次調査ビット1

器種	番号	捕獲場	圖版	法量	形	態	技	法	備考
茎	1	73	口 径 2.9	外上方へ伸びる口縫は端部で肥厚す る。	口縫内面央ヨコナデ。			燃焼良好 黄茶色 口縫に若干黒が付く。	

第2次調査 包含層(土器)

器種番号	測定値	國版法	國版法	形	技	法	備	考
笠 1	74	口径 13.0 残存高 4.3	口径 13.0 残存高 4.3	大きく外反する頸部と、短く外反する口縁部をもつ二重口縁型である。端部は平底面をなす。	口縁部はヨコナデ。頸部外側は前方へラミガキ。	焼成良好 赤褐色		
壺 2	74	口径 12.6 残存高 4.5	口径 12.6 残存高 4.5	口縁は外傾し、頸部は平坦面をなす。頂部から口縁部への屈曲はあまりない。	外面はヨコナデ。	焼成やや不良 暗茶褐色		
小 里 3 丸 底 3	74	口径 6.8 周径 7.9 残存高 5.8	口径 6.8 周径 7.9 残存高 5.8	口縁は内傾しながら開き、頸部は内側に付する平底面を持つ。頸部は曳状を呈し、最大径は中間位置にあり、丸底になるところ考えられる。	口縁部はハダ。外面脚部はハケ目。内面は前方へラケメリ。	焼成良好 淡茶色		
小 里 4 丸 底 4	74	口径 9.8 周径 7.6 脚径 10.0	口径 9.8 周径 7.6 脚径 10.0	口縁は内傾しながら開き、頸部は丸底よりもやや上に最大径がある。丸底で器底は擡げてある。	口縁部はヨコナデ。外面脚部はハケ目。内面は前方へラケメリ。底部は斜め上方へラケメリ。	焼成良好 明茶色		
壺 5	74	口径 16.6 残存高 3.3	口径 16.6 残存高 3.3	口縁は内傾しながら開き、側面は内側に肥厚させており、内傾する面を持つ。	内外面ともヨコナデ。	焼成やや不良 淡茶色		
高 杯 6	74	残存高 7.0 脚径 8.8	残存高 7.0 脚径 8.8	脚部に近づくほどわざかに開く柱状の脚と、屈折して開く脚部をもち、その腰線は明顯である。裾部に4方向の透かし孔を持つ。	内外面柱状脚部ハケ目。	焼成良好 淡茶色		
高 杯 7	74	残存高 7.8	残存高 7.8	脚部に近づくほどわざかに開く柱状の脚と、屈折して開く脚部を持つ。上段は前方へ反しなら屈くが、外面上段の中間位置にさらに腰線もある。端部は外に向	外面脚部はナデ。内面下段はナデ。	焼成良好 灰褐色		
高 杯 8	74	残存高 3.9 脚径 14.4	残存高 3.9 脚径 14.4					

器種	番号	拵区	國版	法量	形	解	技	備	考
					少し折り曲げて、丸く尖とめてい る。				

第6次調査 拡立柱建物跡

器種	強 番 号	播 図	圖 版	法 量 cm	形	施	法	備 考
樂	1	77	66	口 径 32.6 残存高 17.6	長手の胸囲に「L」の字形に屈曲する口巻部がつく。口巻部は平端面を外傾させている。	内外面ヨコナデ。 胸内外面ともナデ。	效試良好	前茶褐色 腹部外面全体に煤着

方形圖書臺2

考									
器種	番号	伸 図	曲 頭	法 骨	形	法 骨	曲 頭	伸 図	考
笠	1	83	69	口 径 11.0 器 高 21.2 底 径 5.0	胸部中位に擴大徑をもち、頭部外圍にかけて4本を半位とする3条の筋筋直線文を施す。平底。	頭部から腹部外圍にかけて頭部中央には4本を半位とする3条の筋筋直線文を施す。平底。	頭部から腹部外圍にかけて細かい筋筋方向へとへラミダキを施した上に、強部以下頭部中央にかけて4本の筋筋直線文を横走させ、下部には横走波状文を施す。頭部外側面にはヨコナデ。頭部前面は放射状のハケ目調整を行う。底部ナゲ。	頭部から腹部外圍にかけて細かい筋筋方向へとへラミダキを施した上に、強部以下頭部中央にかけて4本の筋筋直線文を横走させ、下部には横走波状文を施す。頭部外側面にはヨコナデ。頭部前面は放射状のハケ目調整を行う。底部ナゲ。	胎土 2~7mmの砂粒合 良好 赤褐色 色調
笠	2	83	70	口 径 12.3 器 高 20.9 底 径 5.3	胸の張る体形から、ラッパ状に大きく外反する口様部を持つ。半真	頭部から腹部外圍にかけて細かい筋筋方向へとへラミダキを施した上に、強部以下頭部中央にかけて4本の筋筋直線文を横走させ、下部には横走波状文を施す。頭部外側面にはヨコナデ。頭部前面は放射状のハケ目調整を行う。底部ナゲ。	頭部から腹部外圍にかけて細かい筋筋方向へとへラミダキを施した上に、強部以下頭部中央にかけて4本の筋筋直線文を横走させ、その直線文の中間に横走波状文を施す。頭部外側面内には佛頂圓文を施す。その他の頭蓋はヨコナデ。	胎土 2~7mmの砂粒合 良好 赤褐色 色調	
笠	3	83	70	口 径 18.0 器 高 32.7 底 径 7.2	頭部口位に縮小徑を持ち、細く引き締めた頭部から、本位に外反する口様部を持つ。平底。	頭部から腹部外圍にかけて非常にきめの細かい筋筋ヘケ目を多数する。強部以下頭部中央に4本の筋筋直線文を施文したのち、6条の筋筋直線文を横走させ、その直線文の中間に横走波状文を施す。頭部外側面内には佛頂圓文を施す。その他の頭蓋はヨコナデ。	胎土 2~7mmの砂粒合 良好 赤褐色 色調		

器 種	編 番	番 号	押 抜	圓 版	法 量	形 態	技 法	備 考
壺	4	83	70	口 径 10.0 器 高 16.7 底 径 5.3	もしもくれのしたの腹部にやや大きくな 外反する口縁部をもつ。底部近くに 外側から穿孔。平底。	底部から胴部にかけて斜行するハケ 日と、下半にはヘリミガキ。口縁部 外面はヨコナデ、内面頭部はヘラケ ズリ、底部は平底を呈し、木葉模ら しきものがある。	胎土 燒成 色調 良好 褐色 褐色	胎土 燒成 色調 良好 褐色 褐色
瓶	5	83	70	復 原 15.2 器 高 30.0 底 径 6.4	長頸型、卵形の胸窓から細長、頸部 をもち、ワッペ状に外反する口縁部 を有する。平底。口縁部欠損。	腹部外面には中央分割分を境にして下 部は下から上へ絶対方向のハケ日を施 し、上部は下からへのハケ日。頭 部から底部にかけては下から上へ のハケ日を施している。底部からは 絶対方向のヘラケズリ、内面は口縁部 にヨコナデ。	胎土 燒成 色調 良好 褐色 褐色	胎土 燒成 色調 良好 褐色 褐色
壺	6	83	69	蓋有高 28.4 底 径 8.4	質蠶玉形の腹窓のみで口縁部欠損。 底部はやや丸げ状である。	頭部から胴部中央部にかけて文様器 をもつもので、3条の横直線文と その間に輪指捺文を施したもの のである。また、円形の浮文を最下 段の輪指捺文帶中に2個を1対と して貼り付けている。底部下半はヘ ラケズリ。内面はハケ日。	胎土 燒成 色調 良好 褐色 褐色	胎土 燒成 色調 良好 褐色 褐色
鉢	7	83	69	口 径 14.9 底 存高 6.7	鉢形の器形に突出する底部をつけ、 底部は内に壓導し、口縁部周面に磨 かへらべ刻み目を施す。	外面には絶対方向のヘラケズリ おかげ焼成し、口縁部周面には ヨコナデ。	器面全面にわたり剥離がいちじるし く調整技法不鮮明。全体に器面の凹 凸がほんしく相俟なナヂおよび指オ サエ。	胎土 燒成 色調 良好 褐色 褐色
高 杯	8	83	69	口 径 18.4 器 高 18.7 胸 径 10.0	水平に大きく外反する口縁部で、端 部はさらさらに外反する。柱状部は直 い、底面近くはあまり外反しない。	胎土 燒成 色調 良好 褐色 褐色	胎土 燒成 色調 良好 褐色 褐色	

第4次調査 土壌12

器種	番号	押	圓	圓	板	法	量	形	態	技	法	備	備	考
底部	1	85		67	底 残存高 膜 厚	底 径 残存高 膜 厚	3.3 9.8 20.3	圓形中位に最大径をもつ。 底部は乳首状を呈する。	外面はヘリカキ。内面は脚部中位 にヨコハケ口。底部近くは、ダルハ ケ口。黒斑が脚部中央にある。					

第4次調査 住居跡5

器種	番号	押	圓	圓	板	法	量	形	態	技	法	備	備	考
蓋	1	89	71	口	径 残存高 膜 厚	19.4 7.3	頸部から外反する二重口縫の外面に ヘリ状工具で縫織文を施している。 後縫には、ヘリで糸を入れている。 る。	外面の頸部はナデ、内面はヘリミガ キ。						
蓋	2	89	71	口	全 残存高 膜 厚	18.0 5.2	頸部中央に最大径をもつ、窓の縫部 から「L」字状に外反する。口縫部 端面はひろい。	口縫部は内外面ヨコナデ。内面脚部 以下はヘリケズリ。						
底	3	89	71	底 残存高 膜 厚	径 6.3	4.0	平底。胸部中央に極大腹窪をもつ。	外面はヘリカキ。内面はナデ。						
底	4	89	71	底 残存高 膜 厚	径 2.7	6.2	突出する底部があげ底。	底部に指頭で押正。						
底	5	89	71	底 残存高 膜 厚	径 5.2	4.4	底面ドーナツ形の底盤。	らせん状の叩き目。内面ナデ。						
高杯	6	89	69	底 残存高 膜 厚	径 8.6	15.0	脚部下半で内傾したがら外反するも の。4ヶ所に窓を有する。	成形は不明。脚部を作ったのも、脚 柱部をヘリ等の工具で芯で芯をくっついている。内外面共にヘラ ミガキ。						

器種	番号	溝	國版	法量	形	鉢	技法	備考
高杯	7	89	69	脚柱径 残存高	7.0 11.2	脚中位に4ヶ所の透かしをもち、脚 端部が外反する中空の脚柱。	筋突起上げにより成形後、外か ら透かし孔を穿孔。内外面にヘラミ ガヤ。	胎土 2~3mm内外の砂粒含 良好 褐色
高杯	8	89	68	底 残存高	16.8 9.8	脚部下半で内傾しながら外に開く、 脚柱部は外傾にとどくまで穿孔をあ こなっており、外面はヘラミガヤ。 内面はハケ目とサザナを施している。	脚柱部は円形浮文を施し、その上 に竹管で文様を描いた円形浮文を點 付。	胎土 砂粒を含む 良好 褐色

第4次調査 住居跡6-b

器種	番号	溝	國版	法量	形	鉢	技法	備考
壺	1	93	71	残存高 4.4	二重口縁。	口縁部に地描模様を施し、その上 に竹管で文様を描いた円形浮文を點 付。	胎土 砂粒を含む 良好 褐色	胎土 2~3mm内外の砂粒含 良好 褐色
壺	2	93	71	口径 残存高	6.7 5.5	直立する頸部からわずかに外反す る口縁部をもつ。	内外面共にヨコナデ。	胎土 砂粒を含む 良好 褐色
壺	3	93	71	口径 残存高	8.3 4.0	直立する頸部から大きく外反するに けるをもつ、前面はややひろい。	口縁部はヘリケズリ。口縁部ヨコ ナデ。前面ヨコナデ。	胎土 濾砂を含む 良好 褐色
壺	4	93	67	口径 残存高	21.0 8.9	頸部から直立する二重口縁の壺。頸 部から頸部へと「L」字状に外反す る。	口縁部の内外面はヨコナデ。頸部が 直立する二重口縁の壺。前面はヨコナ デ。前面はヨコナデ。	胎土 3~4mmの砂粒を含 み、さらに細かい灰石、 石英も含む 良好 褐色
壺	5	93	67	口径	8.4	小型の丸底壺。球形に近い胴部にや やくさび形に外反する二重口縁の壺。外 面は不規則なハゲ目。ナデ、口縁 部に焼けたものに着 色。	胎土 1mm以下の砂粒	胎土 1mm以下の砂粒

器種番号	捕獲箇所	法量cm	形態	機能	技術	備考
壹	6	93	口径 67 器高 12.5	小型の丸底壺、球形を呈する開口部をもつ。底部は球形に近く、腹部中央に黒斑を見る。	胸部外面は異型性のないハケ目調査。底部内外面はヨコナデ。内面は底部近くには指オサエのちナデ。	胎土 1mm内外の砂粒を含む 焼成 やや不良 色調 褐色
贰	7	93	口径 71 器高 4.3	胸部から「く」の字状に外反する口縫部から「く」の字状に外反する口縫部で、口縫部は端面がややくぼみ波うつ。	胸部外面は異型性のないハケ目調査。底部内外面共にヨコナデ。内面は底部までハケ目調査。	胎土 1mm内外の砂粒を含む 焼成 やや不良 色調 褐色
叁	8	93	口径 67 器高 11.5	胸形の開口部から「く」の字状に外反する口縫部を有し、その端部は内面で把手をしている。	胸部から胸部にかけて外面にハケ目を下から上に施す。胸部にはハケ目を施した上にヨコナデを加えていく。 口縫部以下は下から上へハケ目。胸部の接合面には指オサエ。	胎土 粒度 3~4mm以下の砂粒を含む 焼成 不良 色調 茶灰色
肆	9	93	口径 16.4 器高 18.2	胸部中央に最大径をもち、広い腹部に「く」の字状の口縫部をもつ。口縫部の一部は片口になるか不規。	胸部以下胸部には右上がりの叩き目。口縫部内外面には指オサエとナデを施している。胸部内下面では胸方向ハケ目。そして、ナデを頸部まで行う。	胎土 1~2mm以下の砂粒を含む 焼成 良好 色調 茶褐色 備註 下手には深が付着
有孔底部	10	93	底径 71 器高 4.2	平底の底部で穿孔をしている。	外面全面にラセン状を呈する叩き目を右上りに施している。内面はわずかにハケ目が残る。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 明褐色
伍	11	93	底径 71 器高 2.7	木葉模様を持つ平底で、突き出た形をとる。	木葉を二枚重ねた上で吹形をしたやすく、突出する底部周囲には指頭によるオサエとナデが見られる。内面指ナデ。	胎土 砂粒を含む 焼成 良好 色調 明褐色

器種	番号	押出機	圖版	法	形	法	量	形	考	
									胎土	チャート石を含む良好
杯	杯	12	93	67	口 径	13.9	杯の形をとり、円形を呈する。口縁部内外面は内側して肥厚する。前面はナゲ。	外面の大部分へラケツリを行ひ、口縁部内外面はヨコナゲを施す。前面はナゲ。	胎土	チャート石を含む良好
高杯	杯	13	93	68	復 口	19.2	杯部に縫をもち、大きく斜めにひらく口縁と、高い中空の唇部とを接続したものである。	解説が激しく技法不明。	胎土	2mm内外の砂粒を含むやや不良色調
高	杯	14	93	68	口 径	23.2	大きくなめ方向に外反する杯部で縫	杯部は口縁部と皿部とを接合し、なくて中空の刺子盤に接合するものである。内外両共ヨコナゲ。	胎土	1mm内外の砂粒を含む難燃良好茶褐色
高	杯	15	93	71	残存高	6.5	脚部下平からひらくもので透かし孔をもたない。	脚部露を杯部に接合する型式のもので、杯部張合の爲土付番、脚柱部の中空化が嵌等による工具脚を回転させながら中の胎土をそぎおとしている。	胎土	砂粒を含む均質度の高い着土地用良好明褐色
高	杯	16	93	71	残存高	7.0	脚部中央から大きくなり脚部をもつ。三方に透かし孔。	杯部と脚部とも接合する型式のもので、脚部が杯底になる。外側はナゲ、内面ヨヘタケツリ。	胎土	1mm内外の砂粒を含む良好明褐色
彌惠器	蓋	17	93	68	残存高	13.1	筒形状を呈するもので、底部はな	胎土を巻きあげて成形するもので、器削は底部から弓の所まで指によるナゲを施し。その他ヨコナゲ。	胎土	精選された粘土使用良好緊緻青灰色
須恵器	把手機	1	94	68	復 口	16.4	い。最大径は脚部中央にあり、口縫はやや外反する筒状のものである。	内面ヨコナゲ、逆時計回り。	胎土	0.5mm以下の砂粒を多く含む良好堅緻黑色
須恵器	蓋	2	94	68	口 径	12.5	口縫部是比较的高く、やや外縫ぎ、口縫部から内面にかけてヨコナ	胎土	精選された粘土使用	

第4次調査 砂層

器種 番号	種 類	形 状	體 積	技 法	備 考
器種 番号	種 類	形 状	體 積	技 法	備 考
瓦器椀	1	器 高 5.0 口 径 15.0 脚 高 6.0 底 高 6.3 高台高 0.6	椀形を呈し、貼りつけ三脚高台をもつ、口縁部内面に1条の波線。	前文を調整に用い、見え部分にはシグザグ文。内面脚部には非常に滑な輪郭部の削文。外面は口縁部近くで横走、脚部は斜行する削文。	胎土 均密度の高い粘土使用 燒成 やや良好 色調 黒色
青磁碗	2	器 高 9.7 口 径 15.8 脚 高 5.8 底 高 7.8 高台高 0.5	外にひらく質密製碗。器全面上に滑継色の施がかけられている。見え部分には重ね焼きの風貌あり。高台は高台。	ロクロ仕上げのため器外側は波うつりしている、その上に釉薬をかけている。乳白色の釉をかけている。	胎土 非常に精良 燒成 良好 色調 淡緑色
白磁碗	3	器 高 9.7 口 径 15.6 脚 高 7.9 底 高 1.0	外にひらく白磁製の碗。高台をのぞく器面には乳白色の釉を施す。	高台はロクロによる削りだし溝台である。乳白色の釉をかけている。	胎土 非常に堅牢 燒成 良好 色調 灰白色
土 壺	4	器 高 7.3 口 径 23.5 脚 高 5.0	須器のもので、肩部以下火搗、口部は内窓し、二段にわたり袋をもつ。肩は水平に突出する。	外圍はヨコナデ。内面は斜行するヨコベケ目。	胎土 砂粒を含む 燒成 やや不良 色調 灰色
土 壺	5	器 高 7.3 口 径 26.8 脚 高 5.8	瓦質。風化が進み、腰の張るもので、脚は水平に突出する。	内外面共に風化のため不規。	胎土 砂粒を含む 焼成 不良 色調 淡褐色
擂鉢	6	器 高 4.5	縦に6条の柳條状沈像を施してい	胎土細顆粒により成形している。外圍は軽いヨコナデ。内面は使用により研磨されている。	胎土 精密な粘土を使用、重い 燒成 良好 色調 茶褐色
三足壺	7	器 高 8.2 脚 高 8.2	断面方形の土師質の足。先端部分は形を整えるためヘラ等で成形している。	胎土 石英の砂粒を含む 燒成 良好 色調 乳灰色	

器種	番号	神國	國版	法善	形	體	法	備	考
三足鍋	8	97	73	直 径 2.0 甕存長 12.0	円柱状の瓦器質の足、場に接続する 部分から欠損。	鑿滅のため不明。	胎土 焼成 色調 褐色	精選した胎土使用 やや不均 褐色	
三足鍋	9	97	73	直 径 2.0 甕存長 13.2	円柱状に成形した足を胴部に接続し ている。	内外両共にヨコナデを施している。	胎土 焼成 色調 褐色	精選した胎土使用 やや不良 褐色	

第5次調査 住居跡7

器種	番号	神國	國版	法善	形	體	法	備	考
甕	1	101	77	残存高 4.0	いわゆる二重口縁の甕で外びらきの 口縁部に輪摺波文を施したもの。 竹管浮文を施した円形浮文を貼りつけ ている。	外びらきの頸部に熱上帶を貼りつけ ることで口縁部をつくりだすもの で、この面に内底輪摺波文を施 す。内面ナデ。	胎土 焼成 色調 褐色	胎土 焼成 色調 褐色	
甕	2	101	77	残存高 5.0	やや外に開く二重口縁部に輪摺波文 を施し、2個1対の竹管浮文を押し た円形浮文を貼りつけている。	上記同様の虎形技法を示し、頸部は 綫のヘラミガキ。内面はナデ。	胎土 焼成 色調 褐色	胎土 焼成 色調 褐色	
甕	3	101	77	残存高 4.2	二重口縁の土甕で、輪摺波文を施 したのち、2個1対の竹管浮文を押し た円形浮文を貼りつけている。	頸部内外面はナデ。	胎土 焼成 色調 褐色	胎土 焼成 色調 褐色	
甕	4	101	74	口 径 9.7 高 10.6	蝶形を呈する体部から大きく「く」 の字状に外反する口縁部をもつもの で、頸部は細くしまっている。最大 径は頸部中央。丸底。	頸部外面は胎かいいハケ日を施し、内 面は側面までヘラケスリ。口縁部は 内外面共にヨコナデ。	胎土 焼成 色調 褐色	直徑1mm内外の砂礫を 含む	
甕	5	101	74	口 径 10.0 高 12.4	最大径が頸部の肩にあり、「く」の 字状に外反する口縁部を持つ。底部 は丸底。	外面側部から底部にかけてヘケ目を 施し、口縁部は内外面共にヨコナ デ。内面はヘラケスリしたのちハケ 目。	胎土 焼成 色調 褐色	直徑1mm内外の砂礫を 含む	

器種	番号	種別	図版	法量cm	形態	枝法	備考	
							地質	砂粒を含む
參	6	101		残存高4.2	頸部から大きく外反する二重口縁で 口縁端部欠損。口縁部分には櫛端波 状文が彫刻され、竹管文をおした円形 文を2ヶ所つ6箇所施付してい る。内外面共にナデ。		胎土 焼成 色調	胎土 焼成 良好 乳白色
壹	7	101	78	口径11.5 残存高5.9	最大幅が頸部中央に位置する。口縁 部は頸部からやや直立ぎみに外反 し、口唇部内側には凹部をもつ。	頸部外面に縱方向のナデ。頸部から 口縁部にかけてヨコナデ、胴部内 面はナデ。	胎土 焼成 色調 茶褐色	胎土 焼成 良好 茶褐色
壹	8	101	74	口径13.3 残存高9.8	球形を呈する頸部からやや外にひら く口縁部をもつ。	頸部外面はナデ。口縁部タブ面は、 鏡合線までヨコナデ、それ以下の開 部はヘラグズリのあとナデを行って いる。また、表面は栓子模様の巻合を あらわすかのように凹凸がある。	胎土 焼成 色調	胎土 焼成 やや不良 淡黃茶色
壹	9	101		口径10.4 残存高7.6	頸部から直立する口縁部をもち、口 縁部上端でさりげなく外にひらく。	頸部から開部までナデ。口縁部は内 外面ヨコナデ。口縁部接合部以下は ナデ、ヨコナデ、斜行するナデなど さまざまな技法を駆使している。	胎土 焼成 色調 石英等の砂粒を含む 良好 茶褐色	胎土 焼成 良好 茶褐色
壹	10	101		口径22.6 残存高10.1	「く」の字状に外反する二重口縁 がつく。	断続的ための調整不明。	胎土 焼成 色調 最大5mmの長石 良好 赤褐色	胎土 焼成 良好 茶褐色
壹	11	101	77	口径23.1 残存高6.8	頸部から「く」の字状に二重にわたり 外反する口縁部である。	口縁部内外面にわたりヨコナデを施 し、頸部以下は内外面共に横方向の ナデ。	胎土 焼成 色調 良好 茶褐色	胎土 焼成 良好 茶褐色
壹	12	101	75	口径19.0 残存高11.3	丸形の胴部から細く引き絞った頸部 をもち、二重口縁部である。口縁部 端面は平坦。	頸部外面にはきめの細かい糸状方向の ナデ。口縁部は外面上にヨコナデ、 頸部内面は斜行ナデ。	胎土 焼成 色調 砂粒多し 良好 茶褐色	胎土 焼成 良好 茶褐色
餘	13	101	78	口径35.2 残存高10.7	頸部から頸部へと 少しうるやかに外反する口縁部である。 開部の裏面がみられる。開部外側は斜 行するハケ目を施し、その後ナデを	頸部とと思われる部分には、粘土結晶 の裏面がみられる。開部外側は斜 行するハケ目を施し、その後ナデを	胎土 焼成 やや不良 茶褐色 良好 茶褐色	胎土 焼成 やや不良 茶褐色 良好 茶褐色

器種	番号	海國圖鑑	法華經疏	形	態	性	法	備考
甕	14	101	74	口径 14.3 腹高 15.8	「く」の字状に外反する口縁をついたもの。最大径は胴部中央にある。	頭部から腹部内外面はヨコナデ。胸部内面にはハケ目を構造させる。	頭部から口縁部内外面は加えている。頭部から口縁部内外面はヨコナデ。胸部内面にはハケ目を構造させる。	部分的に黒斑あり
甕	15	101	77	口径 5.2 腹高 4.4	平底の底部で、大きく外方へひらく。「く」の字状に外反する。	頭部から胸部にかけて湯沸セヨコナデ、胸部はナデである。	頭部から胸部にかけて湯沸セヨコナデ、胸部内面セヨコナデ、胸部はナデである。	前上：3～5mmの大筋粒を多く含む。 燃成 やや不良
甕	16	102	77	口径 14.6 腹高 3.4	口縁部は頭部から「く」の字状に外反する。	右上がりの叩き目日、平行の叩き目日、平面の叩き目日。 底部近くまで施す。内面はナデ。	頭部から胸部にかけて湯沸セヨコナデ。内面は横線のため外縁はヨコナデ。	胎土：1～2mm以下の砂粒 燃成 良好
甕	17	102	77	口径 15.2 腹高 4.4	張った胸部から「く」の字状に外反する口縁部をもつ。	不明。	頭部は横線のため外縁はヨコナデ。	胎土：1～3mmの砂粒多い 燃成 不良
甕	18	102	78	口径 13.6 腹高 9.4	卵形の胸部から「く」の字状に外反する口縁部をもつ。	頭部から胸部にかけて平行および右上りの叩き目を施し、口縁部の外面はヨコナデ。胸部内面は複合線からハケによるナデ。	頭部から口縁部中位にまで右上りの叩き目を施している。口縁部の外面はヨコナデ、内面の瓶部以下はナデ。	胎土：砂粒を含む 燃成 良好
甕	19	102		口径 15.5 腹高 6.4	頭部から「く」の字状に外反し、さらに口縁部端面は外反する。			胎土：2～4mmの大筋粒を多く含む。 燃成 不良
甕	20	102		口径 17.9 腹高 2.2	頭部から強く外反するもので、内面の口縁部端面はわずかに突出。		内面共にヨコナデ。	胎土：1mm前後の砂粒を含む 燃成 良好 色調 茶白色 表面に深付着

器種	番号	種別	図版	法面	法面高	形	態	備考	
								胸	底
頭	21	102	74	口 種 器 高 底 高	12.4 16.6 2.0	頭部は球形に近い器形を呈し、頭部中央に平行引き目が數間にわけて施され、内面はナゲで仕上げられている。口唇部は大底に近い。	頭部から脣部にかけての外側には頭部から脣部にかけての外側には 平行引き目が數間にわけて施され、 内面はナゲで仕上げられている。 口唇部は内外両面共ヨコナデ。	胎土 長石等約3mmの砂粒を含む	胎土 長石等約3mmの砂粒を含む
頭	22	102	74	口 種 器 高 底 高	17.0 17.0 3.0	頭部を呈する頭部で、口唇部はより大きく外反するものである。底部はあげ延ぎみの平底。	頭部近くから頭部まで右トガリの平行引き目を施し、脣部内面ヨコナデを行なう。口唇部はヨコナデ。	胎土 焼成 色調 胎脂付着	胎土 焼成 良好 黒褐色
頭	23	102	77	口 種 残存高 底 高	17.6 8.0 4.6	頭部から「く」の字状に外反する口の開き目を施す。頭部内面には凹部がある。	頭部から脣部にかけては、右上トガリの複数ヨコナデを行なう。頭部から脣部内面にかけでは、ヨコナデ、頭部以下は縦方向ナデ。	胎土 長石等 1mm以下の砂粒を含む	胎土 焼成 良好 色調 胎脂付着
底 部	24	102	77	底 種 残存高	2.9	底部の底面は山形を呈する。	底部から頭部にかけては、ラセメントの叩き目をもつ。	胎土 焼成 良好 色調 胎脂	胎土 長石等 1mm以下の砂粒を含む
底 部	25	102	底 種 残存高	4.2 3.8	底部の底面がややあが底を呈し、大きめの叩き目をもつ。	底部に木彫風のものをもつが何であるか不明、頭部は叩き目をもつものと思われる。	底部に木彫風のものをもつが何であるか不明、頭部は叩き目をもつものと思われる。	胎土 焼成 良好 色調 胎脂	胎土 かなり多くの砂粒を含む
有孔底部	26	102	底 種 残存高	5.0 2.4	底部中心より少し離れた位置に穿孔が2つある。	底部の穿孔は底部に横状のものを差し込むことで、焼成後ものではない。	底部の穿孔は底部に横状のものを差し込むことで、焼成後ものではない。	胎土 焼成 良好 色調 胎脂	胎土 砂粒を含む
有孔底部	27	102	底 種 残存高	2.8 4.0	小底で底部中心より少し離れた位置に穿孔。平底は突出する。	乳首状に突出する底部で、外側には右上がりの叩き目、内面底部はローラー先で放射状に北極状を呈する。	胎土 焼成 やや良好 色調 胎脂	胎土 砂粒を含む	
脚 台	28	102	78	底 種 底 高	7.8	脚のひらがる低い脚型に、輪状の环	外面によるオサエとナデ。内	胎土 砂粒を含む	胎土 砂粒を含む

器種	番号	規格	國	法量	形	體	技	法	備	考
脚台	29	102	78	底径 腰杆高	3.4 6.6	脚部がわざかにひらかり脚部は低い。	外面は脚部のため不明。 内面はナデ。	胎土 焼成	良好 褐色	胎土 焼成
脚台	30	102	78	脚径 腰杆高	4.2 3.6	低い脚部で両端が欠損。脚柱部中空。	外面は指オサエ、ナデ。内面ナデ。	胎土 焼成	良好 褐色	胎土 焼成
脚台	31	102	78	脚径 腰杆高	4.4 5.0	短かい脚部をもち、両端が欠損。脚柱部には複合割離がみられる。	脚部はナデ。内面もナデ。内面腰溝部には複合割離がみられる。	胎土 焼成	砂粒を含む 良好	胎土 焼成
脚台	32	102	75	底径 腰杆高	5.8 12.2	「へ」の字状に脚部の立つもので、四方に通かし孔をもつ。	外面は脚部のため脚部、輪形技法不 明。内面はハケ目とのちナデか。	胎土 焼成	良好 茶白色	胎土 焼成
脚台	33	102	75	底径 腰杆高	14.2 9.6	中空の器台でロート其にひらくも の、脚部は一箇内傾したのちさら に外傾する。	外圍はハケによる調整。脚部はヨ コナデ。内面は脚部のため不明。	胎土 焼成	1~2mm以下の砂粒を含む 良好	胎土 焼成
高杯	34	102	75	底径 腰杆高	14.5 7.5	直立する脚柱部が中位から大きくなり るがるもので、円形の透かし孔を5ヶ所に設けている。脚部が受盤の 底になる。	外面はナデ。脚部は旋方向ナデ。 内面は脚部のため輪形不明。	胎土 焼成	1~2mmの砂粒を含む 良好	胎土 焼成
高杯	35	102	75	口径 指定高	11.0 10.0	輪形の受部に大きく開いた脚部をつ け、四方向に透かし孔を穿つ。	受部前面から脚部にかけてナデ。 脚部は新方向のヘリミガキと施行す るヘリミガキの併用。脚端部はナ デ。	胎土 焼成	3~8mmの大きな砂 粒を含む 良好	胎土 焼成

第5次調査 土壌17

器種	番号	坤 团	圓 板	法 量 cm	形	態	技	法	備 考
高 杯	1	109	76	747萬	9.6	瓶状にひらく杯部と、脚柱が大きくなつてひらくものである。	脚柱の外表面はナヂ。杯部はヨコナヂ。脚柱部は脚方向のヘラケズリ。その後ナヂ。	1 mm内外の砂粒を含む 胎土 色調 良好 褐茶色	胎土 1 mm内外の砂粒を含む 色調 良好
底 部	2	109		底 径 残存高	4.6 4.7	底部に木葉模様をもち、ややすぼまつた形で開拓部がつく。	外面には叩き目を残し、内面はヘタ等による調節。熟練のため不鮮明。	1 mm内外の砂粒を含む 胎土 色調 良好 褐褐色	胎土 1 mm内外の砂粒を含む 色調 良好
底 部	3	109		底 径 残存高	4.2 4.5	底部はドーナツ状の凹みをもち、外に向かう脚部をもつ。	前面は右上がりの叩き目を横かに叩き、内面は放射状のハケ目を描く。	反石を含む砂粒を入れてある。 胎土 色調 良好 褐褐色	胎土 1 mm内外の砂粒を含む 色調 良好

第5次調査 大溝

器種	番号	坤 团	圓 板	法 量 cm	形	態	技	法	備 考
蓋	1	107	79	残存高	3.5	二重口保の口縁部、口縁部周面に横接着状態を残し、その上に竹管文を押した円形容文を貼りつけたものである。	粘土層を頭部に設合することにより口縁端部を拡大している。	1 mm内外の砂粒を含む 胎土 色調 良好 褐色	胎土 1 mm内外の砂粒を含む 色調 良好
蓋	2	107	79	原 口 径 残存高	7.0 8.5	頭部から内側して外反する口縁部をもつ。	頭部外面は逆ハケ目。口縁部はヨコナヂ。内面はヨコナヂのち頭部以下はハケ目。	頭部等を含む 胎土 色調 良好 褐褐色	頭部から頭部にかけての外面部にはハケ目を撲走させ、その下方には輪向のナヂを行う。口縁部外面は横
蓋	3	107	79	口 径 残存高	20.5 3.4	木半な口縁部で、外縫合が上下に拡大して円錐文と円形容文を貼りつけるもの。	頭部から頭部にかけての外面部にはハケ目を撲走させ、その下方には輪向のナヂを行う。	やや不良 色調 胎褐色	0.5 mm 以下の砂粒を含む 胎土 色調 良好
蓋	4	107	75	口 径 残存高	12.7 10.9	胸の張る頭部からや直立しながら二重にわたり外反するもので、口縁部内面には突幣を有する。			

器種	番号	種	形	態	技	法	備	考
壺	5	107	口 径 80 残存高 4.8	頸部から内側に膨らむもの。 口縁部には凹部をもつ。	ナデ。縫合線以下の脣部右から左へ ヘラケズリ。	口唇部はヨコナデと指オサエ。口唇部 内外面はヨコナデ。	黒色 器全面に焼付着	色調 黒色 砂粒を含む
壺	6	107	口 径 75 標 高 26.2	頸部は大 きく外反するものである。口縁部内 面は肥厚する。底部は平坦。	頸部外面は紙のハケ目。頸部は大 きく外反するものである。口縁部内 面は肥厚する。底部は平坦。	口唇部から口 縫合部にかけてはヨコナデ。胸部内部 は粘子を巻きあげたもの。ハケに よるナデ。	胎土 砂粒を多く含む 焼成 良好 色調 黑褐色 器全面に焼付着	胎土 1mm内外の砂粒を含む 焼成 良好 色調 黑褐色 器全面に焼付着
壺	7	107	口 径 75 標 高 25.5	最大腹径を胴部中央にもつ。口縁部 は「く」の字状に外反し、厚い器肉 をもつ。底部は方底。	大きい粘子を巻きあげたもので、胸 部外面にはナデ。およびハケが施 されている。胸部外面には口縁と胸 部とを接合する部分を除いて左方に 向かってハラ開りがおこなわれてい る。	口唇部を巻きあげたもので、胸 部外面にはナデ。およびハケが施 されている。胸部外面には口縁と胸 部とを接合する部分を除いて左方に 向かってハラ開りがおこなわれてい る。	胎土 1mm内外の砂粒 焼成 良好 色調 黑褐色	胎土 1mm内外の砂粒 焼成 良好 色調 黑褐色 器全面に焼付着
壺	8	107	口 径 80 残存高 4.5	内側ながら外方へ屈曲する二重口 縁で、口縁部前面は玉縁状を呈す。	口縁部内外面共ヨコナデ。			
壺	9	107	口 径 80 残存高 5.7	頸部からラバ状に外反するは縫部 をもち、端面は玉縁状を呈する。	外縫部はヨコナデ。内面はナデ。頸部 から胸部にかけてはヘラケズリ。			
壺	10	107	口 径 80 残存高 3.4	小型の丸底土器の口縁部で胸部より 「く」の字状に外反。	口縫部内外面共にヨコナデ。胸部内 面はハケ目。			
甕	11	107	口 径 80 残存高 2.9	頸部から大きく外反する口縁部。	口縫部外面は横ハケ目。内面はナデ。 頸部は横ハケ目。			

器 構	番 号	押 間	岡 版	法 直 cm	形 築	施	備 考		
							口 径	頭 部	口 径
茎	12	107	80	口 径 17.6 頭部から「く」の字状に外反する口 底存高 2.8 縫幅。	口縫部内外面はヨコナデ。	口縫部内外面はヨコナデ。	1 mm内外の砂粒を含む	胎土 燃成 良好	胎土 3 mm内外の砂粒を含む
葉	13	107	80	口 径 12.0 頭部から大きく外反する口縫部。	口縫部内外面はヨコナデ。	口縫部内外面はヨコナデ。	1 mm内外の砂粒を含む	胎土 燃成 良好	胎土 3 mm内外の砂粒を含む
梗	14	107	80	口 径 13.0 頭部から「く」の字状に外反。 底存高 5.9	口縫部内外面はヨコナデ。 内面は横走する ナデ。	口縫部内外面はヨコナデ。	2 mm内外の砂粒を含む	胎土 燃成 良好	胎土 2 mm内外の砂粒を含む
尾	15	107	79	口 径 14.0 頭部から大きく「く」の字状に外反 するもので、口縫部は玉縫状を呈す。	管誠のため調整技法不明。	管誠のため調整技法不明。	砂粒を含む	胎土 燃成 良好	胎土 2 mm内外の砂粒を含む
茎	16	107	79	口 径 5.3 突端が3条めぐる頭部。	磨滅のため不明	磨滅のため不明	砂粒を含む	胎土 燃成 良好	胎土 2 mm内外の砂粒を含む
茎	17	107	80	口 径 18.4 頭部からゆるやかに外反するもの 底存高 4.1 °C、口縫部端面はひろい。	口縫部内外面共にヨコナデ。 頭部は 縦ハケメ。	口縫部内外面共にヨコナデ。 頭部は 縦ハケメ。	砂粒を含む	胎土 燃成 良好	胎土 3 mm内外の砂粒を含む
底 部	18	107	80	底 底径 6.0 底存高 5.0	木葉模をもつ平底。	器面上には叩き目を施す。	砂粒を含む	胎土 燃成 良好	胎土 3 mm内外の砂粒を含む
有孔底盤	19	107	80	底 径 4.8 底存高 2.5	平底を保し、底部は突出。	器面上には連續するラセン状の叩き目。 内面斜行ハケメ。	砂粒を含む	胎土 燃成 良好	胎土 3 mm内外の砂粒を含む
真 部	20	107	80	底 径 2.2 底存高 5.0	乳首状に突出し、穿孔している。	器面上にはナデ。	砂粒を含む	胎土 燃成 良好	胎土 3 mm内外の砂粒を含む
底 部	21	107	80	底 径 5.2 底存高 4.7	平底を保し、大きく外方へひろが る。	器面上にはナデ。 内面は指ナサエ。	砂粒を含む	胎土 燃成 良好	胎土 3 mm内外の砂粒を含む

器種	番号	辨	國	版	法	量	形	態	技	法	備	考
高杯	22	107	79	口径 残存高	21.8 3.2	口 徑 殘存高	大 きく 錐 くひら く口 縫部 である。	口 縫部 は能 く外 反す。	内面はヘラ ミガサ。	胎土 非常に 精選 された 粘土 を使用 燒成 良好 褐色	胎土 胎土 2mm内外の砂粒を含む 焼成 良好 色調 暗褐色	胎土 胎土 非常 に精選 された 粘土 を使用 燒成 良好 色調 褐色
高杯	23	108	79	残存高	5.3	口径 残存高	錐 形的 である。	脚部に接合する杯部で、脚部より 内面共ナデ。		胎土 2mm内外の砂粒を含む 焼成 やや不良 色調 赤褐色	胎土 胎土 砂粒を含む 焼成 やや不良 色調 褐色	胎土 胎土 砂粒を含む 焼成 やや不良 色調 褐色
高杯	24	108	79	口径 残存高	16.3 4.6	口 径 残存高	錐 形的 の杯部が脚部から離れたもの で、杯部外面に縫合面が見られる。	杯部外面はヘラ ミナデ。内面はヘラ ミナデによるナデ。	口縫部はヘラ ミナデ。口縫部は不明。 内面はヘラ ミナデ。	胎土 胎土 均整性の高 い、粘土使用 焼成 良好 色調 褐色	胎土 胎土 均整性の高 い、粘土使用 焼成 良好 色調 褐色	胎土 胎土 均整性の高 い、粘土使用 焼成 良好 色調 褐色
高杯	25	108	79	口径 残存高	14.3 6.2	口 径 残存高	外反だみに口縫部がひらくものであ る。	口縫部はヨコナデ。杯部下部はヘラ ミガキ。	口縫部はヨコナデ。杯部下部はヘラ ミガキ。	胎土 胎土 均整性の高 い、粘土使用 焼成 良好 色調 褐色	胎土 胎土 均整性の高 い、粘土使用 焼成 良好 色調 褐色	胎土 胎土 均整性の高 い、粘土使用 焼成 良好 色調 褐色
高杯	27	108	79	口径 残存高	16.7 6.0	大 きく 外方へ伸 びる杯部で輪状を呈 する。	白縫部内面ヘラミガキ。			胎土 胎土 均整性の有 る粘土使用 焼成 良好 色調 褐色	胎土 胎土 均整性の有 る粘土使用 焼成 良好 色調 褐色	胎土 胎土 均整性の有 る粘土使用 焼成 良好 色調 褐色
高杯	28	108	79	口径 残存高	8.2	脚部から外反するもので、脚頂 が受部になる。	脚頂 磨滅のため不明。			胎土 胎土 砂粒を含む粘土使用 焼成 やや不良 色調 暗褐色	胎土 胎土 精選された粘土を使用 焼成 良好 色調 赤褐色	胎土 胎土 精選された粘土を使用 焼成 良好 色調 赤褐色
高杯	29	108	76	口径 残存高	13.7 12.0 11.2	脚部と受部とを接合させるもので、 脚部を受部に挿入。口縫部は外開き が強く、脚端部は強かひらく。	受部である口縫部はヨコナデ。脚部 は内面ヘラケズリ。脚端部外面 はヨコナデ。外面の脚部はヘラミガ キ。					

器種	番号	種別	國版	法量	形	枝	法	備考
高杯	30	108	79	残存高 5.1	脚部の上方から内壁しながら外反する。	外面はヘラミガヤ。内面はナデ。	胎上 焼成 色調 1 mm内外の砂粒を含む	
高杯	31	108	76	残存高 9.5	杯部と脚部とを接合して盤杯とするもので、杯部と脚部との接合面には突起状の接合面をもつ。杯割はまた各部分を接合するものである。	受部は内面ヘラケズリ。脚部は内外面共ナデ。	胎土 焼成 色調 精選された胎土を使用	
高杯	32	108	79	残存高 6.2	杯部を脚部に接合する形のもので、脚部内面は工具で脚頭まで穿孔。	外面はヘラケズリ。内面はナデ。	胎上 焼成 色調 精選された胎土を使用	
高杯	33	108	79	残存高 7.2	脚部下方で外反するものである。	外面はヘラケズリ。内面は中空。	胎土 焼成 色調 均滑生の高い胎七使用	
脚台	34	108	79	底径 残存高 6.7 3.2	先い脚部にやや外にひらく脚頭をもつ。	脚台は指サエ。内面はナデ。	胎上 焼成 色調 砂粒を含む	
土脚支撑	35	108	80	口径 底径 残存高 10.8 13.0	手づくねの支脚で円錐形を呈し、火熱を受けた痕跡あり。	指頭圧痕が点々と残っている。内面はヘラケズリのちナデ。上端部に火熱を受けた痕跡あり。	胎土 焼成 色調 1 mm内外の砂粒を含む	

第5次調査 磁土内

器種	番号	種別	國版	法量	形	枝	法	備考
湯呑み	1	111	76	口径 高さ 底径 3.6 2.1	口部が外反するもので、底部は絞り底。	クロ虎形によるもので、輪の輪をかけている。	胎土 焼成 色調 砂粒を含む	

器種	番号	插図	國版	法量	法量	形	體	技	法	備	考
湯呑み 茶碗	2	111	76	口 径 器 高 底 程 高台高	6.0 3.5 3.7 0.4	口縫部がラッパ状に外反するもので、内面と外面に茶色の釉を施しているもので、裏面は素焼き。	ロクロ窓形によるもので、高台をもつ。	ロクロ窓形によるもので、削り出し	胎土 地質度の高い精選された粘土使用	胎土 地質度の高い精選された粘土使用	胎土 地質度の高い精選された粘土使用
湯呑み 茶碗	3	111	76	口 径 器 高 底 程 高台高	5.9 4.1 3.2 0.6	口縫部は直立するもので、口径に比して小さい高台をもつ。	ロクロ窓形によるもので、削り出し	胎土 磁器特有の磁物質の素材を使用	胎土 磁器特有の磁物質の素材を使用	胎土 磁器特有の磁物質の素材を使用	胎土 磁器特有の磁物質の素材を使用

第7次調査 5トレンド

器種	番号	插図	國版	法量	法量	形	體	技	法	備	考
甕	1	112 (上)	81	口 径 底 程 高台高	14.4 3.3	ゆるやかに外反し、外側してたちあがり部をもつ。たちあがり部前面に凹彎文4条つく。	口縫部内外とも機ナデ。	口縫部内外とも機ナデ。	甕成良好 淡明茶色	甕成良好 淡明茶色	甕成良好 淡明茶色
三足焼	2	112 (上)	81	胸 径 底 程 高台長	2.0 7.0	瓦器三足焼脚部。			甕成やや不良 黒色	甕成やや不良 黒色	甕成やや不良 黒色
甕	3	112 (上)	81	口 径 底 程 高台高	33.6 5.8	「く」の字形に屈曲し大きく外半する口縫部をもつ。口縫端部はわずかにたちあがり、外面には凹線がつくな。	口縫部内外ともていなヨコナチ。胸部内外面とも斜め方向へケ目。	口縫部内外ともていなヨコナチ。胸部内外面とも斜め方向へケ目。	甕成良好 淡明茶色	甕成良好 淡明茶色	甕成良好 淡明茶色
瓶	4	112 (上)	81	底 程 残存高	4.3 4.2	やや突出した底部で底面切欠く。	外面右上がり引き目。内面ナゲ及び指おさえ。	外面ナゲ及び指おさえ。	甕成良好 黒斑あり	甕成良好 黒斑あり	甕成良好 黒斑あり
瓶	5	112 (上)	81	底 径 残存高	4.5 2.75	底面がわづかに凹んだ平底。	外面右上がり引き目。内面横方向ハケナデ。底面ナデ。	外面右上がり引き目。内面横方向ハケナデ。底面ナデ。	甕成良好 淡灰白色	甕成良好 淡灰白色	甕成良好 淡灰白色



栄根遺跡遠景（上・下）北より

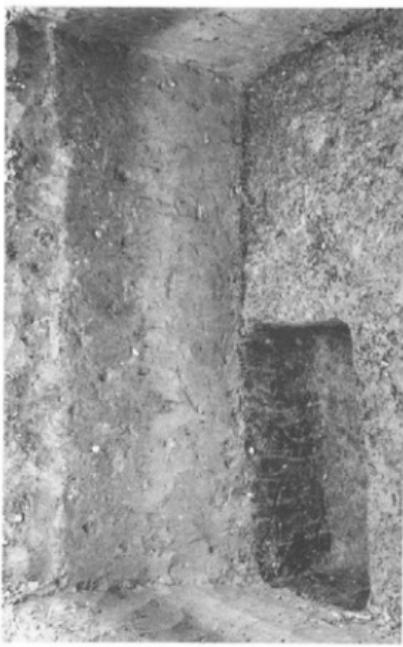
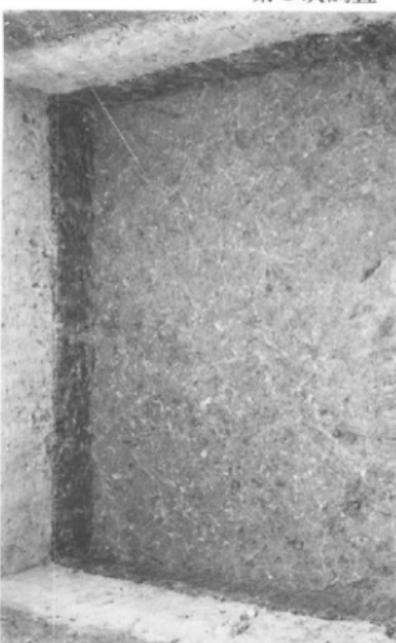


栄根遺跡（上）全景 南より （中）同 西より （下）近景 南より



(上) 2トレンチ

(下) 2トレンチ土器群



(左上) 14トレンチ

(右上) 6トレンチ遺構検出

(左下) 7トレンチ

(右下) 8トレンチ



(上) 調査地点近景 (下) 1トレンチ



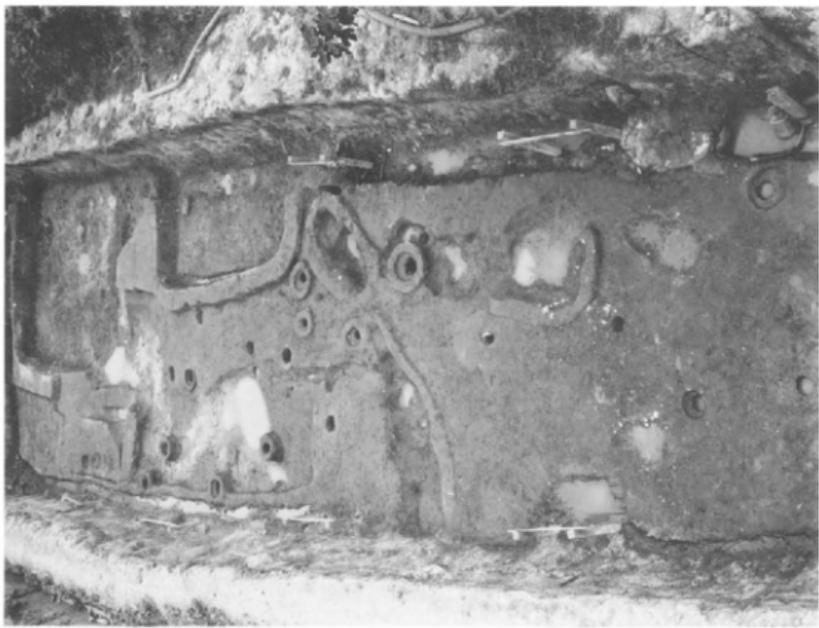
(上) 2トレンチ

(下) 5トレンチ



(上) 7 ドレンチ平面・断面

(下) 同 遺構内出土状態



(上) 調査終了全景 東より (下) 遺構全景 西より



全景 (上) 東より (下) 西より

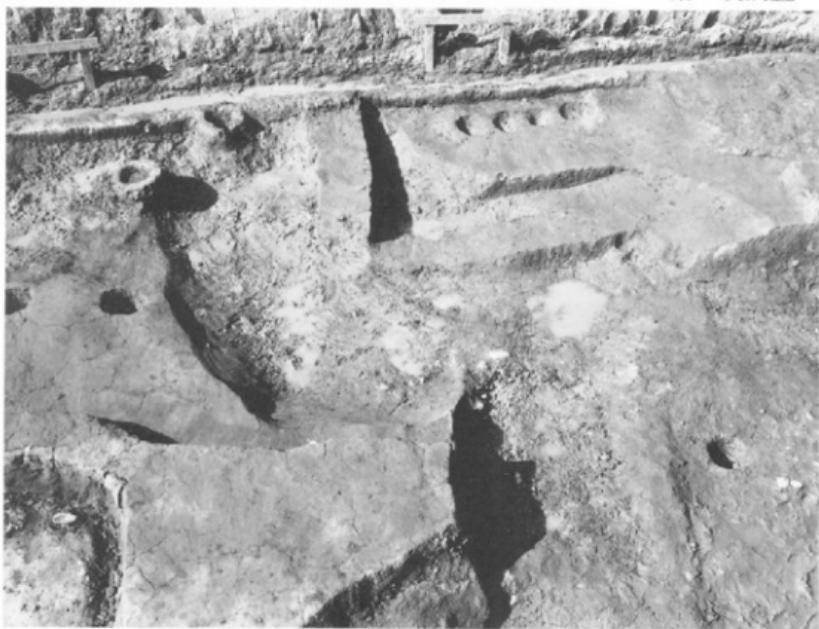


(上) 方形周溝墓 1 (下) 同 溝上層壺(1) 出土状態



(上) 方形周溝墓1 壺(2・3) 出土状態

(下) 同 溝下層壺(4) 出土状態



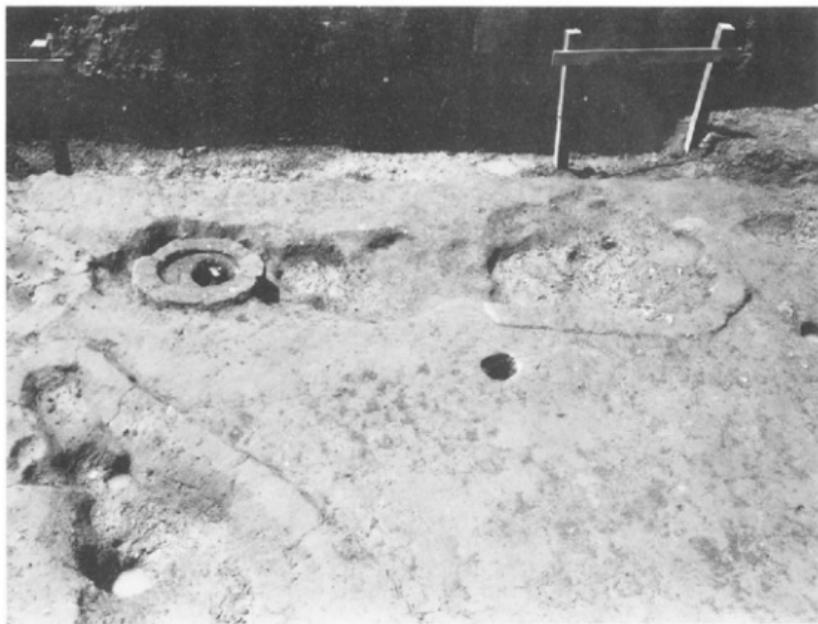
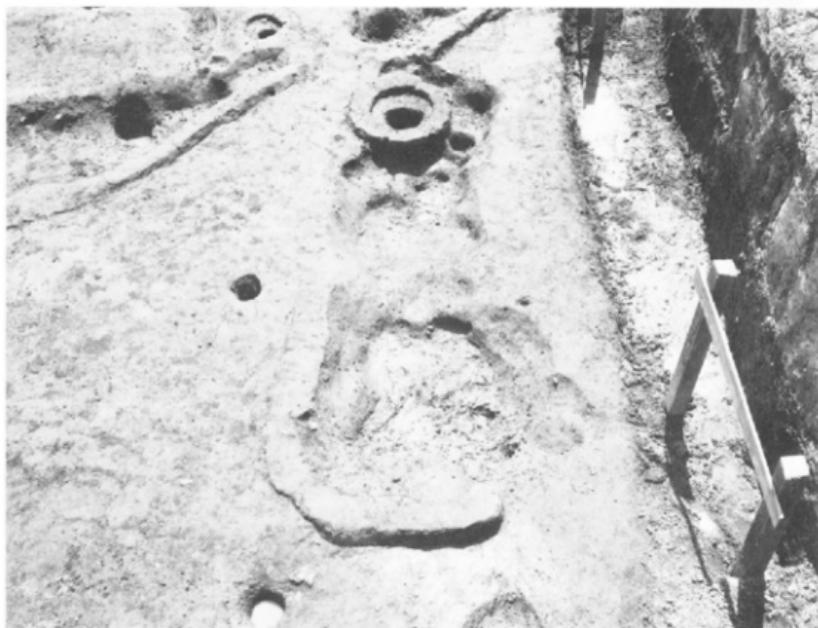
(上) 土壌5

(下) 土壌5 断面 東より



(上) 土壠5 土器出土状態

(下) 同 壺(1・5) 出土状態

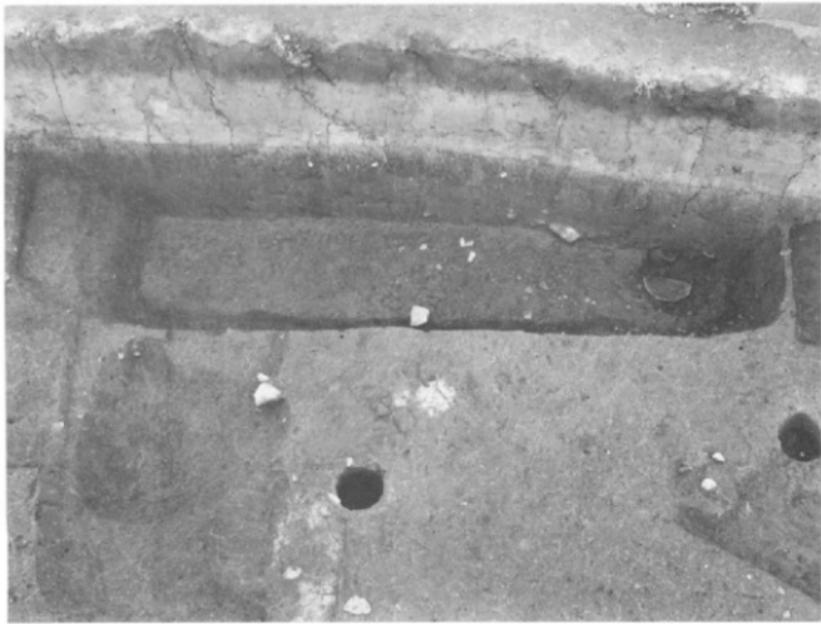


(上) 土壌3 西より (下) 同 北より



(上) 溝7

(下) 同 壺出土状態



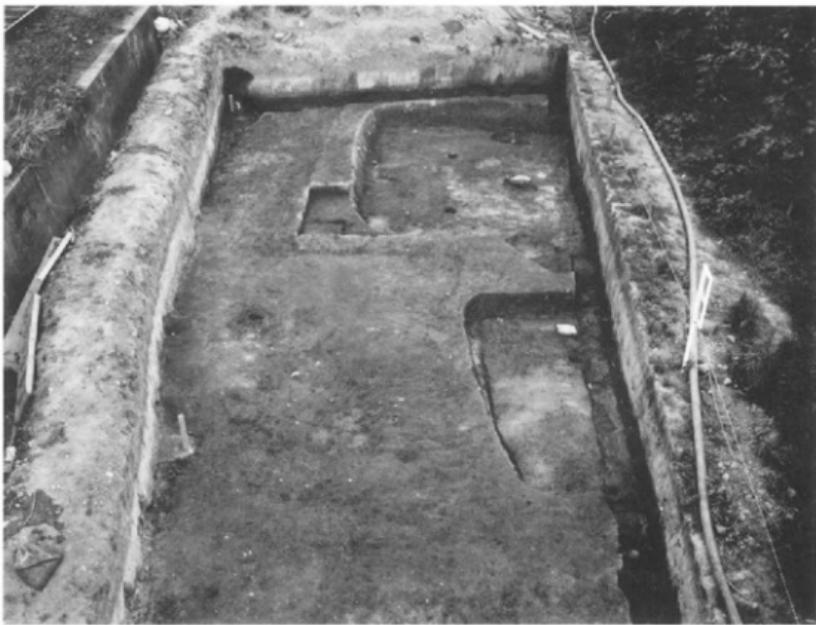
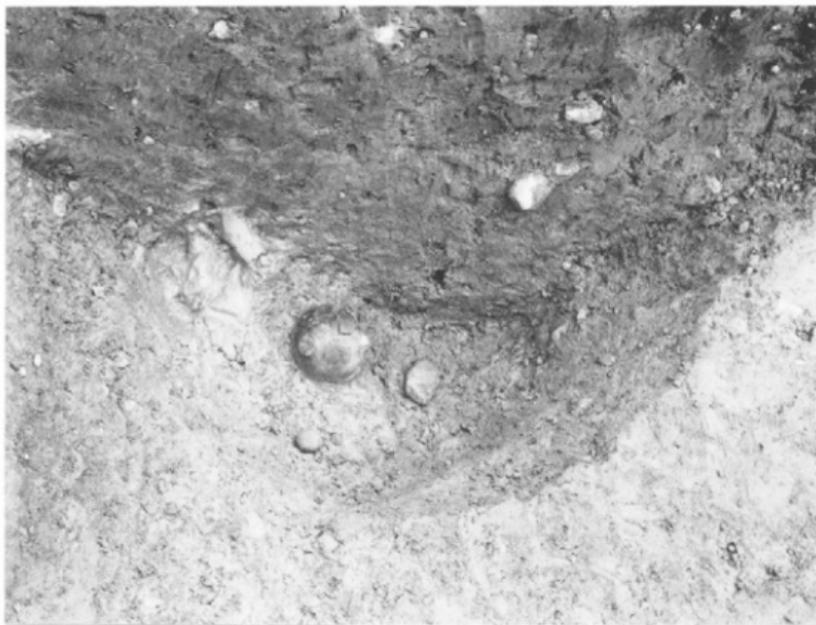
(上) 第2次調査 住居跡1 北より

(下) 第6次調査 住居跡1 南より



(上) 第2次調査 住居跡2 北より

(下) 第6次調査 住居跡2 南より



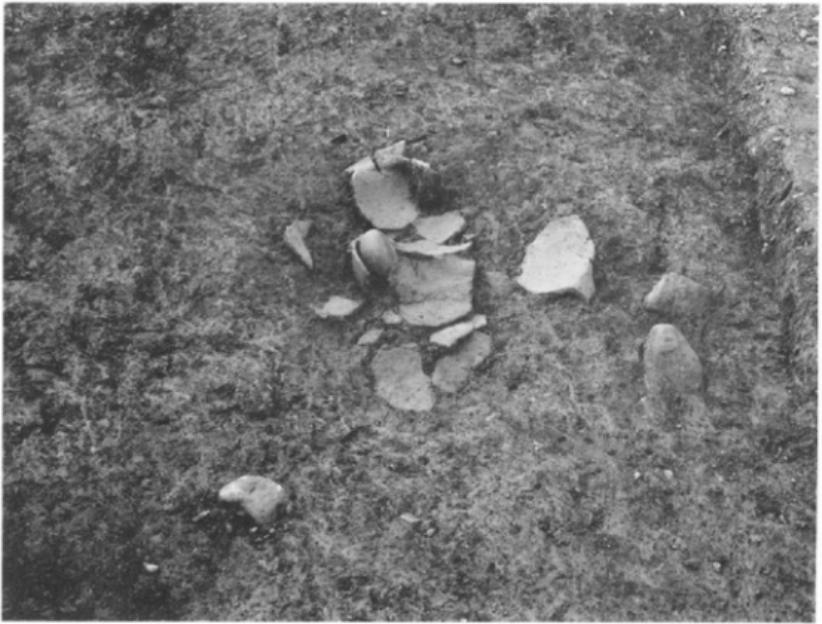
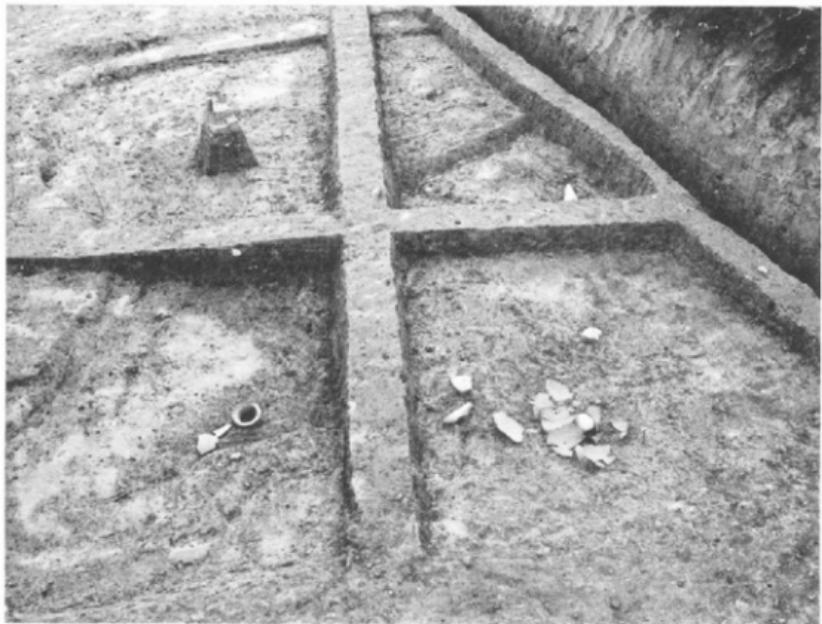
(上) 住居跡2 内東土壤高杯26出土状態

(下) 住居跡1・2 西より



(上) 住居跡 3

(下) 同 南断面



(上) 住居跡 4-c

(下) 同甕(17) 出土状態

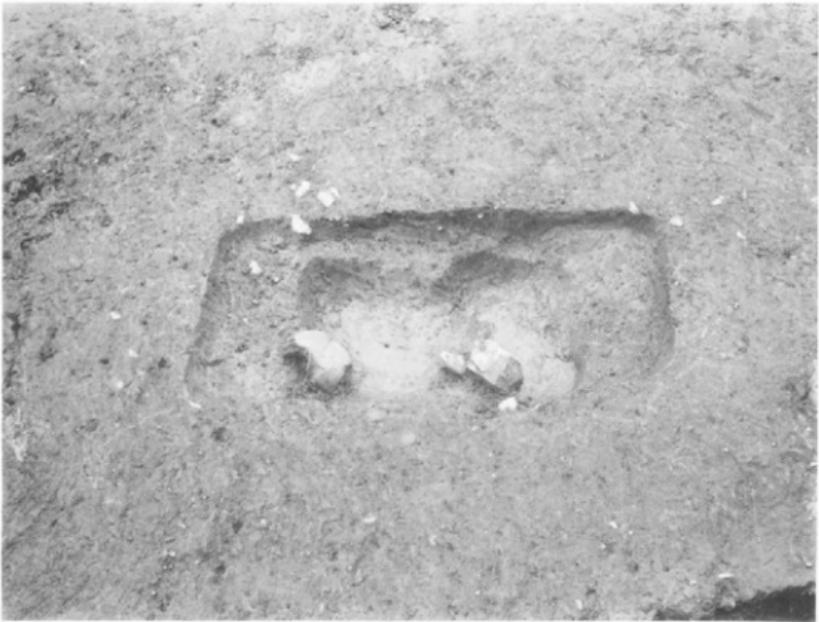


(上) 住居跡 4-a・b

(下) 住居跡 4-b 壺(30)出土状態

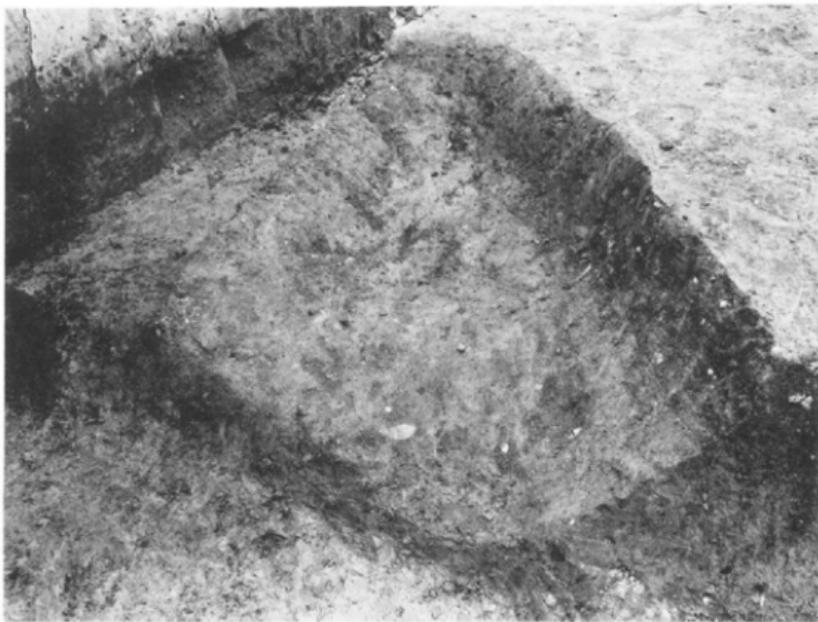


(上) 住居跡 4-b 壺(15)出土状態 (下) 住居跡 4-a



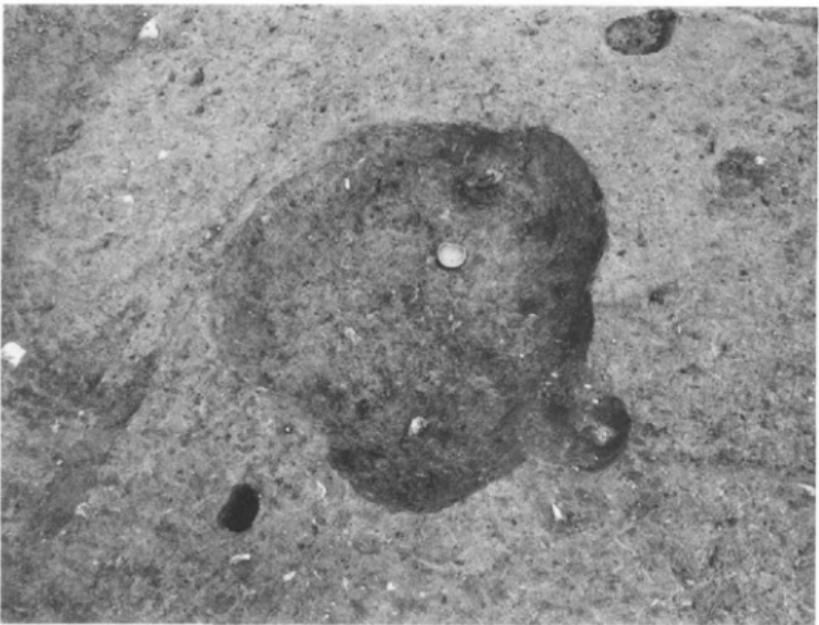
(上) 土壙 1

(下) 土壙 2



(上) 土壌4

(下) 土壌6



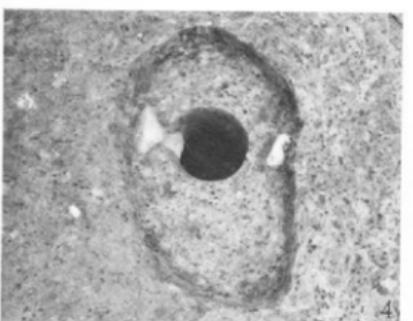
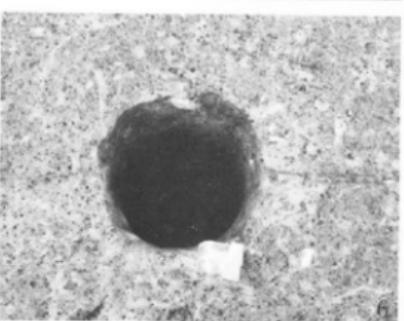
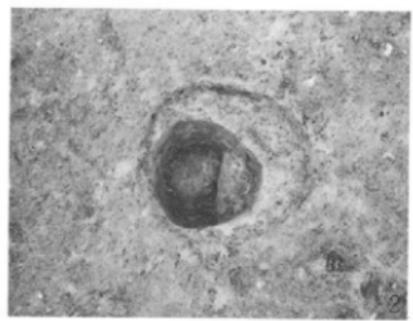
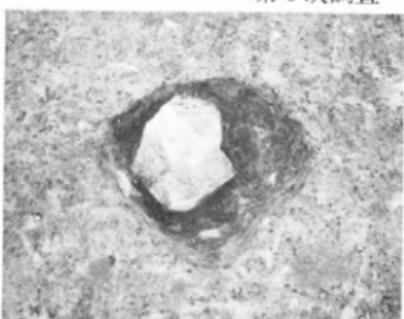
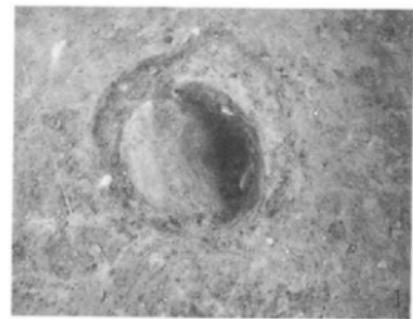
(上) 土壌 8・溝 4

(下) 土壌 9



(上) 石製模造品出土状態

(下) 掘立柱建物跡



掘立柱建物跡柱穴（各番号は柱穴番号を示す）



全景 (上) 西より (下) 北より



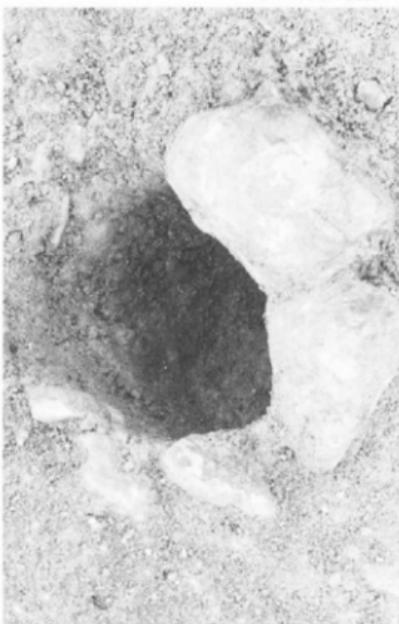
住居跡 5

(上) 調査後

(下) 調査途中



住居跡 5 土層 (上) 東側 (下) 南側

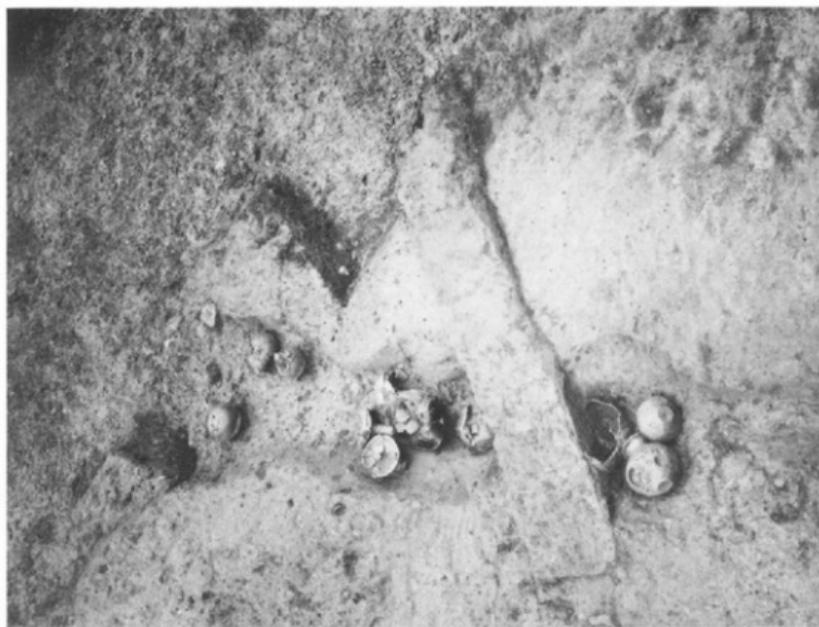


住居跡 5 遺構・遺物 (左上) 壺 (左下) 柱穴 (下) 床上の集石群



(上) 方形周溝墓 2 と住居跡 6-a・b

(下) 方形周溝墓 2 と溝内土器



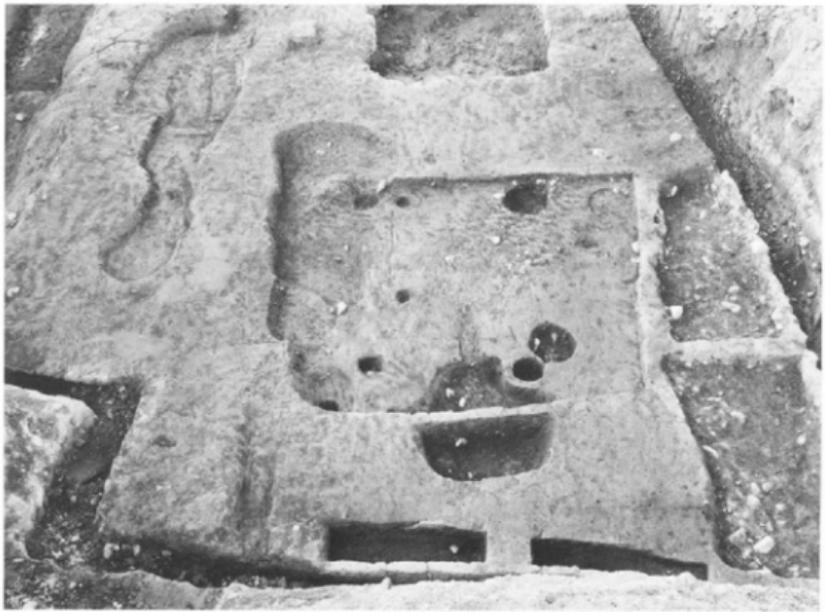
(上) 方形周溝墓溝内土器出土状態 (下) 方溝周溝墓2・住居跡6-b 土器出土状態



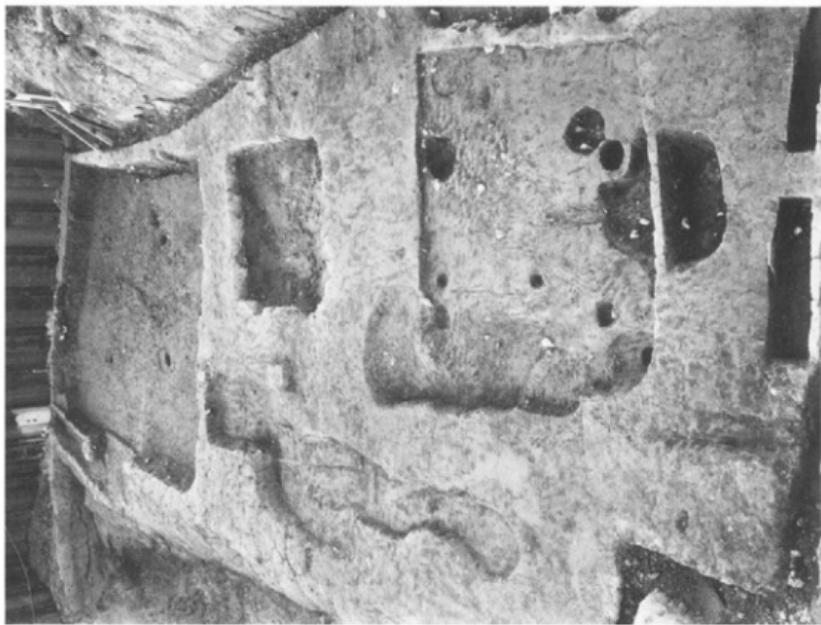
住居跡6-b 遺物出土状態 (上左)石斧 (上右)把手付椀 (下)須恵器壺と小形の丸底土器



(上) 溝10 (下) 土壌12



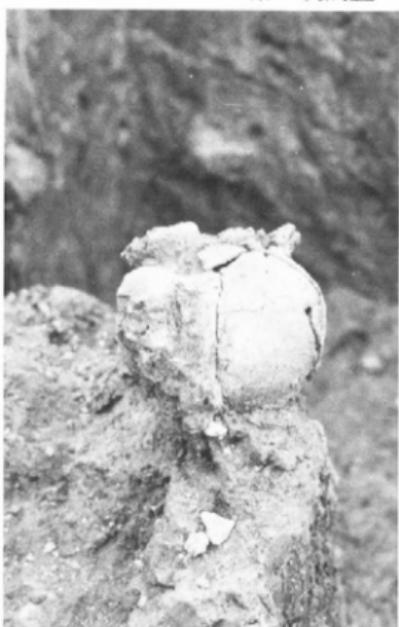
全景 (上) 住居跡 7 と大溝 (下) 方形遺構と土壤



(上) 全景 北より (下) 大溝



住居跡 7 (上) 東より (下) 北より



住居跡7 遺物出土状態

(上左) 土錘

(上右・下左) 壺

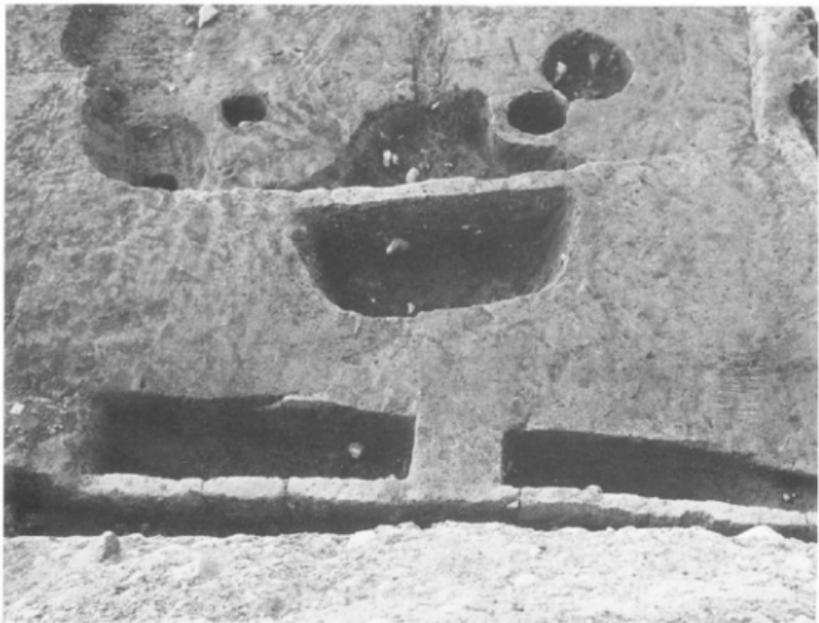
(下右) 高杯



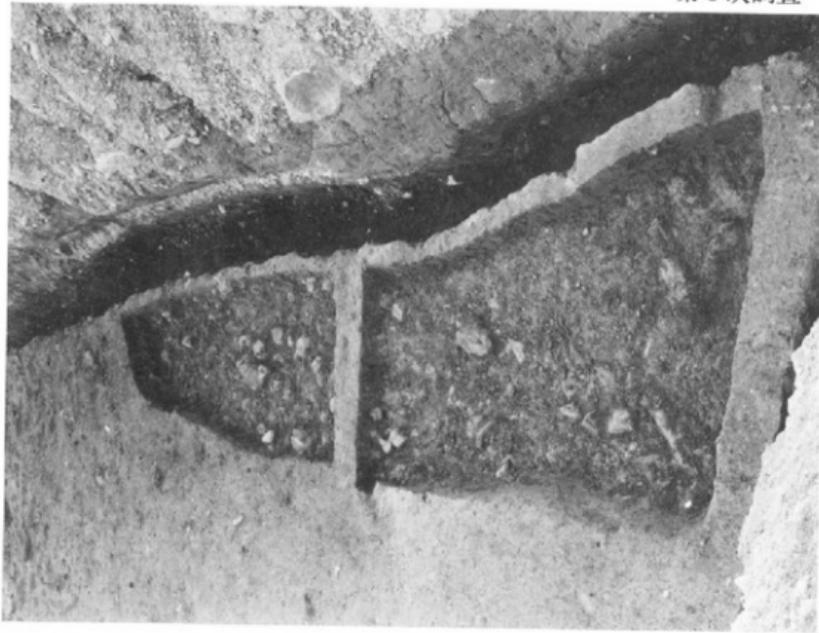
大溝 (上) 完掘状況 (下) 調査途中



大溝遺物出土状態 (上左) 高杯 (上右) 土製支脚 (下) 壺



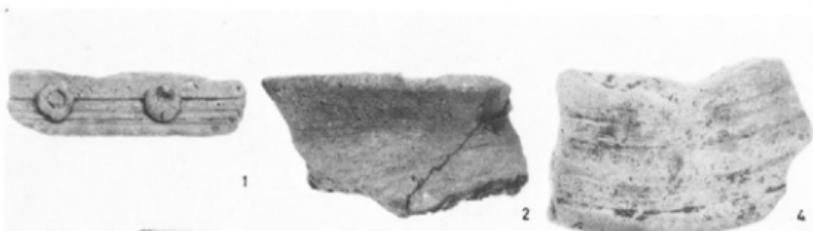
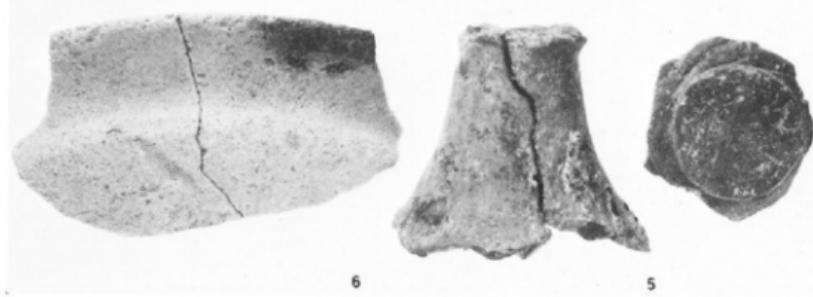
(上) 溝11 (下) 土壌16



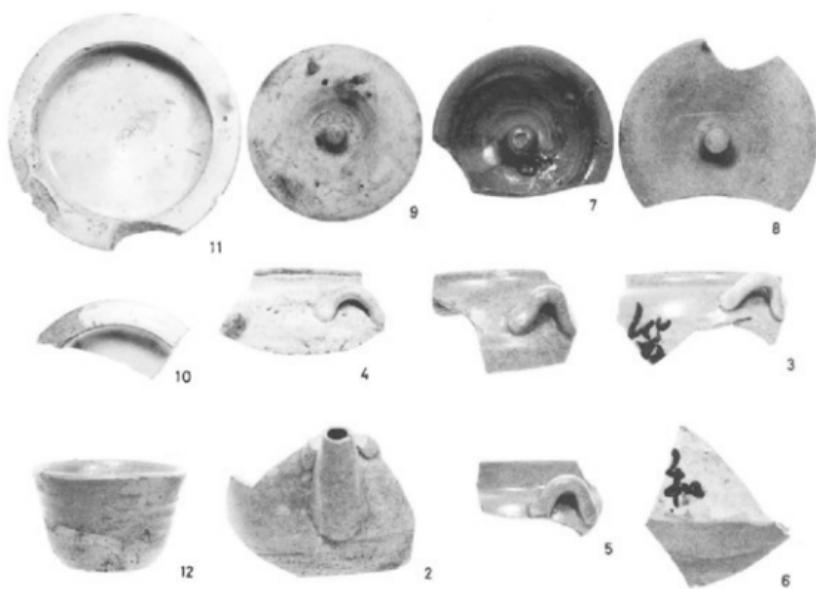
(上) 土壠18 (下) 溝12



(左上) 3トレンチ (右上) 6トレンチ (左下) 1トレンチ (右下) 5トレンチ



(上) 2トレンチ出土土器群 (下) 4・6・8トレンチ出土土器



(上左)・(右上) 7トレンチ遺構内出土土器

(上、右下)・(下) 3トレンチ出土土器



2



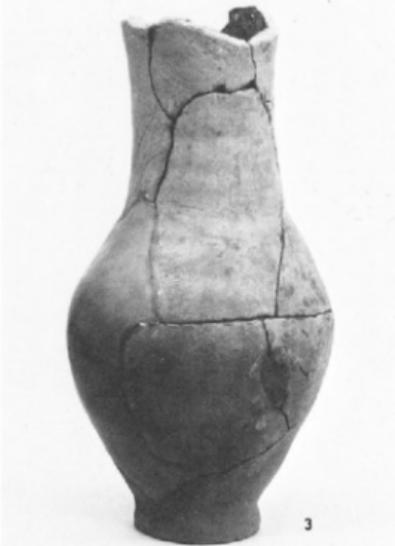
2



1



4



3

(左上) 第1次調査 2トレンチ出土土器群、その他 第2次調査 方形周溝墓1出土土器



(上) 土壌5 下層出土土器

(下) 同 上層出土土器



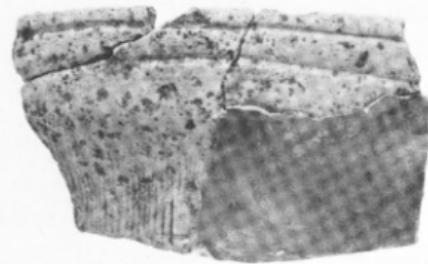
7



8



3



2





14



15



12



16



13



11



17

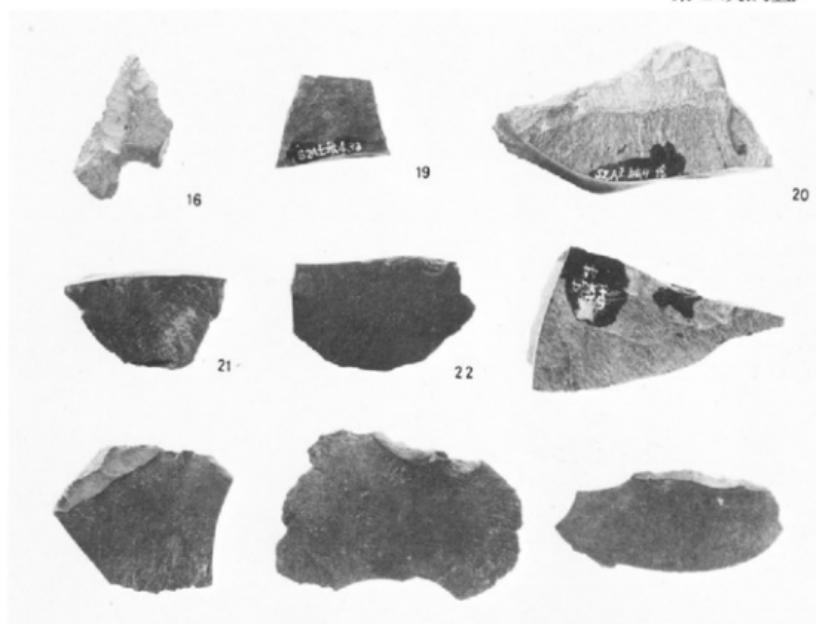
H
S
25

18



(上) 土壌5 上層出土土器

(下) 同 出土石鏃 1:1



(上) 包含層出土石器 1 : 1

(下) 土壌5 上層出土石器 1 : 1

第2次調査

図版
52



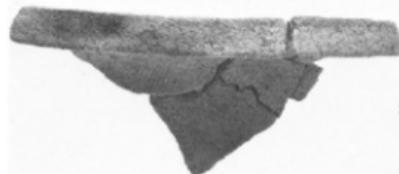
15



17



4



2



8



11



13



12

包含層出土 石器・土器



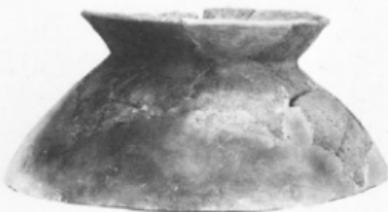
3



6



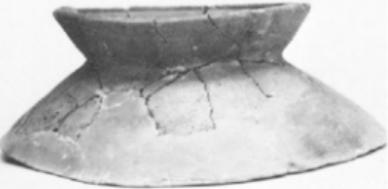
4



7



5



9



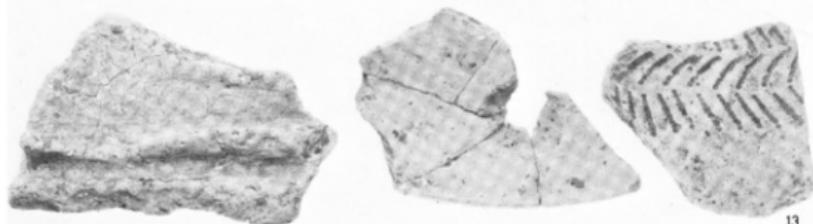
12



10



14



13



(上) 住居跡1 出土土器

(下) 同 出土磁石 1 : 2



2



25



26



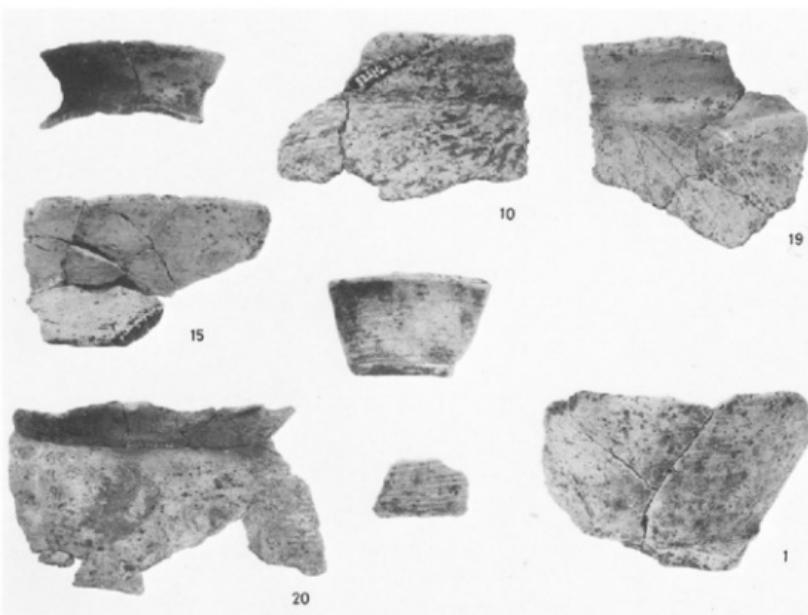
35



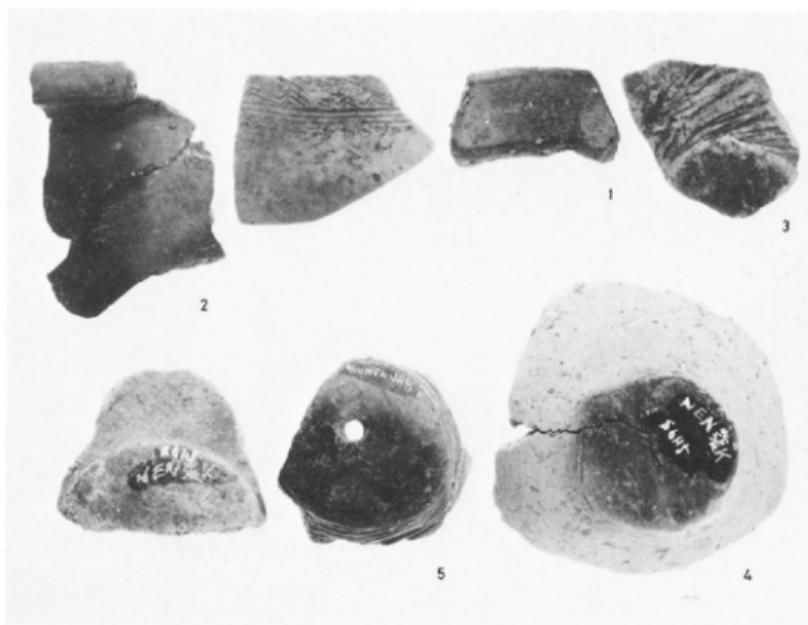
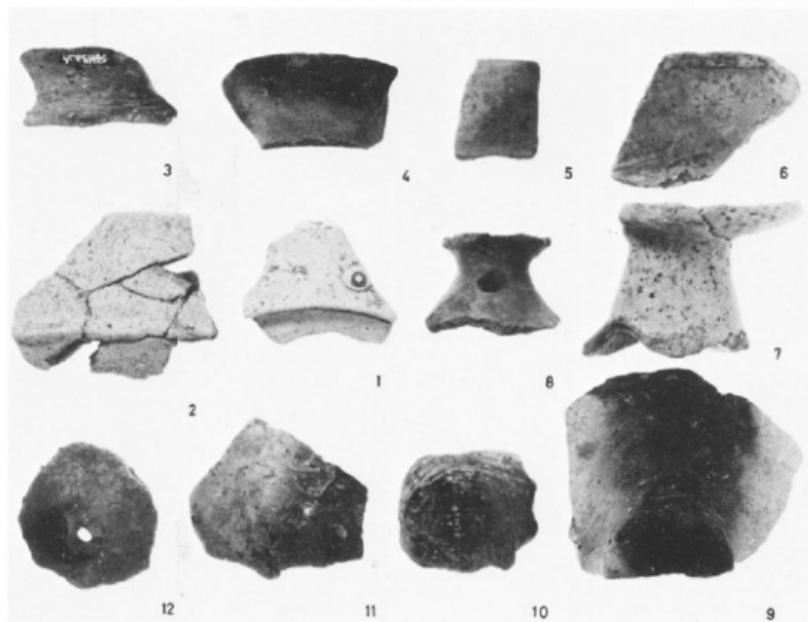
36



4

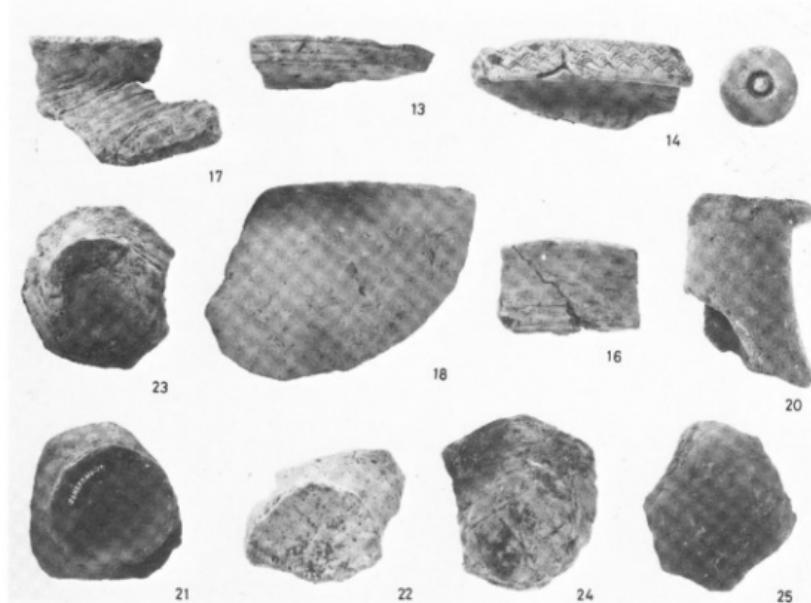
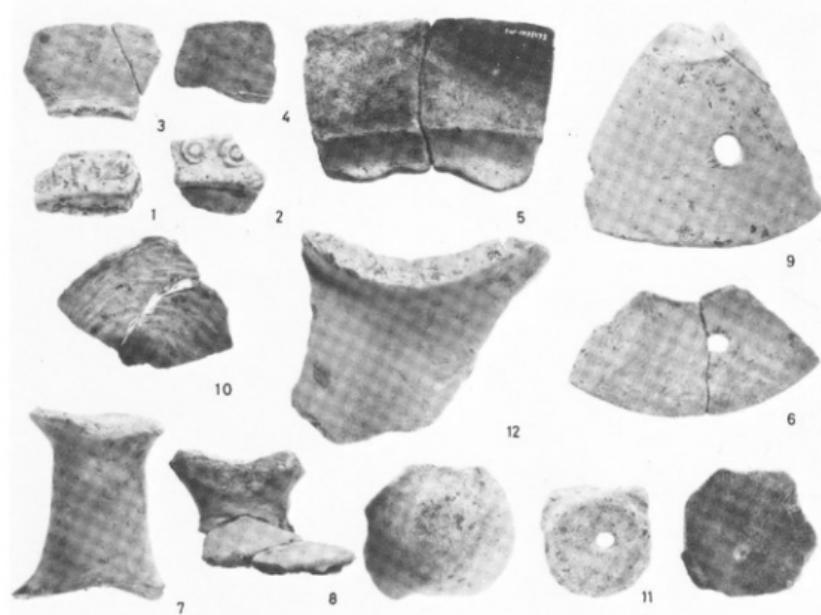


住居跡2 出土土器 土製品1:1 鉄器1:2



(上) 住居跡3 出土土器

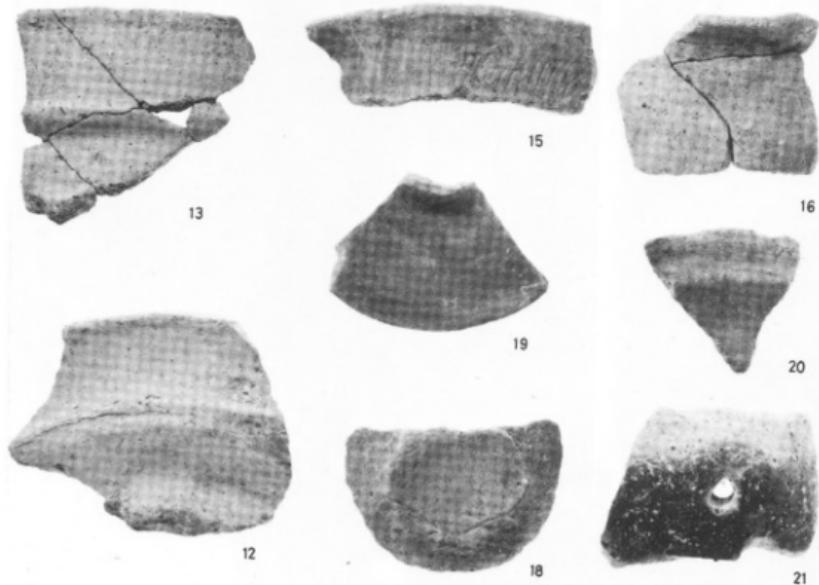
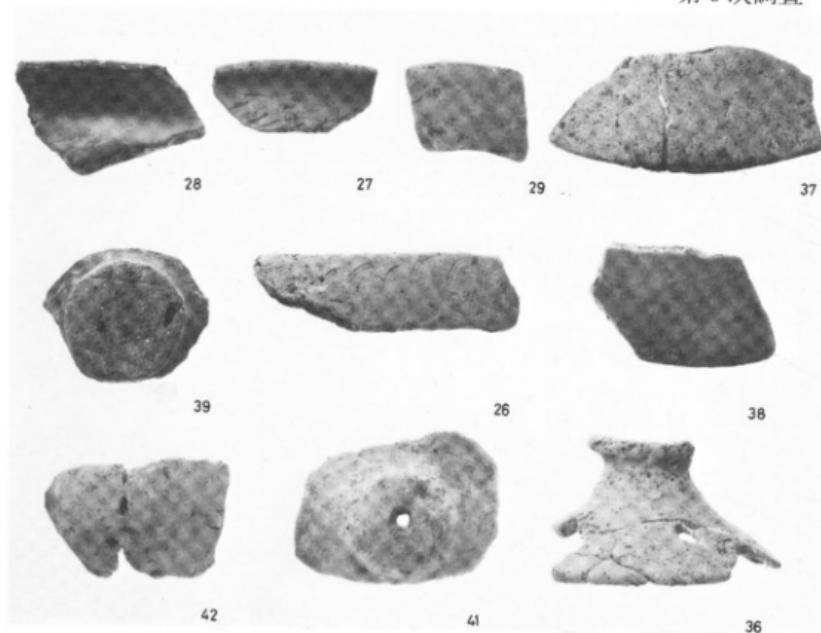
(下) 住居跡4-a 出土土器



(上) 住居跡 4-b 上層出土土器

(下) 同 下層出土土器





(上) 住居跡4-b 最下層出土土器

(下) 住居跡4-c 出土土器



3



6



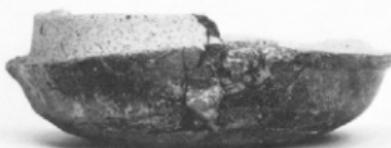
2



7



4



5



9



10



14



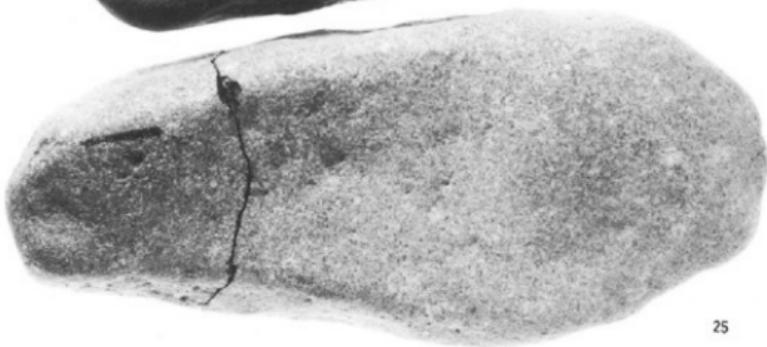
22



23



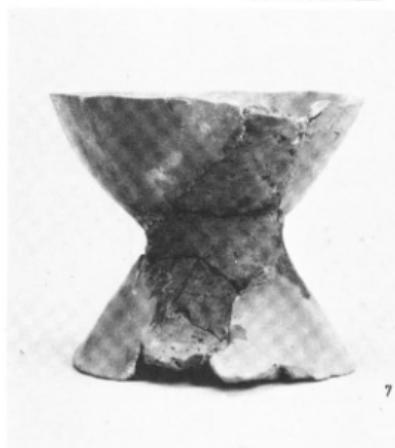
24



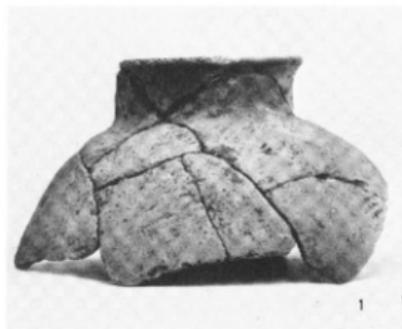
25



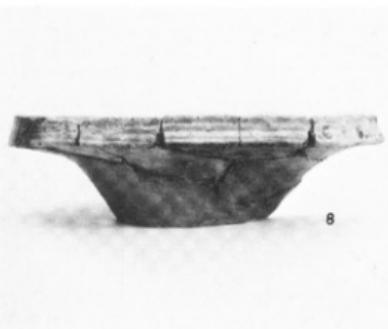
6



7



8



9

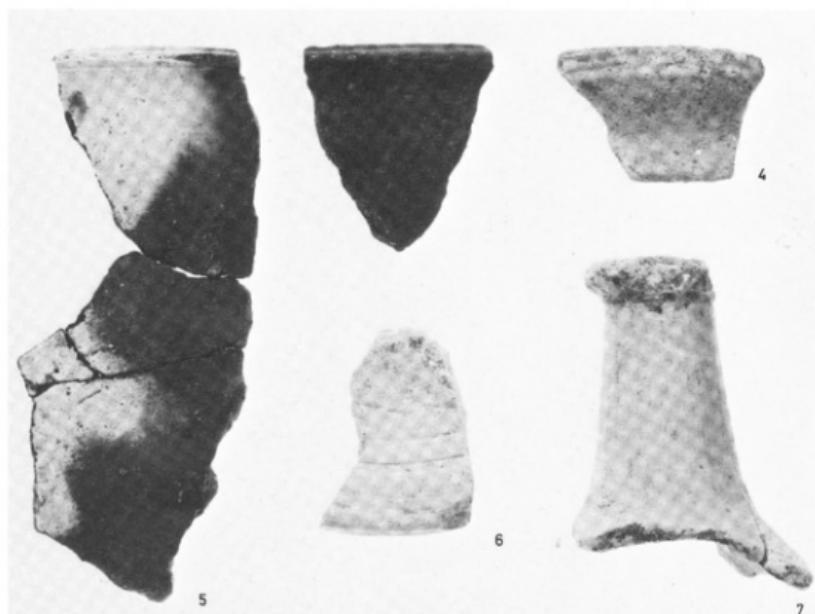


10

(上) 土壙1 出土土器

(中左) 土壙2 出土土器

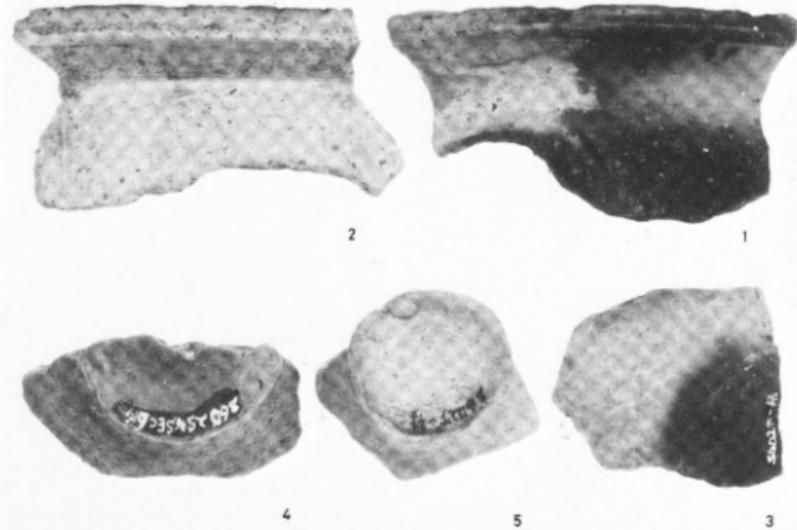
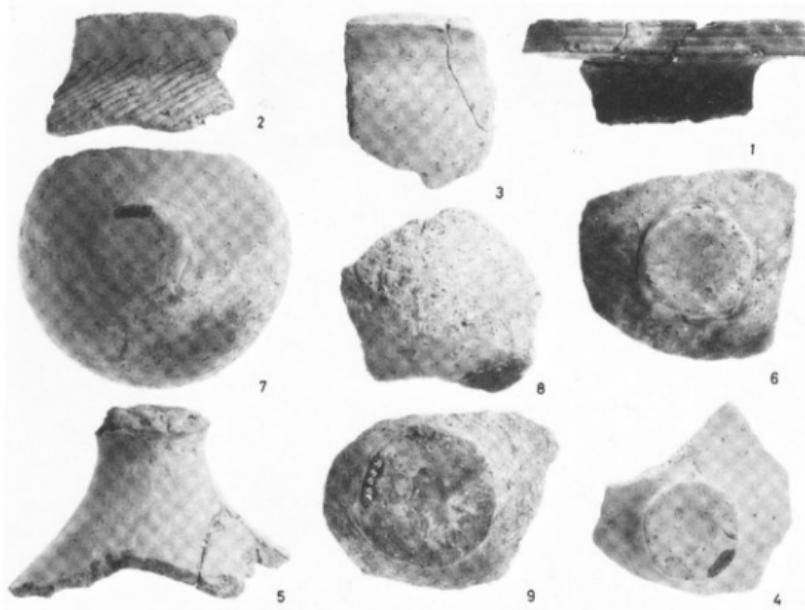
(中右・下) 土壙4 出土土器



(上、右・中) 土壌1 出土土器

(上左) 土壌3 出土土器

(下) 土壌4 出土土器



(上) 土壌9 出土土器

(下) 土壌10 出土土器



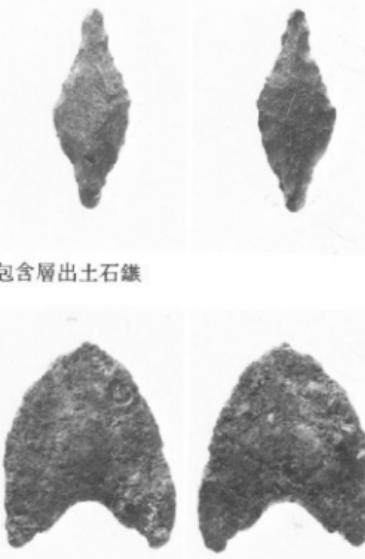
溝7 出土土器



掘立柱建物跡 柱穴4 出土土器



包含層出土石製模造品



包含層出土石鏃

土壤9 出土鉄鏃



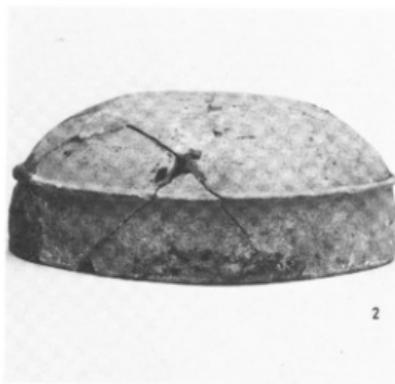
住居跡 6-b 出土土器 (中右) 土壌12 出土土器 (1)



14



13



2



6



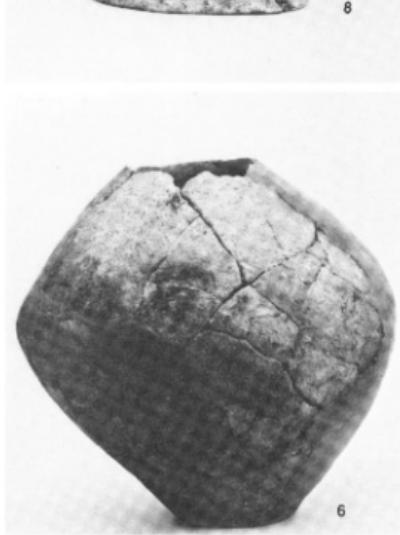
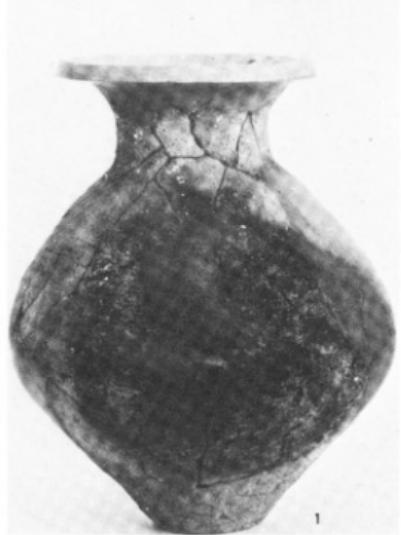
17



1

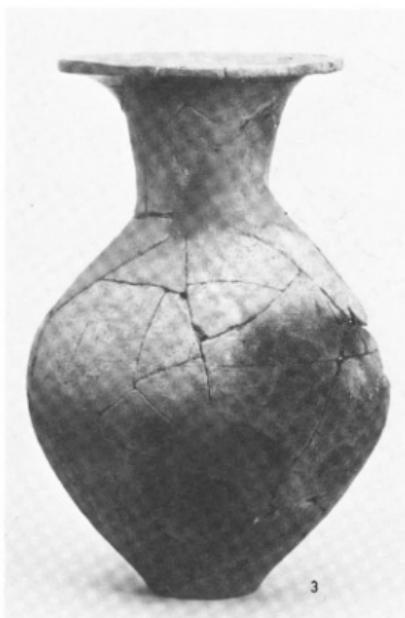
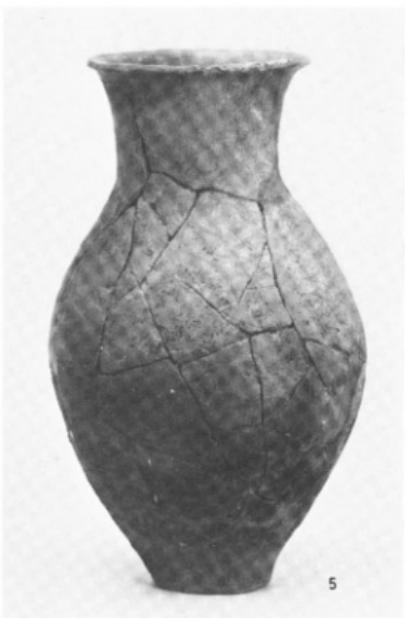
住居跡 6-b 出土土器

(中右) 住居跡 5 出土土器

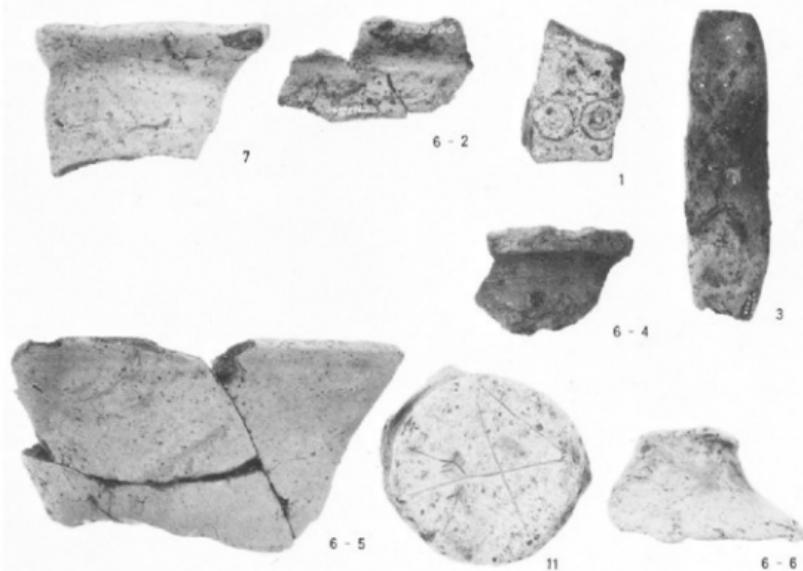


(上) 住居跡5 出土土器

(中・下) 方形周溝墓2 出土土器

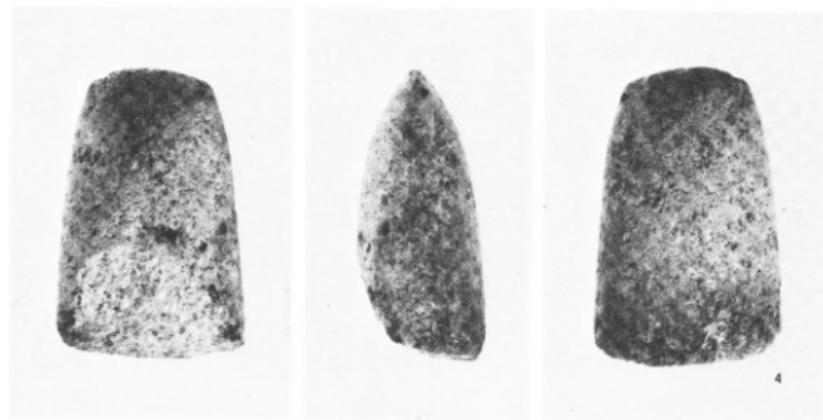
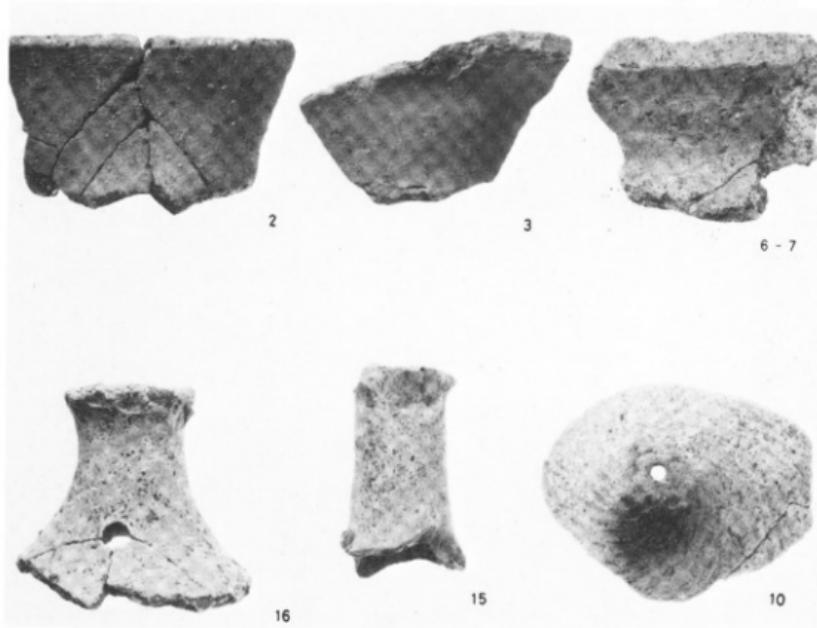


方形周溝墓2 出土土器



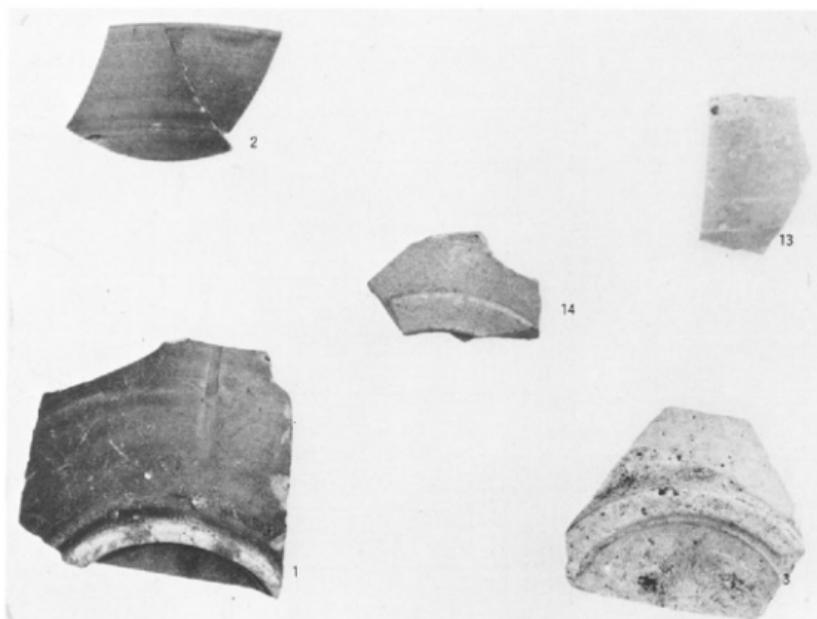
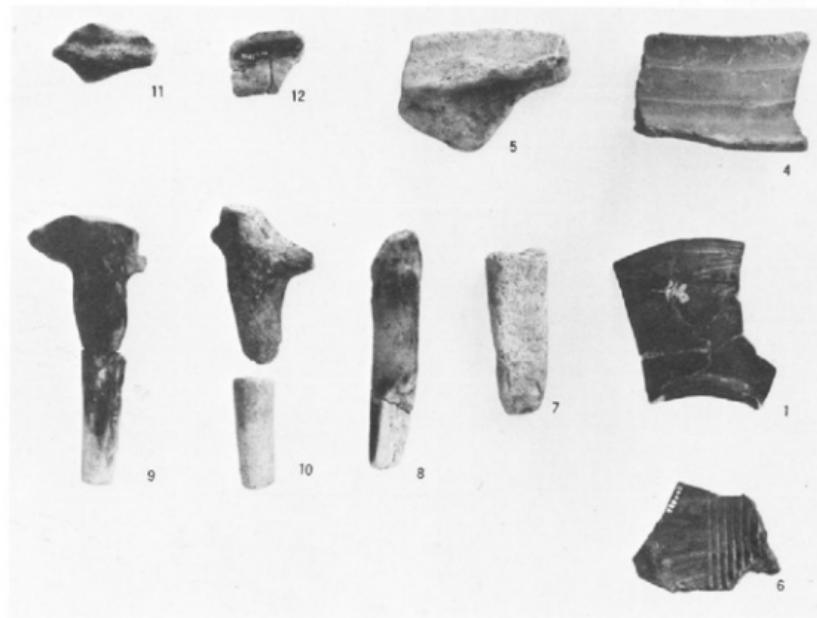
(上) 住居跡5 出土土器

(下) 住居跡6-b 出土土器



(上) 住居跡 6-b 出土土器

(下) 同 出土石斧



砂層内出土土器

(上) 土釜,三足鍋,碗,擂鉢

(下) 磁器碗



4

8



5



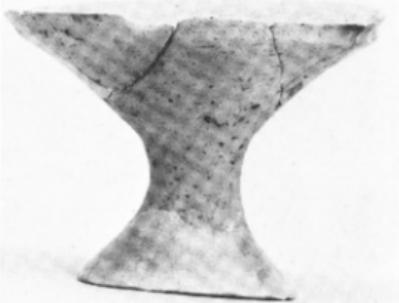
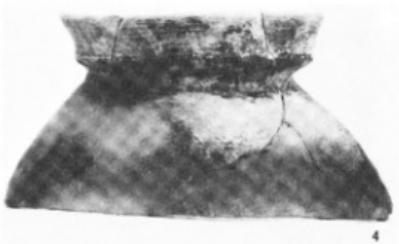
22



14

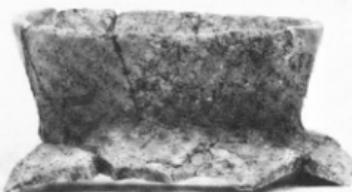


21



(上) 住居跡 7 出土土器

(下) 大溝 出土土器



9



31



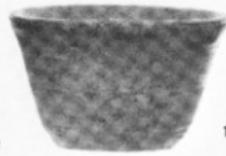
1



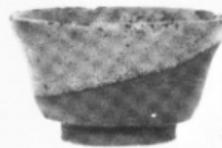
24



3



1

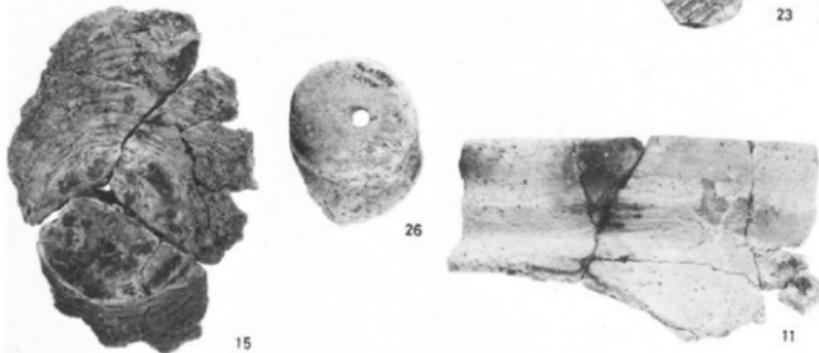
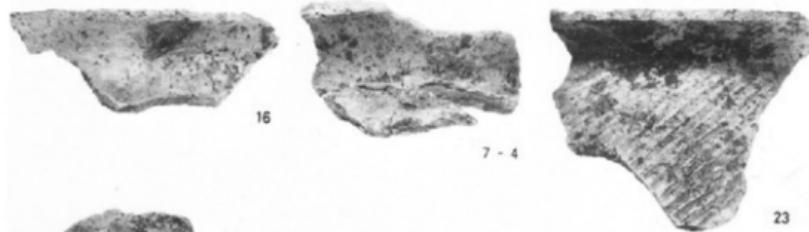
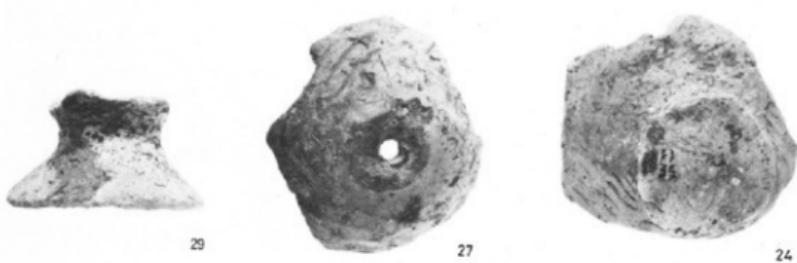
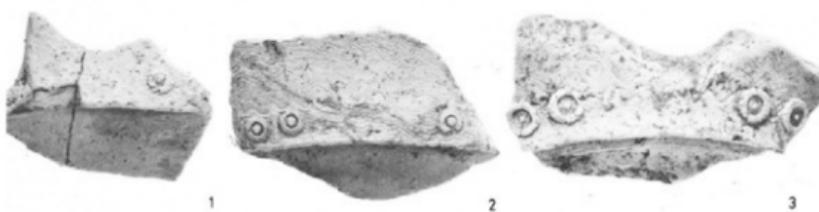


2

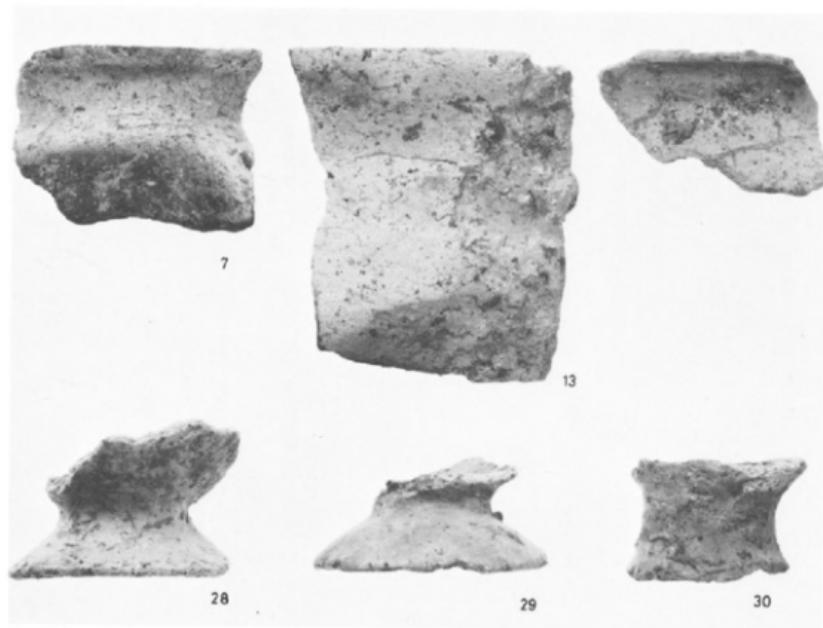
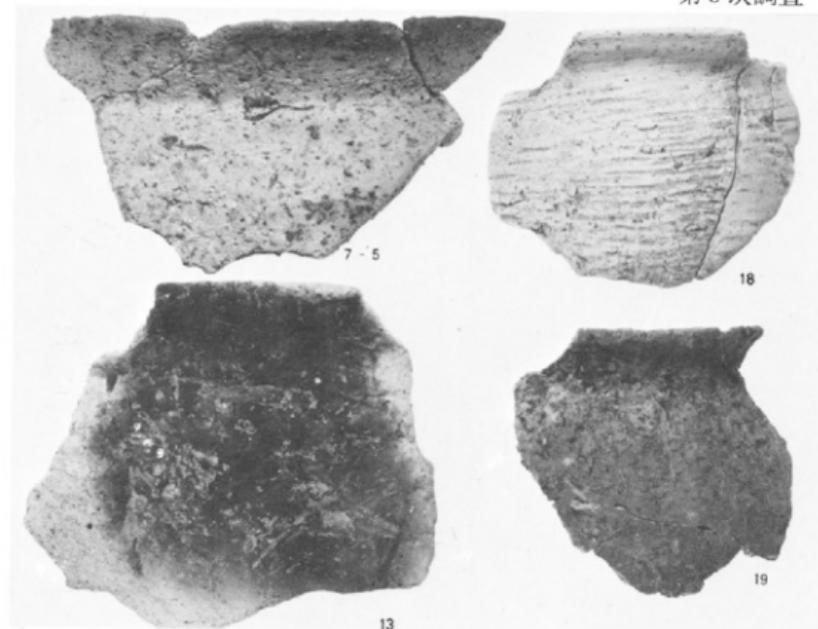
(右) 溝16 出土土器
(下) 盛土出土土器

(上左) 住居跡 7 出土土器

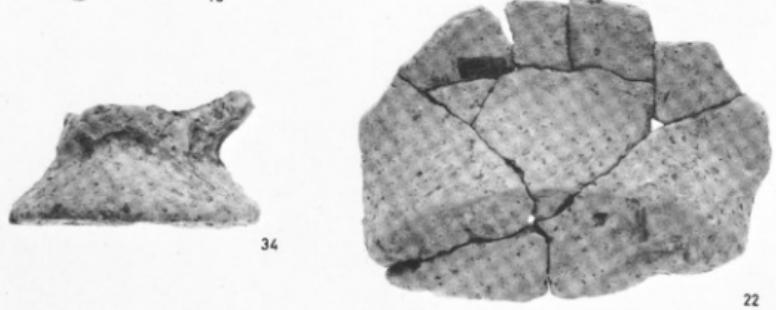
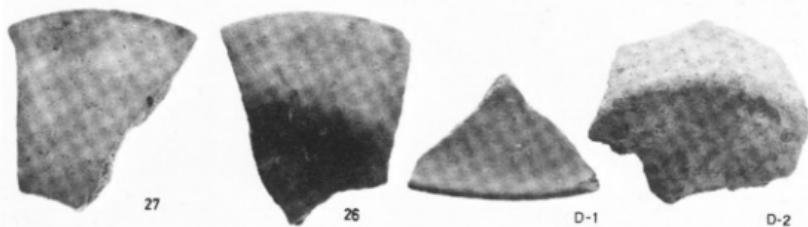
(中) 大溝出土土器

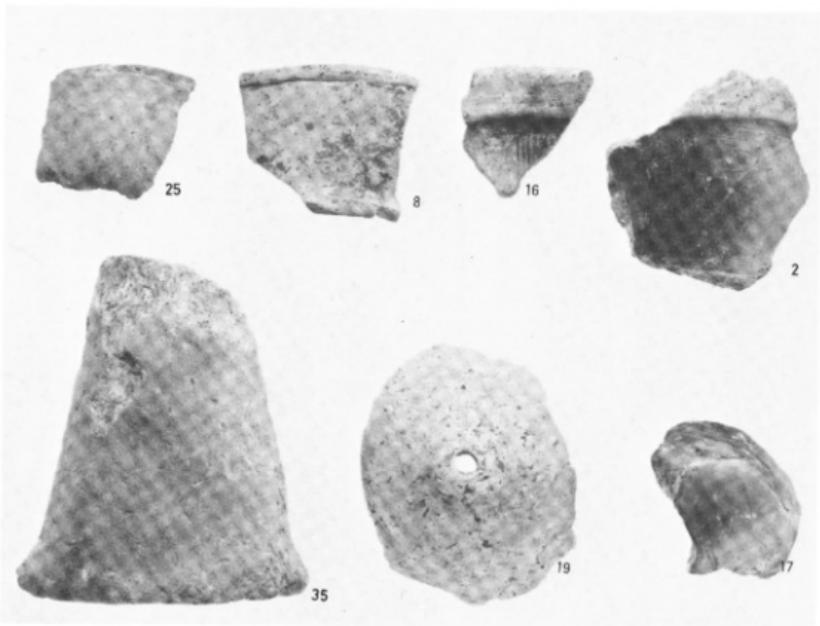
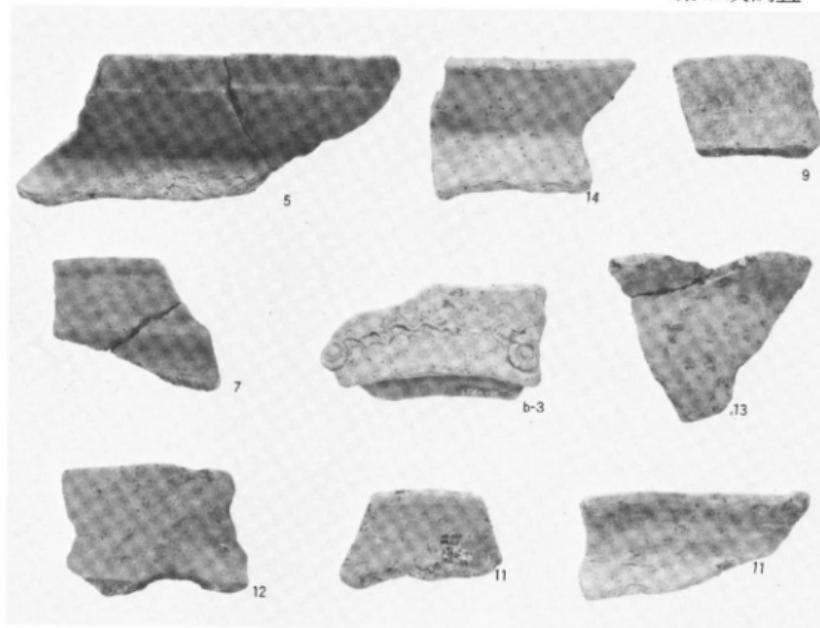


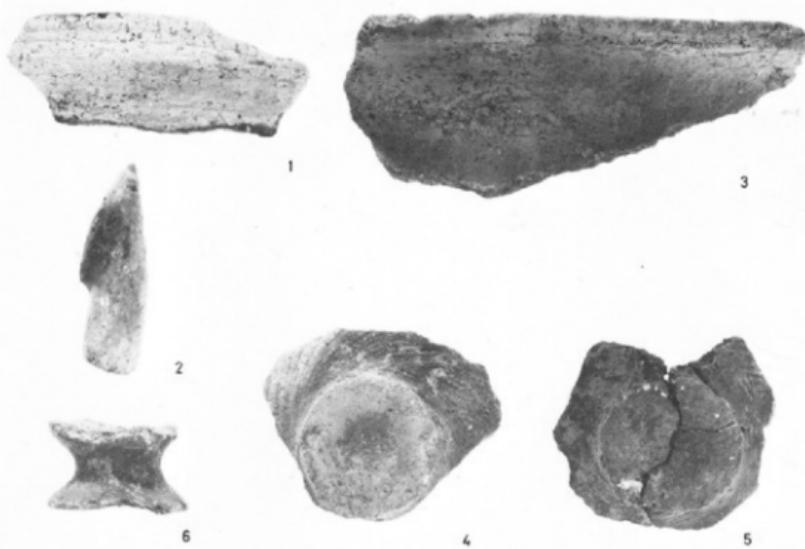
住居跡7 出土土器



住居跡5 出土土器







(上) 第7次調査5トレンチ出土土器

(下) 第6次調査終了後近景(西より)



遺跡周辺の航空写真

榮根遺跡

兵庫県文化財調査報告 第14集

昭和57年3月31日発行

編集発行 兵庫県教育委員会

印刷 三ツ輪印刷工業株式会社
神戸市兵庫区塩町2丁目3番14号